

# 仏教論理学派における対象認識論の成立と展開

三代 舞

# 目次

目次.....	i
緒言.....	iv
本研究の構成.....	v
第1部 論考 ——仏教論理学派における対象認識論の成立と展開—— .....	1
第1章 序論 .....	2
1.1. 仏教論理学派における対象認識論の概要.....	2
1.1.1. 仏教論理学派における認識論の位置付け .....	2
1.1.2. プラマーナ論の思想史的背景.....	4
1.1.3. 本研究で用いる認識論に関わる用語 .....	7
1.1.4. 仏教論理学派の知覚論における対象に対する立場 .....	9
1.1.5. 対象認識の位置付け .....	15
1.2. 先行研究概観 .....	21
1.2.1. ディグナーガおよびダルマキールティにおける認識手段と認識結果と の非別体説 .....	21
1.2.2. ダルモッタラに関する先行研究.....	27
1.2.3. プラジュニャーカラグプタに関する先行研究 .....	28
1.2.4. ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの認識論における違い .....	31
1.3. 本研究の目的と手法 .....	33
第2章 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa) .....	35
2.1. 問題の所在 .....	35
2.2. 正しい知としてのプラマーナ .....	36
2.3. 認識手段としてのプラマーナ .....	39
2.4. プラマーナの二種の意味に対する整合的理解.....	42
2.5. ニヤーヤ学派の見解 .....	46
2.6. まとめ .....	54
第3章 ダルマキールティにおける対象認識.....	56
3.1. 問題の所在 .....	56
3.2. ディグナーガにおける認識手段.....	57

3.3.	ダルマキールティにおける認識手段——知を対象に応じて限定するものとしての認識手段 .....	59
3.4.	知を対象に応じて限定するものとしての認識手段が、なぜ対象の形象をもつことなのか .....	62
3.4.1.	知より外部のものが認識手段であることの否定 .....	64
3.4.2.	対象の形象をもつこと以外のものが認識手段であることの否定 .....	70
3.4.3.	小結 .....	73
3.5.	まとめ .....	75
第4章	ダルモータラにおける対象認識 .....	76
4.1.	問題の所在 .....	76
4.2.	正しい知としてのプラマーナと分別 .....	78
4.3.	正しい知たるプラマーナとその結果との関係 .....	82
4.4.	プラマーナと行動の対象——プラマーナの二種の対象と vastu .....	85
4.4.1.	二種の対象 .....	85
4.4.2.	vastu とは何か .....	87
4.5.	対象認識とは何か .....	89
4.5.1.	プラマーナとその結果に関する三要素 .....	89
4.5.2.	知覚そのものは無分別である .....	93
4.6.	まとめ .....	94
第5章	プラジュニャーカラグプタにおける対象認識 .....	96
5.1.	問題の所在 .....	96
5.2.	<i>Pramāṇavārttikālaṃkāra</i> ad PV III 311 訳註研究 .....	97
5.2.1.	ダルマキールティの偈文とそれに対するプラジュニャーカラグプタの導入的な註釈 .....	97
5.2.2.	感官の健全性と知における対象の特殊性との前後関係 .....	101
5.2.3.	形象の限定と対象の確立との同一性 .....	102
5.2.4.	ダルモータラと目される論者との対論 .....	105
5.3.	ダルモータラにおける決定知 ( <i>niscayaapratyaya</i> ) .....	107
5.4.	まとめ .....	109
第6章	結論 .....	111

6.1.	仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa) の意味.....	111
6.2.	ダルマキールティにおける対象認識と認識手段と認識結果の非別体説.....	112
6.3.	ダルモータラにおける対象認識.....	113
6.4.	プラジュニャーカラグプタにおける対象認識.....	113
6.5.	ダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識に関する解釈の違い .....	114
6.6.	今後の課題 .....	115
第2部 <i>Pramāṇāvinīścaya</i> I 34–37 原典研究 .....		118
1.	科段 .....	121
1.1.	本研究による科段 .....	121
1.2.	戸崎 [1991] による科段.....	121
1.3.	プトン・リンチェントゥプの註釈による科段.....	122
1.4.	チャパ・チューキセンゲの註釈による科段.....	123
2.	サンスクリット・チベット語訳テキスト対照表 .....	125
3.	和訳 .....	129
4.	ダルモータラ註のチベット語訳テキスト .....	134
5.	ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト .....	150
6.	プトン註のチベット語訳テキスト .....	154
参考文献.....		162

## 緒言

知覚 (perception) というものをどのように捉えるかという問題は、哲学上の大きな論題の一つであり、哲学者のみならず科学者によっても、様々な理論が今日に至るまで提唱されてきた。知覚とその対象との関わり方一つとっても、素朴实在論から観念論まで、いくつもの派生的な立場があり決着はついていない。このように、我々は、哲学的関心から知覚論のもつ意義を認めることができるが、その一方で、古代インドの人々にとっては、単なる哲学的論題にとどまらず、宗教的实践あるいは修行に関する方法論を構築するための実用的なツールとして、知覚論が位置付けられていた。例えば、現在に至るまでインドにおいて絶大なる影響力を有してきた聖典『バガヴァット・ギーター』(Bhagavadgītā, Gītā) においても、以下のように言われる。

すべての感官を制御して、専心し、私に専念して座すべきである。感官を制御した人の智慧は確立するから。人が感官の対象を思う時、それらに対する執着が彼に生じる。執着から欲望が生じ、欲望から怒りが生じる。怒りから迷妄が生じ、迷妄から記憶の混乱が生じる。記憶の混乱から知性の喪失が生じ、知性の喪失から人は破滅する。愛憎を離れた、自己の支配下にある感官により対象に向かいつつ、自己を制した人は平安に達する。<sup>1</sup>

最終的な目標である涅槃に達するためには、智慧 (prajñā) を確立させなければならない。そして、智慧の確立を妨げる執着の発生にとって、現前する対象と感官との直接的な触れ合い、すなわち知覚 (pratyakṣa) がその最も重大な契機となる。したがって、知覚をどのように扱うかということが修行論上の一つのトピックとなる。このような要請から、諸宗派および学派においてそれぞれの知覚論が発展することとなった。

本研究は、以上のような大義を有する知覚論のうち、特に、認識と対象との関わりについて扱う。知覚を、何らかの対象との関わりによってその対象に関する認識を成立させる一連の因果プロセスとして考えるならば、その結果として生じる対象認識が、どう

---

<sup>1</sup> Gītā 2.61–64: tāni sarvāṇi saṁyamya yukta āsīta matparaḥ / vaśe hi yasyendriyāṇi tasya prajñā pratiṣṭhitā // dhyāyato viśayān puṁsaḥ saṅgas teṣūpajāyate / saṅgāt sañjāyate kāmāḥ kāmāt krodho 'bhijāyate // krodhād bhavati saṁmohaḥ saṁmohāt smṛtīvibhramaḥ / smṛtibhramśād buddhināśo buddhināśāt praṇaśyati // rāga-dveṣa-viyuktais tu viśayān indriyaiś caran / ātmavaśyair vidheyātmā prasādam adhigacchati // 訳は上村 [1992: 41] による。

してその当該の対象に限定されたものとして成立するののかという問題である。インドの思想家たちによって当時使用されていた術語で言えば、プラマーナ論の一端を担う、認識手段（pramāṇa）や認識対象（prameya）と認識結果（pramāṇaphala）との関係性についての議論である。

この問題に関して、仏教論理学派は、このようないわゆる知覚因果説を離れ、認識手段と認識結果の非別体説という特異な説を打ち出した。この説自体は、両者を因果に基づき実体として別立てするニヤーヤ学派などへのアンチテーゼとして出てきたもので、その区別を同一の知の側面の違いに還元するという、奇妙ではあるがむしろ単純なものである。そのために、往々にして瑣末な問題と見なされる傾向もないわけではないが、実際にその記述を細かく追っていくと、知覚という現象やプロセスそのものに関するそれぞれの論師の基本的な立場の違いが、認識手段と認識結果に関する理解に少なからざる影響を及ぼしていることに気付かされる。すなわち、各論師の認識手段・認識結果非別体説の理解を見るならば、その知覚理解の要点を端的に見て取ることができるのである。したがって、仏教論理学派の知覚論さらには認識論の全体を知るための一つの手がかりとして、本研究ではこのテーマを取り上げることにしたい。

## 本研究の構成

### 第1部 論考——仏教論理学派における対象認識論の成立と展開——

#### 第1章 序論

第1章では、序論として、仏教論理学派における対象認識論の概要について触れた後に、研究史と本研究の目的および手法を述べる。

#### 第2章 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa)

第2章では、導入として、仏教論理学派におけるプラマーナ論の中での、対象認識論の位置付けを探る。プラマーナという語のもつ二つの意味とその関係について、仏教論理学派による理解の特徴を、ニヤーヤ学派による理解との比較を通じて明らかにする。

#### 第3章 ダルマキールティにおける対象認識

第3章では、ディグナーガからダルマキールティに至る間に見られる、対象認識論の成立について扱う。特に、対象認識論において中心的な位置を占める、認識手段と認識

結果の非別体説について、ディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* とダルマキールティの *Pramāṇavārttika* および *Pramāṇaviniścaya* の記述に従って考察する。

#### 第4章 ダルモータラにおける対象認識

第4章および第5章では、註釈者による対象認識論の展開を扱い、特に、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタによる、認識手段と認識結果の非別体説に対する解釈の違いに焦点をあてる。そのうち、第4章ではまず、ダルモータラの理解を取り上げ、*Nyāyabinduṭīkā* や *Pramāṇaviniścayaṭīkā*, *Laghuprāmāṇyaparīkṣā* に従って考察する。

#### 第5章 プラジュニャーカラグプタにおける対象認識

第5章では、プラジュニャーカラグプタによる対象認識の理解を取り上げる。前章で取り上げたダルモータラの説に対して、プラジュニャーカラグプタは批判的な態度を取る。*Pramāṇavārttikālaṃkāra ad Pramāṇavārttika* III 311 の解説を通じて、その相違点を探る。

#### 第6章 結論

第6章では、結論として、以上の論考により明らかにされた内容をまとめた上で、残された課題について簡単に触れる。

### 第2部 *Pramāṇaviniścaya* I 34–37 原典研究

本研究の第2部には、*Pramāṇaviniścaya* I 30,9–32,10 (vv. 34–37) に関する原典研究の成果として、1. 科段、2. サンスクリットテキスト・チベット語訳テキスト対照表、3. 和訳、4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト、5. ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト、6. プトン註のチベット語テキストが含まれている。第1部の論考と合わせて参照されたい。

なお、本研究の中で引用されるサンスクリットテキストについて、ピリオド (.) やカンマ (,) は筆者の理解に従って適宜挿入および削除した。また、連声規則ならびに代用アヌスバーラに基づく変更については、特に註記していない。

## 第 1 部

### 論考

——仏教論理学派における対象認識論の成立と展開——



## 第1章 序論

### 1.1. 仏教論理学派における対象認識論の概要

#### 1.1.1. 仏教論理学派における認識論の位置付け

仏教論理学派とは<sup>1</sup>、ディグナーガ (Dignāga, 陳那, ca. 480–540<sup>2</sup>) を祖とし、ダルマキールティ (Dharmakīrti, 法称, ca. 600–660<sup>3</sup>) によって大成された大乘仏教の一派であ

---

<sup>1</sup> 「仏教論理学派」というのは現代の研究者による便宜的な呼称であり、Erich Frauwallner 氏による「仏教論理学・認識論学派」という命名に端を発する。しかし、このような独立の学派がインドの仏教徒の間で認知されていたわけではない (cf. 桂 [1988: 317])。仏教論理学派とは、論理や認識に関する論題を中心に考察を行った仏教内の学派という程の意味である。この呼称が現在ある程度通用するものの、同派に対する呼称は研究者の間でも一定しない。他には、論理や認識を包括的に意味する *pramāṇa* / *tshad ma* の訳語である「知識」を用いた「仏教知識論学派」や、仏教部派の伝統的な呼称である「経量部 (*sautrāntika*)」と「瑜伽行派 (*yogācāra*)」を応用した「経量瑜伽行総合学派」などと呼ばれることもある。英語やドイツ語では、"Buddhist logico-epistemological school," "Buddhist epistemological school," "Buddhist school of epistemology and logic," "Die erkenntnistheoretisch-logische Schule des Buddhismus," "Die erkenntnistheoretische Schule des Buddhismus," "pramāṇa school" などの呼称がある。Cf. 船山 [2012: 91], 矢板 [2005: v], Steinkellner and Much [1995] 他。

また、ここでいう「学派」とは、師から弟子への教授によって彼らが一連の思想体系を継承していたことを意味しており、その伝承は、主に、先師の著作に対する註釈という形で残されている。しかし、彼らが独立した寺院を有していたというわけではなく、むしろ、一つの寺院において、小乗・大乘の垣根を越えた複数の体系が教授されることが当時の仏教界において一般的であったと考えられる。仏教の思想伝播に関する近年の成果として、多方面からの資料を総合的に検討した船山 [2011b] を挙げることができる。また、大乘仏教や僧団のあり方については、桂紹隆他編『大乘仏教とは何か』(シリーズ大乘仏教 1, 春秋社, 東京, 2011) にこれまでの研究成果がまとめられている。

<sup>2</sup> ディグナーガの年代については、Frauwallner [1961: 134–137] に従う。これは、文法学派のバルトリハリ (Bhartṛhari, ca. 450–510) より後、ダルマパーラ (Dharmapāra, ca. 530–561(?)) より前、さらに、サーンキヤ学派のマーダヴァ (Mādhava) より後という根拠に基づいている。さらにマーダヴァは、スティラマティ (Sthiramati, ca. 510–570) の師であるグナマティ (Guṇamati) と論争を行ったとされており、その論争は 510 年より前に遡ることは難しいとされる。

<sup>3</sup> ダルマキールティの年代については、暫定的に Frauwallner [1961] に従う。これまでの年代論の経緯については、Krasser [2011: 231f.] にまとめられている。600–660 という年

り、教条的傾向の強かった従来の仏教学説を整理し直すことで、仏教内外の党派を超えた、討論に広く開かれた体系を作り上げた点に特徴がある。すなわち、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu, 世親, ca. 400–480<sup>4</sup>）を中心とする経量部および瑜伽行唯識学派の教説を引き継ぎながら、仏教外部の思想家たち、特に、ニヤーヤ学派、ヴァイシェシカ学派、サーンキヤ学派、ミーマーンサー学派といったバラモンたちとの対論を通じ、多くの独自の説を打ち立てた<sup>5</sup>。

---

代設定は主に、玄奘（629–645 に在印）が『大唐西域記』において彼について言及しないにもかかわらず、義浄（675–685 にナーランダー僧院に滞在）が『南海寄帰内法伝』において、「近則陳那護法法稱戒賢及師子月安慧德慧慧護德光勝光之輩。……法稱則重顯因明」（大正 54,229b17–21, cf. 宮林・加藤 [2004: 358f.]）と述べることに基づいている。Cf. 木村（俊）[1987: 9f.] 他。

その後、Lindtner [1980] および Kimura [1999] が 530–600 あるいは 550–620 という新たな年代設定を提示したが、受け入れられなかった。Lindtner 氏は、*Madhyamakaratanapradīpa* (MRP, 『中観宝灯論』) に PV III 4 の一部と思しき偈文がダルマキールティの名で引用されることを有力な根拠として、バーヴィヴェーカ (Bhāviveka, ca. 490/500–570) とダルマキールティがほぼ同時代であると主張する。しかし、MRP がバーヴィヴェーカの真作であるとは認め難く、むしろこの引用自体が、後代（7 世紀以降?）の著作であることの傍証とされる。MRP の著者問題については、塚本 et al. [1990: 229f.], Eckel [2008: 23–28] 参照。また、木村俊彦氏は、ダルマパーラの *Ālambanaprikṣā* 註にダルマキールティの名が言及される点、また、612–625/606–612 に書かれたスバンドゥ (Subandhu) の *Vāsavadattā* にクマーリラやダルマキールティを暗示する記述があると言う点を根拠としている。しかし、前者は Funayama [2000] 等によって否定され、また、後者の根拠も必ずしも明瞭ではない。

しかし近年、Krasser [2011] が、主にバーヴィヴェーカの MHK およびそれに対する註釈 *Tarkajvālā* の記述に基づいて、バーヴィヴェーカがダルマキールティおよび同時代のクマーリラの説を知っていたと考え、改めて 6 世紀中頃という年代設定を提示した。また、Eltschinger [2010: 398] もこれに従い、グプタ朝の衰退という時代背景との一致を指摘している。今後の検討を俟ちたい。

<sup>4</sup> Cf. Frauwallner [1961] 他。いわゆるヴァスバンドゥ二人説の是非については、ここでは深入りしない。あえて言うならば、ここでのヴァスバンドゥとは、*Abhidharmakośa* (AK) や *Vādaśāstra* (『論軌』), *Vādaśāstrāṅga* (『論式』) 等の一連の論理学書を著した、いわゆる *kośakāra* としてのヴァスバンドゥを指す。二人説については、Sakuma [2013] 等に、これまでの経緯がまとめられている。

<sup>5</sup> Eltschinger [2010: 398f.; 432f.] によれば、このような仏教と非仏教との積極的な対論は、仏教の密教化と並んで、当時の時代背景を反映したものであると推察されている。すなわち、グプタ朝（320–550）の衰退とそれに伴う諸々の社会構造の変化によって、バラモンが異教徒に対する敵対を強めていた点、また、仏教を支えていた経済的基盤の変化により、ナーランダーのような少数の大型寺院へと僧侶や仏教徒たちが集結していた点、

仏教論理学派においては、ディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* (PS, 『集量論』『知識論集成』) とそれに対するダルマキールティの註釈 *Pramāṇavārttika* (PV, 『量評釈』『知識論評釈』), さらにダルマキールティ自身が PV の内容を整理し新たに構成しなおした *Pramāṇaviniścaya* (PVin, 『量決択』『知識論決択』) が, ある種の根本経典としての役割を果たしている。そして, これらの書名が示す通り, 仏教論理学派においては, プラマーナ (*pramāṇa*, 正しい認識, 正しい認識の手段, 知識手段, 量) に関する考察が, 重要な位置を占めている。彼らの最終的な目標は, 解脱, すなわちこの苦しみに満ちた輪廻からの脱出であった。そのために, 解脱の前提となる正しい知 (*samyagjñāna*) すなわちプラマーナ (*pramāṇa*) について, そのあり方や獲得方法を探究したのである<sup>6</sup>。そして, 彼らは正しい知として, 知覚 (*pratyakṣa*) と推論 (*anumāna*), すなわち直観と論理的思考との二種類を認め, それぞれの知の特徴や種類について仔細な考察を行った。このように, 仏教論理学派の教理体系の中で, 知覚論すなわち認識論は, 論理学と並ぶ二大トピックの一つとして位置づけられている。

### 1.1.2. プラマーナ論の思想史的背景

仏教論理学派が「プラマーナ」という概念をどのように理解したかという問題については, 本研究の第2章において個別に取り上げる。したがってここでは, 仏教論理学派

などの理由を挙げている。

<sup>6</sup> Cf. NB I 1: *samyagjñānapūrvikā sarvapuruṣārthasiddhir iti tad vyutpādyate* // (すべての人間の目的達成は, 正しい知を前提としている。よって, それが解説される)。解脱のために知を重視する態度は, 仏教のみならずインド思想一般において広く共有されている。例えば, 仏教論理学派に強い影響を与えたヴァスバンドゥの AK や, 仏教論理学派の論敵の一つであるニヤーヤ学派の根本経典 *Nyāyasūtra* (NS) などにも同様の発想が見える。AK I 3: *dharmāṇaṃ pravacayam antareṇa nāsti kleśāṇaṃ yata upaśāntaye 'bhyupāyaḥ / kleśaiś ca bhramati bhavārṇave 'tra lokas taddhetor ata uditāḥ kilaiṣa śāstrā* // (なぜならば, 諸法の弁別 (= 智慧) なしには, 諸々の煩悩を滅するための優れた手段はないのである。そして, 諸々の煩悩によって世人はこの生存の海に漂う。したがって, この故に, 師によってこれ (アビダルマ) が説示されたと伝えられている), cf. 櫻部 [1969: 140]; NS 1.1.1: *pramāṇaprameyasamśayaprayojanadr̥ṣṭāntasiddhāntāyavavatarkanirṇayavādajalpavitandā-hetvābhāsacchala-jātini-grahassthānāṇaṃ tattvajñānān niḥśreyasādhigamaḥ* // (認識手段・認識対象・疑い・動機・実例・定説・支分・吟味・確定・論議・論諍・論詰・擬似的理由・詭弁・誤った論難・敗北の立場に関する真理の知によって, 至福の達成がある), cf. 服部 [1969: 334f.]

がプラマーナを重要視するに至った思想史的背景について簡単に触れておこう<sup>7</sup>。

プラマーナという語は、語源的には *pra√mā* (量る, 測る) という動詞に接尾辞 *-ana* を付けたものであり、「それによってものを量る手段」という意味から、元来、ものさし、はかり、基準といった意味で用いられた。これが、バラモン教学の発展に伴い、「認識の正しさを決定する基準」、「対象を認識する妥当な手段、根拠」といった意味をもつようになり<sup>8</sup>、正しい認識の手段とは何かということが、インド哲学諸派の間で盛んに議論されるようになった<sup>9</sup>。

プラマーナは、認識論に関する文脈の中では、認識主体 (*pramātṛ*)、認識対象 (*prameya*)、認識手段 (*pramāṇa*)、認識結果 (*pramiti*, *pramāṇaphala*) という認識の成立に関わる四つの要素のうちの一つとして扱われるのが一般的である<sup>10</sup>。これは、サンスクリット文法におけるいわゆる行為参与者 (*kāraka*) 理論の影響を受けたもので、*pra√mā* という行為が完成するためには、これらの諸要素が不可欠であると考えられていた。中でも特に、パーニニの規定に基づいて<sup>11</sup>、認識手段が最も重要な要素とされる。また、認識結果などのその他の要素に対しても、プラマーナの語を用いることがある<sup>12</sup>。

このように認識手段を中心とする諸要素に基づいて認識を分析する枠組み——プラマーナ論<sup>13</sup>——は、始めにバラモンたちによって導入された。そして彼らは、学派に関わらず一般的に、諸要素は全て別個の実体であると考えている。しかしながら、仏教論理学派においては、そのような理解は許されない。なぜならば、先に述べたように、仏

<sup>7</sup> プラマーナを巡る思想史的背景についてはこれまでも多くの研究書が扱っており、最近のものとしては、小野 [2012: 156–160] などが挙げられる。

<sup>8</sup> 村上 (真) [1991: 167–168] は、プラマーナに関して、認識の手段、根拠、源泉、権威、さらには、認識の作用、正しい認識、といった意味を挙げる。また、Matilal [1986: 36] は、*means*, *authority*, *proof* という三つの側面を取り上げる。

<sup>9</sup> Cf. 小野 [2012: 158–160]。

<sup>10</sup> 例えば、プラマーナ論を体系的に扱った文献のうち、初期のものと考えられるニヤーヤ学派の *Nyāyabhāṣya* (NBh) では、以下のように述べる。NBh 22,2f.: *arthavati ca pramāṇe pramātā prameyaṃ pramitiṃ ity arthavanti bhavanti* (認識手段が効果をもつ時には、認識主体 (*pramātṛ*)・認識対象 (*prameya*)・認識行為 (*pramiti*, ≡ 認識結果) という、効果をもつ [諸要因] がある)。

<sup>11</sup> Pāṇini 1.4.42: *sādhakatamaṃ karaṇam* (手段とは、最も有効な成立要因である)。

<sup>12</sup> この問題については、本研究の第2章においてより詳しく扱う。

<sup>13</sup> プラマーナ論とは *pramāṇa theory* に対する訳語であり、このような用語は、Matilal [1986], Dunne [2004] 等に見られる。



教論理学派は瑜伽行唯識学派の流れを汲んでおり、最終的には、いわゆる唯識説、すなわち、外界の実在を認めず、この世界は全て「識」すなわち知のあらわれに過ぎない (vijñaptimātra) という立場をとる。しかもその知は、同一基体を保ちながら変化することを許されず、刹那に生じて滅するという極めて特殊な状況下に設定されている<sup>14</sup>。したがって、これらの諸要素を、どうにかして一瞬の知の中で完結するものとして説明するというのが、プラマーナ論を導入する際の彼らの課題であったと考えられる。

そこで彼らがとった手法は、外界実在論者<sup>15</sup>のように認識を、外界対象や感官、認識主体等といった諸々の原因との因果関係を前提とした一連の行為と見なすことから離れ、むしろ、認識が生じているという事実から出発し、諸々の要素を認識自身のもつ性質へと還元させる、というやり方である。その中で提唱されたのが、認識手段と認識結果の非別体説という仏教論理学派に特異な説であった。すなわち、両者は知のもつ性質 (dharma) としてのみ区別されるものであり、実体 (vastu) としては区別されない<sup>16</sup>。この説は、後に他学派からの厳しい批判を受けることとなる。

<sup>14</sup> 仏教論理学派が、知のみならず存在一般について、刹那性を主張することはよく知られている。特に知の刹那性を述べるものとしては、以下のようなダルマキールティの用例を挙げることができる。PV III 495: ekāṇvatyayakālaś ca kālo 'lpīyān kṣaṇo mataḥ / buddhiś ca kṣaṇikā ... // (そして、刹那とはきわめて短い時間で、一極微を過ぎる時間と考えられている。そして知は刹那的なものである……), cf. 戸崎 [1985: 179f.]

また、このような刹那滅論はヴァスバンドゥから引き継がれたものである。彼は *Trīṃśikā(vijñapti)kārikā* (『唯識三十頌』) の冒頭で、知の刹那的なあり方を「識転変」 (vijñānapariṇāma) という語によって表現した。スティラマティの注釈 *Trīṃśikā(vijñapti)-bhāṣya* (TrBh) は、これに対して以下のような説明を加えている。TrBh 16,1f.: kārāṇakṣaṇa-nirodhasamakālah kārāṇakṣaṇavilakṣaṇakāryasyātmalābhah (conj.; -vilakṣaṇah kārya- TrBh, TrBh<sub>B</sub>. Cf. 伊藤 [2010: 36]) pariṇāmah (転変とは、原因の刹那が滅するのと同時に、原因の刹那とは異なる結果が生じることである)。

<sup>15</sup> 本研究でいう「外界実在論」とは、認識の直接的な対象がそのまま外界に実在しているという立場であり、いわゆる素朴実在論と一致する。ニヤーヤ学派やミーマーンサー学派に代表される。

<sup>16</sup> See PV III 318: kriyākaraṇayor aikyavirodha iti ced asat / dharmabhedābhyupagamād vastv abhinnaṃ itīṣyate // (作用と手段とが同一のものであることは矛盾であるというならば、[その批判は] 正しくない。なぜならば、性質の区別が認められるから。実体は無区別であると認められる), cf. 戸崎 [1979: 411].

### 1.1.3. 本研究で用いる認識論に関わる用語

ここであらかじめ、本研究で用いる認識論に関わる用語について、簡単に説明しておきたい。

まず、認識に関する最も広い意味をもつ語として、「知」がある。これに該当するサンスクリット語は、主に *jñāna* や *vijñāna* を想定しており<sup>17</sup>、*dhī* などにもこれに類する。仏教論理学派にとって知とは、瞬間的に生滅する実体として存在するものであり、先後の知はある種の因果関係によって結ばれている。また、知は基本的に何らかの対象形象をもって生じているので、そこにその形象が立ち現れる「場」のようなものとして考えることもできる。

先に述べた正しい知たる「知覚」(*pratyakṣa*)や「推論」(*anumāna*)というのも、仏教論理学派にとっては、この知の下位分類である。つまり、より正確に言うならば、「知覚知」「推論知」ということになる。ただし、これは専ら、知覚や推論を知覚知や推論知の原因と見なすニヤーヤ学派等との比較において、問題となる。よって、特にその点を強調する必要がある場合にのみ、知の語を明示的に付加することとする。

一方、「知」と異なる意味で用いる語としては、「認識」がある。この語には、まず第一に、*prā√mā* という動詞が有する「認識作用」(＝認識する作用 (*kriyā, bhāva*)) という意味がある。よって、その動詞に基づく諸々の派生語には全てこの認識の語が含まれている。ただし、*pramāṇaphala* の訳語である「認識結果」の「認識」という語は、直接的に認識作用を意味するわけではない。*pramāṇaphala* を直訳すれば「認識手段の結果」(格限定複合語 (*tatpuruṣa*) による解釈) となるが<sup>18</sup>、煩雑を避けるために、「認識結果」と省略して訳しているに過ぎない。*pramāṇa* の語を認識作用の意味で理解し、「認識作用た

<sup>17</sup> *jñāna* と *vijñāna* という語は、仏教ではしばしば区別して用いられており、後者は特に対象を別立して認識する作用 (*vijñapti*) を意味する。例えば、*Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) にそのように説明される。AKBh I 17,7 ad AK I 16a: *viṣayaṃ viṣayaṃ prati vijñaptir upalabdhir vijñānaskandha ity ucyate* (境を一つ一つ認識せしめること、すなわち了知すること、が識蘊といわれる (櫻部 [1969: 167,17]) )。しかし、ダルマキールティ等においては、そのような使い分けが意識されているとは考えにくい。更なる調査を要する。

<sup>18</sup> *pramāṇaphala* を“*pramāṇasya phalam*”というように格限定複合語によって述べる例は、PVin I 30,9 (本研究 p. 39) や、*Nyāyamañjarī* 38,13 (本研究 p. 52) などに見える。*Nyāyabinduṭīkā* も同様に解釈する。NBṬ ad NB I 18: *yad eva anantaram uktaṃ pratyakṣaṃ jñānam, tad eva pramāṇasya phalam* (およそ直前に述べられた知覚たる知、それそのものが認識手段の結果である)。

る結果」(同格限定複合語 (karmadhāraya) による解釈) = 「認識結果」とすることもサンスクリットの文法上は可能であるが<sup>19</sup>, 管見の限りでは, そのような複合語の分析表現 (vigrahavākya) を実際に提示するテキストは見当たらない。

さらに, 知がもつ認識内容, すなわち結果としての認識も, 「認識」と呼ぶこととする。これに対しては, (saṃ)vitti/(saṃ)vedana, adhigati/adhigama, pratīti といったサンスクリットを想定している。先行研究の中には, これに対して「理解」という語を用いることもある<sup>20</sup>。知覚(無分別知)の場合には, 「青」, 「心地よい」(実際には知覚の時点ではまだ言語化されていない) というような断片的な形を取るのに対して, 推論などの分別知の場合には, 「あの山には火がある」「これは壺だ」というような命題の形をとる。

しかし, 実際のテキストにおいては, 認識作用と認識結果の両者の区別は非常に曖昧である。というのも, 仏教論理学派では, 認識主体による認識手段を介した認識対象との能動的な行為としての認識作用は否定されている。そして, 行為/作用とその結果とを別立てする立場からすれば正に結果に他ならない知のみが, 瞬間的に存在すると見なされる。したがって, 仏教論理学派の自説としては, 認識作用を認識結果から区別して提示することはせず, 実質的には「作用結果」というような形で, 結果の中に作用を含ませて議論しているようである。

また, 知と認識の区別も曖昧な部分があり, saṃvedana 等の語を jñāna とほぼ同じような意味で使用する場合もある。知の方が広い概念で, 認識はその中に含まれているといえることができる<sup>21</sup>。

<sup>19</sup> 例えば, Hattori [1968: 28] では PSV ad PS I 8cd の pramāṇaphala を “resulting cognition” と訳しており, このような理解を前提としている可能性がある。その一方で, PS I 9a の phala に対しては “result [of the act of cognizing]” という訳語をあてており, これによれば, pramāṇa を認識作用と理解した上で, さらに格限定複合語による複合語解釈をとっているようにも見える。これは, 服部 [1969: 334] の NBh の和訳の中で, pramāṇaphala とほぼ同義とされる pramiti を「知識作用の結果」と訳すこととも一致している。また, 本研究の 1.2.1 で取り上げるように, 服部 [1959] は, pramāṇa を karaṇa によって語義解釈しつつも, 作用の意味で理解している。

<sup>20</sup> Cf. 片岡 [2011a: 14f., fn. 14].

<sup>21</sup> 例えば, ダルマキールティからの影響を受けた, ミーマンサー学派のプラバーカラ派に属するシャーリカナータの場合には, jñāna が一連の認識プロセス全体を意味するのに対して, saṃvit はそのうち最終的な結果としての認識を指すことが明示されている。Cf. Kyuma [2010: 249, fn. 6].

#### 1.1.4. 仏教論理学派の知覚論における対象に対する立場

認識手段と認識結果に関する議論は、PS<sup>22</sup>, PV, PVin および *Nyāyabindu* (NB) それぞれの知覚章の後半部で主に扱われる。後継者たちの作品構成の基礎を築いた PS の科段に従うならば、知覚章全体の流れは以下のごとくである。まず始めに知覚と推論という二種の正しい知／プラマーナ (*pramāṇa*) とそれぞれの対象を述べた後に、知覚の定義が述べられる。その後、知覚の下位分類<sup>23</sup>と疑似知覚 (*pratyakṣābhāsa*) を述べ、認識手段 (*pramāṇa*) と認識結果 (*pramāṇaphala*) との非別体説に入る<sup>24</sup>。

この認識手段とその結果に関する議論は、PS I 8cd–12, PV III 301–541 に亘る長いものであり、必ずしもその論旨は明快ではない。特に近年研究者の間で問題とされているのは、ディグナーガあるいはダルマキールティが、一体いかなる立場からその主張を為し

<sup>22</sup> ディグナーガの *Nyāyamukha* (NMu, 『因明正理門論』) やそれと関係の深いシャンカラスヴァーミン (一説にはディグナーガ) の *Nyāyapraveśa* (『因明入正理論』, NP) では、PS I 8cd に類似する文言によって、認識手段と認識結果との非別体説がごく簡潔に述べられる。NMu (大正 32,3b21–23): 又於此中無別量果。以即此體似義生故。似有用故假説爲量, cf. 桂 [1982: 87f.]. NP 144,16f.: ubhayatra tad eva jñānam phalam adhigamarūpatvāt. savyāpāravatkhyaṭeḥ pramāṇatvam iti (『知覚と推論の』両者にとって、正にその知が結果である。なぜならば、認識を特質とするから。作用をもつかのごとくに顕れるので、認識手段である。以上)。なお、原田 [1999: 22–29] はこの箇所について、NMu から PS への外界対象依存型の有形相知識論の継承という観点から、考察を加えている。

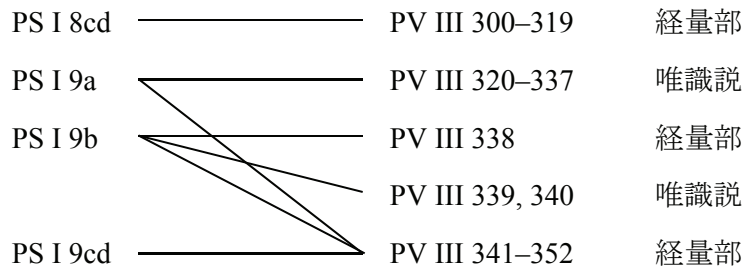
<sup>23</sup> ここでディグナーガが提示する下位分類がある種の重複分類であることは、Franco [1993] [2005] や船山 [2000a] 等に示される通りである。船山 [2000a: 110] がまとめるように、ディグナーガの分類では意知覚の中に、色 (*rūpa*) などに対する対象認識と、楽などの自己認識との両方が含まれるのに対して、ダルマキールティが PV や PVin において両者を切り離し、意知覚を対象認識に関わるもののみに限定して論じていることは、両論者の大きな相違点といえる。一方、Yao [2004] [2005] は、プラジュニャーカラグプタによる PS の引用を根拠に、ディグナーガが意知覚と自己認識とを別立てしているという理解を提示したが、これは Kobayashi [2010] によって否定されている。これまでの主に海外における研究の経緯については、Kellner [2010: 207, fn. 11] にまとめられている。

<sup>24</sup> PS に対する註釈として著されたダルマキールティの PV III の科段は、戸崎 [1979] [1985] によれば以下の通りである。I 量の数 (vv. 1–122), II 現量の定義 (vv. 123–190), III 現量の名称 (vv. 191–193), IV 阿毘達磨の所説と現量の定義「現量除分別」との会通 (vv. 194–230), V 現量の対象 (vv. 231–238), VI 現量の種類 (vv. 239–287), VII 似現量 (vv. 288–300), VIII 量果＝量 (vv. 301–319), IX 量果＝自証 (vv. 320–541)。なお、戸崎 [1985: 1] は、PV III の知覚論は VIII までで一応のまとまりを為しており、IX はある種の余論であると述べるが、筆者自身の考えによれば、むしろ VIII は IX への導入の役割を担っている。



たのかという点である。これまでの研究によってしばしば述べられるように、両者、特にダルマキールティは、認識手段と認識結果について論じる知覚章の後半部において、外界対象 (bāhyārtha, 外境) を認める立場 (いわゆる経量部的立場) から外界対象を認めない立場 (いわゆる唯識的立場) へと徐々に立場を変えている。すなわち、まず始めに、知とは別個の外的な事物を認めた上で、それを対象とする対象認識 (arthādhigati) を認識結果とする<sup>25</sup>。その後、そのような外的対象に対する認識が真実には成り立たないことを論証し、自己認識 (svasaṃvedana), すなわち知による知自身に対する認識こそが認識結果であることを述べる。それは、始めに外界実在論者たる対論者との対話を経た上で、自身の最終的な唯識的主張へと段階的に議論を移行させるためのものであったとも考えられる。

このような立脚点の変更は、戸崎 [1979] においても主な関心事の一つであったし、また、近年「滑り落ちる／上昇する分析の基準」(sliding/ascending scale of analysis) とアメリカの研究者によって命名され、改めて注目を集めている<sup>26</sup>。しかし、実際にどこでどのような変更がなされたのかは未だに確定しておらず、異論の多い問題である。多くの研究者が議論の出発点として取り上げる戸崎 [1979] [1985] によれば、PS と PV の対応関係およびその立場について、以下のような図が想定される (cf. 戸崎 [1985: 2])。



<sup>25</sup> 外界対象が認識対象であるとはいっても、外界対象そのものを直接知覚するわけではない。梶山 [1983: 10f.] などの先行研究が示すように、対象は原因として、一刹那後の知の中に自己の形象を投げ入れる。そして実際に我々が見ているのは、知の中に与えられた、対象の形象に他ならない。PV III 247: bhinnakālaṃ katham grāhyam iti ced grāhyatām viduḥ / hetutvam eva yuktijñā jñānākārpaṇakṣamam // (もし時を異にしたものがどうして把握されようか、と問うならば、理に通じた者たちは、正に知に [自己の] 形象を与える能力のある原因であることが [対象の] 把握対象性であると認める), cf. 戸崎 [1979: 346].

<sup>26</sup> Dreyfus [1997: 83] の “ascending scale of analysis” という命名に始まる。その後この問題を扱った研究としては、McClintock [2003], Dunne [2004], Kellner [2011], Kyuma [2011] などがある。

PS およびそれに付随する自註 *Pramāṇasamuccayaavṛtti* (PSV, PS と PSV の両者を合わせて言及する場合には, PS(V) とする<sup>27)</sup>) に関しては, 上記の図からも分かる通り, PS I 9 の位置付けが特に問題となる. Hattori [1968], 戸崎 [1985], Iwata [1991] といった従来の研究では, PS I 9ab は経量部と唯識の両方に共通する見解を述べるものであり, これによって経量部においても自己認識が認識結果として認められると考えられていた. この場合に, 認識対象, 認識手段, 認識結果がそれぞれの立場で具体的に何を指すかは, 以下のようにまとめられる (Iwata [1991: 4]).

	認識対象	認識手段	認識結果
経量部	外的対象 (bāhyārtha)	知の対象形象性 (viṣayākārātā) = 対象顕現性 (viṣayābhāsātā)	対象認識 (arthasaṃvitti) <sup>28)</sup> または自己認識
唯識	対象を伴った知 (saviṣayaṃ jñānam) = [対象] 顕現 ([viṣaya]ābhāsa) = [所取形象] ([grāhyākāra])	能取形象 (grāhakākāra)	自己認識 (svasaṃvitti)

その後, ジネーンドラブッディ (Jinendrabuddhi, ca. 710–770<sup>29)</sup>) の註釈 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (PST) のサンスクリットテキストが 2005 年に出版され, それに伴い PS(V) もサンスクリット原典が参照可能になった. これによって, 片岡 [2009] [2011a], Kellner [2010], Moriyama [2010] といった新たな研究成果が近年相次いで発表されている<sup>30)</sup>. 以下

<sup>27)</sup> PS と PSV をそれぞれ独立した著作と見るか, 同時に書かれた一つの著作と見るかについては両方の可能性がある. Franco [1986], Iwata [1991] 等が前者の立場をとるのに対して, Schteinkellner et al. [2005] および Kellner [2010] は後者の立場をとる. また, 片岡 [2009] [2011a] も後者に属する.

<sup>28)</sup> しかし, arthasaṃvitti という語は PS(V) I そのものには見当たらない.

<sup>29)</sup> 年代は, Steinkellner et al. [2005: xxxviii–xlīi] による.

<sup>30)</sup> その他に, この箇所を扱った比較的近年の注目すべき研究としては, 原田 [1999] を挙げることができる. 本論文はチベット語訳によるもので, 立脚点の変更については専ら従来の見解に従う. しかし, 『瑜伽師地論』や *Vākyapadīya* といった仏教内部のディグナーガ以前の論書との関わりについて, 他の研究にはないいくつかの独自の観点を提供している. 機会を改めて検討したい.

にその概要を記す。

■ 片岡 [2009] [2011a]

まず、片岡 [2009] [2011a] の特筆すべき特徴は、PS 本文から導かれる素直な解釈こそがディグナーガの本意であるというポリシーにある。PST の解釈はダルマキールティおよびその註釈者デーヴェーンドラブッディ (Devendrabuddhi, ca. 630–690<sup>31</sup>) の影響を多分に受けたものであるから、必ずしもディグナーガの本意に沿ったものではないことを強調し、ジネーンドラブッディの解釈が強引な箇所については、明確な動機によって、その本意を知らながらもあえて新解釈をとっていると考えるのである。

そこで片岡氏は、v. 9a の「あるいは」(vā), v. 9c に対する PSV の「いっぽう」(tu) という接続詞に注目し、唯識の立場と経量部の立場とを以下のように明確に分ける (片岡 [2009: (111)]).

		認識手段	認識結果
PS I 8cd, 9cd	経量部	対象の現れを持つこと	外界対象認識
PS I 9ab, 10	唯識	把握主体の形象	自己認識

これによって、経量部の中に、外界対象認識を認識結果とするもの (経量部 1) と自己認識を認識結果とするもの (経量部 2) といった二つの見解を立てる従来の解釈は否定され、PS I 8–9 の中では、経量部 1 のみが言及されることとなる。また、PS I 9ab は、専ら唯識の立場に関するものとなる。

この解釈は何よりシンプルという点で、魅力的ではある。註釈偏重主義的な傾向を有する仏教研究に対する批判的態度としても、評価することができよう。しかしながら、以下に挙げるような大きな問題を含んでいる。

まず、PS I 8cd について、「対象の現れをもつこと」が認識手段であり、「外界対象認識」がその結果であることを、自明なる出発点として片岡氏は設定している。しかしこれは、ダルマキールティやジネーンドラブッディの解釈によるものであって、実際のところディグナーガはこの問題について何も述べていない。「対象の現れをもつこと」を認識手段とすることは PS I 9cd の記述を援用すれば不可能ではないが、「外界対象認識」については全く言及されていない以上、それを認識結果とすることはできない。したが

<sup>31</sup> 年代は Frauwallner [1961] による。

って、I 8cd を上の図の示すような整理された形で、「経量部」の立場として規定することもできないことになる。vā の語によって、経量部と唯識とを対比させることも、確実ではない<sup>32</sup>。

さらに、I 9cd については、PS(V) の “yasmāt so 'rthaḥ tena mīyate” という記述のみから、「ここでディグナーガは認識結果が「対象認識」であると明言している」(片岡 [2009: 110,1f.], cf. 片岡 [2011a: 6,1-5]) と述べる。しかし、これは「対象の表れをもつこと」が認識手段であることの理由説明であって、ここから、認識結果が対象認識であることを読み取るのは容易ではない。さらに、Moriyama [2010: 263] が注目するように、PSV 4,10 ad PS I 9c に対する “jñānaṃ svasaṃvedyam api” という表現を無視することはできない。これに基づいて自己認識を認識結果とする可能性も残る。

以上のように、I 8cd と I 9cd の両方ともにおいて、PS(V) のテキストを素直に読む限り、認識結果を外界対象認識とすることは明らかではない。たとえ、片岡氏の指摘する通り経量部 1 と経量部 2 とを区別することができないとしても、その代わりに、両者を同一の経量部と見なすこともできないだろう。また、もし I 8cd-10 が単純に二つの立場を述べるものとしたら、なぜわざわざそれを分割して、入れ子構造にする必要があったのか、という根本的な疑問も浮かぶ。

#### ■ Kellner [2010]

一方 Kellner [2010] は、ジネーンドラブッディによる解釈をできる限り尊重するという立場をとる<sup>33</sup>。そして、Hattori [1968], Iwata [1991], 片岡 [2009] といった先行研究の問題点を挙げた上で (224f.)<sup>34</sup>、立場の違いを観点 (aspect) の違いへと置き換えようとする新たな見解を提示した。すなわち、PS I 9 では、「外在論」(externalism, = 経量部) か「内在論」(internalism, = 唯識) かという立場の変更が意図されているのではなく、問題となる対象を、外的なものに限定するか、あるいは内外に関わらず一般的なものとするか、という対象に対する観点の違いが意図されていると考える。

<sup>32</sup> Iwata [1991: 2] が示すように、pramāṇaphala = pramāṇa と pramāṇaphala = svasaṃvedana とを対比させることもできる。

<sup>33</sup> PST に基づき PS(V) を理解しようとする同様のアプローチは、Chu [2006] にも見える。しかし、Kellner [2010] と Chu [2006] の理解は多くの点で異なる。

<sup>34</sup> 片岡 [2011b: 69, n. 6] が指摘するように、Kellner [2010] による Hattori [1968] に対する批判は誤解に基づくものである。また、批判の内容についても検討の余地があり、片岡 [2011a] は多くの点について再反論している。

■ Moriyama [2010]

Moriyama [2010] は、PS I 9 の解釈については、基本的に従来の研究に従っている。その際の、護山氏の理解の一つの大きな特徴は、PS が PSV とは別の一つの著作である可能性を捨て去っていないことである。確かに、PS I 9 を一つのまとまった偈文として見るならば、自己認識を認識結果、対象形象性を認識手段とする、経量部（片岡氏の言うところの経量部 2）の立場を明らかに読み取ることができる。また、PSV の解釈を入れた場合にも、PSV 4,10 ad PS I 9c の “jñānaṃ svasaṃvedyam api” という表現に基づいて、自己認識を認識結果とすることができると述べる（263,24–26）。また、経量部における自己認識の役割を、認識の主観性を確立することにあると考えている（266,24ff.）。

以上のように、三者はそれぞれ異なった結論に至っている。あまりに簡潔な PS(V) のみからその内容を確実に理解することは、困難というより他ない。

一方、PV に関しては、戸崎 [1985] による理解がある程度定説として認められているとはいえ、やはり、研究者間での異論がある。そして、それは、主に註釈者間における解釈の相違に起因している。特に近年では、チベットの註釈者、特にゲルク派のギェルツァプジェ・タルマリンチェン（rGyal tshab rje Dar ma rin chen, 1364–1432）やケードゥプジェ・ゲレクペルサンポ（mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385–1438）による、PV III 341–352 を唯識説とする解釈がいくつかの研究によって取り上げられている<sup>35</sup>。特に、村上（徳）[2008] はその理解が PV そのものに適用可能かどうかを考察した意欲的な研究である。それに対して小林 [2009] は、プラジュニャーカラグプタを始めとするインドの註釈者の解釈を根拠に、その可能性を否定している。また、片岡 [2011b] は、この問題に関しても註釈を排除した素直な解釈という方法論を適用し、あらたな説を提示する。

さて、以上のような多くの問題を孕んだ認識手段と認識結果に関する議論の冒頭、すなわち、PS I 8cd, PV III 301–319, PVin I 34–37, さらに NB I 18–21 において、本研究の主眼である認識手段と認識結果との非別体説が述べられる。しかしながら、少なくともダ

---

<sup>35</sup> See 福田 [1988], 池田 [1993], 村上（徳）[2008]. なお、v. 338 については、サキャ派のラマダンパ・ソナムゲルツェン（bLa ma dam pa bSod nams rgyal mtshan, 1312–1375）やギェルツァプジェが唯識説と見なすのに対して、ケードゥプジェは異論を唱え、経量部説と見なすようである。See 村上（徳）[2006a] [2006b].



ルマキールティは、ここでは知とは別個の外的対象を容認する立場（経量部）にあり<sup>36</sup>、さらに、認識手段は「知が対象の形象をもつこと」((pra)meyarūpatā)あるいは「対象と同一の形象をもつこと」(arthasārūpya)であり、認識結果は「知が対象を認識すること」(prameyādhigati, arthapratīti)であるということを明言している<sup>37</sup>。ここでは、その点をひとまず本研究の議論の出発点として明確にしておきたい。

認識手段	対象形象性 ((pra)meyarūpatā) = 対象同一形象性 (arthasārūpya)
認識結果	対象認識 (prameyādhigati, arthapratīti)

### 1.1.5. 対象認識の位置付け

本研究で主題とされる「対象認識」とは、ここで認識結果として言及される「対象を認識すること」に他ならない。しかしながら、ダルマキールティ自身は対象認識について、それが認識結果であるということと、対象に応じて区別されるものであるということ

<sup>36</sup> ディグナーガの PS I 8cd については、この点は必ずしも明らかではない。というのも、ここで彼は、認識手段と認識結果とがそれぞれ具体的に何を指すか、という点については何も言及していない。また、もしこれを、認識手段と認識結果との非別体性一般を述べるものと考えれば、外界対象を認める立場に限定する必要はなく、唯識説においても通用するものとなろう。この点は、ディグナーガが PS I 9 で統一理論を構築していると理解する Iwata [1991], Kellner [2010] 等のこれまでの研究においても、見逃されていた点である。本研究もそれに倣って基本的には外界対象を認める立場のものと見なしているが、検討の余地がある。PS I 8cd に対する筆者自身の理解については、本研究の 3.2 を参照のこと。

<sup>37</sup> See PV III 306ab (=PVin I 35ab): tasmāt prameyādhigateḥ sādhanam meyarūpatā / (したがって、認識対象の認識（認識結果）を成立させるもの（認識手段）は、[知が] 認識対象の形象をもつことである); PVin I 34: arthena ghaṭayaty enām na hi muktvārtharūpatām / tasmāt prameyādhigateḥ pramāṇam meyarūpatā // (実に、対象の形象をもつことを除いた[他のものは、] それ（知, adhigati）を対象と結びつけることはない。したがって、認識対象の認識に対する認識手段は、[知が] 認識対象の形象をもつことである); NB I 18–21: tad eva ca pratyakṣam jñānam pramāṇaphalam // arthapratītirūpatvāt // arthasārūpyam asya pramāṇam // tadvaśād arthapratītisiddher iti // (そして、正にその知覚たる知が認識結果である。対象認識を特質とするから。それ（知）の対象と同一の形象をもつことが認識手段である。それによって対象認識が成立するから。以上). NB では、対象認識を特質とする知が認識結果であると言われているが、間接的には、対象認識そのものも認識結果と言える。

とを述べるのみであり<sup>38</sup>、それ以上の積極的な議論を展開することはない。むしろ、直後の PV III 320–327 で示されるように、知とは別個の外的な事物が認識対象であることは否定され、認識は正に自ら顕照するのである<sup>39</sup>。したがって、外的対象に対する認識という意味での対象認識が認められない以上、自己認識こそが認識結果であるという結論に至る<sup>40</sup>。このように、対象認識は、外界実在論者たる対論者も認める共通の出発点として仮に認められたものに過ぎない。

しかしながら、ダルマキールティの認識論の体系の中で、対象認識は決してそのような消極的な意義のみを有するわけではない。というのも、ダルマキールティは、PV II の中で、プラマーナを「欺かない／整合した知 (avisamvādi jñānam)」すなわち「目的達成が確定している知」<sup>41</sup>と定義し、その知を「対象に対する行動の主要因」<sup>42</sup>と見なす。また、PVin I の中では、「それに基づいて対象を判別して行動すれば、目的達成に関して欺かれることがないもの」<sup>43</sup>とも述べる。このように、プラマーナが有する知としての妥当性を、当該の対象への到達との整合性に基づいて規定する以上、対象と知との最も直接的な関わり合いである対象認識が、彼のプラマーナ論の中で重要な位置を占めるこ

<sup>38</sup> See PV III 304: tasmād yato 'syātmabhedād asyādhigatir ity ayam / kriyāyāḥ karmaniyamaḥ ... (したがって、それ(知)の本性の違いに基づいて、「[[これは]こ[[の対象]]の認識である」というこのように、作用(認識結果)が[[それぞれの]]対象に応じて確定される場合……。詳しくは、本研究 3.3 を見よ。

<sup>39</sup> See PV III 327: nānyo 'nubhāvyas tenāsti tasya nānubhavo 'paraḥ / tasyāpi tulyacodyatvāt svayam saiva prakāśate // (それゆえに、[知より]別個に感受されるべき[対象]は存在しない。[また]それ(知)を感受するのは他のものではない。なぜならば、同じように非難されるから。正にそれ(知)は自ら顕照する), cf. 戸崎 [1985: 10].

<sup>40</sup> See PS III 332cd: tadānyasamvido 'bhāvāt svasamvit phalam iṣyate // (その場合、「他を認識すること」がないから、自己認識が結果であると認められる), cf. 戸崎 [1985: 16f.].

<sup>41</sup> See PV II 1abc: pramāṇam avisamvādi jñānam arthakriyāsthitiḥ / avisamvādanam (プラマーナとは、欺かない知である。欺かないこととは、目的達成が確定していることである), cf. 稲見 [1992: 65] 他。

<sup>42</sup> See PV II 3b'cd: dhīpramāṇatā / pravṛttes tatpradhānatvād dheyopādeyavastuni // (知がプラマーナである。なぜならば、捨てられるべきものと取られるべきものに対する行動は、それ(知)を主たる要因とするから)。詳しくは、本研究 pp. 43f. を参照せよ。

<sup>43</sup> See PVin I 1,10: na hy ābhyām arthaṁ paricchidya pravartamāno 'rthakriyāyām visamvādyate (というのも、これら二つの[正しい知(=プラマーナ)]に基づいて対象を判別した後、行動する人は、目的達成に関して欺かれることがない)。

とは想像に難くない<sup>44</sup>。

なお、ここで言われる“対象”とは、唯識的立場からすれば知の内部の形象に他ならず、知の相続の中で受け継がれた潜在印象 (vāsanā) によって生み出されるものである。外的実在との対応ではなく、後の経験との整合性によって知の真偽を判定する以上、このような認識論に立つことも不可能ではない。そしてこの場合には、「対象認識」とはいえ、真実には、知が知自身の内にある対象形象を認識するという意味で、「自己認識」に他ならない。しかし、残念ながら、外界実在論に立つ多くの対論者にとって、そのような前提は到底受け入れられるものではなく、議論全体の説得力が失われかねない。したがって、知覚と対象到達との整合性を論じる際には、ダルマキールティ自身も、もっぱら知覚に形象をもたらすものとしての外的対象を容認した上で、その外的対象に対する認識を想定している。

さて、次に、知覚において対象認識と行動とがどのように関わるのか、という点が問題となろう。先に述べたように、仏教論理学派では、プラマーナを知覚と推論の二種とした上で、両者のあり方を明確に区分している。すなわち、知覚は構想作用を欠いた無分別なる (kalpanāpoḍha) 知であり、一切の言語 (abhilāpa) との関わりを離れている。しかし、このような純粋な無分別知たる知覚から、果たしてどのようにして行動が起こるのだろうか。我々の日常的な行動のあり様を省みるならば、何らかの対象を知覚してから実際の行動を起こすまでの間に、その対象に対する事実判断や価値判断など、分別と関わりうるいくつかの認知プロセスが含まれていることに思い当たる。

ここで重要な働きを為すのが、Stcherbatsky [1932: 212] を始めとする先行研究によって「知覚判断」(perceptual judg(e)ment) 等と呼ばれ、「判断」(adhyavasāya)<sup>45</sup>、「分別」(vikalpa)、「決定」(niścaya)<sup>46</sup>等の語によって表される、知覚の直後に生じる概念知で

<sup>44</sup> 桂 [1989: 541] が指摘するように、このように、行動をも含めた認識プロセス全体を考慮にいてプラマーナ論を展開する点は、ダルマキールティにおけるディグナーガとの決定的な相違である。

<sup>45</sup> adhyavasāya の訳語については、先行研究においても様々な可能性が模索されてきた。桂 [1989] および沖 [1990] による「断定」や、北原 [1996] に挙げられる「決定」「間接的決定」「判断」「実体化作用」、福田 [1999] による「思い込むこと」「思いなすこと」、護山 [2011: 63f.] による「実体視」などである。本研究では、太田 [1973] や西沢 [2011] 等に倣い、穏当と思われる「判断」という訳語を採用した。

<sup>46</sup> 「決定」(niścaya) の語は、知覚の後の分別知だけではなく、知覚そのものに対しても用いられることがあり、註釈者によって扱いが異なる。詳しくは、本研究 4.5.1 の註



ある。これは、桂 [1989] がまとめるように、一種の疑似知覚 (pratyakṣābhāsa) であり、「瓶性」などの一般相を対象としており、「これは瓶だ」などという形で、特定の対象を命名、同定するもの」である<sup>47</sup>。「同一の判断」(ekapratyavamarśa, abhedapratyavamarśana),あるいは、アビダルマの伝統に基づき、「世俗的な [知]」(sāmṃvṛta) と呼ばれる。また、*Hetubindu* (HB) で言われるように、以前に知覚された通りの形象を把握する (yathādr̥ṣṭākāragrahaṇa) という点で、想起 (smṛti) に他ならない。そして、想起である以上、未知の情報を明らかにするというプラマーナの定義を満たしていないので、プラマーナには含まれない<sup>48</sup>。

同様に PVin でも、知覚が行動を引き起こす上で、想起の介在を受けるということが述べられている。ここでの対論者の論難は、無分別なる知覚からは日常的活動 (vyavahāra = 行動) は起こりえない、というものである。なぜならば、行動は、「これは楽をもたらすものである」「これは苦をもたらすものである」という対象に関する決定 (niśīci) を必ず前提とするからである<sup>49</sup>。それに対してダルマキールティは、以下のように回答する。

PVin I 18,7–19,2: nāyaṃ doṣaḥ, yasmāt  
tadṛṣṭāv<sup>50</sup> eva dr̥ṣṭeṣu saṃvitsāmarthyabhāvināḥ /  
smaṇād abhilāṣeṇa vyavahāraḥ pravartate // (v. 18)

41 を参照せよ。

<sup>47</sup> ダルマキールティの知覚判断については、その他に、Katsura [1993], 福田 [1999] などの研究がある。

<sup>48</sup> See HB 2,21–23: ... atadvyāvṛttiviśayā smṛtir utpannā pratyakṣabalena yathādr̥ṣṭākāragrahaṇān na pramāṇam, prāg asādhāraṇaṃ dr̥ṣṭvāsādhāraṇa ity abhilapato 'pūrvārthādhigamābhāvād\* ... (……それでないものの排除を対象とする、知覚の力によって生じた想起は、以前に見られた通りの形象を捉えるので、プラマーナではない。先に共通しないものを見た後に、「共通しない」と言語表現するものには、以前にない対象を認識することがないのだから……)。

<sup>49</sup> PVin I 18,5–7: kathaṃ tarhīdānīm anīścayātmanaḥ pratyakṣād vyavahāraḥ. niścinvan hīdamṭayā sukhaduḥkhasāadhanayoḥ prāptiparihārāya pravartate (【問】それならば、どうして、ここで (知覚には分別がないと認める時)、無決定を本性とする知覚から、日常的活動があるのか。というのも、[人は、「これは楽の成立要因であり、これは苦の成立要因である」というように] 「これだ」と決定して、楽の成立要因に到達するために、あるいは苦の成立要因を回避するために、行動するのである)。

<sup>50</sup> PVin I, 58,16: don mthong ba for tadṛṣṭau.

arthālocanamātre 'pi pratyakṣe 'nubhavasāmarthyabhāvino 'nubhūtapratisaṃdhāyinaḥ  
smaraṇāt tadḍṛṣṭāv eva ḍṛṣṭeṣv abhilāṣetarābhyām vyavahāro bhavati.

vastudharmo hy eṣaḥ, yad anubhavaḥ paṭīyān smṛtibijam ādhatte. tāḍṛśadarśanād asya  
prabodho<sup>51</sup> 'bhilāṣavāsanāvivṛttir ato vṛttiś ca.

【答】このような過失はない。なぜならば、

正に<sup>52</sup>それ（以前に直接経験されたのと同種の、現前する対象）<sup>53</sup>を見る（ḍṛṣṭi）時に、[過去と直前の二つの]<sup>54</sup>直接認識（saṃvit）の能力によって生じる想起（smaraṇa）に基づいて、[以前に] 見られた諸々のもの<sup>55</sup>に対する欲求（abhilāṣa）によって、日常的活動が起こる。（v. 18）

知覚が単なる対象の感知（arthālocana）であったとしても、[過去と直前の] 直接経験（anubhava）の能力によって生じる、[以前に] 経験されたものに[現前する知覚

<sup>51</sup> PVin I, 58,25: sad pas for prabodhaḥ.

<sup>52</sup> See PVinT(Dh) P98b3/D84a1: **nyid** ces bya ba'i tshig ni rgyu dang 'bras bu nges par ston pa'o // (eva という語は、原因と結果を限定して説く)。

<sup>53</sup> See PVinT(Dh) P98b3/D83b7–84a1: gang la sngon zhugs pa'i nye ba mngon sum gyi yul du gyur pa **de mthong** ste (以前に作用した近接性を持ち、知覚の対象となっているそれを見ること)。

<sup>54</sup> See PVinT(Bu) 86,3–4: dran pa'i 'du byed 'jog pa myong ba snga ma dang / dran pa'i 'du byed sad byed myong ba phyi ma ste / **myong ba** gnis po'i **mthu las** (想起の潜在印象を[心に]植え付ける前の直接認識と、想起[を起こさせる]潜在印象を覚醒させる後の直接認識との二つの直接認識の能力によって); PVinT(Dh) P98b5–7/D84a2f: **myong ba'i** zhes bya ba gsungs te / sngon zhugs pa'i shing la sogs pa 'bras bu khyad par can gyi rgyu yin par myong ba gang yin pa dang / gang yang rgyu dang 'bras bu'i dngos po gtan la phabs pa'i 'og rol du 'jug pa'i dus su 'jug pa gnyi ga yang mtshungs par gzung ba yin te / gcig ni dran pa'i 'du byed skyed par byed pa yin la / phyi mas ni sad par byed pa'i phyir ro //; PVinT(Jñ) P226a3f./D190b5: mthong ba snga ma dran pa'i sa bon bzhag cing mthong ba phyi mas bag chags de nyid sad par byed pas **myong ba'i mthu las byung ba'i dran pa** 'dis chu 'dzin pa'o snyam pa las. Cf. 戸崎 [1988: 13, fn. 63].

<sup>55</sup> ここでダルモータラは、欲求の対象として、以前に経験されたもののうち、原因ではなく果報（火と物の燃焼ならば、物の燃焼）を考えている。PVinT(Dh) P98b5/D84a1: **mthong ba'i** 'bras bu de **rnams la** (見られたものの結果であるそれらに対して), cf. 戸崎 [1988: 13, fn. 62]. しかし、果報についての言明がダルマキールティ自身によっては為されていないことを考えると、行動の直接の対象である原因の方を欲求の直接的な対象と見なす方が穏当であろう。

対象を] 結び付ける (pratisaṃdhāyin) [「これはあれだ」という]<sup>56</sup>想起に基づいて、正にそれ（現前する対象）を見る時に、[以前に] 見られた諸々のものに対する欲求あるいはそれ以外のもの（嫌悪）によって、日常的活動が生じる。

というのも、大変明瞭な直接経験が、想起の種子を[心に] 植え付ける、ということとはものの道理 (vastudharma)<sup>57</sup>である。それ（以前の明瞭な直接経験の対象）と同種のもの (tādṛśa) を見ることから、それ（想起の種子）の覚醒、[それに基づく]<sup>58</sup>欲求の潜在印象の顕在化 (vivṛtti)、そして、それに基づく行動がある。<sup>59</sup>

知覚そのものは単なる対象の感知 (arthālocana) であり、無分別である。しかし、以下のようなプロセスを経ることにより、知覚から行動が起こる。すなわち、現在の知覚が契機となって、過去の明瞭な直接経験による想起が起こり、それによって、以前に経験された対象への欲求から、日常的活動が起こる<sup>60</sup>。

このように、無分別なる知覚であっても、同種の対象に対する明瞭な直接経験が既になされていれば、想起に基づいて行動を引き起こすことができると考えられている。し

<sup>56</sup> See PVinT(Dh) P99a5–7/D84b1f.: khyad par can gyi (D; om. P) 'bras bu byed pa nyid du myong ba'i don la da ltar mthong ba'i don dang mtshams sbyor ba gcig tu byed pa ste / "khyad par can gyi 'bras bu sgrub par mthong ba'i bum pa (P; bdag D) gang yin pa de nyid ni 'di yin no" zhes de ltar myong ba gnyis mtshams sbyor bar byed pa'i dran pa mngon sum las skyed ba yin la/ (特殊な結果をもたらすものとして[以前に] 直接経験された対象を、現在見られる対象と結び付ける、すなわち同一視することであって、「特殊な結果を生ぜしめることが直接経験された壺、これはそれに他ならない」とこのように、二つの直接経験を結び付ける想起が、知覚によって生じるならば), cf. 戸崎 [1988: 14, fn. 64].

<sup>57</sup> ダルモータラは、ここでの vastudharma を、「明瞭な直接経験の本性」というように限定された意味で解釈する。PVinT(Dh) P100a2/D85a3: de ni gsal bar nyams su myong ba'i chos yin no // (これが、非常に明瞭な直接経験の本性である)。

<sup>58</sup> サンسكريットテキストからは、想起の種子の覚醒と欲求の潜在印象の顕在化とを同格に理解することもできるが、チベット語訳や註釈にしたがって、両者の間に段階を設ける。ダルマキールティ自身が、偈文およびその説明部分で、想起と欲求との間に段階を設けていることにも相応する。PVin I, 58,25f.: sad pas mngon par 'dod pa'i bag chags 'jug cing; PVinT(Dh) P100a4f./D85a5: dran pa sad pa de las mngon par 'dod pa skyed par nus pa'i bag chags gang yin pa de 'jug ste.

<sup>59</sup> Cf. 戸崎 [1988: 13f.], Vetter [1966: 58f.].

<sup>60</sup> 戸崎 [1984: 163] は、「感官知（これは〈過去の経験の想起を起こす心的潜在力（習気、種子）〉を覚醒させる）→ 想起（これは〈現前の対象への行動を起こす心的潜在力〉を覚醒させる）→ 行動意欲 → 行動」と図示する。

たがって、少なくとも、現在の知覚が行動を引き起こす不可欠な原因の一つであることは言える。しかし、知覚が想起を引き起こす契機に過ぎないとすれば、実際に行動を引き起こすのは想起等の後のプロセスなのではないか、という異論の余地も残る。また、あらゆる知覚がこのような有分別知を伴って初めてプラマーナとしての働きを為すとするならば、仏教の教理体系の中で清浄なものとして重要視されている無分別知の価値が、著しく低められることにもなりかねない。

以上のような問題意識に基づいて、その後の註釈者たちは対象認識に関する考察を深めた。そして、その内容を注意深く見ていくと、必ずしもその見解が一致したものではないことが分かる。特に、ほぼ同時代に活躍したと考えられているダルモッタラ (Dharmottara, 法上, ca. 740–800) とプラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta, ca. 750–810)<sup>61</sup>との間には明瞭な対立関係を読みとることができる。両者の解釈の相違点は、対象認識の捉え方を軸に、知覚とその後の認知プロセスとの関わり方や、認識手段とその結果との関係性に関する理解の違いへと広がっているのである。したがって、本研究では、両者の解釈の違いに注目することにした。

### 1.2. 先行研究概観

ここでは、ディグナーガおよびダルマキールティにおける認識手段と認識結果との非別体説に関する先行研究について見た後に、本研究で特に注目して取り上げるダルモッタラとプラジュニャーカラグプタに関する先行研究について、まとめておく。

#### 1.2.1. ディグナーガおよびダルマキールティにおける認識手段と認識結果との非別体説

ディグナーガおよびダルマキールティの知覚論のうち、認識手段と認識結果の非別体説に特化したものとしては、1960年頃に特に日本で続けて研究が発表された後に、2010年前後に、再びいくつかの研究が発表されている。2010年頃の研究は主に知覚論における立脚点について論じるものであり、1.1の中で既に触れたので、ここでは、1960年頃

---

<sup>61</sup> プラジュニャーカラグプタの年代は小野 [1995]、ダルモッタラの年代は Krasser [1992] による。

の研究について概観する。

1960 年前後に発表された研究としては、服部 [1959: 384–393]、宮坂 [1960]、戸崎 [1963] の三つを代表的なものとして挙げることができる<sup>62</sup>。この三つの研究は比較的近い時期に発表されたものであるが、興味深いことに、PS と PV との関係や、プラマーナの解釈について、それぞれ異なった見解を示している。PS と PV との関係に関するそれぞれの基本的な理解を押さえておくならば、服部氏が PV の理解を基本的にそのまま PS に対して適用可能であると考えているのに対して、宮坂氏及び戸崎氏は PS と PV との間に大きな相違があると考えている。また、プラマーナに関しては、服部氏が *karāṇa* による解釈を取るのに対して、戸崎氏は *bhāva* による解釈を提示する。しかし、両者ともが最終的に「作用」という意味に到達する点においては共通している。

#### ■ 服部 [1959] の理解

本論文は、ディグナーガの知識論について、PS I の記述に基いて概要をまとめたものである。また、その内容は単なるディグナーガの知識論のみにとどまらず、他学派、特にニヤーヤ学派の思想についての関連情報を多く含み、その点においても有益である。当該の問題である PS I 8cd については、本論文の五章（384–399）において、vv. 9–12 と合わせて扱われる。

まず、プラマーナが何を意味するかという点については、以下のように述べる。

知識根拠とは、*pramāṇa* = *pra√mā* + *ana* = *pramā-karāṇa* という語源解釈が示すように、「正しい知識を得るための手段」であり、知識を結果せしめるところの過程である (384,7f.)。

これは、先に註 10 で取り上げた NBh における理解であるが、「知識根拠 (*pramāṇa*) は前述の様に正しい知識の手段 (*pramā-karāṇa*) であるが」(387,15) という記述から、PS I 8cd においても同様に理解するという服部氏の態度が読み取れる。さらに、*karāṇa* が何を意味するかという点については、パーニニによる「最上の有効因が *karāṇa* である」という定義を確認した後に、ニヤーヤ学派の諸解釈を取り上げる。

後世の解釈によれば、古典ニヤーヤ学派 (*prācīna-naiyāyika*) は「作用を有していて、

<sup>62</sup> なお、PS I 8cd および PV III 301–319 を取り扱ったその後の研究として、Hattori [1968]、Katsura [1984] 等を挙げるができるが、認識手段と認識結果との非別体説に特化したものではない。



他と共通でない原因」(vyāpāra-vad asādhāraṇaṃ kāraṇaṃ) を *karāṇa* となし、之に対して新ニヤーヤ学派 (nivāna-naiyāyika) は、「結果との結合ということによって限定された原因」(phalāyoga-vyavacchinnaṃ kāraṇaṃ) を *karāṇa* となすと云われる (388,7-12) <sup>63</sup>.

このように、古典ニヤーヤ学派においては、「作用を有するもの」すなわち、作用するもの、実物であることが、*karāṇa* であることの必要条件であると見なされていた。よって、「知覚の *karāṇa* は感官であり、その対象との接触が作用 (vyāpāra) であるということになる」(388,17) と言われる。一方、新ニヤーヤ学派においては、*karāṇa* は必ずしも実物に限定されず、最も結果に対して直接的なものとして、作用そのものが *karāṇa* として認められる。したがって、「知覚に於ける *karāṇa* は感官と対象との接触である」(389,5) ということになる。

さらに服部氏は、新ニヤーヤ学派と同様に、*karāṇa* を必ずしも実物に限定せず、結果に対してより直接的である点を重視するという方向性の延長上にあるものとして、ディグナーガのプラマーナ観を位置付ける。そして、「対象を他のものから区別して確定する作用が、知覚における *karāṇa* である」(390,10f.) というように、*karāṇa* が作用そのものであるという結論に至る。そして、その具体的な内容については、「主観が表象上に対象の相を映し出すこと、換言すれば、知覚表象が対象の相と相似 (sārūpya) なるものとして顕れること (ābhāsa) に外ならないであろう」(389,19-390,1) と述べる。

この服部氏によるディグナーガのプラマーナ理解が文献上のどの根拠に基づくものであるかは明示されておらず、ダルマキールティの NB I 20 における、「対象との相似性／類似性」(arthasārūpya, 対象と同一の形象をもつこと) をプラマーナとする理解を参照したものであるとも考えられる。あるいは、PS I 9cd にも、「対象の顕現をもつこと」(viśayābhāsātā) をプラマーナとする記述が見られるため<sup>64</sup>、明言はされないものの、そ

<sup>63</sup> この服部氏の記述は、*Nyāyakośa* (NK) に基づくものである。NK 200,2: *pracīnanaiyāyikamate vyāpāravat asādhāraṇaṃ kāraṇaṃ*; 200,21f.: *navīnanaiyāyikamate phalāyoga-vyavacchinnaṃ kāraṇaṃ*。しかし、新ニヤーヤ学派の解釈に関する理解には問題があり、これは、「結果との非結合の排除された原因」と訳されるべきであろう。これに類似する解釈はウダヤナの *Nyāyakusumāñjali* 等に見える。Cf. 志田 [2002: (81)]。

<sup>64</sup> PS(V) I 4,8f.: *yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ, tadā viśayābhāsataivāsya pramāṇaṃ ...* (一方、もし外的なものに他ならない対象が認識対象であるならば、その場合には、これ(知)が対象の顕現をもつことがプラマーナである……)。

れを援用した可能性もある。大まかな内容については筆者も同意するものの、「相似なるものとして現れること」というように両者を組み合わせることについては疑問が残る。

全体的に、服部氏はディグナーガの理解を、ダルマキールティの理解から大きくずれるものではないと見なしているようである。確かに、プラマーナを *karāṇa* と結び付けて理解する点<sup>65</sup>、またそれを対象の顕現をもつこととする点については、PS 内部の記述からも裏付けられる。しかし、後代の新ニヤーヤ学派の解釈と結び付けて、それが作用であることを強調し、さらに、対象を確定するもの (*vyavasthāpaka*) というダルマキールティ以降の註釈者によるプラマーナ解釈を安易に導入した上で、「対象を他のものから区別して確定する (*vyavasthā*) 作用が、知覚における *karāṇa* である」(390,10f.) とする点については、より慎重になるべきであろう。

#### ■ 宮坂 [1960] の理解

宮坂氏によっては、ダルマキールティとディグナーガの所説が相違するものであると考えられており、その点については以下のように明示される。

ダルマキールティは七世紀中葉当時のインドの諸哲学々派の *Pramāṇa-phala* 説を予想し反駁しながら自説を表明し、その学説は般若中観派と瑜伽唯識学派の論争を思想史的転機として、ディグナーガの所説との間に注目すべき相違がみとめられる (43a, 10–14)。

このように、ダルマキールティとディグナーガの所説との間に相違があることをはっきりと認めた上で、その思想史的転機として、般若中観派との論争を取り上げている。さらに、ここで述べられる「般若中観派」は、「有相唯識のディグナーガとバヴィヤのスワタントリカ派とに対してダルマキールティの *Pramāṇaphalavyavasthā* がさらに一つの発展形態を示していることを知りえたわけである」という終わりの記述から、自立論証派のバーヴィヴェーカを意図していることが理解される。

次に、PS と PV の内容をそれぞれどのように理解しているのか確認する。まず、PS に関しては PS I 8–11 を取り上げ<sup>66</sup>、その要点としては、「以上で重要なのは認識根拠し

<sup>65</sup> See PS(V) I 4,11f.: *yasmāt so 'rthaḥ tena mīyate* // (9d') (なぜならば、その[外的]対象は、それ(対象の顕現もつことたるプラマーナ)によって認識されるからである)。

<sup>66</sup> ここで提示される宮坂氏による PS I 8–11 の個々の理解に関しては、多くの疑問が残るものの、ここで一々取り上げることはしない。

たがって識が作用を有すとして、自証の性格を明確に打出した点にある」(45b,18f.)と述べる。すなわち、認識根拠 (pramāṇa) であるところの識が、作用を有すとされる点を重視している。これは、v. 8 における「pramāṇa は作用を有するもの (savyāpāra) と考えられるから」という記述から導き出されたものであると考えられる。さらにこの点について、「これが中観派から瑜伽唯識 (有相) 側に対する場合の主なる論争点となるからである。そうして、その論争はダルマキールティに新しい回答を要求するかたちをとることとなるのである」(45b,20f.) と続けられる。

一方、PV については PV III 301–319 を取り上げており、中でも特に v. 319 を重視している。それは宮坂氏によれば、「すべて、正に作用と [作用の] 手段との確定は、このようなたぐい [=分別されたもの] である。なぜなら、存在がもろもろの区別されたものとして認められるときにはまた [作用と手段との関係を] 付託すること āropa によって作用があるからである」(47b,21–48a2) と理解される<sup>67</sup>。さらにこの v. 319 について、以下のように述べる。

この結びの一頌は重要な発言で、般若中観派と瑜伽唯識学派との間における識有に関する対論を介してえられた解答で、瑜伽経量派とも称せられるダルマキールティがヨーガーチャラ派に占める一つの地位を物語るものといえるであろう。それは識論者が識有の左証とする「識の上における自証なるはたらき」を第一義的には否定したがためである。そうしてそれは有作用の識は縁起説に相違すると論難する中観派側の理由を失わさせるものでもある (48a,3–10)。

このようにして、PS においては、「識が作用を有する」ということがプラマーナとプラマーナの結果との同一性の根拠として述べられるのに対して、PV では、勝義としてその作用自体が否定されるという点に、両者の違いを見ている。

しかし、PS における「識が作用を有する」という記述については、ディグナーガによってもそれが決して実物として認められるわけではないという点に注目する必要がある。すなわち、当該の偈に対する PSV で、「[プラマーナの結果としての認識は、実際には] 作用をもたないにもかかわらず、「プラマーナである」と転義的に言われる」とはっきりと述べられている。したがって、認識が作用をもつというのはあくまでも構想上

<sup>67</sup> この解釈は、特に後半部分について疑問が残る。PV III 319 については、戸崎 [1979: 411–413] 小林 [2006] を参照せよ。



のものであるということが、ダルマキールティのみならず、ディグナーガによっても認められているのである。したがって、「識が作用を有する」ということに対する理解の相違から、PS と PV の相違を導き出すことはできない。

#### ■ 戸崎 [1963] の理解

本論文では、PS I 8cd と PV III 301-319 の所説について、結論としてそれぞれ以下のようまとめている (189f.)。

(1) ここで PSV. は「量」を、対象を把握する作用と解して、量果と量の非別体説を論証している。(正理門論・入正理門論も同じ論旨と考えられる。) その論証の根拠である「知は対象に似て生ずるから、対象を把握する動きがあると仮説される」という説は、破我品の所説に由来すると考えられる。破我品が経量部説と見做される限り、PSV. のこの説も経量部説に基づくと見うる。

(2) PV. は、破我品に由来するその説をそのまま踏襲しながらも、「量」を、対象に相応して知を差別せしめるもの——すなわち対象相性——と明確に解釈して、量果と量の非別体性を論じている点で、PSV. と相違している。また、この説は後期の人々によって経量部説乃至外境論説と名言されている。

このように、プラマーナを PS は「対象を把握する作用」と理解し、一方、PV は「対象に相応して知を差別せしめるもの、対象相性」とし、「対象を把握する作用」についてはむしろプラマーナの結果として理解する、と考えている。すなわち、PS と PV では、それぞれ何をプラマーナとするかという点において、相違が見られるとしている。さらに、ディグナーガがプラマーナを「作用」として理解することの妥当性について、戸崎氏は「そこでは *pramāṇa* は、*karāṇa* (作具) ではなく、*bhāva* (作用) の意味に解されていると考えられる」という根拠を挙げている。一方ダルマキールティのプラマーナ理解に対しては、戸崎氏自身によっては明示されていないものの、PV 自体の記述に基いて、*sādhana* ないしは *karāṇa* (手段、作具) の意味で理解していると考えられる。

このように、それぞれのプラマーナの理解について PS と PV の相違を明らかにし、さらに、そのプラマーナ理解を先に確認された *-ana* 接尾辞の三種の用法と結びつけて解釈した点に、本論文の特徴がある。PV については、プラマーナを *karāṇa* と結び付け、対象に相応して知を差別せしめるものとするのは、筆者自身の見解とも一致する。ただ

し、PS については、「[認識は、] 作用をもつ (savyāpāra) と理解されることによって、プラマーナである[と転義的に言われる]」という記述のみから、「対象を把握する作用」がすなわちプラマーナである、とする点について疑問が残る。また、それをさらに bhāva の用法によって理解する点についても、ディグナーガ自身の明言がない以上、再考の余地があるだろう。

### 1.2.2. ダルモッタラに関する先行研究

ダルモッタラについては、ダルマキールティの *Nyāyabindu* (NB) に対する彼の註釈 *Nyāyabinduṭīkā* (NBṬ) のサンスクリットテキストが、仏教論理学派に対する近代的研究がスタートした最初期の段階で出版されている。すわち、1889 年のイギリスの Peter Peterson による、*The Nyāyabindu-ṭīkā of Dharmottara āchārya to which is Added the Nyāyabindu* (Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1929) である。さらに 1904 年には、ロシアの Theodore Stcherbatsky が NBṬ のチベット語訳テキストを発表し、続けて 1918 年には新たな写本の情報を加えて改めて NB および NBṬ のサンスクリットテキストを発表した。その後、翻訳および研究を、ロシア語および英語にて発表した<sup>68</sup>。また、1955 年には、インドの Dalsukhbai Malvania によって、Durvekamiśra の復註 *Dharmottarapradīpa* (DhPr) を伴う刊本も出版された。

このような恵まれた資料の状況や、比較的内容が簡潔にまとめられているという利点もあり、NB とそれに伴う NBṬ とは、仏教論理学派の思想研究のための基本テキストとして用いられてきた。しかし、先行研究が指摘するように、ダルモッタラの解釈が必ずしもダルマキールティの意図に忠実であるとは限らず、先行する註釈者との違いを意識しながら、彼独自の理解を打ち出したものと思しき箇所も多くある<sup>69</sup>。

1990 年頃には、*Pramāṇaviniścayaṭīkā* (PVinṬ(Dh)) や、*Laghuprāmāṇyaparīkṣā* (PPar II) といったその他の著作に関しても、チベット語訳テキストに基づく研究が発表されるよ

<sup>68</sup> Cf. Stcherbatsky [1930] [1932]. 赤松 [1984a: 188–190] が指摘するように、同書にはいくつかの解釈上の問題点が含まれているものの、その重要性は未だ失われていない。

<sup>69</sup> 例えば、渡辺 [1970: 243] は NB の註釈に対する和訳研究の中で、ヴィニータデーヴァ (Vinītadeva, 調伏天, ca. 690–750) とダルモッタラとの解釈の違いに触れながら、「ある意味では、法上よりもむしろ調伏天の方が法称に対して忠実であるとも考えられる」と述べる。

うになった。これらの研究により、ダルモータラのプラマーナ論や認識論の特徴が徐々に明らかになってきた<sup>70</sup>。

さらに、21世紀に入り、かねてよりその存在が噂されていたチベットのポタラ宮所蔵の *Pramānaviniścayaṭīkā* (PVinT(Dh)) の写本の複写が、中国蔵学中心 (China Tibetology Research Center) とオーストリア科学アカデミー (Austrian Academy of Science) との協力により、正式に利用可能になるというダルモータラ研究にとって画期的なニュースがもたらされた<sup>71</sup>。これにより、現在、各国の研究者の共同研究によって、サンスクリットテキストの校訂作業が進められている。これまでに発表されたまとまった成果として、第2章 自己のための推論章を扱った Sakai [2010] (ad PVin II 53–55) や Ishida [2011] (ad PVin II 64) などの研究を挙げることができる。また、第3章 他者のための推論章についても、岩田孝氏、渡辺俊和氏等による研究が進められている。残念ながら、第1章知覚章の全体と、第2章および第3章それぞれの一部については、写本は発見されていない。しかし、まずは写本が現存する箇所についてサンスクリットとチベット語訳とを比較対照させ、それを応用することによって、チベット語訳のみが現存する箇所についても、より高い精度での解読が可能となろう。

### 1.2.3. プラジュニャーカラグプタに関する先行研究<sup>72</sup>

プラジュニャーカラグプタに関する近代の研究は、Rāhula Sāṅkrtyāyana により、1935年に *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (PVA) の知覚章後半部分を含むサンスクリットテキストが出版されたことに始まる。その後チベットにおける2度の再調査を経て、1953年に彼は二種の写本 (A: , B) に基づき<sup>73</sup>同書の全体を含むサンスクリットテキストを出版した。

---

<sup>70</sup> プラマーナ論については、Steinkellner and Krasser [1989], Krasser [1991] など。これらの著作については、本研究の第4章でも取り上げる。また、認識論については、Iwata [1991] などがある。

<sup>71</sup> 両者の協力関係に至る経緯については、Steinkellner [2004] を参照せよ。

<sup>72</sup> 以下の概要は、小林 [2005: v–vi; lv–lvii] の記述を元に、近年の研究成果を加えたものである。プラジュニャーカラグプタの思想史的立場や、PVA の刊本およびチベット語訳に関する詳しい書誌情報については、小林 [2005: xlii–liv] を参照のこと。

<sup>73</sup> Sāṅkrtyāyana によるチベットにおける PVA に関する写本調査とテキスト校訂の経緯については、PVA および Watanabe [1998] の前書きにまとめられている。それによれば、彼は1934年と1936年の調査を通じて、合計五つの PVA 写本を発見し (A: Sa-skya (Gu rim

この刊本は今日に至るまで PVA の基本テキストとして用いられているものの、Frauwallner [1957] や Franco [2004: 151] が指摘するように多くの問題を含んでおり、内容を正確に理解するためには再校訂が不可欠である。

その後、沖和史氏および岩田孝氏による一連の研究によって、プラジュニャーカラグプタの認識論、特に唯識思想に関する基本的な立場が明らかにされた<sup>74</sup>。また、小野 [1995] により、プラジュニャーカラグプタ<sup>75</sup>、および後継者のラヴィグプタ、ジャヤンタ、ヤマーリの年代や、PVA の呼称、ジャヤンタ、ヤマーリの呼称といった基本的な項目に関する共通見解が得られた。

---

lha khang (=sgo rum lha khang?)), B: Sa skya (サキヤ寺南寺, phyag dpe lha khang), C: Zhwa lu (=王 [1985] No. 33), D: Zhwa lu (=王 [1985] No. 34), E: Ngor), 実際にはそのうちの二つ (A, B) に見られる読みが異読として彼の刊本に採録されている。さらに、五つのうち二つの写本 (B, E) については、ネガフィルムを複写したものが Watanabe [1998] によって出版されている。

近年、チベットにおける梵文写本の現状や、Sāṅkrtyāyana の写本調査の実態について改めて諸研究者の関心が高まっており、その成果の一端は、Steinkellner [2004] や加納 [2012] などに発表されている。それらに記載された情報を合わせて考えると、これまでその内容を見ることができなかった残りの三つの写本 (A, C, D) も、チベットに現存している可能性がある。少なくとも、Steinkellner [2004: 12] は、Vibhūticandra (12 世紀後半～13 世紀後半) の書写による A と思しき紙写本が、1999 年にサキヤ寺で確認されたことを報告している。PVA の前書き p. da に書かれた A の発見場所である Gu rim lha khang がシャキヤ寺北寺の sgo rum lha khang を指すとすれば、奇跡的に破壊を免れたということになる。C, D については、もしそれが王 [1985] に記載されている北京の民族文化宮 (Culture Palace of Nationalities (民族文化宮ホームページによる英語表記)) 図書館に保管されていたものであれば、1993 年にラサの西藏博物館 (Tibet Museum) に移管されていることになる (Steinkellner [2004: 23])。また、加納 [2012: 149, fn. 88] によれば、サキヤ寺南寺 phyag dpe lha khang の梵文写本の蔵書はそのままサキヤに現存するとあり、複写が出版されている B の原本も、その中に含まれている可能性がある。

<sup>74</sup> 沖 [1975] [1982], 岩田 (Iwata) [1983] [1986] [1991] など。

<sup>75</sup> プラジュニャーカラグプタの年代は、西暦 800 年頃という推定が Steinkellner [1981] によって既になされていたが、小野氏は更に詳細な検討を加え、具体的な年代を提案した。その根拠は以下の通りである。1. ダルモータラ (ca. 740–800) が PVA を批判する。2. ジャヤンタ・バッタ (ca. 840–900) が、PVA およびプラジュニャーカラグプタの直弟子とされるラヴィグプタに言及する。3. ヴィドヤーナンダ (ca. 775–849?) が PVA を引用する。また、PVA の中で「死者のように、記憶されてはいるが知覚されることがないもの」として例示されるカニャークブジャ (Kanyākubja. 玄奘の『大唐西域記』には「曲女城」と記され、現在の Uttar Pradesh 州 Kannauj (カナウジ) にあたる) が、実際に 8 世紀後半には戦火を被り衰退していたという点も、傍証として挙げられる。

本格的なテキストの再校訂を伴った研究は 1990 年代前半から公刊され始め、その後 1998 年に成田山新勝寺から、Patna の Bihar Research Society に保存されている Sāṅkṛtyāyana による写本コレクション（ネガ）の複写版が出版されたことにより<sup>76</sup>、研究の環境は大幅に改善され、多くの研究成果が発表されている<sup>77</sup>。これまでに発表されている主な校訂テキストは、以下の通りである<sup>78</sup>。

(1) プラマーナ・シッディ (pramāṇasiddhi) 章

PVA 3,4–32,15 (Ono [2000])

PVA 3,20–4,16; PVA 25,1–29,31 (Watanabe [2000])

PVA 32,19–42,18 ad PV II 8–10; PVA 50,19–53,5 ad PV II 29–33 (Moriyama [2014a])

(2) 知覚 (pratyakṣa) 章 (PVA 169,3–463,31)

PVA 169,3–175,9 ad PV III 1–2 (稲見 et al. [2002])

PVA 212,28–213,4 ad PV III 53d–54ab (護山 [2014b])

PVA 349,7–373,4 ad PV III 320–332ab (小林 [2005])

(3) 他者のための推論 (parārthānumāna) 章 (PVA 467,4–648,20)

PVA 467,4–469,22 (小野 [2003])

PVA 469,23–471,18 ad PV IV 1–3 (小野 [2004])

PVA 471,18–474,7 ad PV IV 4–6 (小野 [2005])

PVA 474,7–475,26 ad PV IV 7–12ab (小野 [2006])

PVA 475,26–478,10 ad PV IV 12cd (小野 [2007])

PVA 478,12–481,16 ad PV IV 12cd (小野 [2008])

PVA 481,17–483,26 ad PV IV 12cd (Iwata [1993])

PVA 481,17–484,18 ad PV IV 12cd–14 (小野 [2011])

PVA 579,31–589,20 ad PV IV 189–194 (稲見 et al. [2005])

---

<sup>76</sup> Watanabe [1993].

<sup>77</sup> プラジュニヤーカラグプタに関する研究は、仏教論理学派研究の中でも、この 20 年の間で最も進歩した分野といってもよい。これは、平川彰他編『認識論と論理学』（講座・大乘仏教 9、春秋社、東京、1984）の中では全く扱われなかった彼の解釈を、リニューアルされた桂 et al. [2012] の中では多くの研究者が取り上げていることから伺われる。

<sup>78</sup> 以下の表は、小林 [2005: lv] の表にその後の成果などを加えたものである。



PVA 641,7–644,1 ad PV IV 280–285 (酒井 [2003])

#### 1.2.4. ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの認識論における違い

ダルマキールティの思想を引き継ぐ中で、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタとが異なった立場をとることは、古くから指摘されていた。すなわち、Stcherbatsky [1932: 39–47] による、1. 文献学派(philological school), 2. 哲学学派(philosophic school), 3. 宗教学派(religious school)という分類であり、ダルモッタラは2に、プラジュニャーカラグプタは3に配される。この分類は、チベット撰述の宗義書における、形象の取り扱いに関する分類との対応が袴谷 [1976: 241f.] によって指摘されているように、チベットの思想家による理解を参考にしたものであろう<sup>79</sup>。例えば、PVA や PVinṬ(Dh) を始めとする多くの仏教論理学派関連の書物のチベット語訳に関わった翻訳官であり、また自らも優れた註釈者であったゴクローツァーワ・ローデンシェーラブ(rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059–1109)のPVin註, *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad*(rNgog)では、ダルモッタラ(Chos mchog)の説が名前と共にしばしば取り上げられる一方で、時折、プラジュニャーカラグプタ(Shes rab 'byung gnas)の説がそれと対比的に取り上げられる<sup>80</sup>。こういった理解をさらに発展させて、チベットの思想家たちは上記の三分類を為したと考えられる。

また、このようなダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの対立関係は、周知のごとく、既にインド撰述の文献においても言及されている。すなわち、ヤマーリによるPVA註, *Pramāṇavārttikālaṅkāraṭīkā Suparīśuddhi* (Y)における記述である。小野 [1995: 161] がまとめるように、彼は、プラジュニャーカラグプタが引用、批判している学説の幾つかを、ダルモッタラの学説に比定している。このヤマーリの記述に注目し、両者の比較研究にいち早く着手したのが、谷貞志氏と岩田孝氏である。その成果は谷(Tani) [1983] [1984] [1991], 岩田(Iwata) [1983] [1991] [1993] などに発表されている。

<sup>79</sup> 白館 [2004: 3] によれば、Stcherbatsky は仏教論理学の概要書などを著したゲルク派の僧ロンドルラマ(Klong rdol Ngag dbang blo bzang, 1719–1795)の系統に属するモンゴル人ラマから中観、量を学んだとのことである。

<sup>80</sup> 一例を挙げる。rNgog 146,21–147,4: slob dpon chos mchog gis ... // 'di la slob pon shes rab 'byung gnas na re .... なお、プトン・リンチェントゥブ(Bu ston Rin chen grub, 1290–1364)のPVin註(PVinṬ(Bu))もそれを引き継ぎ、同様の形式の註釈を行う。

中でもダルモータラとプラジュニャーカラグプタの認識論に関わるものとして重要なのは、Iwata [1991] である。これは、一種の唯識論証である、「必然的同時認識」(sahopalambhaniyama) という証因に基づく知と対象との非別体性の論証に関する詳細な研究である。その中で岩田氏は、論証を個々の要素に分割した上で、それぞれに対する注釈者や後の思想家たちの解釈を仔細に検討している。特に、所証特性(sādhya-dharma)たる非別体性(abheda)については、Iwata [1991: 211–213] がまとめるように、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタとの対比的な態度が目立つ。

すなわち、ダルモータラは、非別体性を、知における青などの対象の形象という客観的な側面と主観的側面との「別異性の単なる否定」(bhedapratishedhamātra)として理解している。これは、その客観的な側面が真実の存在ではない、と考えられることに由来しており、このような立場は「形象虚偽論」(alīkākāravāda)と呼ばれる。この立場を更に推し進めれば、後代のラトナーカラシャーンティなどに代表される、無形象認識論(nirākāravijñānavāda, =無形象唯識説)の立場に接近することになる。一方プラジュニャーカラグプタは、デーヴェンドラブッディなどの先行する註釈者に倣って、非別体性を「同一性」(ekatva)として理解している。このような理解は、PV のみにおいて取り上げられ、PVin や NB には見られない、形象の多様不二(citrādvaita)説に影響されたものと考えられている。また、このような彼の立場は、知が真実として存在する対象形象を有していると考え、「有形象認識論」(sākāravijñānavāda, =有形象唯識説)と一致している。また、Iwata [1991: 216] の図では、プラジュニャーカラグプタがダルモータラを批判している可能性が示されている<sup>81</sup>。

このような、知における対象形象に対する態度の違いは、本研究で扱う認識手段と認識結果の非別体説にも直接的な影響を与えている。というのも、先に 1.1.4 で確認したように、認識手段が「知が対象の形象をもつこと」、認識結果が「知が対象を認識すること」であるならば、それは正に、知の客観的側面と主観的側面とを意味することになる。そして、その両者が非別体であるという時に、それは果たして、別異性の単なる否定を意味するのか、あるいは同一性を意味するのか、という問題にもなる。本研究の第5章で見るように、プラジュニャーカラグプタは、彼の基本的な立場に従って、ここでも両者の同一性をはっきりと述べているのである。

---

<sup>81</sup> しかし、岩田 [1983: 65, n. 80] にも示されるように、あくまでも可能性にとどめており、両者の先後関係については慎重な態度を崩さない。

その後、小野 [1995] に至り、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの先後関係を確定しようという試みが為された。「もしもヤマーリがダルモッタラ説とみなしている学説をダルモッタラの著作の中に同定することができ、しかもそれがダルモッタラ以前には見られない彼特有の学説であることを論証できれば、事実上プラジュニャーカラがダルモッタラの学説を（直接的であれ間接的であれ）引用しているとみて差し支えなく……」（160,3-6）という方針に基づき、それに該当する（1）真理論、（2）個別相の定義、（3）直接知覚の定義、（4）認識の顕現に関する学説、という四つの事例を検討している。この試みは、成功していると言ってよく、本研究もこれに従うものである。

### 1.3. 本研究の目的と手法

このように、ディグナーガやダルマキールティによる認識論すなわち知覚論の全体像や、さらにそれぞれの註釈者の解釈における基本的な特徴や相互の関係が、先行研究により既に明らかにされている。そして、近年注目を集めている認識手段と認識結果に関する議論の中でも、その冒頭箇所については意外に研究が手薄である。また、特にそこで扱われる対象認識については、ディグナーガおよびダルマキールティにおいては特に積極的な議論は展開されないものの、ダルモッタラやプラジュニャーカラグプタといった註釈者の解釈を丁寧に見ていくと、両者の認識論の大きな相違点が、そこにも影響を与えていることがわかる。具体的には、知における対象形象の取り扱いや、知覚と行動との関わりといった問題である。このような現状に鑑みて、本研究では、対象認識という特定の論題に限定して、仏教論理学派における思想史的展開を追うことにしたい。

そこで本研究では、まず第2章では、研究の前提となる「プラマーナ」という概念について、仏教論理学派の一般的な理解をニャーヤ学派の理解との比較を通じて明らかにする。次に第3章では、ディグナーガおよびダルマキールティによる認識手段と認識結果に関する理解について、基本的な内容を押さえる。その後、第4章と第5章では、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタとの対象認識に関する解釈の違いに注目し、それぞれの内容を取り上げる。

また、それぞれの論師の思想内容の理解には、主に以下のようなテキストを使用する。

ディグナーガ

PS I 8cd

ダルマキールティ

PV III 301-319, PVin I 34-37



## 第1章 序論

ダルモッタラ

NBT ad NB I 1; 18–21

それに対応する PVinT(Dh) と PPar II

プラジュニャーカラグプタ

PVA ad PV III 311

本研究で実際に扱うテキストは、ごく僅かな量に過ぎない。ダルモッタラやプラジュニャーカラグプタの豊富な註釈の全体から見れば、はなはだ不十分であろう。しかし、たったこれだけのテキストからも、両者の対象認識理解の違いを端的に読み取ることができる。また、PVA ad PV III 311 に対するヤマールの復註にも、ダルモッタラとの対立が指摘されており、検討の価値はある。

なお、本研究の本論部分は、これまでに筆者自身が発表した雑誌論文を元に、適宜加筆訂正したものである。以下に、該当箇所とその初出を挙げる。

第2章 「プラマーナ (pramāṇa) という語のもつ二つの意味とその関係——仏教論理学派とニヤーヤ学派」, 『久遠—研究論文集』3, 2012, 52–68 (三代 [2012]).

第3章 ダルマキールティの対象認識に関する一考察——なぜ対象の形相をもつことが認識手段なのか」, 『東洋の思想と宗教』26, 2009, 67–87 (三代 [2009]).

第4章 「ダルモッタラにおける対象認識——分別と無分別のあいだ」, 『久遠—研究論文集』4, 2013, 26–40 (三代 [2013b]).

第5章 「決定知に関するプラジュニャーカラグプタのダルモッタラ批判——*Pramāṇavārttikālaṅkāra* ad PV III 311 訳注研究」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』58–1, 2013, 93–107 (三代 [2013a]).

## 第2章 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa)

### 2.1. 問題の所在

「プラマーナ」(pramāṇa) という語は、仏教論理学派のみならず、当時のインドの思想家たちによって学派や宗派を超えて広く用いられた、認識論上の重要な術語であった<sup>1</sup>。これに対してこれまで、「量」という漢訳や、「正しい認識の手段」、「認識手段」、「知識手段」、「認識根拠」、あるいは「正しい認識」というような種々の訳語が当てられている。これらの訳語は、pra√mā (量る、認識する) という動詞に、接尾辞 -ana のもつ手段 (karaṇa, 作具) の意味を付加して解したものと、そのような手段の意味を出さずに、認識そのものあるいは認識の作用と解したものの二種に大別される<sup>2</sup>。

広く知られているように、仏教論理学派では、プラマーナとして、知覚 (pratyakṣa) と推論 (anumāna) の二種が認められる。その一方で、ディグナーガさらにダルマキールティに至ってより明確に、プラマーナとは対象の形象をもつこと (meyarūpatā) あるいは能取形象 (grāhakākāra), プラマーナの結果とは対象の認識 (arthādhigati) あるいは自己認識 (svasaṃvitti) であり、それら両者の区別は概念的構想に過ぎないという、いわゆる認識手段・認識結果の非別体説が述べられる<sup>3</sup>。さらには、諸々の徳目を備えた世

---

<sup>1</sup> 「プラマーナ」という概念に関する歴史的な背景については、本研究 1.1.2 を見よ。

<sup>2</sup> パーニニ文法によれば、-ana 接尾辞には、作用 (bhāva), 手段 (karaṇa), 基体/場所 (adhikaraṇa) という三つの意味がある。Pāṇini 3.3.114–117: napuṃsake bhāve ktaḥ. ... lyuṭ ca. karaṇādhikaraṇayoś ca ( [Kṛt 接尾辞] Kta (-ta) は、作用 (bhāva) をあらわす中性の [名詞をつくるために、動詞語根の後ろに用いられる]。同様に、[Kṛt 接尾辞たる] Lyuṭ (-ana) も、[作用をあらわす中性の名詞をつくるために、動詞語根の後ろに用いられる]。…… [kṛt 接尾辞である Lyuṭ は、] 手段 (karaṇa), あるいは、基体 (adhikaraṇa) [をあらわすために用いられる] )。

プラマーナにおける -ana 接尾辞に関しては、手段の意味によるのが最も基本的な理解であったと考えられるが、後に本研究 2.5 で確認するように作用の意味で解するものや、さらに、基体の意味で解するものもある。例えば、後代のニヤーヤ学派の論師ウダヤナ (Udayana, 11 世紀) 等は、主宰神をプラマーナに含める際に、基体による解釈を採用した。Cf. 志田 [2002]。

<sup>3</sup> この非別体説は、専ら知覚に関連して詳細な議論がなされるものの、推論に対しても同様の説が適用される。Cf. NB II 4: pramāṇaphalavyavasthātrāpi pratyakṣavat // (認識手段と結果の確立は、この [自己のための推論の] 場合にも知覚と同様である), PVin II 46,3:

尊こそが、プラマーナであるとも言われる<sup>4</sup>。

ここで浮かび上がってくるのは、果たして「プラマーナ」という語の意味は何かという問題である。ここで問題を知覚に限るとしても、知覚に当てはめられる「プラマーナ」という語と、対象の形象をもつことや能取形象に当てはまる「プラマーナ」という語とは、一見すると別々の意味をもつかのように見える。一連の認識論の枠組みの中で、この両者は、どのように整合性をもって位置付けられるのだろうか。本章では、ダルマキールティの所説を中心に、ニヤーヤ学派の用例との比較を通じてその内容を見ていくことにしよう<sup>5</sup>。

## 2.2. 正しい知としてのプラマーナ

周知のように、プラマーナは知覚および推論の二つであると述べる場合のプラマーナとは、「正しい知」(samyagjñāna) という意味である<sup>6</sup>。例えば以下に挙げるように、ダルマキールティは、正しい知の分類として知覚と推論を挙げ、直後にそれを二つのプラ

---

pratyakṣavad asya phalavikalpo vijñeyah (知覚と同様に、これ(自己のための推論)に対する結果の想定が知られるべきである)。

<sup>4</sup> このような宗教的権威としてのプラマーナについては、本研究では扱わない。世尊を表すプラマーナと認識論的なプラマーナとの関わりについては、小野 [2012: 160–178] に詳しい。

<sup>5</sup> プラマーナという語のもつ二つの意味については、吉田 [2011] 等の先行研究においても既に取り上げられているが、本研究ではさらに、その二つの意味がどのように整合的に理解されるのか、また、その理解の仕方にはいかなる特徴があるのか、といった視点からこの問題を更に掘り下げて検討した。吉田 [2011] では、これら二種の意味をプラマーナの両義性としてそれぞれ認めた上で、対象の形象をもつことたる後者のプラマーナを他学派が主張するプラマーナを批判するためのものであると結論付けている。仏教論理学派のプラマーナ論がそのような側面をもつことは十分に認められよう。このような他学派批判としてのプラマーナ論については、本研究第3章および三代 [2010] で詳しく述べた。

<sup>6</sup> Cf. 船山 [2012: 95] 他。一方、木村(誠) [1994] は、samyagjñāna の語が PVin および NB においてのみ使用されることから、PV II で主に論じられる世尊たる pramāṇa には適用できない低レベルのものであると考え、Krasser [1991: Teil 2, 12, fn. 41] が samyagjñāna と pramāṇa とを同義語とすることに異議を唱える。しかし、少なくとも本節で取り上げるような文脈に限って言えば、両者を同義語と見なすことは何ら問題ない。PV II の冒頭でプラマーナが「欺かない知」(avisamvādi jñānam) と規定されるのも、これと軌を一にする。PV II 1ab': pramāṇam avisamvādi jñānam (プラマーナは欺かない知である)。

マーナと言い換えている。

PVin I 1,8–2,4: tad dvividhaṃ samyagjñānaṃ pratyakṣaṃ anumānaṃ ceti. ...

nanv anyad api śābdopamānādikaṃ pramāṇaṃ asti. pramāṇasya sato 'traivāntarbhāvāt pramāṇe eva.

その正しい知は、二種である。知覚と推論という〔二種〕である。……

【反論】他にも、聖言や類比などのプラマーナがあるではないか。

【答】プラマーナであるならば、この〔二種〕のみに含まれるのだから、二つのプラマーナのみがある<sup>7</sup>。

このように、知覚や推論に該当せられるプラマーナの語は「正しい知」の意味で用いられており、そのことは、プラマーナの一種である知覚 (pratyakṣa) や推論 (anumāna) の定義からも確認される。

まず、知覚の定義である。

PVin I 7,3f.: timirāsubhramaṇanauyānasamkṣobhādyanāhitavibhramam avikalpakam jñānaṃ pratyakṣam.

ティミラ眼病，早い回転，船行，[体液の] 不均衡などによって迷乱が引き起こされていない，分別を有さない知が知覚である<sup>8</sup>。

さらに、自己のための推論も同様に、知の意味で定義される。

PVin II 46,3: trilakṣaṇāl līṅgād yad anumeye 'rthe jñānaṃ, tat svārtham anumānam.

三つの条件を満たした証因に基づく，推論対象に関する知，それが自己のための推論である<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> 以下に挙げる PVin I の訳については、Vetter [1966], 戸崎 [1986] [1987] [1991] [1992b] [1993a] [1993b] を適宜参照した。他には、高麗 [1977] による PV I の 33,1 から終わりまでに対するチベット語訳からの和訳があるが、問題が多い。

<sup>8</sup> Cf. NB I 6: tayā rahitaṃ timirāsubhramaṇanauyānasamkṣobhādyanāhitavibhramam jñānaṃ pratyakṣam // (それ(分別)を離れた，ティミラ眼病，早い回転，船行，[体液の] 不均衡などによって迷乱が引き起こされていない知が，知覚である)。なお，知覚の定義に関する諸註釈者の解釈については，沖 [1987], Funayama [1999], 船山 [2012: 99f.] 等を参照せよ。

<sup>9</sup> Cf. NB II 3: tatra svārtham trirūpāl līṅgād yad anumeye jñānaṃ tad anumānam // (そのうち，三つの条件を満たした証因に基づく，推論対象に対する知，それが自己のための推論で

一方、他者のための推論は、直接的には言葉として定義されるが、本意としてはその言葉を聞くことによって生じる知を指すという点で、上の二つと同じである。

PVin III 1,2–4: yathaiva hi svayaṃ trirūpāl līṅgāl līṅgini jñānam utpannam, tathā paratra līṅgijñānotpādayiṣayā trirūpālīṅgākhyānaṃ parārtham anumānam, kāraṇe kāryopacārāt.

[立論者] 自身に、三つの条件を満たした証因に基づいて、証因を有する[所証]に関する知が生じ、同様に、他者に[も]、証因を有する[所証]に関する知を生起せしめようと意図して、三つの条件を満たした証因を表述するものが他者のための推論である。原因に対して結果[を表す語]を転義的に用いる(upacāra)から<sup>10</sup>。

ここでは、証因の表述(līṅgākhyāna), すなわち三つの条件を満たした正しい証因を表述する言葉が他者のための推論であると述べられている<sup>11</sup>。しかし、それはあくまで原因に対して結果を表す語を用いるという転義的用法(upacāra)によるものであり、正しい知がプラマーナであるというここでの原則からいけば、原因たる言葉を聞いた結果として他者に生じる対象に関する知こそが、他者のための推論である。

以上のように、プラマーナは知覚と推論の二種であると述べる場合の「プラマーナ」という語、あるいは「知覚」や「推論」は、一貫して正しい知を意味していることが理解されよう<sup>12</sup>。

ある)。

<sup>10</sup> Cf. NB III 1–2: trirūpālīṅgākhyānaṃ parārtham anumānam // kāraṇe kāryopacārāt // (三つの条件を満たした証因を表述するものが、他者のための推論である。原因に対して結果[を表す語]を転義的に用いるから)。

<sup>11</sup> Cf. NBT 150,4–6: ākhyāyate prakāśyate 'neneti — trirūpaṃ līṅgaṃ ity ākhyānam. kiṃ punas tat. vacanam. vacanena hi trirūpaṃ līṅgaṃ ākhyāyate (これによって表述されるすなわち明らかにされるという意味で[表述なので]あって、「証因が三つの条件を満たしている」という表述である。【問】ならば、それ(表述)とは何か。【答】言葉である。すなわち、言葉によって三つの条件を満たした証因が表述されるのである)。

<sup>12</sup> ディグナーガも、ダルマキールティとほぼ類似する形でそれぞれのプラマーナを定義している。See PSV I 2,8: yasya jñānasya kalpanā nāsti, tat pratyakṣam (ある知に分別がないならば、そ[の知]が知覚である); PS II 1ab: anumānam dvidhā, svārtham trirūpāl līṅgato 'rthadr̥k / (推論は二種類である。自己のための[推論]は、三つの条件を満たした証因に基づく、対象の観察である); PS III 1ab: parārthānumānam tu svadr̥śarthaprakāśakam / (一方、他者のための推論は、自らによって観察された対象を明らかにする[言葉]である)。自己のための推論と他者のための推論の定義については、北川 [1965: 73f.; 126] を参照せよ。

### 2.3. 認識手段としてのプラマーナ

それでは、対象の形象をもつことあるいは能取形象がプラマーナであると述べる場合の「プラマーナ」とは何を意味しているのでしょうか。なお、ここであらかじめ、この場合のプラマーナが常にプラマーナの結果と対をなすものとして取り扱われている点に、注意を喚起しておきたい。すなわち、認識成立のために必要な諸要素として、要因としての認識主体 (pramātr)・認識対象 (prameya)・認識手段 (pramāṇa)、そしてその行為 (pramā) あるいは結果としての認識 (pramiti)、すなわち認識結果 (pramāṇaphala) が、サンスクリット文法における行為参与者 (kāraṇa) 理論に基づき抽出されるが<sup>13</sup>、その諸要因を代表する認識手段と結果たる認識結果とが、対照的に明示されているのである。よってこの文脈では、プラマーナを「認識手段」あるいは「認識手段／プラマーナ」、プラマーナの結果を「認識結果」と呼ぶことにしよう。

まずは、外界対象を容認する経量部の立場から、認識手段および認識結果について述べる箇所を見ていこう。

PVIn I 30,9–31,2: kiṃ punar asya pramāṇasya phalam. prameyādhigatiḥ. sā hi jñānam, tac ca phalam iti kim idānīm pramāṇam. yata iyaṃ prameyādhigatir avyavadhānā tattvaṃ pratilabhate. tatra

arthena ghaṭayaty enāṃ na hi muktvārtharūpatām /

tasmāt prameyādhigateḥ pramāṇaṃ meyarūpatā // (v. 34)

【問】それならば、この〔直前に述べられた〕認識手段の結果とは何か<sup>14</sup>。

【答】〔認識手段の結果とは、〕認識対象の認識 (prameyādhigati) である。

【問】〔しかしそうすると、〕実に、これ（認識対象の認識）は知であり、しかも、

<sup>13</sup> ここで問題となるのが、行為としての認識と、その行為の結果としての認識とは別か否かという点である。ダルマキールティの記述を見る限りでは、その両者の区別は意識されておらず、むしろ行為結果ともいうような同一のものとして扱われている印象を受ける。ただし、後で取り上げるニヤーヤ学派等においては、その限りではない。このような違いは、本研究 3.2 で触れるような、能動的な行為を否定し、全てを因果関係に還元させようという仏教論理学派の基本的な態度に由来するとも考えられる。

<sup>14</sup> See PVInT(Dh) D129a3/P149b2f.: 'di'i ni bshad ma thag pa'o / thob par byed pa ni tshad ma yin la / gdon mi za bar bya dgos pa'i don thob par byed pa ni de'i 'bras bu yin no // (「この」というのは、直前に述べられたものである。獲得せしめるもの (\*prāpaka) が認識手段であって、必ず為されるべき対象の獲得 (\*prāpana) がその結果である)。



それ(知)は結果である[ということになる]ので、この場合に認識手段とは何か。  
[認識手段として何が残されようか、いや何もない.]

【答】およそある[要因]に基づいて、この[他のものによって]介在されることのない(avyavadhānā)認識対象の認識がそれたることを獲得するならば、[それが認識手段である]<sup>15</sup>。この場合(認識手段は、他の要因に拠らずに、自らの内部にある相違に依って知を区別する要因であり、対象の特定の認識が認識結果である、という道理が確立される場合)<sup>16</sup>、

実に、対象の形象をもつことなしに、[他の如何なるものも、]それ(認識)を対象と結びつけることはない。したがって、認識対象の認識に対する認識手段は、認識対象の形象をもつこと(meyarūpatā)である<sup>17</sup>。(v. 34)

<sup>15</sup> See PVV 208,25–209,1 ad III 301c'd: kiṃ tarhi **tad vastu tasya** karmaṇaḥ **sādhanaṃ** karaṇaṃ **yā kriyā yataḥ** padārthād avyavadhānena bhavati, sa tasyāḥ karaṇaṃ ucyate (そうではなくて、ある作用(kriyā)がある事物(padārtha)に基づいて介在されずに生じる場合に、その事物(vastu)がその作用(karman)を成立させるものすなわち手段であり、それ(事物 padārtha)はそれ(作用 kriyā)の要因と言われる)。

<sup>16</sup> See PVinT(Dh) D129b5f./P150a8–150b1: **de la** ste tshul de ltar gnas pa na'o // ltos par bya ba gzhan gyis bar du ma chod par rang gi bye brag gis (gis D; gi P) bye brag tu byed pa po byed pa yin pa dang / don gyi khyad par rtogs pa ni tshad ma'i 'bras bu yin no zhes tshul de lta yin pa na'o // (この場合とは、このような道理が確立する場合である。他の依拠されるものによって介在されることなく、自身の違いによって[知の]違いを為すものが手段であり、[一方、]特定の対象の認識が認識結果である、というこのような道理である場合である)。

<sup>17</sup> See PVinT(Dh) D129b6–130a1/P150b1–3: don dang 'brel par byas pa rtogs pa **'di'i don dang 'brel par byed pa ni don** lta bu'i rang **bzhin** gang yin pa de'i dngos po **don gyi rang bzhin nyid min pa** gzhan ni 'ga' yang **med do** // 'brel par byed pa yang sgrub byed yin la / 'brel par byas pa rtogs pa yang 'bras bu yin te (yin te P; ste D) / **de'i phyir gzhal bya rtogs pa** gzhal bya dang 'brel par byas pa rnam par gzhas par bya ba'i **tshad ma** ste / rnam par 'jog par byed pa nyid kyis sgrub byed dam par gyur pa ni **gzhal bya'i rang bzhin nyid de** / don dang 'dra ba nyid yin no // (対象のごとき形象(\*rūpa)をもつもの(gang yin paをgang la yod paに訂正して解説。Cf. NBT 203,9 ad NB III 75.) / 対象と類似したもの(lta bu'i rang bzhin, \*sarūpa??. Cf. PVV 210,1 ad PV III 305), その性質(\*bhāva), [すなわち]対象の形象をもつこと, [そのこと]なしに, 他の如何なるものも, それすなわち対象と結びついた知を対象と結びつけることはない。そして, 結びつけることとは成立させることであって, また, 結びついた知は結果である。このことから, 認識対象の知すなわち認識対象と結び付けられた確立せしめられるものに対する認識手段すなわち確立せしめるものとしての勝れたる成立要因は, 認識対象の形象をもつことすなわち対象と類似することである。)

## 第2章 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa)

ここでは、認識結果と認識手段とのそれぞれについて、以下のように述べられている。

認識結果 — 認識対象の認識 (prameyādhigati), 知 (jñāna)

認識手段 — 介在されることのない対象の認識が成立するための要因, 認識対象の  
形象をもつこと (meyarūpatā)

ここで気をつけるべきは、先の第2節においてプラマーナすなわち認識手段として扱われてきた知が、ここではむしろ対象の認識という認識結果として扱われている点である。この点については、以下の記述からより明確に読み取ることができる。

PVin I 33,11f.: atha keyam arthasaṃvid yā pramāṇaphalam. yad evedaṃ pratyakṣaṃ prativedanam.

【問】あるいはまた、認識結果であるところの、この対象認識 (arthasaṃvid) とは何か。

【答】この知覚たる、それぞれの〔対象ごとの〕認識 (prativedana) なるものに他ならない。

このように、認識結果であるところの対象認識すなわち対象の知とは、知覚たる認識に他ならないと述べられている<sup>18</sup>。

さらに、吟味検討によって認識対象たる外的対象が否定された結果、対象認識も否定され、自己認識こそが認識結果であると言われる。

PVin I 36,7: tadānyasaṃvidō 'bhāvāt svasaṃvit phalam iṣyate / (v. 41ab)

その場合、他のものに対する認識はないから、自己認識 (svasaṃvid) が〔認識〕結果であると認められる。(v. 41ab)

また、外的対象の存在を認めない唯識の立場からは、自己認識という認識結果に対して、能取形象が認識手段であると述べられる。

PVin I 42,8: tasmād grāhakākāraḥ svasaṃvidaḥ sādhanam iṣṭam, tato 'syās tadbhāva-vyavasthāpanāt.

<sup>18</sup> NB においても同様に、知覚たる知が認識結果であると述べられている。NB I 18: tad eva ca pratyakṣaṃ jñānaṃ pramāṇaphalam // (そして、正にその知覚たる知が認識結果である)。

したがって、能取形象が自己認識の成立要因（＝認識手段）であると認められる。それ（能取形象）に基づいて、それ（自己認識）のそれたることが確立するのだから。

ここでは、能取形象と自己認識がそれぞれ認識手段と認識結果であることが、前者が後者のあり方を確立する(vyavasthāpana)という関係に基づいて示されている。すなわち、認識手段としての能取形象が確立させるもの(vyavasthāpaka)であり、認識結果としての自己認識が確立させられるもの(vyavasthāpya)である。このような両者の関係性は、先に取り上げた、対象の形象をもつことと対象認識との間においても同様である。

以上のように、認識手段と認識結果とが対になって扱われる場合には、一貫して、対象認識、対象の知、自己認識といった知の側面が認識結果の内容であると見なされている。そして、対象の形象をもつことや能取形象といった、その知のあり方を確立する最も直接的な要因が、認識手段／プラマーナであるとされる。

## 2.4. プラマーナの二種の意味に対する整合的理解

このように、知覚や推論の場合のように、プラマーナという語が単独で使用される場合には、正しい知という意味で用いられるのに対して、プラマーナ／認識手段と認識結果とが対で使用される場合には、むしろ認識結果が知の意味で用いられており、認識手段はその知のあり方を確立させる直接的な要因という意味になる。一体どのようにして、この両者を統合的に理解することができるのだろうか。

むろん周知のごとく、仏教論理学派にとっては、認識手段と認識結果との区別はあくまでも概念構想によるものであり、実体としてはただ瞬間的な知が生じているに過ぎない。よって、その知と知の要因とを無区別にプラマーナ／認識手段と呼ぶことができる、と乱暴に結論付けることもできるかもしれない。しかし、ここで思い出されるのが、ディグナーガの以下の記述である。

PSV 3,23–4,1: na hy atra bāhyakānām iva pramāṇād arthāntaram phalam. tasyaiva tu phalabhūtasya jñānasya viśayākāratayā utpattiyā savyāpārapratītiḥ. tām upādāya pramāṇatvam upacaryate nirvyāpāram api sat.

というのも、こちら（ディグナーガの説）では、外界実在論者たちの「考える」よ

うに、[認識] 結果は、認識手段とは別個のものであるというのではない。むしろ、正にその知は結果そのものであるが、対象の形象をもって生じることによって、作用をもつと認められる。それ（作用をもつと認められること）によって、[認識結果としての知は、実際には] 作用をもたないにもかかわらず、「認識手段である」と転義的に言われる。<sup>19</sup>

ここでディグナーガは、認識結果と認識手段との非別体説を述べるに際して、知は認識結果に他ならないが、作用 (vyāpāra) をもつと認められるがゆえに、認識手段と転義的に言われる、と述べている。すなわち、知覚や推論といった正しい知は、その語のもつ本来の意味としては認識結果に他ならないが、それ自身のうちに「対象の形象をもつこと」というその作用の根拠を有するがゆえに、転義的に認識手段と呼ばれているのである。

ダルマキールティにおいては、このような転義的用法に関する明瞭なる言明は存在しない。PVin I では、プラマーナの一種である知覚は知であるという定義のもとで一連の知覚論が展開された後に、唐突ともいえるべき形で、認識結果は知であるという文言が投げ込まれ、続けて、認識手段は対象の形象をもつことであるという議論に入る。このような文脈から推測するに、知としての知覚たる認識手段について議論する段階においては、認識手段・認識結果というような分析的な思考が排除されており、無区別な、結果をも含む包括的な知そのものを意図して、プラマーナの語が用いられているのであろう。

このような包括的な知を表すプラマーナの使用例として、PV II の冒頭に見えるいわゆるプラマーナの第一定義を挙げることができる。ここでダルマキールティは、「プラマーナとは欺かない知である」(PV II 1ab': pramāṇam avisamvādi jñānam) といういわゆるプラマーナの第一定義を述べた後、知がプラマーナであることに対して二つの理由を挙げる。

PV II 3b'–4b: dhīpramāṇatā / pravṛttes tatpradhānatvād dheyopādeyavastuni //

viśayākārabhedāc ca dhiyo 'dhigamabhedataḥ /

知がプラマーナである。なぜならば、捨てられるべきものと取られるべきものに対する行動は、それ（知）を主たる要因とするから。そして、知には、対象の形象の

<sup>19</sup> ここで引用したテキストについては、本研究 3.2 においてより詳しく検討する。解読上の問題点や先行研究に示される理解等については、そちらを参照のこと。

違いに基づいて、[対象] 認識の違いがあるから<sup>20</sup>.

ここでは、1. 知は、取捨されるべき対象に対する行動 (pravṛtti) の主要因 (pradhāna) であるから、2. 知には、対象形象 (viśayākāra) の違いに基づいて、[対象] 認識 (adhigama) の違いがあるから、という二つの理由が述べられている<sup>21</sup>. このうち、第二の理由は、

<sup>20</sup> Cf. 稲見 [1992: 22], Ono [1993], 小野 [2012: 167], van Bijlert [1989: 141–147] 他. 小野 [2012] では、「知の結果の差異に基づいて対象領域の形象に差異がある限りで」というように、4ab の二つの従格を逆の順序で理解しているが、根拠は不明.

なお、プラジュニャーカラグプタは、4ab のそれぞれの語に対して複数の解釈を提示しており、それによって 4ab を異なった認識論的立場にも適用可能なものになっている. PVA<sub>o</sub> 57,1–6: viśayākāra ivākāro 'sya viśayākāraṃ jñānam, tasya bhedo **viśayākārabhedah**. viśaye vākārabhedo **viśayākārabhedah**. ākāraṇam **ākārah**, ullekha ity arthaḥ. viśayasadrśatā viśayonmukhatā ca. **tadbhedād dhiyo 'dhigamabhedah** nīlasya saṃvittis tadākārasya ceti. **arthādhigamaś ca pramāṇaphalaṃ svarūpādhigamo vā** ([有形象認識論 (ex. 経量部・有形象唯識) の立場からは、] それに、[外的] 対象の形象のごとき形象がある [ので、] 対象の形象をもつ知であって、その違いが、[外的] 対象 [に類似する] 形象をもった [知] の違い (viśayākārabhedah)、である. あるいは、[仮に無形象認識論 (ex. 毘婆沙師) の立場からは、] 対象における形象の区別が、対象における形象の区別 (viśayākārabhedah) である. 形象 (ākāra) とは、形象をとること (ākāraṇa) であり、描出すること (ullekha) という意味である. [viśayākāra とは、有形象認識論 (経量部・有形象唯識) の立場から言えば、] 対象との類似性 (viśayasadrśatā) であり、そして、[無形象認識論 (ex. 毘婆沙師) の立場から言えば、] 対象への直面性 (viśayonmukhatā) である. その (対象と類似する形象をもつ知/対象における形象) の違いによって、知 (dhī) に、認識 (adhigama) の違いがある. 「青の認識 (saṃvitti)」あるいは「それ (青) の形象の [認識]」というように. そして、[無形象認識論と思慮を欠いた有形象認識論の立場では、] 対象の認識 (arthādhigama) がプラマーナの結果であり、あるいは、[思慮が十分な有形象認識論の立場では、] [知] 自身の認識 (svarūpādhigama) が [プラマーナの結果である] ), cf. Ono [1993: 114, fn. 825].

<sup>21</sup> 稲見 [1992: 32, n. 8] が報告するように、本箇所に対する註釈の中で、デーヴェーンドラブッディとシャーキヤブッディは、プラマーナの結果 (tshad ma'i 'bras bu, \*pramāṇaphala) には 1. 間接的なもの、他のものによって介在されるもの (chod pa, \*vyavahita) と 2. 直接的なもの、介在されないもの (chod pa med pa, \*avyavahita) の二種があることを指摘し、前者は取るべきものと捨てるべきものの取捨、後者は対象認識と説明する. PVP D3b4–4a2/P4a4–4b2: 'di ltar tshad ma'i 'bras bu ni nram pa gnyis te / skyes bu'i don zhes bya ba chod pa dang khyad par can chod pa med pa'o // ... blang bar bya ba dang dor bar bya ba'i dngos po'i (D; dnogs po'i dngos po'i P) yul can dang / skyes bu'i don zhes bya ba can gyi 'jug pa de (D; de'i P) la / **de gtso bo nyid kyi phyir te shes pa gtso bo nyid yin pa'i rgyu'i phyir / blo ni tshad ma nyid yin no** // ... tshad ma'i 'bras bu ma chod pa yang don rtogs pa yin no // (というのも、プラマーナの結果には二種あって、人の目的と呼ばれる、介在されるものと、違い



先に 2.3 で扱ったような、知のもつ対象形象が認識手段、同じ知のもつ対象認識が認識結果であり、前者が後者を区別するもの (bheda) すなわち確立するもの (vyavasthāpaka) である、といういわゆる認識手段と認識結果との非別体説を述べている。しかしここでダルマキールティは、そのような二つのあり方を分析的に扱うのではなく、その両者を内包した知そのものを、包括的にプラマーナと見なしている。

さらに、初学者向けに簡潔に著わされたという NB では、正しい知こそがその主題として冒頭に提示され、続いて知覚と推論という分類が述べられる。そして、知覚章の終わりに認識手段と認識結果との非別体性を説くにあたって、初めて認識手段と認識結果という一對の語が使用される。おそらくは、このようにプラマーナという語を異なった意味で使用する事による混乱や誤解を避けるために、意識的にそのような使い分けをしたのであろう。

このように、知覚や推論といった正しい知は、認識手段と認識結果という対立概念を用いて分析的に考えるならば、認識結果であることになるが、転義的にあるいは包括的に認識手段／プラマーナと呼ばれているのである。

---

をもつ、介在されないものとである。……取られるべきものと捨てられるべきものを対象とする、人の目的と呼ばれるその行動にとって、それが主要因であるから、すなわち知が主要因であるから、知がプラマーナに他ならない。……また、介在されないプラマーナの結果は、対象の認識である); PVT(Ś) D77b1-1/P94a3-5: **skyes bu'i don ces bya ba'i ming gang la yod pa de la de skad ces bya'o // chod pa zhes bya ba ni rnam par chod pa'o // de yang blang bar byed pa dang dor bar bya ba dag la len pa dang dor ba'i mtshan nyid can yin no // chod pa med pa zhes bya ba ni gang tshad ma tsam la rag lus pa yin gyi rgyu gzhan gyis ni chod pa (D; om. P) ma yin te dper na gzhal bya rtogs pa lta bu'o // de yang khyad par can zhes brjod de gdon mi za bar 'gyur ba ni khyad par yin la des spyod pa'i phyir khyad par can no //**。これによれば、知がプラマーナである場合には、必ずしも知自身のみがその結果であるのではなく、間接的には、対象の取捨という、知の後に起こる行動も結果となり、プラマーナとその結果との非別体説から離れることになる。このように、知をプラマーナとした場合にその後の認識プロセスをプラマーナの結果とする説は、次節で確認されるように、ニヤーヤ学派などでは一般的であるが、ダルマキールティ自身がこのような説を積極的に認めたとは考えにくい。しかし、行動との因果関係に基づいて知がプラマーナであることを説くならば、行動がプラマーナの結果であると考えるのはごく自然な成り行きであらう。



## 2.5. ニヤーヤ学派の見解

それでは、このように、認識結果たる知覚や推論といった正しい知に対して、「認識手段」という呼称を転義的に適用するのは、一体なぜだろうか。すなわち、このような術語の使用は、認識手段と認識結果を区別しないという仏教論理学派の特殊な思想的立場に基づくものなのか<sup>22</sup>、あるいは、概念として両者を厳密に区別して使用するニヤーヤ学派などの外界実在論者においても見られるもので、思想的立場ではなくむしろサンスクリットの言語的慣習に基づくものなのであろうか<sup>23</sup>。仏教論理学派と同じくプラマーナを知と見なす見解をもちながらも、その場合の認識手段／プラマーナと認識結果の認識に関して別様なる態度を示したニヤーヤ学派の所説を取り上げることで、その手がかりを探る。

ニヤーヤ学派は、認識成立のための諸要因を各々別個の实在と考え、認識手段と認識結果とを別立てする代表的な学派であると周知されており、また、その思想体系が一貫性をもって整理された段階では、認識結果を知、認識手段をその直接的な原因とすることが定説とされる<sup>24</sup>。しかし、そこに至るまでの思想史的な経緯を見てみると、そのよ

<sup>22</sup> Bandyopadhyay [1979] は、認識手段と認識結果との非別体説自体は必ずしも仏教徒に独自のものではなく、サーンキヤ学派やジャイナ教、さらには、一般的に仏教徒の非別体説に否定的であると考えられているミーマーンサー学派ですらも、両者の非別体説を認める可能性があるとして述べる。しかしながら、サーンキヤ学派が別体説に立つことは、中井 [1981] などに述べられる通りである。また、ミーマーンサー学派に関する彼の理解にも問題がある。Bandyopadhyay は、ミーマーンサー学派が必ずしもニヤーヤ的な別立て理論に従うものではないということを示すための根拠として、認識手段を知として規定する点を挙げる。しかし、以下に確認されるように、知を認識手段とする場合には、後続する認識プロセスを認識結果とすれば両者の別体性は保持されるのである。

<sup>23</sup> 例えば、桂 [2012: 14] は、「ダルマキールティがプラマーナを「知識」と規定したことは、他学派には受け入れがたいことであった」と述べ、プラマーナを知とする理由を仏教論理学派の特殊な認識論に求めている。しかしながら、以下に確認するように、この見解は必ずしも当てはまらない。

<sup>24</sup> 網羅的な定義の体系が完成された段階においては、知の手段と結果たる知とは別個の術語によって表される別個の概念として完全に分けられている。例えば、ニヤーヤ学派とヴァイシェシカ学派が折衷された後の綱要書として知られる *Tarkasaṃgraha* では、以下のように言われる。TS 36: yathārthānubhavaś caturvidhaḥ pratyakṣānumityupamitiśābdabhedāt / tatkarāṇam api caturvidhaḥ pratyakṣānumānaupamānaśābdabhedāt // (如実な直接経験(真知)には四種類がある。知覚知(pratyakṣa)・推論知(anumiti)・類比知(upamiti)・

うに整理された定説が最初からあったというわけではない。

まずはじめに、*Nyāyasūtra* (NS) の定義を見てみよう。彼らはプラマーナとして、知覚、推論、類比 (upamāna)、証言 (śabda) の四種を認めている<sup>25</sup>。そして、そのそれぞれに関する定義は、以下の通りである。

NS 1.1.4: indriyārthasaṃnikarṣottpannam jñānam avyapadeśyam avyabhicāri vyavasāyātmakam pratyakṣam //

感官と対象の接触によって生じた、言い表されない、錯誤のない、決定を本性とする知が知覚である。

NS 1.1.5: atha tatpūrvakam trividham anumānam pūrvavac cheṣavat sāmānyatodṛṣṭam ca /  
さて、それ（知覚）を前提とする三種の推論がある。過去のもを〔対象として〕もつ〔推論〕と、未来のもを〔対象として〕もつ〔推論〕と、〔現在のもを〕共通性にもとづいて認識する〔推論〕とである。

NS 1.1.6: prasiddhasādharmyāt sādhyasāadhanam upamānam /

周知のものとの類似性によって、成立させられるべきものを成立させるのが類比である。

NS 1.1.7: āptopadeśaḥ śabdah /

信頼しうる人の教示が証言である。

このように、知覚の場合には、それが知 (jñāna) を意味することが明瞭に述べられているが、それ以外のものについては、それが知を指すのかあるいは知の手段や根拠を指すのかははっきりしない。証言の場合には、信頼しうる人の教示とあるように、知の手段が示されているようにもみえる。したがって、NS の段階では、それが知であるかその手段であるかに関する四種類全てのプラマーナに共通するような統一的理解は示されておらず、認識手段と認識結果とを対比的に扱う意識も明らかではない。

しかし、ヴァーツヤヤナの *Nyāyabhāṣya* (NBh) に至って、認識手段と認識結果とに関わる積極的な規定が見られるようになる。例えば、ニヤーヤ学派が認識成立のため

---

証言知 (śabda) と、その作具 (karaṇa) にも四種類ある。知覚 (pratyakṣa)・推論 (anumāna)・類比 (upamāna)・言説 (śabda) と。テキストおよび和訳は宇野 [1996] による。

<sup>25</sup> See NS 1.1.3: pratyakṣānumānopamānaśabdāḥ pramāṇāni // (プラマーナは、知覚と推論と類比と証言である)。以下に挙げた NS および NBh の訳については、服部 [1969] を適宜参照した。

の四要因を別立てする典拠として示されるのが、かの有名な次の文言である。

NBh 24,2–4: tatra yasyepsājihāsāprayuktasya pravṛttiḥ sa pramātā, sa yenārthaṃ pramiṇoti<sup>26</sup> tat pramāṇam, yo 'rthaḥ pramiṇyate<sup>27</sup> tat prameyam, yad arthavijñānaṃ<sup>28</sup> sā pramitiḥ<sup>29</sup>, catasṛṣu caivaṃvidhāsv arthatattvaṃ<sup>30</sup> parisamāpyate.

その〔四要因の〕中で、〔対象を〕得ようあるいは捨てようという意欲に突き動かされたある者に行動がある場合、その者が認識主体である。その〔認識主体〕が、あるものによって対象を認識する場合、それが認識手段である。ある対象が認識される場合、それが認識対象である。ある対象の知、それが認識行為（≡認識結果）<sup>31</sup>である。対象の真理は、これら四種の〔要因〕に帰属している。

ここで注意すべきは、結果たる認識行為（pramiti）を対象の知（arthavijñāna）と規定している点である。これは先の、プラマーナ／認識手段の一種である知覚を知（jñāna）とする NS の定義と矛盾する恐れがあり、実際に後代その点が議論されるようになる。その一方で、知覚の語義解釈に際して、認識手段と認識結果との別立てを以下のように述べる。

NBh 86,2–87,2 ad NS 1.1.3: akṣasyākṣasya prativīṣayaṃ vṛttiḥ pratyakṣam. vṛttis tu saṃnikarṣo jñānaṃ vā. yadā saṃnikarṣaḥ, tadā jñānaṃ pramitiḥ. yadā jñānam, tadā hānopādānopekṣābuddhayaḥ phalam.

個々の感官の対象に対する機能（vṛtti）が知覚〔という認識手段〕である。ところで、〔その感官の〕機能とは、〔感官と対象の〕接触、あるいは、知（jñāna）である。〔感官の機能が〕接触である場合には、知が認識行為（pramiti, ≡認識結果）である。〔感官の機能が〕知である場合には、捨・取・無関心という諸々の知（buddhi）が〔認識〕結果（phala）である。

ここで NBh は、NS にはない新たな解釈を加え、知覚を感官の対象に対する機能（vṛtti）

<sup>26</sup> praminoti NBh; praminoti vijānāti NBh<sub>T</sub>.

<sup>27</sup> pramiṇyate NBh; pramiṇyate jāyate NBh<sub>T</sub>.

<sup>28</sup> arthavijñānaṃ NBh; tadarthavijñānaṃ NBh<sub>T</sub>.

<sup>29</sup> pramitiḥ NBh; pramitiḥ iti NBh<sub>T</sub>.

<sup>30</sup> arthatattvaṃ NBh; tattvaṃ NBh<sub>T</sub>.

<sup>31</sup> 服部 [1969: 334] では、pramiti を「知識作用の結果」と訳している。

と規定した上で、機能に接触 (saṃnikarṣa) と知 (jñāna) という二種を挙げている。そして、知覚たる認識手段が〔対象と感官との〕接触である場合には、知が認識行為すなわち認識結果であり、認識手段が知である場合には、捨・取・無関心という知が認識結果であると述べる。つまりこの場合には、認識プロセスの段階に合わせて認識手段と認識結果とが柔軟に設定されており<sup>32</sup>、知の手段および知そのもののいずれに対しても、状況に合わせて認識手段の語が適用可能と考えられている。ここで明らかになるのは、ヴァーツヤーヤナにおいては、プラマーナが知を指すかあるいは知の手段を指すのかという問題に関する画一的な規則への関心は薄く、むしろ、認識手段／プラマーナと認識結果との別立てという原則が重視されているということであろう<sup>33</sup>。

しかしその直後においても、原則としてプラマーナを知の手段と考えるような記述が見える。

NBh 91,2–4 ad NS 1.1.3: upalabdhisādhanaṇi pramāṇāṇi<sup>34</sup> samākhyānirvacanasāmarthyād boddhavyam. pramīyate 'neneti karaṇārthābhīdhāno hi pramāṇaśabdaḥ. tadviśeṣasamākhyāyā api tathaiva vyākhyānam.

「プラマーナ」とは認識の成立手段 (upalabdhisādhana) であると、〔プラマーナという〕名称 (samākhyā) の語源解釈 (nirvacana) によって理解されるべきである。

「プラマーナ」という語は、〔対象が〕これによって量られる (pramīyate 'nena), [すなわち認識される] というように、手段の意味を表わしているからである。その特殊形態〔である知覚、推論など〕の名称も、まったく同じように説明される。

ここでは、「対象がこれによって量られる／認識される」という語義解釈によってプラマーナを知の成立手段 (upalabdhisādhana) とし<sup>35</sup>、それに準じて知覚なども認識の成立

<sup>32</sup> このような段階的な認識手段と認識結果の設定は、ミーマンサー学派のクマーリラの *Ślokavārttika* IV 59–61, 70–73 にも見られる。Cf. 戸崎 [1992a]。また、マノーラタナンディンの *Pramāṇavārttikavṛtti* (PVV) 211,14–16 ad PV III 310 では、対論者の説として、「感官と対象との接触 (indriyārthasaṃnikarṣa) ⇒ 単なる対象の感知 (arthālocanamātra) ⇒ 種などによって限定された決定〔知〕 (jātyādiviśiṣṭaṇīścaya)」という段階にしたがって、それぞれ認識手段と認識結果が設定される。

<sup>33</sup> 類比についても、それが知を指すことが明示されている。NBh 90,2f.: upamānam sāmīpyajñānam, yathā gaur evaṃ gavaya iti.

<sup>34</sup> pramāṇāṇi NBh; pramāṇanīti NBh<sub>T</sub>.

<sup>35</sup> NS の規定によれば、upalabdhī と jñāna は同義である。NS 1.1.15: buddhir upalabdhir

手段であると言われる。

このように、NBh の段階では、プラマーナを知の手段とする原則が打ち出されてはいないものの、それが実際に何を指すかという議論においては、知の手段および知のいずれに対してもプラマーナの語が用いられている。そして、その傾向は、ウッディヨータカラの *Nyāyavārttika* (NV) ではより強められている。たとえば、NBh で言われた推論の語義解釈に関連して<sup>36</sup>、彼は以下のように述べる。

NV 88,4–90,8 ad NS 1.1.3: **mitena liṅgena liṅgino 'rthasya paścān mānam anumānam** iti na yuktam, phalābhāvāt<sup>37</sup>. etasmin vyākhyāne 'phalam anumānam iti<sup>38</sup>. arthasya mitatvāt. naiṣa doṣaḥ. mitena liṅgena arthasya paścān mānam bhavati yata ity arthaḥ<sup>39</sup>. bhavatu vāyam arthaḥ — laiṅgikī pratipattir anumānam iti. nanu ca phalābhāvo doṣa uktaḥ. na doṣaḥ, hānopādānopekṣābuddhīnām phalatvāt. sarvaṃ ca pramāṇam svaviśayaṃ prati bhāvasādhanaṃ, pramitiḥ pramāṇam iti. viśayāntaraṃ prati karaṇasādhanaṃ, pramīyate 'neneti pramāṇam. ...

kecit tu saṃnikarṣaṃ eva pratyakṣaṃ varṇayanti. na taṃ nyāyyam, pramāṇābhāvāt<sup>40</sup>. saṃnikarṣa eva pramāṇam iti na pramāṇam asti. ubhayaṃ tu yuktam, paricchedakatvāt<sup>41</sup>, ubhayaṃ paricchedakaṃ saṃnikarṣo jñānaṃ ca. ekāntavādinā tu doṣa iti.

【反論】「認識された証因によって、証因をもつ対象を後に認識するのが、推論である」という [NBh の規定] は妥当ではない。結果がないから。[すなわち、] この説明では、推論は結果がない [ことになってしまう] という [意味である]。なぜならば、対象は既に認識されているから。

【答】このような過失はない。それに基づいて、認識された証因によって対象を後に認識するのが、[推論である] という意味である [から]。あるいは、以下のよう

jñānam ity anarthāntaram //.

<sup>36</sup> NBh 88,2 ad NS 1.1.3: anumānam — mitena liṅgena liṅgino 'rthasya paścān mānam anumānam.

<sup>37</sup> phalābhāvāt というこの句は, grahaṇakavākya あるいは vārttika と呼ばれる, 後続する議論の論点を簡潔に表現する名詞句であり, 次の一文はこの句を開いて説明している。grahaṇakavākya および vārttika については, Meuthrath [1996: 59–61] を見よ。

<sup>38</sup> anumānam iti NV; prāpnoti. kiṃ kāraṇam NV<sub>T</sub>.

<sup>39</sup> bhavati yataḥ ity arthaḥ NV; yato bhavātīti brūmaḥ NV<sub>T</sub>.

<sup>40</sup> この pramāṇābhāvāt という句も, 先の註 37 と同じく, grahaṇakavākya である。

<sup>41</sup> この paricchedakatvāt という句も, 先の註 37 と同じく, grahaṇakavākya である。



な意味であろう。「証因に基づく認識が推論である」という[意味である]。

【反論】しかし、結果がないという過失が既に述べられたではないか。

【答】過失はない。なぜならば、捨・取・無関心という知が結果であるから。そして、あらゆるプラマーナは、自らの対象に対しては、行為の意味で[-ana 接尾辞を添加して]形成された[語](bhāvasādhana)である。認識行為がプラマーナであるというように。別の対象に対しては、手段の意味で[-ana 接尾辞を添加して]形成された[語](karaṇasādhana)である。これによって認識されるからプラマーナである[というように]<sup>42</sup>。……

しかし、ある者たちは、接触のみが知覚であると述べる。これは理に適ったものではない。なぜならば、認識手段(pramāṇa)がないから。[すなわち、]接触のみが知覚であるというような認識手段はない。むしろ、両者が妥当である。決定するもの(paricchedaka)であるから。[すなわち、]接触と知という両者[とも]が決定するものである[から、知覚]である。しかし、一方だけを主張するものには、過失があるという[意味である]。

ここでウッディヨータカラは、プラマーナという語に、認識手段と認識行為の両方の意味を認めることを明確に述べている。すなわち、-ana 接尾辞を手段(karaṇa)の意味で理解した場合には、対象がこれによって認識されるというような認識手段の意味になり、その接尾辞を行為(bhāva)の意味で理解した場合には、認識行為(pramiti)という意味になる。そして、推論の場合には、前者の語義解釈を適用するならば、それに基づいて(yataḥ)証因によって対象を後に認識するところのもの、すなわち証因の内省(līngaparāmarśa)が認識手段としてのプラマーナであり<sup>43</sup>、後者の解釈を適用するならば、証因に基づく認識(laṅgikī pratipatti)すなわち煙などの証因に基づく火などの対象の知が認識行為としてのプラマーナとなる。同様に、知覚の場合にも、前者の場合には感官と対象との接触が認識手段としてのプラマーナであり、対象の知が認識行為としてのプラマーナとなる。そして、どちらか一方だけをプラマーナとして主張するのは誤り

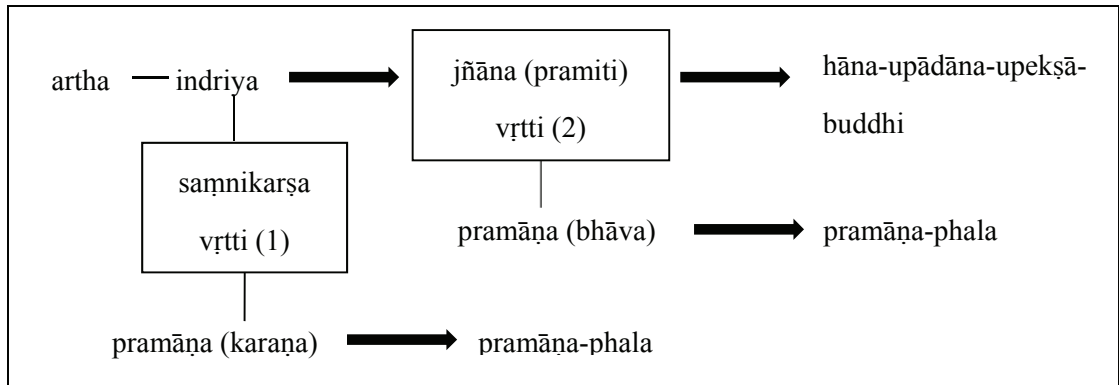
<sup>42</sup> bhāvasādhana および karaṇasādhana については、小川 [1997: 66f.] が、*Mahābhāṣya* およびその註釈を和訳する際に、kartṛsādhana を「〈行為主体〉の意味での語形成」、bhāvasādhana を「bhāva (行為)を意味する kṛt 接辞の添加による語形成」とするのに倣った。そこでは、bhāva という語のもつ -a 接尾辞の意味が議論されている。

<sup>43</sup> 証因の内省については、赤松・山上 [1988: 296f.] 等を参照。



であり、両者ともがプラマーナとして認められなければならないと主張されている。

ただし、ここで注意しなければならないのは、プラマーナを認識行為 (pramiti) と見なした場合でも、その結果 (phala) すなわち認識行為たるプラマーナに対する結果は、必ずそのプラマーナとは別立てされているという点である。例えば推論の場合には、証因に基づく対象の認識が認識行為たるプラマーナであるならば、「その対象が捨てられるべきである」、「取られるべきである」、あるいは「捨てられるべきである」という意識がそのプラマーナの結果となる。つまり、往々にして認識行為 (pramiti) と認識結果 (pramāṇaphala) は同義語であると見なされがちであるが、NV の解釈によればその理解には問題があるということになる。確かにプラマーナが認識手段の意味で用いられる場合には、認識行為がすなわち認識結果であることになるので、両者の指示する対象は一致する。しかし、プラマーナが認識行為の意味で用いられる場合には、認識行為と認識結果とは別の事柄を指示するために、両者を同義語と考えることはできないのである。以上の内容を、先に NBh で述べられたことと合わせて図示すれば、以下のようになる。



このように、NV においては、認識手段と認識行為のいずれをもプラマーナとして認めるべきであるということを明示した上で、それらのプラマーナとその結果との別立てという原則は、忠実に守られている。しかし、時代が下るにつれ NBh の認識結果を知とする規則との整合性が尊重されるようになり、知を認識結果、その知に対する手段を認識手段／プラマーナとする意識が徐々に現われるようになる。たとえば、ジャヤンタ・バッタ (9 世紀末頃) は、その著書 *Nyāyamañjarī* (NM) の中で以下のように述べている。

NM 38,13–39,2 ad NS 1.1.3: ye tu bodhasyaiva pramāṇatvam ācakṣate, na sūkṣmadarśinas<sup>44</sup> te. bodhaḥ khalu pramāṇasya phalam, na sāṅgāt pramāṇam.

<sup>44</sup> sūkṣmadarśinas NM; sūkṣmadarśanas NM<sub>G</sub>.

karaṇārthābhīdāno hi pramāṇaśabdaḥ, pramīyate 'neneti pramāṇam. pramīyate iti ko 'rthaḥ. pramā janyate iti. pramāṇād avagacchāma iti<sup>45</sup> vadanto laukikāḥ karaṇasyaiva pramāṇyam anumanyante. yas tu pramā pramāṇam iti pramāṇaśabdaḥ, sa pramāṇaphale draṣṭavyaḥ.

ある者たちは、知 (bodha) のみが認識手段であると論じるが、彼らは鋭い見方をするものではない。そもそも、知は、認識手段の結果であって、直接的には認識手段ではない。というのも、「プラマーナ」という語は手段の意味を述べるものであって、これによって認識されるから (pramīyate) プラマーナである。

【問】「認識される」とは、どういった意味か。

【答】「認識 (pramā 正しい認識) が生ぜしめられる」という [意味である]。世間の人々は、「我々はプラマーナによって認識する」と言う場合に、手段こそがプラマーナであると認めているのである。一方、「プラマーナ」という語が「プラマーナとは認識 (pramā) である」と [見なされる] 場合には、その [「プラマーナ」という語] は、認識手段の結果 (pramāṇaphala) の意味で理解されるべきである。

このように、直接的には、プラマーナは認識の手段であり、知はその結果であるということが明示されている。そして、先にウッディヨータカラが挙げたような「プラマーナとは認識である」という説に対しても、その場合のプラマーナの語を認識結果の意味で理解することによって、あくまでもプラマーナ＝認識手段、知＝認識結果という一貫性が保たれている。

また、知覚の定義の問題に関しても、そのような一貫性に基づく理解が主たる自説として採用されている<sup>46</sup>。

NM 173,7–11 ad NS 1.1.4: svarūpasāmagrīviśeṣaṇapakṣau tāvad yathoktadoṣopahatatvān nābhyupagamyete. phalaviśeṣaṇapakṣam eva saṃmanyāmahe. tatra ca yad vaiyadhikarāṇyaṃ<sup>47</sup> coditam, tad yataḥśabdādhyāhāreṇa parihariṣyāmaḥ. yata evaṃvidhiviśeṣaṇaviśiṣṭaṃ jñānākhyam phalaṃ bhavati, tat pratyakṣam iti sūtrārthaḥ.

まず、「[感覚と対象の接触によって生じた] 云々を知覚」それ自体を限定するもの

<sup>45</sup> iti NM; iti ca NM<sub>G</sub>.

<sup>46</sup> Cf. 赤松・山上 [1988: 307f.]. ただし、NM 174,4–189,8 では、知を認識手段、捨などの意識を認識結果とする説も述べられており、知と捨などの意識との両者が直接的な因果関係にあることが検討された上で、認識手段とその結果として認められる。

<sup>47</sup> vaiyadhikarāṇyaṃ NM<sub>G</sub>; vaiyadhikarāṇyaṃ NM.

であるとする立場と、総体を限定する者であるとする立場は、既に述べられたような過失によって損なわれているので、認められない。我々は、結果を限定するものであるとする立場のみを承認する。それについて、[結果と手段という別個のものを表示する知と知覚とは]別の基体をもつ[べきである]ことが詰問されたが、我々はそれを、「それに基づいて」(yataḥ)という語を補うことで回避するつもりである。「あるものに基づいて、そのような種類の限定要素により限定された知と呼ばれる結果が生じる場合に、それが知覚である」というのがスートラの意味である。

これは、先にウディョータカラによって示された二つの理解のうちの第一のプラマーナ解釈に類するものである。「それに基づいて」(yataḥ)という語を補うことによって、NS 1.1.4 に示された知覚の定義における「感官と対象の接触によって生じた、言い表されない、錯誤のない、決定性をもつ知」という限定は、知覚の結果である知を限定するものであると言われている。

## 2.6. まとめ

このように、知覚や推論などのプラマーナについては、それが認識論的な枠組みとして用いられるようになった当初、知として定義する場合と知の手段として定義する場合とが混在しており、認識手段と認識結果とが概念として厳密に区別されていたわけではなかった。しかしその後、両者の区別が意識されるようになった段階で、それぞれの思想的立場に従って異なる解釈が取られるようになった。

すなわち、ニヤーヤ学派の論師たちは、受け継がれたスートラに従って、四種のプラマーナに対して知および知の手段という両方の解釈の可能性を文法的分析を通じて模索した後に、徐々に、知を認識結果、その手段を認識手段とする方向に向かっていった。ただし、プラマーナがいずれを意味するかにかかわらず、一貫してその結果との別体説は保持されている。つまり、知の手段がプラマーナである場合には知が結果となり、知がプラマーナである場合には捨などの意識が結果となる。

一方、仏教論理学派の論師たちは、知覚と推論という二種のプラマーナを知として自ら積極的に定義した上で、それを、語本来の意味としては認識結果であるものの転義的用法によって認識手段と呼ばれると見なすことによって、非別体説を整備した。つまり、プラマーナは知であるという場合であっても、それが実際には結果であるがゆえに、更

に別個にその結果を立てる必要がないのである。

以上のように、プラマーナが正しい知を意味すること自体は、それが術語として使われるようになった当初においてはむしろ一般的であったし、仏教論理学派独自のものではない。しかし、ウッディヨータカラ等のニヤーヤ学派の論師が -ana 接尾辞の文法的分析に基づいた正当な方策によってプラマーナが知であることを根拠付けた上で、常にそれとは別にプラマーナの結果を設定したのに対して、仏教論理学派の論師たちが、認識結果たる知に対して本来は手段を意味するプラマーナという語を転義的に用いたと考えることによって、別個にプラマーナの結果を設定することを回避したという点は、極めて特徴的である。したがって、このような転義的用法は、おそらくは知の成立に関わる全ての要素を知それ自体に還元させたいという特殊な意図に基づいた、認識手段・認識結果非別体説という思想的立場によるものと考えることができよう<sup>48</sup>。

本章では、認識論の重要な術語として当時インドで広く用いられていた「プラマーナ」という語が、仏教論理学派においては文脈によって二つの意味を持つことを出発点とし、まず、その両者がどのように整合的に理解されるかを検討した。そこでは、知覚や推論を指示する場合の正しい知たるプラマーナは、認識手段と認識結果という対立概念によって分析された場合むしろ認識結果に該当せられるべきものであって、その場合のプラマーナという語はプラマーナの結果／認識結果の意味で用いられていることが理解される。さらに、そのようなプラマーナという語の使用法について、ニヤーヤ学派のプラマーナ理解と比較することにより、認識手段・認識結果非別体説という思想的立場に基づく独自性が見られることが明らかになった。

---

<sup>48</sup> 認識手段・認識結果非別体説とは、言い換えるならば、知以外のもの（決定や行為発動）を認識結果として立てるのは避けながら、かつ、その同じ知の中に認識手段を入れたいという意図の表れである。したがってその根底には、知で全てを説明したいという唯識的な傾向が伺われる。

## 第3章 ダルマキールティにおける対象認識

### 3.1. 問題の所在

我々凡夫にとって、あらゆる対象はひとまず現前に存在するものとして認知されている。しかし、その対象がそこに存在すると果たして本当に言えるだろうか。仏教の一派である瑜伽行唯識学派は、認識対象をそのままそこに実在するものと見なすこの対象認識のあり方そのものを疑うことから出発し、外界対象が真実には存在しないということを主張した。本章では、仏教論理学派の大成者であるダルマキールティが、このような唯識的な認識論を他者に向けて論証しようとする過程で、外界対象を容認する立場、すなわち経量部の立場から、認識手段と認識結果とをどのように説いたのかを明らかにする。

インド哲学では、正しい認識について考察する場合、認識主体（*pramāṭṛ*）・認識手段（*pramāṇa*）・認識対象（*prameya*）・認識結果（*pramāṇaphala*, *pramiti*）という四つの要素に分析して考察するのが一般的である。たとえば、「私が目で木を認識する」という場合に、私たる主体が、目たる手段によって、木たる対象を認識するのであって、その結果、木の認識が生じることになる。これらの諸要素を正しくそなえた認識によって人間は目的を達成することができるのであり、宗教的な観点からすれば、最終的な目標である解脱への足掛かりを得ることができる<sup>1</sup>。このような認識論の枠組みは、サンスクリットの格変化とも関わる行為参与者（*kāraka*）の理論に基づくもので、ニヤーヤ学派をはじめとする多くの学派の共通の基盤として積極的に用いられた。これら四つの要素は、ニヤーヤ学派等の実在論的傾向をもつ人々によってはそれぞれ別個の実在であると考えられているのに対して、唯識という特殊な認識論を最終的な拠り所とする仏教論理学派にとって、それらの要素は全て認識自身の中に含まれる必要があった。そこで仏教論理学派の祖であるディグナーガは、認識手段（*pramāṇa* 量）と認識結果（*pramāṇaphala* 量果）との非別体性を提唱し、その後、他学派との間に激しい議論の応酬が展開されることとなった。そのような流れの中で、ダルマキールティは、ディグナーガがはっきりとは示すことのなかった認識手段の認識結果に対する役割を「知を対象に応じて限定す

<sup>1</sup> Cf. NBh 22,2f. 本研究 1.1.2 の註 10 を参照せよ。

るもの」として規定し、それに基づいて非別体説を積極的に論証している。このように、認識手段という概念は外界実在論者たちとも共通する議論の基盤であるから、ダルマキールティがそれをどのようなものとして捉えていたかを調査することによって、彼の認識論の独自性がより明確なものとなるであろう。

以下に、認識手段と認識結果との非別体性の典拠としてしばしば取り上げられるディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* (PS) I 8cd および自註 *Pramāṇasamuccayavṛtti* (PSV) について簡単に確認した後に、ダルマキールティが認識手段についてどのように考えていたのか、*Pramāṇavārttika* (PV) III 301–306 および *Pramāṇavinīścaya* (PVin) I 34 の散文部分の記述を主な手がかりとして検討することにする。また、PVin の理解に関しては、主にダルモッタラ (Dharmottara, ca. 740–800) の註釈 *Pramāṇavinīścayaṭīkā* (PVinT) を使用する。ディグナーガおよびダルマキールティにおける認識手段と認識結果については、Hattori [1968] や戸崎 [1979] [1991] 等の充実した先行研究が既にあるが、本研究はこれらの研究を再検討した上で、近年新たに出版されたサンスクリットテキストや註釈に基づく研究成果を加えたものである。

### 3.2. ディグナーガにおける認識手段

まず、ディグナーガが認識手段をどのように捉えていたのか、PS I 8cd およびそれに対する自註を取り上げる。ここでは、知の外部に実体としての認識手段が存在すると考える外界実在論者の説に対して、知とは別個の認識手段は存在せず、あくまでも認識結果たる知そのものが転義的に認識手段と呼ばれるに過ぎないということが示される。

savyāpārapratītatvāt pramāṇaṃ phalam eva sat // (v. 8cd)

[知は、] 作用をもつと [世間で] 認められることによって<sup>2</sup>, [実際には認識] 結果以外の何ものでもないにもかかわらず、認識手段である [と転義的に言われる]。

PSV 3,23–4,1: na hy atra bāhyakānām iva pramāṇād arthāntaraṃ phalam. tasyaiva tu

<sup>2</sup> *pratīti* の語は、一般に「認識、理解」という意味をもつが、ここでは特に「分別によって世間で周知、認知されていること」という意味で解釈した。Cf. NBT 183,6f.: *pratītiḥ pratītatvaṃ vikalpaviññānaviśayatvaṃ ucyate* (認知 (*pratīti*) とは、認められていることであり、分別知の対象であることと言われる)。Iwata [1991: 3], Kellner [2010: 219, fn. 47] も同様の理解を示す。*pratīti* を *prasiddhi* の言い換えとして用いる例は、岩田 [2010: 9] などにも挙げられる。



phalabhūtasya jñānasya viśayākāratayotpattyā savyāpārapratītiḥ. tām upādāya pramāṇatvam upacaryate nirvyāpāram api sat.

というのも、こちら（ディグナーガの説）では、外界実在論者たちの「考える」ように、[認識] 結果は、認識手段とは別個のもの（*artha*）であるというのではない。むしろ、正にその知は結果そのものであるが、対象の形象をもって生じることによって、作用をもつと「世間で」認められる。それ（作用をもつと認められること）によって、[認識結果たる知は、実際には] 作用をもたないにもかかわらず、「認識手段である」と転義的に言われる。<sup>3</sup>

ディグナーガはここで、認識結果と認識手段との非別体性を以下のように主張している。すなわち、認識結果であるところの知が、認識手段であると転義的に言われるのであって、外界実在論者が考えるように、知とは別個の実体としての認識手段が存在するのではない。そして、知が認識手段と言われることの根拠として、作用をもつと認められること（*savyāpārapratītatvāt*）を挙げている<sup>4</sup>。すなわち、真実には知に対象を能動的に把握するという認識作用はないにもかかわらず、世間の人々によってそのようなものと見なされているということである<sup>5</sup>。さらに、知が作用をもつと認められることに対しては、

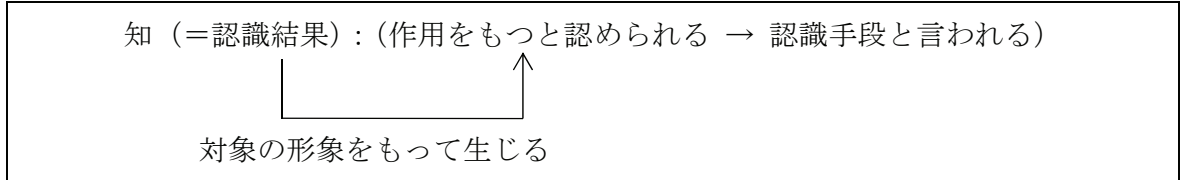
<sup>3</sup> Cf. Hattori [1968: 28], 戸崎 [1979: 394], Iwata [1991: 2], Taber [2005: 80], Kellner [2010: 218f.].

<sup>4</sup> 「作用をもつと認められること」と「認識手段と言われること」とがどのように関わるのかという点については、先行研究において見解が分かれる。戸崎 [1963] が、-ana 接尾辞の三つの用法（*bhāva*, *karāṇa*, *adhikarāṇa*）のうち *bhāva*（作用）の意味を採用した上で認識手段を作用と結び付けているのに対して、服部 [1959] は *karāṇa*（手段、作具）の意味を採用した上で、*Tarkasaṃgraha* 等に見られる「作用を有していて、他と共通でない原因」という *karāṇa* の定義を用いて、PS の記述と関連付けている。これらの先行研究について詳しくは、本研究の 1.2.1 を参照せよ。

ディグナーガ自身が、対象の顕現をもつことという認識手段を、*karāṇa* を表す具格によって後に語義解釈している点、また、「転義的に言われる」ということから直接的に作用と認識手段とを結び付ける必要がない点を合わせて考えると、*karāṇa* による解釈が妥当であろう。PS(V) I 4,11f.: *yasmāt so 'rtaḥ tena mīyate // (9d')* (なぜならば、その[外的] 対象がそれ（対象の顕現をもつこと）によって認識されるのだから）。

<sup>5</sup> ここで言う「作用」というのは、知が対象を把握する、すなわち対象を認識するという作用を意味している。ダルマキールティによれば、実際には能動的に知が対象に働きかけることがないにもかかわらず、知は、対象の形象をもって生じることによって対象認識を確立することから、まるで作用をもつかのように見える解釈される。PV III 307bc-309: *dadhānaṃ tac ca tām ātmany arthādhigamanātmanā // savyāpāram ivābhāti*

知が対象の形象をもって生じること (viṣayākāratayotpattyā) を根拠としている。これを図示すれば以下になる。(図で使用する記号について、「A : (B→C)」のうち、A は主題を、B→C は含意を表す。)



さらに、PS の後の箇所では、この「対象の形象をもつこと」が認識手段であると述べられる<sup>6</sup>。

概要は以上の通りであるが、その内容については疑問が残る。特に、なぜ知が対象の形象をもつことが、認識作用をもつと認められるための理由となりうるのか、ということについては明らかにされていない。言い換えるならば、対象の形象をもつこととしての認識手段が、知の“認識作用”に対して、一体どのように機能しているのかということが不明瞭なままである。これが、ディグナーガによって残された課題となろう。

### 3.3. ダルマキールティにおける認識手段——知を対象に応じて限定するものとしての認識手段

対象の形象をもつこととしての認識手段が、知の認識作用に対してどのように機能しているのかという問題に対して、ダルマキールティはいかなる回答を与えたのであろうか。ここでは、PS に対する註釈として著わされた PV の記述に従ってその内容を概観す

---

vyāpāreṇa svakarmanī / tadvaśāt tadvyavasthānād akāraṁ api svayam // ([知]自身にそれ(対象の形象をもつこと)を保持するそれ(知)は、対象認識を自体とする作用によって、自身の対象に対して作用をもつかのごとくに顕現する。[知は]自ら[能動的に]作用を為すものではないが、それ(対象の形象をもつこと)によってそれ(対象認識)を確立するから)。

戸崎 [1979: 43–45] や Kellner [2010: 219f.] がまとめるように、このような知が真実には作用を持たないという説は、*Abhidharmakośabhāṣya* や *Yogācārabhūmi*, *Abhidharma-samuccayabhāṣya* などに遡る。

<sup>6</sup> PS I 9ab: viṣayābhāsataivāsyā pramāṇam ... (認識手段は、それ(知)が対象の顕現をもつことに他ならない)。

る<sup>7</sup>.

まず始めに、認識手段とは知においてどのような働きをするものであるのかを確認する。

tatrānubhavamātreṇa jñānasya sadṛśātmanah /

bhāvyam tenātmanā yena pratikarma vibhajyate // (v. 302)

それ（色などの対象）に関する知は、単なる感受（anubhava）としては同じ本性をもつので、[もし対象に応じて区別される本性をもたないないならば、それぞれの知が対象に応じて区別される（異なったものとして限定される）ことがなくなってしまふ。しかし実際には、知は対象に応じて区別されるので、その知]には、およそそれによって[知が]それぞれの対象に応じて区別される（vibhajyate）ような、そのような本性（ātman）が存在するはずである<sup>8</sup>。

tasmād yato 'syātmabhedād asyādhigatir ity ayam /

kriyāyāḥ karmaniyamaḥ siddhā sā tatprasādhanaḥ // (v. 304)

したがって（知の本性となっていない感官などの外的な要因の違いは対象に応じて知を決定することがないから）<sup>9</sup>、それ（知）の本性の違いに基づいて、「[これは]こ[の対象]の認識である」というこのように、作用（認識結果）が[それぞれの]対象に応じて限定される場合、それ（作用）はその[知の本性の違い]を成立要因（認識手段）とすると証明された。

上の 302 偈では、帰謬論証を通じて<sup>10</sup>、対象に応じて知が区別されるための根拠が知の

<sup>7</sup> 以下に挙げる PV の訳については、戸崎 [1979] を適宜参照した。

<sup>8</sup> マノーラタナンディンの註釈に従って、知（jñāna）の語を補って理解した。PVV 209,6–8: **tatra rūpādaḥ karmanī jñānasyānubhavamātreṇānubhavātmanā** (PVV<sub>M</sub>; -ātmano PVV) **sadṛśātmanas tulyarūpasya tenātmanā svarūpeṇa prativīṣayaṃ vyatirekiṇā bhāvyam, yena pratikarma prativīṣayaṃ** (*conj.*; -viṣaya- PVV) **jñānam vibhajyate, nīlasyedaṃ pītasyedaṃ iti** (それすなわち色などの対象に関する知は、単なる感受として、すなわち感受という本性によっては、同じ本性、等しいあり方をもつものである [が、その知]には、それぞれの対象に応じて異なるそのような本性すなわち固有のあり方が存在するはずである。およそそれによって、知が、それぞれの対象に応じて、すなわちそれぞれの対象に応じて区別されるような [そうした本性が存在するはずである]。「これは青色の [知] である」、「これは黄色の [知] である」というように)。

<sup>9</sup> See PV III 303. 次節で詳しく取り上げる。

<sup>10</sup> ここでの帰謬論証的な理解は、PVV の以下の記述による。PVV 209,8f.: anyathānubhava-

本性としてあるということが導かれる。知は、単なる感受、すなわち対象を捉えるという純粋な働きに関しては、あらゆる対象に対して同じ本性をもつ。そのような知が、もし対象に応じて区別される本性をもたないと仮定するならば、それぞれの対象に応じて限定されないという不都合な帰結に陥る。しかし実際には、知は、青や黄というそれぞれの対象に応じて、青の知、黄の知という形で限定されている。よって、先の前提は誤りであって、知は、自身が対象に応じて限定されるための根拠として、対象に応じて区別される本性をもつということになる。さらに 304 偈では、このような対象に応じて区別される知の本性こそが、認識手段に他ならないということが示される。(図で使用する記号について、「A × B」は主題 A において B が成り立たないことを表わす。)

<p>知は、単なる感受としては全ての対象に対して同じ本性をもつ</p> <p>知 × (もし 対象に応じて区別される本性をもたない → 対象に応じて限定されない)</p> <p>知 : (実際には 対象に応じて限定される → 対象に応じて区別される本性をもつ)</p> <p>(ex. 青の知, 黄の知)</p> <p style="text-align: center;">認識手段 (=対象に応じて知が限定されるための根拠)</p>
--

このように、認識手段とは、対象に応じて知が限定されるための根拠である、すなわち対象の認識を決定する根拠である、という明確な規定がダルマキールティによって提示されている<sup>11</sup>。さらに、後の註釈者たちは、このような、知を限定する根拠としての認識手段と、それによって限定される対象認識としての認識結果との関係を、確立させ

---

mātratayā sarvatra viṣaye sadṛśaṃ jñānaṃ prativīṣayaṃ kathaṃ bhedena vyavasthāpayitum śakyeta (もしそうでないならば (それぞれの対象に応じて区別される本性が知に存在しないならば), 単なる感受であることにより全ての対象に対して等しい知は, どうしてそれぞれの対象に応じて区別されるものとして確立させられうるのか [、いやされない]).

<sup>11</sup> ここで示される「認識を限定する根拠」としての認識手段という考え方は、戸崎 [1979: 17-19] 等によれば、ディグナーガの認識手段・認識結果非別体説へのクマーリラの反論に対する再反論として提示されたものである。この理解は *Tattvasaṃgraha* (ed. Embar Krishnamacharya, 2 vols., Gaekwad's Oriental Series 30-31, Central Library, Baroda, 1926, reprint: 1984) 1344-1345 偈に *Ślokavārttika* pratyakṣa 章 74-75 を引用した後に、1346 偈でダルマキールティの説に類似する見解が述べられることに基づく。なお、プトン・リンチェントップ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) の PVin 註 (PVinT(Bu)) においても、同じ ŚV からの引用が見える。See PVinT(Bu) 130,3f.

るもの (vyavasthāpaka)・確立させられるもの (vyavasthāpya) という語によって表現した<sup>12</sup>.

次に、上記の内容を踏まえた上で、認識を対象に応じて限定するものとして機能する認識手段が、具体的に何を示すのかが述べられる。

tasmāt prameyādhigateḥ sādhanam meyarūpatā / (v. 306ab)

したがって、認識対象の認識（認識結果）を成立させるもの（認識手段）は、[知が] 認識対象の形象をもつことである。

こうして、認識結果であるところの対象の認識を成立させる認識手段は、対象の形象をもつこと (meyarūpatā) であることが述べられた。さらに、認識手段と認識結果との二つは、同一の知における側面の違いとして区別されるものに他ならず、実体としては区別されない。すなわち、認識手段と認識結果とは非別体なるものである<sup>13</sup>。

以上のように、認識手段は「知を対象に応じて限定するもの」であり、それは「対象の形象をもつこと」に他ならないというのが、ダルマキールティの見解である。これによって、ディグナーガが残した、対象の形象をもつこととしての認識手段が、知においていかなる機能をもつのか、という問題に対して、「知を対象に応じて限定する」あるいは「知のもつ対象認識作用を確立させる」という機能をもつという回答が与えられたことになる。

### 3.4. 知を対象に応じて限定するものとしての認識手段が、なぜ対象の形象をもつことなのか

上で見たように、ダルマキールティは、「認識手段とは知を対象に応じて限定するものである」と規定した上で、それに基づいて「認識手段とは対象の形象をもつことであ

<sup>12</sup> 戸崎 [1979: 396–397] が報告するように、このような用語は、PVP, PVT, NBT や、PVV などの諸註釈に見える。しかし実際には、NBT における確立させるもの・確立させられるものの関係は、このような単純な二項からなるものではない。詳しくは、本研究の 4.5 を参照せよ。

<sup>13</sup> See PV III 307ab: sā ca tasyātmabhūtaiva tena nārthāntaram phalam / (そして、それ（対象の形象をもつこと）は、正にそれ（知）自体である。したがって、[認識] 結果は [認識手段より] 別個のものではない)。

る」ということを導いている。しかし、このような導出がなぜ成り立つのであろうか。以下にこの問題を検討する。

この問題について、ダルマキールティは PV III において、以下の二つの偈文をその説明に充てている。

anātmabhūto bhedo 'sya vidyamāno 'pi hetuṣu /

bhinne karmaṇy abhinnasya na bhedena niyāmakāḥ // (v. 303)

〔感官などの外的な〕諸原因に違いが存在しているとしても、〔知の〕本性ではない〔そうした違い〕は、〔単なる感受という点で〕区別されないその〔知〕を、異なる対象（karman）に応じて区別されるものとして限定するものではない。

arthena ghaṭayaty enām na hi muktvārtharūpatām /

anyaḥ svabhedāj jñānasya bhedako 'pi kathamcana // (v. 305)

実に、対象の形象をもつことを除いた〔感官などのいかなる〕他のもの〔も〕、たとえ〔感官など〕自身の違いに基づいて知をなんらかのあり方で区別するもの（bhedaka）であるとしても<sup>14</sup>、それ（認識 adhigati）を対象と結びつけることはない。

まず 303 偈では、先ほど 302 偈および 304 偈で触れた通り、認識手段とは知の本性の違いに他ならないということを示すために、知の本性ではない外的な要因は、認識手段ではないとして排除される。さらに 305 偈では、最終的にダルマキールティ自身によって認識手段として認められる、対象の形象をもつことを導くために、外的な要因のみならず内的な要因をも含めたそれ以外のあらゆるものが排除される。このようにダルマキールティは、対象の形象をもつこと以外の感官等の諸要因が、知を限定させるもの、あるいは認識を対象と結び付けるものとしては不適當であると示すことによって、認識手段が対象の形象であるということを示している。

さらに、ここで他の要因を排除する手順としては、まず初めに知より外部のものを排除した上で、さらに範囲を限定して、対象の形象をもつこと以外のものを排除している

<sup>14</sup> Cf. PVV 210,1f.: artharūpatām arthasarūpatām muktvā na hy anyaḥ kaścīd indriyādiḥ (PVV<sub>M</sub>; kaścīndriyādiḥ PVV) svabhedāt kathamcana kenāpi prakāreṇa jñānasya bhedako 'pi ... (対象の形象をもつことすなわち対象と同一の形象をもつことを除いた感官などのいかなる他のものも、〔感官など〕自身の違いに基づいてなんらかのあり方で、すなわち何らかの方法で知を区別するものであるとしても……)。



のであるから、二つの段階を経ているということができよう。あるいは、303 偈では単なる感受であり区別されない知、すなわち形象をもたない知を想定しているのに対して、305 偈では、知自身に何らかの違いを認めているという段階の違いを考えることもできる。

しかしいずれにしても、この記述だけからでは、どのような理由によってどのような要因が排除されるのかという、それぞれの段階における具体的内容を知ることはできない。ここで、註釈ではなく自著として著わされ、PV よりも発展した議論を含む PVin に手掛かりを求めることにしよう。PVin は PV とほぼ同じ文章から成るが、これら二つの偈文に対応する箇所では若干の補足的説明が見られる。以下にその内容を検討する。

#### 3.4.1. 知より外部のものが認識手段であることの否定

ではまず、PV III 303 で述べられるように、知自身が区別をもたない場合に、知より外部の諸要因が知を限定するものとしては妥当しないことがどのように示されるのか、PVin I の記述を見てみよう。

PVin I 31,5–9: anātmabhūtaś cāsyendriyārthasaṃnikarṣādiṣu hetuṣu vidyamāno 'pi bhedo bhinne karmaṇy abhinnātmano jñānasya na bhedena niyāmakah, kriyānibandhanatvāt karaṇatattvasya,<sup>15</sup> tadaviśeṣe tasyā api viśeṣāsiddheḥ, sato 'pi vā viśeṣasya tadanāṅgatayākaraṇatvāt.

なぜならば<sup>16</sup>、感官や〔外的〕対象、〔両者の〕接触などの諸要因において<sup>17</sup>〔何らかの〕区別があったとしても、それ（知）の本性ではない〔それらの区別は〕、区

<sup>15</sup> Steinkellner の校訂ではここにコンマはなく、①の理由句を②にかけて理解したものと考えられる。①を②の理由と考えることも可能ではあるが、そのつながりは必ずしも明瞭ではない。したがって、PVinT̄(Dh) および PVinT̄(Bu) に従って、3つを別々の理由句として理解した。

<sup>16</sup> See PVinT̄(Dh) D131a1/P151b6: **ni'i** sgra ni gang gi phyir gyi don te / (**ca** という語は、「なぜならば」という意味である)。

<sup>17</sup> indriyārthasaṃnikarṣādi の訳は、チベット語訳および註釈に従う。PVin I<sub>t</sub> 78,26: dbang po dang don dang phrad pa la sogs pa; PVinT̄(Dh) : **dbang po dang don dang phrad pa** zhes bya ba dbang po dang don dag gi 'brel pa dang / de dag **la sogs pa** ni yid la sogs pa gang yin pa de dag ste (感官や〔外的〕対象、〔両者の〕接触とは、感官と対象の両者の接触と、その両者とであって、などとは、およそマナスなど、それらである); PVinT̄(Bu): **dbang po dang** phyi'i **don dang** dbang don **phrad pa** ste 'brel pa dang.

別される対象に対して、区別されない本性をもつ知を、区別されるものとして限定するものではない。①手段のそれたること（知を区別するものとしての手段たること）は、作用の「区別」を根拠とするから<sup>18</sup>。②「感官のように」それ（手段と見なされるもの）に「対象に応じた」違いがない場合には、それ（作用）にも違いは成り立たないから。あるいは、③「外的対象にある形象などは、」たとえ「対象に応じた」違いがあったとしても、「その外的対象にある形象の違いは」その「作用の違いの」原因ではないので<sup>19</sup>、手段ではないから。<sup>20</sup>

ここでダルマキールティは、PV III 303 と同様、感官、あるいは感官と外的対象との接触等の、知の本性以外の外的な要因は知のあり方を限定するものでないということを述べた上で、それに対して三つの理由（①～③）を挙げている。これら三つの理由句は、ダルモータラおよびそれに影響を受けたプトンの解釈によれば、それぞれ別個の役割を担っている<sup>21</sup>。それに従って内容を見ていこう。

まず①では、「手段（＝認識手段）の、知を区別するものとしての手段たることは、作用（＝認識結果）の区別を根拠とするから」と述べられており、認識手段の概念規定に関わる因果関係が述べられている。すなわち、何らかのものが認識手段として認められるならば、認識結果の区別が成り立っていなければならない。また、認識結果の区別が成り立たないならば、いかなるものも認識手段として認められない<sup>22</sup>。ここで、「区別

<sup>18</sup> PVin I<sub>t</sub> 78,29: bsgrub par bya ba *for* kriyā. See PVinT(Dh) D131a7–131b1/P152a7f.: **byed pa'i de nyid** ni byed pa nyid de bye brag tu byed pa po nyid ces bya ba'i don no (D; to P) // **bsgrub par bya ba'i rgyu mtshan** ni bye brag gi rgyu'o // (手段のそれたることとは、手段たること、すなわち区別するものたることという意味である。成立させられるものの根拠とは、区別の原因である)。

<sup>19</sup> See PVinT(Dh) D131b5f./P152b6f.: don la gnas pa'i sngon po la sogs pa'i rnam pa'i khyad par **yod kyang** bya ba'i khyad par **de'i yang lag ma yin pas byed pa ma yin pa'i phyir ro** // (対象にある青などの形象の違いがあったとしても、[それは] その作用の違いの原因ではないので、手段ではないから)。

<sup>20</sup> Cf. Vetter [1966: 79,32–81,6], 戸崎 [1991: 3,3–5,4]。

<sup>21</sup> なお、ジュニャーナシュリーバドラの註釈 (PVinT(Jñ) D196b3–5/P233a4–7) では、①と②を合わせて解釈しているようであるが、はっきりしない。

<sup>22</sup> See PVinT(Dh) D131b1/P152a8: rang gi bye brag gis bya ba'i bye brag byed pa na sgrub par byed pa 'ga' zhig byed par 'gyur ba yin gyi / bya ba'i bye brag byed pa med par ni 'ga' yang byed pa zhes bya ba ma yin no // (自身の違いによって作用を区別するならば、何らかの成立させるものは手段となろうが、作用を区別することがないならば、いかなるものも手段と

されない本性をもつ知」という直前に述べられた前提に従えば、知が区別されない以上<sup>23</sup>、知そのものである対象認識たる認識結果の区別も成り立たない。したがって、いかなるものも認識手段とはならないのである<sup>24</sup>。よって、当然感官等も認識手段とはならない。

なお、*kriyānibandhanatvāt* という複合語について、本研究では所有複合語 (*bahuvrīhi*) による解釈をとったが、従来のチベット語訳に基づく研究では、「手段の手段たることは、作用の〔区別の〕原因たることであるから」といった格限定複合語 (*tatpuruṣa*) による解釈が多く行われてきた<sup>25</sup>。現状のサンスクリットテキストを直接このように理解

---

[見なされることは] ない)。

また、これと類似する、作用を為すもの (*kāraka*) と作用との概念規定上の因果関係を述べる表現が、チャンドラキールティ (*Candrakīrti*, 650 年頃) の *Prasannapadā* (PP) にも見える。(片岡啓氏の指摘による。Cf. <http://kaula.seesaa.net/article/389259410.html> (2009 年 1 月 8 日掲載, 2014 年 11 月 28 日確認。)) PP 181,5f. ad *Madhyamakakārikā* VIII 2: *kriyānibandhanatvāt kārakavyapadeśasya, karotikriyāyukta* (*em.*; *karoti kriyā-* PP) *eva kaścit sadbhūtaḥ kārakavyapadeśaṃ labhate* (「作用を為すもの」という呼称は作用を根拠としているので、「作用する」という作用と結び付いて初めて、何らかの存在するものは「作用を為すもの」という呼称を獲得する)。

<sup>23</sup> ここでいう「区別されない本性をもつ知」とは、PV III 303 で確認されたように、単なる感受という点で区別されない知であり、形象をもたない知である。

<sup>24</sup> プトンはここで、知の区別がなくとも、何らかの知の本性が対象認識の区別を確立するという対論者の説を想定している。PVinT(Bu) 133,5–7: *shes pa'i bye brag med kyang rang gi ngo bos bye brag tu nges par byed do zhe na / shes pa'i rang gi ngo bo chos can / don rtogs bye brag tu sgrub byed min par thal / rang gi bye brag gis bya ba'i bye brag byed pa ma yin par thams cad la khyad par med pa'i phyir / khyab pa yod de / sgrub par byed pa'i de nyid ni bsgrub par bya ba'i bye brag sgrub byed kyi rgyu mtshan can yin pa'i phyir ro //...* (【反論】知の区別がなくとも、[知の] 本性が、区別されるものとして確定する。【答】知の本性というのが主題であって、対象認識を区別されるものとして成立させることがなくなってしまう。なぜならば、自身の区別によって結果の区別を為すことがないので、全ての [対象に] 対して違いがないのだから。遍充関係はある。成立手段のそれたることは、成立結果の区別の成立を根拠とするから)。

<sup>25</sup> Vetter [1966: 79,37–81,1]: denn das Mittelsein des Mittels (beruht darauf, daß) es Ursache eines (bestimmten) Zubewirkenden ist; 戸崎 [1991: 4,5–7]: なぜならば、作具 (*karana*) の作具たるゆえんは成就されるべき (行為) (を差別する) 因 (*nibandhana*) であることにあるから。また、山上 [1999: 95] も、*Nyāyabhūṣana* における PVin からの引用を同様に解釈している。

しかし実際には、この複合語を格限定複合語として理解したとしても、現行のサンスクリットテキストからは、先行研究が意図したような意味にはならない。すなわち、属

することは難しいが、「あるもの (X) は、作用を区別して初めて手段として認められる」という先に確認された概念規定から、「手段は作用の区別の原因である」というこのような両者の関係は自ずと導かれうる。

次に②では、感官などのように、対論者によって手段（＝認識手段）と見なされるもののそれ自身が、青や黄などの対象に応じた違いをもたない、すなわちあらゆる対象に対して共通するものであるから、作用（＝認識結果）にも違いが成り立たないことを挙げる。したがって、これは作用を区別するものとしての手段には妥当しない<sup>26</sup>。

さらに③では、外的対象における形象のように、手段（＝認識手段）と見なされるもののそれ自身に対象に応じた違いがあっても、そのような違いは認識結果の区別の原因ではないとされる。よって、これもまた、作用を区別するものとしての手段ではない。

このように、①で認識手段に関する基本的な概念規定を述べた上で、②③では、対論者によって認識手段と見なされうる外的な諸要因が実際にその規定を満たしているかどうか、具体的に検討される。その結果、②では感官などの対象に応じた違いをもたないものが、③では外的対象における形象などの対象に応じた違いをもつものが、それぞれ否定されている。

以上三つの理由のうち、①②は PVin の記述からある程度その内容が理解されうるが、③の「外的対象にある形象の違いは認識結果を区別する原因ではないから」については、これだけではその理由としての妥当性に疑念が残る。外界実在論者の立場からすれば、知は外的な対象を直接的に捉えるのであるから、その外的な対象が知の区別の原因であるということは、当然考えられることである。どうして、外的対象にある形象の違いが認識結果を区別する原因でないと言えるのだろうか。

格+*-tvāt* という構文上、*karaṇatattvasya* の *-tva* と *kriyānibandhanatvāt* の *-tva* とは同格とはならず、「手段のそれ（手段）たることは、作用の根拠であるから」となる。この場合には、*tattva* の語が浮いてしまう。それならばむしろ、*tattva* のない「手段は作用の根拠であるから」という文言によって、「手段 ⇒ 作用 [の区別]」という事実上の因果関係を直接的に述べたであろう。

さらに、Vetter [1966: 78,29] は、格限定複合語による理解に合わせて、チベット語訳テキストから所有を表す *can* の語を除去している。その際には、PVinI(Dh) に *can* の語がないことを根拠としている。しかし、所有複合語においても *can* の語が付加されない訳例はめずらしくない。

<sup>26</sup> あらゆる対象に共通することに基づいて感官等が認識を限定するものであることを否定する記述は、PVin I 32,15, PV III 312, DhPr 82,18f.などにも見える。

この問題に関して、PVinTにおけるダルモータラの見解については不明瞭な点が残るものの<sup>27</sup>、おそらくこれと類似する見解を示すものとして、ダルモータラの *Nyāyabinduṭīkā* に対するドゥルヴェーカミシュラ (Durvekamiśra, 11 世紀頃) の註釈 *Dharmottarapradīpa* (DhPr) を挙げることができる。

DhPr 82,25–27: arthagataś cākāro jñānādhīnapratipattitayā jñānasya viśiṣṭarūpatā-saṃdehena saṃdigdhaḥ. na ca tenaiva saṃdigdharūpeṇa tad eva saṃdigdham rūpaṃ niścetum śakyam.

また、対象にある形象は、知に基づいて知られるのだから、知が特定のあり方をもつことが疑わしい限り、[その対象にある形象も] 疑わしい。しかし、正にその疑わしい [対象の形象の] あり方によって、正にその [知の] 疑わしいあり方が決定されることは不可能である。

ここで対論者は、外的な対象にある形象によって、知のあり方が限定されると考えている。それに対して、立論者は以下のように論駁する。まず、対象にある形象は知に基づいてのみ知られるものである<sup>28</sup>。よって、対論者のように知自身に区別を認めないならば、知が特定の対象に限定されたあり方をもつことが疑わしいこととなり、その疑わしい知によって知られる対象の形象も疑わしいものとなる。しかし、立論者においては、確立させられるものより先に確立させるもの自身が限定していることを前提とするの

<sup>27</sup> See PVinT(Dh) D131b6–132a5/P152b7–153a7. 特に、ここで挙げる DhPr とのパラレルとして、以下の箇所を挙げるができる。PVinT(Dh) D132a1/P153a1f.: ... rnam par shes pa la the tshom za bas ji ltar na the tshom za ba'i rang bzhin gyi sngon po dang 'brel pa can des the tshom za ba'i rang bzhin de nyid nges par byed / ( [対象にある形象の違いについての] 知に疑いがあるのだから、どうして疑いを本質とした青と結び付きをもつそれ (対象の形象) によって、疑いを本質とした正にそれ (知) が決定されようか)。

<sup>28</sup> プトンの註釈では、対象における形象の違いが知によってのみ知られるものである理由として、対象における形象の違いは物質的なものであることを述べる。PVinT(Bu) 134,1f.: don la gnas pa'i sngon po la sogs pa'i rnam pa'i khyad par yod kyang / de chos can / shes pa de'i bye brag tu byed pa ma yin par thal / shes pa de'i khyad par rnam 'jog gi yan lag ma yin pa'i phyir ro // rtags grub ste / de bem po yin pas shes pa'i khyad par ma grub par mi shes pa'i phyir ro // (対象にある青などの形象の違いがあったとしても、その主題は、その知を区別する手段ではないことになる。この知の区別を確立する原因ではないから。証因は成立する。なぜならば、それ (外的対象における形象の違い) は物質的なものであるの、知の区別が成り立たない限り知られないから)。



で<sup>29</sup>、そのような疑わしい対象の形象によって、疑わしい知が決定されることはありえない。よって、外的対象にある形象の違いは、知を決定するものではない。このように、外的な対象にある形象は知によってのみ知られうるということを有力な根拠として、外的な対象における形象の違いを認識手段とする説を否定している。

以上に検討した外的な諸要因が知を限定するものではないことを示す三つの理由は、以下のように整理されよう。まず第一の理由では、あるものが認識手段として認められるための基本条件が提示される。それに対して第二、第三の理由では、外界実在論に立つ対論者によって認識手段と見なされるものが具体的に検討され、否定される。ここで具体的に否定される対論者の認識手段は、以下の二種である。第一は、感官などの違いのように、それ自身に対象に応じた区別をもたないものである。これはあらゆる対象に共通するものであるから、知を対象に応じて限定するものとはなりえない。第二は、外的対象における形象の違いのように、それ自身に対象に応じた区別をもつものである。この場合には、外的対象における形象の違いは、知を通じてしか知られない疑わしいものであるということから、知を限定する原因としては不適當であるとされる。

---

<sup>29</sup> 確立させるもの・確立させられるもの (vyavasthāpya-vyavasthāpaka) の関係は、発生させるもの・発生させられるもの (janya-janaka = kārya-kāraṇa 原因・結果) の関係と対比的に用いられている。PVV ad PV III 305 によれば、後者の場合には、結果（発生させられるもの）から原因（発生させるもの）を推論することが可能であるのに対して、前者の関係の場合には、確立させられるものから確立させるものを推論することはできない。確立させるものは、確立させられるものより先に、必ずそれ自身が観察を通じて確立していなければならない。See PVV 210,9–13: *tathā hi paraśucchidayoḥ kāryakāraṇa-bhāvaviśeṣaḥ kriyākāraṇabhāvaḥ. adhigatijñānātmabhūtavīśeṣayos tu vyavasthāpyavyavasthāpakabhāva eṣitavyaḥ, ubhayor api jñānasvarūpātmatvāt. tatra kāraṇam ajñātam api svakāryaṃ nirvartayatīti kāryadarśanāc ca tadvyavasthā yuktaiva. vyavasthāpakas tu nānupalakṣito vyavasthāpyavyavasthāyām kṣamate* (というのも、斧と切断には、特殊な原因と結果の関係たる手段と作用の関係がある。一方、認識 (adhigati) と知自体の違いにとっては、確立するものと確立させられるものの関係 [たる手段と作用の関係] が認められるべきである。なぜならば、両者 (認識と知自体の違い) とも知そのものを自体とするのだから。この [二種の関係の] うち、原因は知られていなくても自身の結果を生起させるので、結果を見ることに基づいてそれ (原因) を確立することは確かに妥当である。しかし、確立するものは、観察されていないならば、確立させられるものを確立することはできない)。



### 3.4.2. 対象の形象をもつこと以外のものが認識手段であることの否定

では次に、PV III 305 で述べられるような、対象と同一の形象をもつこと以外の要因は認識を対象と結び付けることができないということを示す箇所に入ろう。これまで見てきたように、知を区別する認識手段として、まず知より外部のもの（感官、外的対象にある形象）が排除されるが、ここでさらに、知の内部のものについても吟味される。以下に取り上げる PVin の箇所では、先ほど同様感官などの違いが否定された後に、対象によってもたらされた特殊な感受を認識手段として立てる説が否定される。

PVin I 31,10–32,3: na ceyam arthaghaṭanārthasārūpyād anyato jñānasya sambhavati. na hi paṭumandatādibhiḥ svabhedair bhedakam apīndriyādy arthenaitad ghaṭayati, tatra pratyāsattinibandhanābhāvāt. asty anubhavaviśeṣo 'rthakṛtaḥ, yata iyaṃ pratītiḥ, na sārūpyād iti cet, atha katham idānīm sato rūpaṃ na nirdiśyate. nedam idaṃtayā śakyam nirdeṣṭum. anirūpitenā nāmāyam ātmanā bhāvān vyavasthāpayatīdam asyedaṃ neti suvyavasthitā bhāvāḥ.<sup>30</sup>

【立論者】そして、この知の対象との結びつきは、[知が] 対象と同一の形象をもつことより別のものによってはありえない。というのも、感官などは、鋭さ・鈍さなどの「感官など」自身の区別によって「明瞭・不明瞭などの何らかの形で知を」区別するものであったとしても、これ（知）を対象と結びつけるものではない。なぜならば、それ（感官など）には、[知と対象との] 近接（pratyāsatti）[すなわち結び付き] の原因が存在しないのだから。

【対論者】[外的] 対象によって特殊な感受（anubhavaviśeṣa）がもたらされ、それ（特殊な感受）に基づいて、その認識（pratīti, 対象認識）がある。[対象と] 同一の形象をもつことによって「認識があるの」ではない。

【立論者】それならば、この場合、なぜ「特殊な感受という」存在するもののあり方が示されないのか。

【対論者】これ（特殊な感受のあり方）<sup>31</sup>は、これであるという「知覚されるよう

<sup>30</sup> チベット語訳は、PVin I, 80,4–16 にあたる。

<sup>31</sup> See PVinI(Dh) D133a7/P154b5: **de ni zhes bya ba don gyis byas pa'i khyad par gyi rang bzhin no** // (「これ」というのは、対象によってもたらされた特殊性のあり方である)。

な] 形では示されえない<sup>32</sup>.

【立論者】この者（このような説を説く人）は，[感受／知における] 規定されない（anirūpita）本性（ātman）によって，「これはこの[対象]の[感受]であり，これは[この対象の感受では]ない」というように諸々の存在（bhāva<sup>33</sup>，すなわち認識）を確立せしめている<sup>34</sup>．諸々の存在は，[何と]見事に確立される[ことか]．

35

ここでは，PV III 305 同様，認識を対象と結び付けるもの，すなわち認識手段として，知が対象と同一の形象をもつこと（arthasārūpya）以外のものは不適切であることを述べた後に，まず，感官などを認識手段として立てる説が否定される．それに対して，「そこには近接の原因が存在しないから」という曖昧な理由が述べられるが，註釈を見る限り，その内容は先に挙げた感官に関する議論と比べてさほど大きな展開は見られない．すなわち，感官による違いはあらゆる対象に共通するものであることから，近接のための原因，すなわち知と対象との結び付きの原因とはならないのである<sup>36</sup>．

次に，外的対象によってもたらされた，知における特殊な感受（anubhavaviśeṣa）を立てる説が否定される<sup>37</sup>．ここで対論者は，外的対象によってもたらされた特殊な感受に

<sup>32</sup> See PVinT(Dh) D133a7/P154b6: di'i dngos po ni 'di nyid de (D; kyi P) mngon sum nyid do // (「これ」(\*idam)の性質(\*bhāva)がこれであること(\*idamṭā)であって，知覚されることである)．

<sup>33</sup> ここでの存在(bhāva)は，「存在するもの」の意味で使われており，後に検討されるように，ものの上にある性質としての本性(ātman)と対になるものとして考えられる．以下，テキスト中に現れるbhāvaおよびdngos poについても同様である．

<sup>34</sup> idam asyedaṃ neti の一節は，サンスクリットテキストに素直に従えば，後のsuvyavasthitāにかかるものとして理解することもできる．しかしここでは，チベット語訳およびPVinT(Dh)の解釈に従って，前のvyavasthāpayatiにかかるものとした．

<sup>35</sup> Cf. Vetter [1966: 81,10–26], 戸崎 [1991: 6,2–7,9]．

<sup>36</sup> See PVinT(Dh) D133a1f./P154a5f.: dbang po la sogs pa'i bye brag la ni shes pa dang nye ba'i rgyu yod pa ma yin te / 'di ltar nyams su myong ba zhes bya ba dbang pos byas pa'i shes pa'i bye brag yod kyang don thams cad la thun mong ba (D; ma P) yin pa nyid kyis nges pa ma yin pa'i dang nye ba'i rgyu ma yin no // (感官などの区別には，知との近接の原因はない．というのも，[明瞭あるいは不明瞭な] 感受という感官によって作られた知の違いがあったとしても，[その知の違いは] 全ての対象に共通するものであるから，[感官などの区別は対象に応じて] 決定されておらず(?)，そして近接の原因ではない)．

<sup>37</sup> 特殊な感受と類似する，対象によってもたらされた，知の特殊性(jñānagata viśeṣo 'rthakṛtaḥ)を否定する説が，DhPrにも見える．See DhPr 82,27–83,7．

よって知は対象に応じて限定され、しかも、その特殊な感受そのものは「これである」という知覚されるような形では示されないものであると考えている。それに対して立論者は、そのようなはっきりとは決定されない特殊な感受を本性とすることによって知が確立されることはありえない、と論駁する。

このような特殊な感受と知との関係について、ダルモータラは以下のように説明する。

[ある存在 (X) における] ある自性 (\*svabhāva, Y) が知られないならば、存在 (X) がそのような自性 (Y) をもつものとして知られることはないであろう。たとえば、[青という存在における] 刹那性 (\*kṣaṇikatva) が規定されない (\*anirūpita) 場合に、青などがその[刹那性という] 自性をもつものとして規定されることはないのと同様である。そして (\*ca), [対論者が認識手段と見なす] 対象によってもたらされた、知における特殊性 (すなわち特殊な感受) は規定されていない [と彼ら自身によって言われる]。したがって、知がそれ (対象によってもたらされた知における特殊性) を自性とするものとして規定されることはないであろう。以上のゆえに、[特殊な感受に基づいて] 規定された対象の認識があるということはないであろう。

38

ここでは、対論者が認識手段と見なす特殊な感受と、対象認識との関係が、本性／自性 (ātman, svabhāva, Y) と存在 (bhāva, X) との関係として示される。本性と存在との関係において、何らかの存在 (X) におけるあるもの (Y) という本性がはっきりと知られない、すなわち規定されないならば、存在 (X) はそのような本性 (Y) をもつもの

<sup>38</sup> See PVinT(Dh) D134a2f./P155b2–4: rang bzhin gang zhig ma rtogs na ni dngos po de'i rang bzhin du rtogs par mi 'gyur te / dper na skad cig ma nyid nges par ma rtogs par sngon po la sogs pa de'i rang bzhin du nges par mi rtogs pa bzhin no // shes pa'i don gyis byas pa'i bye brag kyang nges par rtogs pa ma yin te / des na shes pa de'i rang bzhin du nges par rtogs par mi 'gyur ba'i phyir / (D; om. P) don nges par rtogs pa'i rtogs par mi 'gyur ro //. Cf. DhPr 82,29–83,7: yadrūpaś ca yaś ca karmaniyamaniścayo jñānasya, tasminn anirūpīte kīdṛśī tadrūpatāvyavasthā. yathā nīlādir anirūpīte kṣaṇikatve tadrūpo (*em.*; tud- DhPr) na nirūpyata iti (知には、何らかの対象に関する限定の決定 (niścaya, X) があり、そして [その決定が] あるあり方 (Y) を持つ場合に、その [あり方] (Y) が規定されていないならば、[(X) において] 一体いかなるそのあり方 (Y) をもつものとしての確立があろうか。たとえば、青などは、刹那性が規定されていない場合に、その [刹那性という] あり方をもつものとして規定されることはない)。

として知られることはない。この関係の具体例としては、刹那性という自性が規定されていない場合に、青などの存在がそのような自性をもつものとして規定されないことが挙げられる。そして、特殊な感受は、対論者によって、これであるとはっきりとは規定されないものとして考えられている。したがって、知がそのような特殊な感受を本性とするものであると規定されることはありえない。

存在 (X, ex. 青) におけるあるもの (Y, ex. 刹那性) という本性が規定されないならば、  
存在 (X) は (Y) を本性とするものとして知られない。  
知における特殊な感受という本性も規定されていない。  
したがって、知は特殊な感受を本性とするものとして知られない。

さらに、知が特殊な感受を本性とするものであることが知られない以上、特殊な感受は知における本性ではなく、このように知の本性とはならない特殊な感受によって知が限定されることはありえない。したがって、対論者が認識手段として主張するところの特殊な感受に基づいて、認識結果である対象の認識があるということにはならない。このように、ダルモッタラの註釈によって、特殊な感受と知とは本性と存在の関係にあり、特殊な感受が規定されないならば、それが知の本性となって認識結果を確立するということはありえないということが、より明確な形で示された。

以上のようにしてダルマキールティは、それがはっきりと規定されないという理由によって、特殊な感受は認識手段としては不適當であるとして退ける。さらに、彼自身の立場としては、このようにはっきりと決定されないものではなく、知自身においてありありと顕われる対象の形象こそが、対象と認識とを結び付けるものとして認められることが理解されよう。

#### 3.4.3. 小結

これまで見てきたように、ダルマキールティは、対象の形象をもつこと以外のものを認識手段から排除するために、二段階の過程を経ている。すなわち、まず初めに、知より外部の要因を否定するために、感官などおよび外的対象における形象を排除している。次に、知の外部のみならず、知の内部においても否定されるものがあるとして、感官に加えて特殊な感受が排除される。

しかし、このように段階としては二つであるものの、そこで排除される具体的な事例について整理するならば、その内容は三種に分類されよう。すなわち、①感官、②外的対象にある形象、③特殊な感受、の三つである<sup>39</sup>。これに、ダルマキールティ自身が認識を限定するものとして認めている④知の本性としての対象の形象を加えれば、認識手段とは知を対象に応じて限定するものであるという前提から、対象の形象をもつことであるという結論に至る過程で、ダルマキールティは四つのパターンを想定していると言うことができる。この中で、①②は知より外部のものであり、①は対象に応じた区別をもたないことから否定される。さらに②は、対象に応じた区別をもつものの、知を通じてしか知られない以上、それ自身確立されていないものであることから否定される。さらに③は知の内部における要因であるから、④のダルマキールティ自身の説に接近してはいるものの、はっきりと規定されないという点で不十分である。以下の表に、これらのパターンをその拒斥の理由と共にまとめて示す<sup>40</sup>。

外的	①感官	×	対象に応じた区別をもたない
	②外的対象にある形象	×	知を通じてしか知られない
内的	③特殊な感受	×	はっきりと規定されていない
	④知の本性としての対象の形象をもつこと	○	(対象に応じた区別をもつ & 規定される)

<sup>39</sup> これら三種の分類は、DhPr の記述からも読み取ることができる。まず、NBT<sub>I</sub> に対する直接的な註釈を行う箇所では、①のパターンにあたる感官および光 (āloka) と、②のパターンにあたる外的対象における特殊性とが取り上げられる。さらに、独自の註釈を行う箇所では、②と③のパターンが、ほぼ PVinT<sub>I</sub> に沿った形で取り上げられる。See DhPr 82,18–20; 82,25–83,7.

<sup>40</sup> なお、PV III 310–317 では、ここで扱った対象を確定するものという前提から対象の形象をもつことを導き出すという文脈とは別に、対論者によって想定される認識手段の非妥当性の検討がそれぞれ個別に行われる。そこに見られる批判の内容については、PS の他学派批判などと合わせて、更に検討する必要がある。Cf. 戸崎 [1979: 401–410]. この問題については本研究では詳しく論じることができなかったが、特に感官と対象との接触については、三代 [2010] で取り上げた。

### 3.5. まとめ

これまで、仏教論理学派が認識手段と認識結果との非別体説を主張するにあたって認識手段をどのように扱ったのか、ディグナーガからダルマキールティへと順を追って見てきたわけであるが、以下にその内容をまとめておこう。

まず、ディグナーガによって、認識手段と認識結果との非別体性が、以下のように主張される。認識結果であるところの知とは別個の認識手段があるのではなく、知そのものが転義的に認識手段と呼ばれる。なぜならば、知は、対象の形象をもって生じることによって作用をもつと認められるのだから、ということである。しかし、この対象の形象をもつことが、どのような意味で知の認識作用に関与するのか、という点については明示されていない。

それに対してダルマキールティは、認識手段とは対象に応じて知を限定する要因であるとして、認識手段の知およびその認識作用に対する働きを明示し、これに基づいて、認識手段とは対象の形象をもつことであると積極的に論証しようとしている。以上はPVからも読み取れることであるが、さらに PVin を合わせて検討することによって、その詳細が明らかになった。PVin では、対象の形象をもつこと以外のものは認識手段としては不適當であるということを示すために、認識手段として四つのパターンを想定している。すなわち、感官、外的対象にある形象、特殊な感受、知の本性としての対象の形象をもつこと、の四つである。これらのパターンについて段階を踏んで論じることにより、対論者の説から四番目の自説へと徐々に接近している。

このように、ダルマキールティがその論証の過程でかなり丁寧に他者の説を排除しているということが明らかになったが、対論者である外界実在論者の側からすれば、この論難をそのまま受け入れるわけにはいかない。というのも、認識手段と認識結果の間に、限定するもの・限定されるものという特殊な関係を設定した時点で、外界実在論者の考える両者の関係とは全く異質なものとなっているからである。すなわち、認識手段とは知を対象に応じて限定するものであるという前提自体が、彼の独自性であると言えよう。



## 第4章 ダルモットタラにおける対象認識

### 4.1. 問題の所在

ダルモットタラが、「概念的構想を伴わない単なる直観的認識は、正しい知としての作用を為さない」<sup>1</sup>と述べたことは、よく知られている。しかし、彼のこの言明は、仏教論理学派の基本的なテーゼと矛盾をきたす恐れがある。仏教論理学派では、正しい知（プラマーナ, *pramāṇa*）として、知覚と推論との二種が認められている。そして、知覚とは、概念的構想を伴わない認識のことである。したがって、知覚が正しい知として認められる以上、概念的構想を伴わずとも何らかの正しい知としての作用を為すことが期待される。

ダルモットタラにおけるプラマーナ（*pramāṇa*, 正しい知／正しい認識の手段）<sup>2</sup>およびその結果については、*Nyāyabinduṭīkā*（NBT）を中心に扱った沖 [1990] [1993] や、*Pramāṇaviniścayaṭīkā*（PVinT(Dh)）冒頭のプラマーナ論を扱った Steinkellner and Krasser [1989]（PVinT(Dh)<sub>s</sub>）, *Laghuprāmāṇyaparīkṣā*（PPar II）を扱った Krasser [1991] [1995], その他西沢 [2011] 等の研究がある<sup>3</sup>。これらの研究によって、上記の問題に対する一定の

<sup>1</sup> See NBT 84,5f.: *akṛte tv adhyavasāye nīlabodharūpatvenāvyavasthāpitam bhavati vijñānam. tathā ca pramāṇaphalam arthādhigamarūpam anīṣṭam* (判断が為されないならば、知は青の知を本質とするものとして確立されないことになる。そしてその場合には、対象の認識を本質とするプラマーナの結果は完成されない)。

<sup>2</sup> プラマーナの語が「正しい知」と「正しい認識の手段」という二つの意味をもつことと、その両者の関係については、本研究第2章を参照のこと。それに倣い、前者を「プラマーナ」と訳し、後者を「認識手段」と訳す。本章では主に前者の意味で用いられているが、終わりに後者の用例も扱われる。

<sup>3</sup> PVinT のうち、プラマーナとその結果に関する議論の大半が含まれている知覚章は、残念ながらサンスクリット原典が失われたままである。しかし、そのチベット語訳に対応する多くのサンスクリット断片を NBT や DhPr 等から回収することができ、今回扱う部分の大半は Steinkellner and Krasser [1989] によって既に丁寧な研究がなされている。PPar II については、Krasser [1991] による詳細な研究がある。その他に、*[Brhat]Prāmāṇyaparīkṣā*（PPar I）というプラマーナに関するダルモットタラの自著があるが、本研究ではその内容に直接触れることはできなかった（Krasser [1995: 269, n. 2] には、PPar I に対するテキストおよび翻訳が準備中と記されているが、未刊である）。PVinT および PPar II と共通する内容については、それぞれ Steinkellner and Krasser [1989] と Krasser [1991] に

解答が与えられている。すなわち、知覚は、その後に生じる決定知 (niścayapratyaya)<sup>4</sup>あるいは判断 (adhyavasāya)<sup>5</sup>と呼ばれる概念的認識 (分別知, vikalpa) と協働することによって、正しい知としての作用を為す。ただし、決定知自身は、未知の情報を明らかにするというプラマーナの定義を満たしていないので、プラマーナには含まれない<sup>6</sup>。

しかし、依然としてはっきりしないのが、プラマーナの結果として提示される「対象認識」(arthādhigati) の、知覚における位置づけである。対象認識と決定知とはどのような

一覧が付されている。

ダルモットタラ内の著作順序については、Krasser [1992: 155] によって、NBṬ → PPar II → PVinṬ という順序が、プラマーナの定義に関する内容比較に基づき提示されているが、検討の余地がある。

<sup>4</sup> 後に挙げる NBṬ などの記述によって、知覚と決定知との間には時間的先後関係が認められる。桂 [1989: 542] や沖 [1993] など、同様の理解を示す。一方、西沢 [2011: 458] は、両者を同時であると考えているようである。

<sup>5</sup> ダルモットタラの認識論における adhyavasāya の意味については、近年特に *Apoḥaprakaraṇa* (AP) における用例が注目されており、赤松 [1984b] に対する片岡 [2013] の批判や、石田 [2014] 等の研究がある。そこで問題とされるのが、「分別は、自らの顕現という対象でないものを、対象として判断するのではないか。したがって、それ(自らの顕現)が分別の対象である」(AP 238,7f: gal te nam par rtog pa rang gi snang ba don med pa la don du lhag par zhen pa ma yin nam / de'i phyir de ni de'i yul yin no zhe na /) という対論者の説とそれに対する回答である。そこでダルモットタラは、adhyavasāya の意味を、「把握すること」(grahaṇa)、「作ること」(karaṇa)、「結びつけること」(yojanā)、「付託すること」(samāropa) の4つの可能性に分けて考察する。そこで、前者三つの可能性を否定した上で、ダルモットタラ自身が第4の「付託すること」という意味を認めているか否かが争点とされており、赤松氏および石田氏が認めているという立場を採るのに対して、片岡氏はそれを否定する。また、adhyavasāya の対象が知のもつ内的形象として認められるかどうかについても、異論がある。

さらに、adhyavasāya に類する語として、avasāya を挙げることができる。岡田 [2005] によれば、シャーンタラクシタおよびカマラシーラはその著書 *Tattvasaṃgraha* および *Tattvasaṃgrahapañjikā* の中で、言葉の作用について考察する際に両者を区別して使用していると言われる。よって、両者と密接な関係にあるダルモットタラが、同様の傾向を有する可能性がある。現段階ではダルモットタラの用語について明確な区別は見当たらないが、今後検討する必要がある。

<sup>6</sup> このような知覚の後に生じる決定知は、「知覚判断」(perceptual judgement) 等と先行研究において呼ばれるものである。ダルマキールティにおける知覚判断については、本研究の 1.1.5 に簡単にまとめたので、参照されたい。ダルモットタラにおける知覚判断については、沖 [1990]、西沢 [2011: 454-460] に詳しい。その他、ラトナキールティの理解に関する太田 [1973] や北原 [1996]、アルチャタの理解に関する乗山 [2000] などの先行研究がある。

な関係にあるのか。果たして対象認識は、分別知なのか、無分別知なのか。もしダルモットタラが、対象認識は分別知であると考えていたならば、有分別知覚を容認することになり、基本テーゼから逸脱する。そこで本章では、ダルモットタラによるプラマーナとその結果に関する理解を先行研究を手がかりに整理した上で、対象認識について考察する。

## 4.2. 正しい知としてのプラマーナと分別

ダルモットタラは、プラマーナについてどのような基本理解を示しているのであろうか。この問に対してしばしば取り上げられるのが、NBṬ の以下の一節である。

NBṬ 17,1–18,2: avisamvādakam jñānam samyagjñānam. loke ca pūrvam upadarśitam arthaṃ prāpayan samvādaka ucyate. tadvaj jñānam api svayaṃ pradarśitam arthaṃ prāpayat samvādaka ucyate. pradarśite cārthe pravartakatvam eva prāpakatvam, nānyat. tathā hi na jñānam janayad arthaṃ prāpayati, api tv arthe puruṣaṃ pravartayat prāpayaty artham. pravartakatvam api pravṛttiviśayapradarśakatvam eva. na hi puruṣaṃ haṭhāt pravartayitum śaknoti vijñānam.

正しい知とは、欺かない知である。そして、世間では、以前に示された対象に到達させる [人] が (prāpayat) 欺かない [人] (samvādaka) と言われている。同様に、知も、[その知] 自身によって示された対象に到達させるものが、欺かない [知] と言われる。さらに、到達させるものたること (prāpakatva) とは、示された対象に向かって行動させるものたること (pravartakatva) に他ならず、それ以外ではない。というのも、知は、対象を生ぜしめることによって [対象に] 到達させるのではない。そうではなくて、対象に向かって人を行動させることによって対象に到達させるのである。また、行動させるものたることとは、行動の対象を示すものたること (pravṛttiviśayapradarśakatva) に他ならない。というのも、知は、強制的に (haṭhāt) 人を行動させることはできない。<sup>7</sup>

ここでダルモットタラは、正しい知であるプラマーナを、以下のように言い換えている。すなわち、正しい知 (samyagjñāna) とは欺かないもの (samvādaka) であり、欺かない

<sup>7</sup> 翻訳は、沖 [1993: 122f.], Franco [1997: 51f.] などを参照。

知とは、その知によって示された (pradarsita) 対象 (artha) に到達させる要因 (prāpaka) であり、その対象に向かって行動させる要因 (pravartaka) であり<sup>8</sup>、それはすなわち、行動の対象 (pravṛtṭiṣaya) を示す要因 (pradarsaka) である<sup>9</sup>。

正しい知 (saṃyagiñāna) — 欺かないもの — 示された対象に到達させるもの  
— 示された知に向かって行動させるもの — 行動の対象を示すもの

この一連のプラマーナに対する言い換えは、NBṬ のみならず、PVinṬ(Dh) や PPar II にも概ね共通しているが、そこでは、更にいくつかの付加的な情報が与えられる。たとえば、PVinṬ(Dh) では、欺かない知とは到達させるものであると言い換えるのに加えて、「實在 (vastu)<sup>10</sup>を把握するもの (grāhaka) であることによって正しい知であるのではなく、實在に到達させるもの (\*vastuprāpaka) であることによる」といわれる<sup>11</sup>。ここから、「示された対象」(upadarsitārtha) と先に呼ばれた対象が、「實在」(vastu) であるこ

<sup>8</sup> プラマーナが pravartaka であるという理解は、ダルマキールティの *Pramāṇavārttika* プラマーナシッディ (pramāṇasiddhi) 章 (PV II) 冒頭の言明に遡る。そこで彼は、知がプラマーナであることに關する二つの理由を挙げ、その第一として、「捨てられるべきものと取られるべきものに対する行動 (pravṛtti) は、それ (知) を主たる要因 (pradhāna) とするから」と述べる。つまり、知こそが行動のための主要因であり、行動させるものである。当該箇所の詳細については、本研究 2.4 を見よ。

また、プラマーナを行動と結び付ける発想は、ニヤーヤ学派の *Nyāyabhāṣya* (NBh) などに遡ることができる。NBh 1,5: pramāṇato 'rthapratipattau pravṛttisāmarthyād arthavat pramāṇam (プラマーナによって対象を理解するとき、[その理解に基づく人の] 行動は有効であるから、プラマーナは効果をもつ), cf. 服部 [1969: 333] 他。

<sup>9</sup> この一連の言い換えは、先行研究によって指摘されている通り、PV II でダルマキールティが規定したプラマーナの二種の定義を関連付ける点に、意義を求めることができる。すなわち、ダルモットタラの理解によれば、知によって対象が示された、つまり人によって対象が認識された時点でプラマーナの作用は完了されたことになり、「プラマーナは欺かない知である」(PV II 1: pramāṇam avisamvādi jñānam) という第一の定義は、「未知の対象を明らかにするものである」(PV II 5c: ajñātārthaprakāśo vā) という第二の定義を含意することになる。Cf. Krasser [1995: 248f.], Franco [1997: 51f.], 木村 (俊) [1997: 6].

<sup>10</sup> ここでの vastu は、後に検討するように、目的達成能力を特質としており、私たちの行動に対して所期の結果をもたらすものである。つまり、日常的なレベルで、実質的にそこにあると見なされるようなものである。そのような意味で、「實在」と訳した。

<sup>11</sup> See PVinṬ(Dh)<sub>s</sub> 5,6–9: de'i don ni 'di yin te / dngos po 'dzin par byed pas ni yang dag pa'i shes pa nyid ma yin gyi 'on kyang dngos po thob par byed pa nyid yin no // (これの意味は以下のごとくである。實在を把握することによって正しい知であるのではなく、實在に到達させることに [よって正しい知であるに] 他ならない)。

とが読み取れる。また、「実在を把握するもの」(\*vastugrāhaka)であるだけでは、正しい知として不十分であることも分かる<sup>12</sup>。ここでいう、「実在」(vastu) および「把握するもの」(grāhaka)の意味については、次節で詳しく検討する。

さらに重要な点は、「行動させるもの」(pravartaka)を「対象を示すもの」(pradarśaka)と言い換える際に、「対象を判別するもの」(paricchedaka)という概念を入れ込んでいることである。これは、PVin I 本文の、「というのも、これら二つの[正しい知(=プラマーナ)]に基づいて対象を判別した後に (paricchidya), 行動する人は (pravartamāna), 目的達成に関して欺かれることがない」<sup>13</sup>という一文に基づいている。

「把握されていないものが行動の対象である場合に、過大適用になってしまうのではないか」という主張に反駁するために、「対象を判別した後に (artham paricchidya)」と述べる。これ(二種のプラマーナ)によって先に判断されたものに依拠して、行動するのだから、決定 (nges pa, \*niścaya, ≡ pariccheda) と行動とは、因果関係にあると説かれる。したがって、対象を判別する知(\*arthaparicchidakajñāna)に対してこそ、「行動させるもの」(pravartaka)と言われるのである。

もし、判別の対象のみが行動の対象であって、いずれか一方(\*anyatara)ではないならば、その場合に、それは妥当である。したがって、判別されたもの(\*paricchinna)が行動の対象であって、判別するもの(\*pariccheda)が行動させるもの(\*pravartaka)に他ならないと説かれるであろう。知は、人の中にあるものを把握するので、いかなる場所に向かっても行動させるものではなく、行動の対象(\*pravṛttiviśaya)を示

<sup>12</sup> この点については、本章 4.4.1 で取り上げる「把握対象」(grāhya)と「判断対象」(adhyavaseya)という二種のプラマーナの対象に関連して述べられる、ドゥルヴェーカミシュラの以下の記述が参考になる。DhPr 73,16f.: tatra prāmāṇyaṃ pravṛttiviśayāpekṣaṃ vyavasthāpyate. jñānatvaṃ tūbhayāpekṣaṃ eva. ajñānasya ca prāmāṇyāsambhavana jñānāntarbhūtaṃ pramāṇaṃ viśayadvaividhyavad eva bhavati (その(二種の対象)の中で、[プラマーナたる知が] プラマーナであることは、行動の対象(=判断対象)に依拠して確立される。一方、[プラマーナたる知が] 知であることは、[把握対象と判断対象の] 両者に依拠して確立されるに他ならない。そして、知でないものがプラマーナであることはありえないので、知の中に含まれるプラマーナは、二つの対象をもつものに他ならない)。このように、プラマーナであることは判断対象によって確立され、一方、知であることは、判断対象のみならず両者ともによって確立される。すなわち、プラマーナたる知は、二種の対象を両方とも備えていなければならない。したがって、知の側の働きとしては、把握するだけでは不十分である。

<sup>13</sup> PVin I 1,10: na hy ābhyām arthaṃ paricchidya pravartamāno 'rthakriyāyām viśamvādyate.



すもの (\*pradarśaka) [としての行動させるもの] である。したがって、判別するもののみが行動させるものであることは、妥当である。<sup>14</sup>

ここでダルモータラは、判別した後に行動するという、判別と行動との因果関係に基づいて、行動させるもの (pravartaka) とは、判別するもの (paricchedaka) であると述べる。この際に、判別 (pariccheda) と決定 (niścaya) とは、ほぼ同義の語として使用されている<sup>15</sup>。

さらに、判別の対象と行動の対象とは同一のものとされている。到達の対象と行動の対象も当然同じであるから<sup>16</sup>、到達、行動、判別の対象はいずれも同じく、実在 (vastu) であり、判別されたもの (paricchinna) ということになる。また、この場合の判別する

<sup>14</sup> PVinT(Dh) 8,4–18: ma gzung ba 'jug pa'i yul yin na ha cang thal bar 'gyur ro zhes brjod pa spang ba'i phyir / **don yongs su bcad nas** zhes gsungs te / 'dis sngar yongs su bcad pa la ltos nas 'jug pa'i phyir / nges pa dang 'jug pa dag rgyu dang 'bras bu nyid du bstan to // des na don yongs su gcod par byed pa'i shes pa nyid la 'jug par byed par brjod do // gal te yongs su bcad pa'i don nyid 'jug pa'i yul yin gyi gang yang rung ba ma yin pa de ltar na de rigs pa yin te / de'i phyir yongs su bcad pa ni 'jug pa'i yul yin la / yongs su gcod par byed pa ni 'jug par byed pa nyid yin no zhes bstan par 'gyur ro // gang gi phyir shes pas skyes bu la gnas bzung ste / 'ga' zhig tu 'jug par byed pa ni ma yin gyi / 'on kyang 'jug pa'i yul ston par byed pa yin no // de'i phyir yongs su gcod par byed pa nyid 'jug par byed pa yin par rigs so //. 翻訳は、Steinkellner and Krasser [1989: 78] を参照した。

<sup>15</sup> これによって、PVin I に見える paricchidya の語を、ダルモータラが分別に関わるものとして理解していることが分かる。pari/chid の語は、知覚を論じる際にダルマキールティにより数度使用されているが、それを分別と関わるものとするか否かは、註釈者によって解釈が分かれるところである。例えば、稲見 [1993: 95f.] に示されるように、シャーキヤブッディは、同様の文脈の paricchidya を、知覚の場合には「決定ではなく、むしろ、そのように顕現するものとして生じるにすぎない」と解釈し、分別が関わらないことを強調する。PVin(Ś) D72a5/P87a5–7: **don yongs su bcad nas 'jug pa** zhes bya ba smos te / ci rigs par tshad ma gnyis kyis yongs su bcad par blta bar bya'o // mngon sum ni rnam par rtog pa med pa nyid kyi phyir nges pa ma yin mod kyi 'on kyang der snang bar skyes pa tsam yin no // rjes su dpag pa ni nges pa nyid yin (D; ma yin P) no // (「対象を判別した後に行動する」と [デーヴェーンドラブッディが] 述べる。適宜 [知覚と推論の] 二つのプラマーナによって判別する、と理解すべきである。知覚は無分別であるから、決定 [知] (\*niścaya) ではなく、むしろ、そのように顕現するものとして生じるにすぎない。一方、推論は、決定 [知] に他ならない)。

<sup>16</sup> Cf. DhPr 72,24: pravṛttiviśayaśyaiva prāpaṇīyatvāt prāpaṇīya eva pravṛttiviśayaśabdenoktaḥ (行動の対象こそが到達されるべきものであるから、到達されるべきものこそが、行動の対象という語によって述べられている)。



ものは、先に述べられた、「行動の対象を示すもの」とほぼ同じ位置を占めている。  
 以上の内容をまとめると、以下のようになる。

samyagjñāna — samvādaka

— prāpaka (pūrvam upadarśitam artham prāpayat) \*下線部は vastu であり pricchinna

— pravartaka (pradarśita arthe pravartakatvam) — artha の paricchedaka

— pravṛttiviśaya の pradarśaka

このように、プラマーナの説明には、判別 (pariccheda) や決定 (niścaya) といった有分別的な傾向の強い用語が用いられており、知覚としてのプラマーナにも、何らかの形で分別が含まれるのではないかという懸念が生じてこよう。

### 4.3. 正しい知たるプラマーナとその結果との関係

本節ではさらに、ダルモータラがプラマーナの結果についてどのように考えているか、プラマーナとの関係を中心に見ておくことにする。彼は、プラマーナの結果について、先の引用に続けて以下のように説明する。

NBṬ 19,1f.: ata eva cārthādhigatir eva pramāṇaphalam. adhigate cārthe pravartitaḥ puruṣaḥ, prāpitaś cārthaḥ. tathā ca saty arthādhigamāt samāptaḥ pramāṇavyāpāraḥ.

そして、正にこの故に、プラマーナの結果は、対象の認識 (arthādhigati) に他ならない。というのも、対象が認識された時に、人は行動させられた [ものとなり]、そして、対象は [認識によって人が] 到達せしめられた [ものとなる]。さらにそのようである場合に、対象の認識 (arthādhigama) によって、プラマーナの作用は完成される。

ここではまず、プラマーナの結果が対象認識 (arthādhigati) であることが明示される。さらに、その対象の認識 (arthādhigama) によって<sup>17</sup>、プラマーナの作用が完成される、と言われている。したがって、プラマーナとプラマーナの結果との関係は、正しい知と、その知のもつ作用 (vyāpāra) という関係で理解される。

そのことは、以下の記述からも分かる。

<sup>17</sup> ここでの arthādhigati と arthādhigama とは同義と考えてよいだろう。

NBT 79,8-13: etad uktaṃ bhavati. prāpakam jñānam pramāṇam. prāṇaśaktiś ca na kevalād arthāvinābhāvitvād bhavati, bījādyavinābhāvino 'py āṅkurāder aprāpakatvāt. tasmāt prāpyād arthād utpattāv apy asya jñānasyāsti kaścīd avaśyakartavyaḥ prāpakavyāpāraḥ, yena kṛtena arthaḥ prāpito bhavati. sa eva ca pramāṇaphalam, yadanuṣṭhānāt prāpakam bhavati jñānam. uktaṃ ca purastāt "pravṛttiviśayapradarśanam eva prāpakasya prāpakavyāpāro nāma." tad eva ca pratyakṣam arthapratītirūpam arthapradarśanarūpam. atas tad eva pramāṇaphalam.

以下のことが述べられたことになる。プラマーナとは、[人を対象に] 到達させる知（prāpakam jñānam）である。そして、[知の] 到達させる能力（prāṇaśakti）は、単に[知が] 対象と不可離のものたることのみからあるわけではない。なぜならば、芽などは、種などと不可離のものであっても、[種を行動の対象として示すものではないので、種などに] 到達させるものではないから<sup>18</sup>。したがって、到達されるべき対象から[知が] 生じるとしても、この[到達させる] 知には、必ず為されるべき或る到達させる作用（prāpakavyāpāra）——その[到達させる作用が] 為されることによって、対象が到達されたものとなる[というそうした作用] ——が、存在する。そして、それが実行されることによって（yadanuṣṭhānāt）知は到達させるものとなる、その[知のもつ到達させる作用] そのものがプラマーナの結果である。というのも、以前（NBT 18,1）に以下のことが述べられている。「到達せしめる[知]にある到達させる作用というものは、行動の対象を示すこと（pravṛttiviśayapradarśana）に他ならない」[と]。そして、正にその知覚[たる知] そのものが、対象の認識（arthapratīti）を特質としており、対象を示すことを特質としている。したがって、それ（知覚たる知）こそが、プラマーナの結果である。

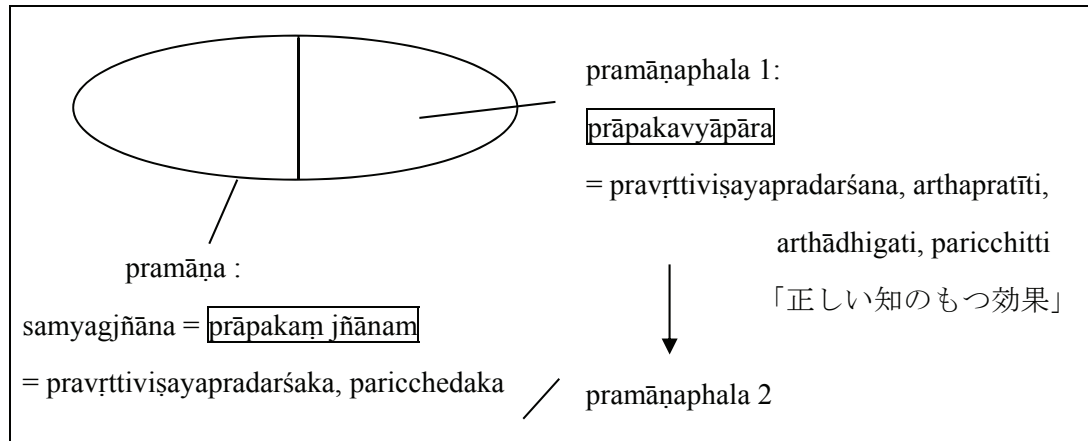
まず、プラマーナとは、先にも説かれたように、人を対象に到達させる知（prāpakam jñānam）である。さらに、知がそのような対象に到達させる能力（prāṇaśakti）を発揮するためには、知のもつ対象との不可離性、すなわち知が対象から生じたものであると

<sup>18</sup> ここで、なぜ芽などが種などに到達させるものでないかという問題は、先に確認したように、「到達させること」が「行動の対象を示すこと」と言い換えられることに基づいて、以下のように解決できる。すなわち、芽には認識作用がないので、種を行動の対象として示すことができない。したがって、芽は種に到達させるものではない。Cf. DhPr 80,2f.: **na kevalād ekākino 'rthapradarśanavinākṛtāt**（「不可離のものたること」のみから、すなわち、単独で、対象を示すことなしにもたらされたものから、あるわけではない）。

いう両者の因果関係だけでは不十分であり、対象に到達させる作用（*prāpakavyāpāra*）が不可欠である<sup>19</sup>。そして、その、知の有する対象に到達させる作用こそが、プラマーナの結果に他ならない。さらに、到達させる作用とは、具体的に言うならば、「行動の対象を示すこと」（*pravṛttiviśayapradarśana*）であり、「対象の認識（対象を認識すること）」（*arthapratīti*）である。したがって、直接的には、知の有する、対象に到達させる作用たる「対象の認識」がプラマーナの結果（*pramāṇaphala* 1）であるということになる。そして、知がその到達させる作用を特質とすることを根拠にして、知覚たる知そのものがプラマーナの結果（*pramāṇaphala* 2）であるという帰結が導かれる。

ここでの対象認識（*arthapratīti*）は、先に言われた対象認識（*arthādhigati*）と同義である。また、ドゥルヴェーカミシュラは、NBT に対する復註 *Dharmottarapradīpa*（DhPr）で、*arthādhigati* を「判別（判別すること、判別作用）」（*paricchitti*）<sup>20</sup>と言い換えている。これは、先にダルモットタラが正しい知を、「示すもの」（*pradarśaka*）と並んで「判別するもの」（*paricchedaka*）と言い換えたことに基づくものであろう。

これまでに確認されたプラマーナとプラマーナの結果との関係を図示すれば、以下のようになる。



<sup>19</sup> 人を対象に到達させるという知の能力が、対象と知との因果関係のみからもたらされうるかどうかという問題は、ダルモットタラの中でも変遷があるようである。このように、NBT では因果関係のみでは不十分であるとされるが、少なくとも PPar II では、因果関係のみで十分であると言われている。Cf. Krasser [1995: 264f.]. また、この NBT の理解は、ダルマキールティの説からも逸脱する可能性がある。Cf. 西沢 [2011: 147].

<sup>20</sup> DhPr 19,8: *ata evāsmād eva kāraṇād arthasyādhigatiḥ paricchittiḥ phalam, na pravṛttyādi.*

#### 4.4. プラマーナと行動の対象——プラマーナの二種の対象と vastu

##### 4.4.1. 二種の対象

上で見たように、「欺かない知」は、「到達させるもの」、「行動させるもの」という言い換えを経て、「対象を示すもの」へと転換される。その際に、「到達させるもの」および「行動させるもの」はいずれも、「もし人が、その知に基づいて行動を起こしたならば、必ず対象に到達するはずである」という意味での可能性 (yogyatā) の次元で処理されており、実際に行動および到達が起こるかどうかは、一見問題にされない<sup>21</sup>。しかし、対象への到達の実現によって知の正しさを保証するという立場を採る限り、実際の行動や到達を全く無視するわけにはいかない。

ここで大きな障壁となるのが、「刹那滅」(kṣaṇabhāṅga) という仏教論理学派が採用する大前提である。すなわち、この世界のあらゆるものは、持続せず、一瞬一瞬生滅を繰り返している。したがって、認識の対象と、行動によって到達される対象とは、時点がずれているために厳密には別個のものであるから、対象への到達によって認識の正しさを確認することはできないことになってしまう<sup>22</sup>。

そこでダルモットタラが採った解決策は、プラマーナに二種類の対象を立てるという方法である。すなわち、知がその形象をもって生じるところの瞬間的なもの (kṣaṇa) としての「把握対象」(grāhya) と、人によって到達されるべきもの (prāpaṇīya) たる「判断対象」(adhyavaseya) とである。そして、知覚にとっての把握対象とは、知覚がその

<sup>21</sup> Cf. DhPr 19,11–13: yasmād yenārthaḥ samyagjñānena darśitaḥ, tatra tenāpravartito 'pi puruṣaḥ pravṛttiyogyopadarśanāt tadgatasya ca vyāpārāntarasyābhāvāt pravartita ity ucyate. saty arthitve pravartanam eva. jñānena tāvat pravṛttiyogyāḥ kṛta iti yāvat (なぜならば、何らかの正しい知によって対象が見られているならば、その[対象に]対して、その[正しい知に]よって、人がその[対象]に向かって[実際にはまだ]行動させられていなくとも、[その人は]行動が可能であると示されるから、そして、それ(正しい知)に含まれる別の作用は存在しないから、行動させられたと言われる。[人が対象を]求めることがあれば、必ず行動がある。その限りで、知によって[人は]行動が可能なものとしてされたという程の意味である); DhPr 80,7f.: **prāpito bhavātīti pūrvavad yogyatayocyate** (対象が到達されるとは、以前と同様に、可能性として言われている)。

<sup>22</sup> Cf. PVinT(Dh)<sub>s</sub> 6,16–18: gal te de ltar na yang mngon sum gyis gzung ba'i don ni thob par rung ba ma yin te / skad cig ma nyid yin pa'i phyir ro // (【反論】もしそのようなのであるならば、知覚によって把握された対象は、到達されえない。瞬間的なものに他ならないから)。

形象をもって生じるところの、一刹那のものである。一方、判断対象とは、その知覚によって後に生じる決定知 (niścaya) によって知られる、すなわち判断される対象であり、相続 (saṃtāna) すなわち時間的幅をもつものである<sup>23</sup>。

ここでは、把握対象の形象すなわち顕現をもって生じる知覚と、その後生じる、判断作用を為す決定知という、二段階の認識プロセスが想定されている。そこで問題となるのが、判断対象は後の決定の対象であって、知覚の対象ではないのではないか、という点である。この問題について、ドゥルヴェーカミシュラは以下のように解釈している。

DhPr 71,22f.: pratyakṣapṛṣṭhabhāvino niścayasya pratyakṣagr̥hīta eva pravṛttatayānatiśayādhānena yat tenādhyavasitam, tat pratyakṣeṇaivāvasitam iti bhāvaḥ.

知覚の後に生じる決定 [知] は、知覚によって把握された正に同じ [対象] に対して作用するので、付加的特性をもたらすものでない (anatiśayādhāna) それ (決定知) によって判断された (adhyavasita) [対象]、それが正に知覚によって判断された (avasita) のである、という意味である。<sup>24</sup>

このように、決定知は知覚の把握対象と同じものに対して作用し、決定知が把握対象に何か新たな特性を加えるわけではない、と考えることによって、把握対象と判断対象とを重ね合わせているのである。この理解は、知覚の後に起こる決定知が想起の一種と見なされることを合わせて考慮すると、より明確になる<sup>25</sup>。すなわち、決定知は想起であ

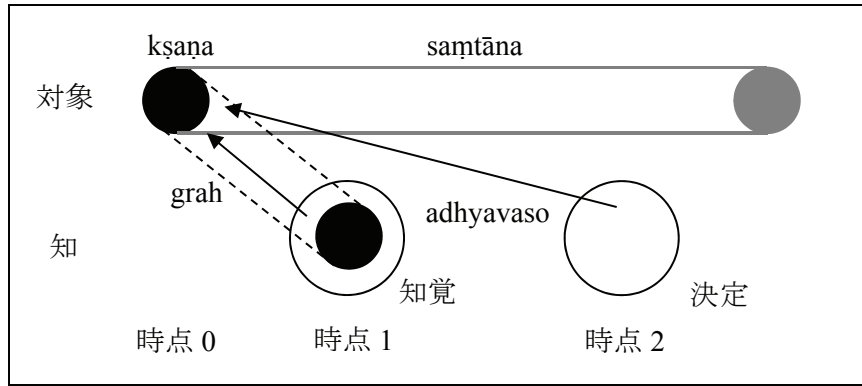
<sup>23</sup> See NBT 71,1–4 ad NB 1.12: dvividho hi viśayaḥ pramāṇasya, gr̥hyaś ca yadākāram utpadyate, prāpaṇīyaś ca yam adhyavasyati. anyo hi gr̥hyo 'nyaś cādhyavaseyaḥ. pratyakṣasya hi kṣaṇa eko gr̥hyaḥ. adhyavaseyas tu pratyakṣabalotpannena niścayena saṃtāna eva. saṃtāna eva ca pratyakṣasya prāpaṇīyaḥ, kṣaṇasya prāpayitum aśakyatvāt (というのも、プラマーナの対象は二種である。[すなわち、] それ (把握対象) の形象をもった [プラマーナたる知が] 生じるところの把握対象と、[プラマーナが] それを判断するところの到達されるべきものとである。なぜならば、一方は把握対象であり、他方は判断対象である。実に、知覚にとって、把握対象はある一刹那のものである。一方、判断対象は、知覚によって生じた決定 [知] によって [判断されるものであり]、相続に他ならない。そして、相続のみが、知覚にとって到達されるべきものである。なぜならば、瞬間的なものは到達されえないのだから); PVinT(Dh)<sub>s</sub> 7,10–16; PPar II 8,8–11.

<sup>24</sup> adhyavasita と avasita の使い分けについては、今後の課題としたい。本章註5を参照のこと。

<sup>25</sup> 以下は、決定知が想起の一種であると述べる一例である。PVinT D88b7–89a1/P104a8–104b1 ad PVin I 20,2f.: nges pa ma skyes kyang nges par nus pas rtogs pa'i don 'dzin pa ni sngar med pa'i khyad par byed pa med pas na dran pa nyid yin te / mngon sum gyi stobs kyis bskyed

るために、時間の壁を越えて、先行する知覚の対象である把握対象を自らの対象とすることができる。

上で確認された把握対象と判断対象の関係を図示するならば、以下のようになる。



#### 4.4.2. vastu とは何か

さて、本章 4.2 において問題となった、「實在」(vastu) とは、いずれの対象に該当するものであろうか。これが、行動および到達の対象であり、しかも、判別の対象であるということから考えれば、第二の判断対象であろうことは、想像に難くない。しかしその一方で、ダルマキールティが NB などで、知覚の対象たる個別相 (svalakṣaṇa) を vastu に置き換え、しかも、「真実の対象として存在するもの」(paramārthasat) と説く点も、看過できない<sup>26</sup>。

そこで、当該箇所における vastu の記述を見ていくと、「目的達成」(arthakriyā)<sup>27</sup>が鍵となっていることが分かる。すなわち、いずれの文脈においても、vastu は、目的達成能

---

pa'i nges pa bzhin no // (「先行する知によって実際に」決定が起こらなくても、決定の可能性があったので、既に認識された対象を把握するもの (\*adhigatārthagrahin) は、以前にはなかった特殊性をもたらすことはないから、想起に他ならない。知覚によって生じた決定のように)。

<sup>26</sup> See NB 1.12–15: tasya viśayaḥ svalakṣaṇam // yasyārthasya saṃnidhānāsamnidhānābhyāṃ jñānapratibhāsabhedas tat svalakṣaṇam // tad eva paramārthasat // arthakriyāsāmarthyalakṣaṇatvād vastunaḥ // (それ(知覚)の対象は、個別相である。ある対象に関して、近いことや遠いことによって、知の顕現の違いがあるならば、その[対象]は個別相である。それ(個別相)だけが最高の対象として存在する。實在(最高の対象)は、目的達成の能力をもつことを特質としているから)。

<sup>27</sup> Cf. NBT 76,3f.: arthasya prayojanasya kriyā niṣpattiḥ (artha とは目的であって、その達成(kriyā)とは完成である)。



力 (arthakriyāsamārtha/-śakti) を特質とするものと説かれている。

それ（実在を把握することによって正しい知であるのではなく、実在に到達させることによって正しい知であること）はなぜか、というならば、「目的達成に関して」と述べる。……したがって、以下の意味である。成立させられるべきことを成立させる能力のある対象に関して欺かないそれ（知）は、それ（対象）に依拠して、[その対象に] 到達させるものである、という意味である。<sup>28</sup>

ここでは、実在に到達させることによって正しい知である、ということの理由を述べるものとして、PVin 本文の「目的達成に関して」(arthakriyāyām) の句が導入される。そして、その目的達成のある対象、すなわち成立させられるべきことを成立させる能力のある対象が、到達させられる対象とされている。

またダルモットタラは、実在を把握するものであるというだけでは、正しい知として不十分であることを示唆しているが、その理由を以下のように述べる。

そして、彼ら（何かを求める良識ある人々）が、目的達成 (\*arthakriyā) の成立に向かって行動した場合に、その [目的] に到達させる能力をもった、行動させる知こそを希求するのであって、単に実在を把握する (\*vastugrahaṇamātra) [知] を [希求するのでは] ない。なぜならば、[単に実在を把握する知は、] 目的達成を成立させるものではないから。<sup>29</sup>

良識ある人々が目的達成に向かって行動した場合に、単に実在を把握するのではなく、人を目的へと到達させる能力をもった、行動させる知が希求される。その第一の理由は、単に実在を把握する知は、目的達成を成立させるものではないからである。すなわち、目的達成のためには、知覚による把握だけでは不十分であり、その後の判断が不可欠である。

また、ここで、「実在を把握する」という表現が為されることから、vastu は、把握の

<sup>28</sup> PVinT(Dh)<sub>s</sub> 5,10–16: de gang las she na / **don bya ba la** zhes gsungs te / ... des na don 'di yin te / bsgrub bya sgrub pa'i nus pa'i yul la mi slu ba de ni de la ltos nas thob par byed pa yin no zhes bya ba'i don to // Cf. Steinkellner and Krasser [1989: 75f.].

<sup>29</sup> PVinT(Dh)<sub>s</sub> 6,1–8: de dag kyang don byed pa bsgrub pa la 'jug pa na / de thob par rung ba 'jug par byed pa'i shes pa nyid tshol gyi dngos po 'dzin pa tsam ni ma yin te / don byed pa sgrub par byed pa ma yin pa'i phyir dang ... // Cf. PPar II 2,3–13.

対象をも含みうる．すなわち，先に確認された，行動や到達，および判別の対象としての vastu は，二種の対象のうち後者の「判断対象」であった．ただし，前者の「把握対象」の意味でも，vastu の語は用いられている．

#### 4.5. 対象認識とは何か

これまで見てきたように，ダルモットタラは，ある知がプラマーナであるならば，その知は行動の対象（pravṛttiviśaya）を示すもの（pradarśaka）であり，判別するもの（paricchedaka）であるということから，さらに，その知のもつ必ず為されるべき作用（vyāpāra）たる結果（phala）が，行動の対象を示す作用（pravṛttiviśayapradarśana），すなわち対象認識（arthapratīti, arthādhigati），判別作用（paricchitti）であることを導き出した．また，それら行動や判別の対象は，判断対象（adhyavaseya）と呼ばれ，知覚の後の決定知によって知られるものであった．

以上の内容からは，プラマーナの結果である対象認識には，分別が含まれているように見える．しかし実際には，沖 [1993] も示す通り，ダルモットタラは，知覚は無分別であるという原則を遵守するために，分別の要素を対象認識から慎重に取り除いている．それを示すのが，NBṬ の以下の記述である．

##### 4.5.1. プラマーナとその結果に関する三要素

ダルモットタラは，NBṬ ad NB I 21 において，対象形象たる認識手段（pramāṇa）<sup>30</sup>とその結果との非別体説を展開する中で，両者の関係を以下のように説明する．

NBṬ 83,2–84,1: vyavasthāpyavyavasthāpakabhāvo 'pi katham ekasya jñānasyeti cet. ucyate. sadṛśam<sup>31</sup> anubhūya tadvijñānam yato nīlasya grāhakam avasthāpyate niścayapratyayena, tasmāt sārūpyam anubhūtam vyavasthāpanahetuḥ. niścayapratyayena ca tajjñānam nīlasamvedanam avasthāpyamānam vyavasthāpyam. ... vyavasthāpakaś ca vikalpapratyayaḥ pratyakṣabalotpanno draṣṭavyaḥ.

<sup>30</sup> この場合の pramāṇa を「プラマーナ」ではなく「認識手段」と訳すことについては，本研究の pp. 39f.を参照．

<sup>31</sup> NBṬ は，nīlasadṛśam というように DhPr から nīla を補っているが，NBṬ に挙げられる全ての写本およびチベット語訳に従って除去する．直前の 83,1 でも，nīla を伴わない sārūpya が単独で用いられており，nīla は DhPr による説明的な補足であろう．

【対論者】確立させられるものと確立させるもの (vyavasthāpaka = 確立させる原因 vyavasthāpanahetu) <sup>32</sup>の関係といても、どのようにして一つの知にあるのか。

【立論者】答える。[青と]類似するもの ([nīla]sadṛśa) を感受した後に、[「私は青を感受する」という<sup>33</sup>、後の時点にある<sup>34</sup> 決定知 (niścayapratyaya) によって、その (青と類似するものの) 知は青を把握するものと決定される (avasthāpyate) <sup>35</sup>。

<sup>32</sup> ここでの vyavasthāpaka が確立させる原因の意味であることは、NBT 82,8 に見える vyavasthāpana (後述の通り -ka に訂正) を直後に vyavasthāpanahetu と言い換えることから理解できる。また、それらに対する DhPr の文法的解釈も、それを支持している。DhPr 83,14–17: vyavasthāpyate viśiṣṭenātmanā niyamyate 'neneti vyavasthānimittam vyavasthāpanam abhipretam. vyavasthāpanabhāvenety ayaṃ pāṭho vakṣyamānavirodhī. yadā tu vyavasthāpakabhāveneti pāṭho dṛśyate, tadā karaṇe kartṛbhāvivakṣayā tathā draṣṭavyam. sādhv asiś cchinattīti yathā (確立させるものとは、これによって確立させられる、すなわち特殊な自体によって限定されるから、確立の要因であると意図される。「確立させるものの (vyavasthāpana) の関係によって」というこの読みは、現に言われているものには反している。しかし、「確立させるもの (vyavasthāpaka) の関係によって」という読みが見られる場合で [も]、手段 (-ana 接尾辞) の意味で主体たること (-aka 接尾辞) を言うことによって、同様に知られるべきである。例えば、「よい刀は切れる」というようなものである)。これによれば、NBT 82,8 の vyavasthāpana は、意味的には正しいものの、テキストとしては、むしろ写本にある通り vyavasthāpaka に訂正されるべきであろう。その方が、vyavasthāpanahetu への言い換えとも馴染みやすい。さらに、vyavasthāpanahetu に対する註釈は以下の通り。DhPr 83,24f.: vyavasthāpanam vyavasthā-kāraṇam, vyavasthāyām prayojakavyāpāra itī yāvat, tasya hetur nimittam (確立させることは確立をもたらすことであり、確立に向かわしめる作用と言う意味である。その原因とは要因である)。ここでの vyavasthāpana は、先に解釈された「確立の原因」とは異なり、「確立させる作用」の意味である。

なお、沖 [1993: 136, n. 23] は、ここでの vyavasthāpaka の語を vyavasthāpana に変更する解釈を提示している。しかし、以上のような DhPr の解釈を踏まえれば、その必要はないだろう。

<sup>33</sup> See DhPr 83,29f.: na tu nīlasadṛśam anubhavāmīti niścayo 'sti, api tu nīlam evānubhavāmīti nīlasya grāhakam avasthāpyate (しかし、「私は青と類似するものを感受する」という決定はない。そうではなくて、「私は他ならぬ青を感受する」という [決定によって、前の時点の知は、] 青を把握するものとして確立される)。

<sup>34</sup> See DhPr 84,10: niścayapratyayeneti. niścayātmakajñānenottarakālabhāvinā ( [答える.] 決定知によって、と。後の時点に生じる、決定を本性とする知によって [という意味である] )。

<sup>35</sup> ava√sthā は決定知のもつ機能であり、ni√yam (DhPr 84,15) や niś√ci (DhPr 84,17) と言い換えられる。したがって、「決定する」と訳した。なお、「存続する」という意味で用いられることも多いが、もしここでその意味を適用するならば、感受すなわち知覚が

したがって、感受された同一形象性(sārūpya)は、確立させる原因(vyavasthāpanahetu)である。そして、その(青と類似するものの)知は、[後の]決定知によって、青の認識と決定される(avasthāpyamāna)ので、確立させられるもの(vyavasthāpya)である。……そして、知覚によって生じた分別知(vikalpapratyaya, =決定知)<sup>36</sup>が確立させるもの(vyavasthāpaka = 確立の主体)<sup>37</sup>であると見なされるべきである。

38

対論者はここで、「知にある対象との同一形象性(sārūpya)が確立するもの(vyavasthāpaka)であり、同じ知にある青の認識というあり方(nīlasamvedanarūpa)が確立されるものである」と説くダルモットタラに対して、その両者がどのように一つの知において成り立つのかを質問する。

なお、あらかじめ留意すべきなのは、ダルモットタラが、vyavasthāpakaの語を二つの意味で用いていることである。このように、同一形象性を指す場合には、「確立させる原因」(vyavasthāpanahetu)の意味である。それに対して、以下の自説の中で、直接の後の決定知を指す場合には、「確立させる主体」の意味で使用されている<sup>39</sup>。

さて、上記の問に対するダルモットタラの回答は、以下のごとくである。まず、外的対象たる青と類似するもの(nīlasadṛśa, =知にある青の形象)を感受(anubhava)した後に、「私は青を感受(=把握)する」という決定知(niścayapratyaya)が生じる、というように、時間差を有する、感受(=知覚)と決定知という二段階の知のプロセスを設定する。そして、前の知において感受される、「青と類似するもの」すなわち、「外的対象たる青と同一の形象」を知がもつことによって、後の決定知による決定すなわち確立

時間的幅をもつという不都合な帰結に陥る。知が刹那的な存在であることは、ダルモットタラ自身も随所で述べている。

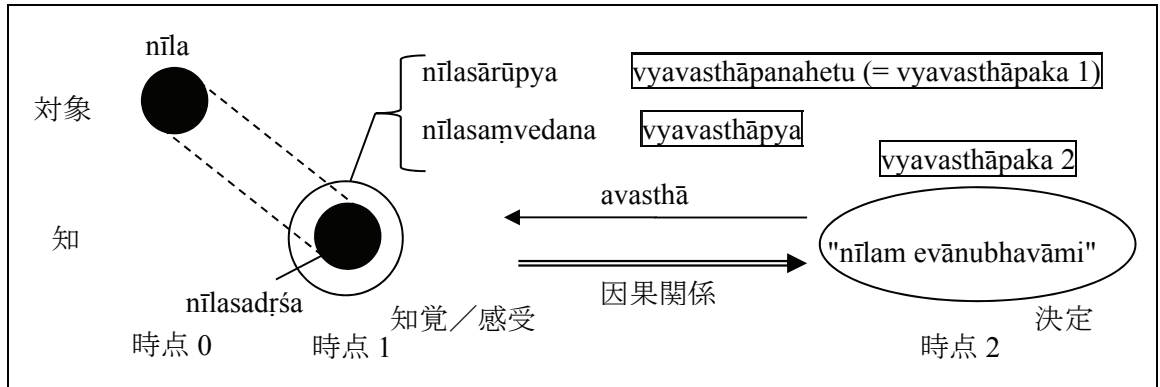
<sup>36</sup> 決定知は、いわゆる「他の排除」によって決定を行うので、分別知ともいわれる。NBṬ 83,5f.: tasmād asārūpyavyāvṛtṭyā sārūpyam jñānasya vyavasthāpanahetuḥ. anīlabodhavyāvṛtṭyā ca nīlabodharūpatvaṁ vyavasthāpyam (したがって、同一形象性でないものの排除による、知の同一形象性が、確立の原因である。そして、青の認識でないものの排除による、青の知を本質とすることが、確立させられるものである)。

<sup>37</sup> ここでの vyavasthāpaka は、対論者の問いの中で用いられた「確立の原因」とは違い、「確立の主体」すなわち確立させるという動作を行うものである。Cf. DhPr 84,25: vyavasthāpayatīti vyavasthāpakah (確立せしめるから、確立せしめるものである)。

<sup>38</sup> 翻訳は、沖 [1993: 128f.]などを参照。

<sup>39</sup> 註 32 および 37 を参照。

が起こるので、その同一形象性が確立させる原因 (vyavasthāpanahetu) である。また、その後続する決定知によって、前の知が青の認識 (nīlasamvedana) すなわち青を把握するものであることが決定される (avasthāpyamāna) ので、青の認識が確立させられるもの (vyavasthāpya) である。そして、その決定を行う後の決定知 (= 分別知) こそが、確立させるもの (vyavasthāpaka) である。これを図示すれば、以下のようになろう。



このように、ダルモッタラは、「確立の原因」(vyavasthāpanahetu)、「確立させるもの」(vyavasthāpaka)、「確立させられるもの」(vyavasthāpya) という三要素を用いて、対象との同一形象性 (sārūpya) たる認識手段 (pramāṇa) と、対象認識たる認識手段／プラマーナの結果、さらにその両者と決定知との関係を説明している。

このような三要素によるプラマーナとその結果との解釈は、おそらくダルモッタラ独自のものであり、ダルマキールティ自身には意図されていなかった。マノーラタナンディン等の註釈に見られるように<sup>40</sup>、成立させるもの (sādhana) たる認識手段と成立させられるもの (sādhya) たる認識手段の結果を、それぞれ、確立させるもの (vyavasthāpaka) と確立させられるもの (vyavasthāpya) とに当てはめ、一刹那の知覚の中だけで完結させるのが、素直な理解であろう。このことは、ダルモッタラ自身が議論の導入部分において、「確立させられるものと確立させるものの関係」(vyavasthāpyavyavasthāpakabhāva) という語で、同一形象性と対象認識との関係を示していることから分かる。

しかし、ダルモッタラは、vyavasthāpaka を新たに「確立させる原因」(vyavasthāpanahetu) と解釈し、確立させる原因たる同一形象性の他に、知覚の後の決定知という第三

<sup>40</sup> Cf. PVV 213,15f. ad PV III 315: nāsty atra kāryakāraṇatātmakāḥ (PVV<sub>M</sub>; kāraṇatmakāḥ PVV) kriyākaraṇabhāvaḥ, kiṃ tu vyavasthāpyavyavasthāpakabhāvaḥ (この場合、手段と作用の関係は、生じさせるものと生じさせられるものという関係を本性とするものではない。そうではなくて、確立させるものと確立させられるものの関係である)。



の要素を、「確立させる主体」として導入した．ここには一体如何なる意図があったのであろうか．現段階では想定 of 粹を出ないものではあるが，おそらくダルモータラは，知覚は無分別であるという原則を厳密に守ろうとしたのではないだろうか．そのために，確立 (vyavasthā) や判別 (pariccheda)，決定 (niścaya) といった，註釈者によっては無分別たる知覚の作用に含めてしまうものを，分別知の側へと明示的に移項させているのであろう<sup>41</sup>．

#### 4.5.2. 知覚そのものは無分別である

上記の引用に続けて，ダルモータラは，知覚そのものは無分別であることをはっきりと述べる．

NBT 84,1–5: na tu nirvikalpakatvāt pratyakṣam eva nīlabodharūpatvenātmānam avasthāpayitum śaknoti. niścayapratyayenāvyavasthāpitam sad api nīlabodharūpaṃ vijñānam asatkalpam eva. tasmān niścayena nīlabodharūpaṃ vyavasthāpitam vijñānam nīlabodhātmanā sad bhavati. tasmād adhyavasāyaṃ kurvad eva pratyakṣam pramāṇam bhavati.

一方，知覚そのものは，分別をもたないものであるから，青の知を本質とするものとして [知覚] 自身を確立せしめることは不可能である．決定知によって確立されないならば，青の知を本質とする認識は，たとえ存在していても存在しないのと同じである．したがって，認識は，決定 [知] によって青の知を本質とすると確立される場合に，青の知を本質とするものとして存在するのである．したがって，判断 (adhyavasāya) を為す限りで，知覚はプラマーナである．<sup>42</sup>

<sup>41</sup> 例えば，シャーキヤブッディは *Pramāṇavārttikaṭīkā* の中で，pariccheda を無分別たる知覚の作用に含めるべきか否かについて議論しており，知に形象が生じることをそのように表現していると解釈し，知覚の作用として問題ないことを述べる．Cf. 稲見 [1993: 96]．また，ヴィニータデーヴァは，*Nyāyabinduṭīkā* の中で，NB I 19 の対象認識 (arthaprātīti) を対象の「決定」(gtan la phebs pa, \*niścaya) と言い換える．これは，ダルモータラの解釈とは大きく異なる．また，ダルマキールティも，決定の語を知覚そのものに対して用いることがある．PV III 339cd: tadā ya ātmānubhavaḥ sa evārthaviniścayaḥ // (その場合，正に自己感受 (= 自己認識) こそが対象決定である)，cf. 戸崎 [1985: 24]，片岡 [2011b: 62]．

<sup>42</sup> Cf. 沖 [1993: 129] 他．



知覚そのものは分別をもたないことから、自身を、青の知を本質とするものとして決定することはできず、決定されない限りは存在しないのと同じである。したがって、後続する分別知たる判断を生起させて初めて、知覚はプラマーナとなる。

このように、確かに知覚そのものは無分別であり、概念的思考はすべて、後続する分別知の側に割り当てられている。そして、プラマーナの結果たる対象認識そのものは、先行する知覚の側に所属している。ゆえに、対象認識は無分別である、と言うことができよう。

しかしその一方で、青の認識といった対象認識は、あくまでも後続する分別知の判断を介して顕在化するものである。すなわち、分別知の働きによって、初めてプラマーナの結果として完結する。したがって、限りなく有分別に接近しており、そのために、*pariccheda* や *niścaya* といった有分別的な用語が、プラマーナやその結果を説明する際に用いられていると考えられる。

### 4.6. まとめ

本章では、まず初めに、ダルモットタラによるプラマーナおよびプラマーナの結果の定義を確認した。彼によれば、正しい知 (*samyagiñāna*) たるプラマーナとは、人を「対象に向かって行動させる (*pravartaka*) 知」すなわち「対象に到達せしめる (*prāpaka*) 知」であり、さらに、「行動の対象を示す (*pradarśaka*) 知」および「対象を判別する (*paricchedaka*) 知」と言い換えられる。一方、プラマーナの結果は、そのような到達せしめる知のもつ、到達せしめる作用 (*vyāpāra*) であり、「行動の対象を示すこと」(*pravṛttiviśaya pradarśana*) および「対象を認識すること」(*arthapratīti*) と言い換えられる。

次に、その行動や判別の対象について、瞬間的な存在である「把握対象」(*grāhya*) と時間的幅をもった「判断対象」(*adhyavaseya*) という二種の知覚対象の観点から考察を加えた。この二種の対象に関連して、把握作用を為す知覚と、その後に生じる、判断作用を為す決定知という認識プロセスが確認された。さらに、このことから、これら行動や判別の対象が、いずれも、時間的幅をもった判断対象であり、目的達成 (*arthakriyā*) との密接な関係を有することが明らかになった。

最後に、この二種の対象に関連する、知覚と決定知という認識プロセスは、行動の前提となる知覚と決定知の場合にも類似することが分かった。ここでは、青などの対象と

#### 第4章 ダルモットラにおける対象認識

同一の形象をもった無分別なる感受すなわち知覚が生じ、その後に、その知覚について決定（avasthā）を行う決定知たる分別知が生じる。先行する知覚が、青などの特定の対象の認識であることは、後の分別知による判断を待って、初めて決定される。したがって、青の認識という対象認識そのものは無分別なものとして存在するが、それが青の認識であることは後の分別を通してのみ理解されるのであるから、有分別なものに限りなく接近している。

## 第5章 プラジュニャーカラグプタにおける対象認識

### 5.1. 問題の所在

仏教論理学派については近年著しい研究の発展が見られるが、そのような流れの中で、ディグナーガやダルマキールティに留まらず、註釈者たちが拠るそれぞれの思想的立場が徐々に明らかにされつつある。そして、諸註釈者の中でも特に、プラジュニャーカラグプタがその著書 *Pramāṇavārttikālamkāra* (PVA) の中で、ダルモータラと思しき対論者の説に対してしばしば批判的な態度をとることは、先行研究によって指摘される通りである<sup>1</sup>。本章では、そのような対論が見られる一例として、ダルマキールティ著 *Pramāṇavārttika* (PV) 第3章（知覚章、III）311 偈に対する PVA を取り上げることとする。

その対論において論題とされるのは、端的に言うならば、知覚というプラマーナ<sup>2</sup>が人の行動を引き起こすという機能を果たす上で、決定知 (*nīścayapratyaya*) という、知覚とは別の分別知 (*vikalpapratyaya*) が必要とされるか否かという問題である。この決定知は、いわゆる「知覚判断」(*perceptual judgment*) として先行研究において度々取り上げられてきたものであり、ダルモータラがその存在を重視したことは、前章でも取り上げた通りである。しかし、本章で後に明らかにされるように、実はプラジュニャーカラグプタは、そのような決定知は知覚のみならず推論にとっても不必要であり、いずれのプラマーナもその形象のみから人の行動を引き起こすということを明確に述べている。よって、その両者の間の対立関係は容易に理解されよう。

本章の眼目となる対論はその最後部（本章 5.2.4.）ではあるが、管見の限りでは、PVA ad PV III 311 を取り扱った研究は未だ発表されていない。したがって、未解決の点が多く残るものの、対論に至る過程をも含めた全体を取り上げることにした。まず第2節では、サンスクリット校訂テキストと試訳を挙げた上で、小節ごとに解説を付す<sup>3</sup>。その後

<sup>1</sup> Cf. 小野 [1995] 他。詳細は、本研究 1.2.4 を見よ。

<sup>2</sup> プラマーナの語が「正しい知」と「正しい認識の手段」という二つの意味をもつことと、その両者の関係については、本研究第2章を参照のこと。それに倣い、前者を「プラマーナ」と訳し、後者を「認識手段」と訳す。

<sup>3</sup> PVA ad PV III 311 に対するジャヤンタおよびヤマーリによる復註は、J D118b5–

に、第3節では、決定知に関するダルモータラの自説について *Nyāyabinduṭīkā* (NBT) を中心に概観し、PVA に見える対論者説との比較を試みる。

## 5.2. *Pramāṇavārttikālaṃkāra* ad PV III 311 訳註研究

### 5.2.1. ダルマキールティの偈文とそれに対するプラジュニャーカラグプタの導入的な註釈

ダルマキールティは、PV III 301–319 において、知が認識対象の形象をもつこと (*meyarūpatā*) が認識手段 (*pramāṇa*) であるという自説の擁護と、他者の認識手段説の批判を展開している。その中 311 偈は、「手段 (*karaṇa*, = 認識手段) とは、作用 (*kriyā*, = 認識結果) に対する最も有効な成立要因 (*sādhakatama*) である」という自他ともに認める前提をもとに、最も有効な成立要因に関する解釈を提示する箇所である。

以下にまず挙げるのは、ダルマキールティの PV III 311 と、それに対するプラジュニャーカラグプタの導入的な註釈である。

PVA(S344,27–345,1, M174a7–174b1):

**sarveṣāṃ upayoge 'pi kārakāṇāṃ kriyāṃ prati /**

**yad antyaṃ bhedakam tasyās tat sādhakatamaṃ matam //PV III 311<sup>4</sup>//**

作用 (*kriyā*) <sup>5</sup>に対して全ての要素 (*kāraka*) が効用をもつ (*upayoga*) としても、およそ [その諸要素の中で] 最終的なものであり、[作用を] 区別するも

119a2/P134b6–135a3, Y D250b6–251a4/P337a3–337b2 にあたる。本研究では、解読に直接かわる箇所のみを適宜註記した。チベット語訳 (T) の異読に関しても同様である。

<sup>4</sup> *Sāṅkṛtyāyana* の PVA に含まれる PV III の偈文番号は、205 以降、他の刊本に含まれるものよりも一つずつ大きい。また、PVA の番号で 310 と 311 が入れ替わっている。これらは単なる振り間違えであり、内容の理解に関わるものではない。よって、戸崎 [1979] に従って改める。

<sup>5</sup> *kriyā* は、動詞語根の表す意味であって、名詞が表す一群の *kāraka* と対になる概念であるが、通例として「行為」と訳されている。確かに、文法的な分析に基づいて諸要素を別立てする場合には、主体が対象に対して行う「行為」という意味になる。しかし、ここで問題となる *prāṇmā* という *kriyā* に関して、仏教認識論では、何らかの主体が対象に対して認識行為を行うというような具体的な意味での「行為」はむしろ否定されており (PV III 307ab–309), 諸要素から生じた結果としての認識そのものを *kriyā* と見なしている。よって、「作用」と訳す。

の、それが、それ（作用）にとって最も有効な成立要因（sādhakatama）である  
と考えられる<sup>6</sup>。（PV III 311）

sādhakatamaṃ hi karaṇam<sup>7</sup>. tasya ca sarvakāraṇakopayoge 'pi kriyāyām katham prakarṣaḥ.  
na hi kriyānirvartanam eva. bhāve 'pi<sup>8</sup> tatrānantaryam yasya kriyām prati, tad eva  
sādhakatamam. tathā hi satsv apīndriyādiṣu dūradeśatādinā<sup>9</sup> yadi pratiniyatākārātā<sup>10</sup> na  
pariprāpyeta<sup>11</sup>, na tadā tadākārārthaparicchedavyavasthā<sup>12</sup>. tadanantarabhāvinī<sup>13</sup> sā kriyeti  
tad eva karaṇam.

実に、手段 (karaṇa) とは、最も有効な成立要因 (sādhakatama) である (Pāṇini 1.4.42)。

しかし、全ての要素が作用に対して効用をもつとしても、どのようにしてそれ（最も有効な成立要因たる手段）に卓越性 (prakarṣa) があるのか。すなわち、単に作用

<sup>6</sup> Cf. PVin I 32,12–14, 戸崎 [1979: 404f.], 戸崎 [1991: 8]. PV III 311 に対するマノーラタナンディンの註釈は以下の通り。PVV 212,1–3: sarveṣāṃ kārakāṇāṃ sākṣāt pāramparyeṇa kriyām praty upayoge 'pi teṣu madhye yat kārakam antyaṃ kārakāntareṇāvyavahitavyāpāraṃ (-vyāpāraṃ PVV<sub>M</sub>; -vyāpyāraṃ PVV) sat kriyābhedakam, tat tasyāḥ sādhakatamaṃ matam nānyat (全ての要素が、直接的 [あるいは] 間接的に (pāramparyeṇa) 作用に対して効用をもつとしても、これら (全ての要素) の中でおよそ最終的なもの、すなわち他の要素 (kāraṇa) によってその働き (vyāpāra) が介在されないものであり、作用を [他の作用から] 区別するものである要素、それが、それ（作用）にとって最も有効な成立要因であると考えられる) のであって、それ以外のものは [最も有効な成立要因] ではない)。その他、デーヴェーンンドラブッディの註釈については PVP D217b1f./P255a3f., ラヴィグプタの註については PVT(R) D117b6f./P142a4–7 を参照せよ。

<sup>7</sup> sādhakatamaṃ hi karaṇam M; sādhatamakamaṃ hi karaṇam S [n.e. T(D14b4, P17b6)]. Cf. Pāṇini 1.4.42: sādhakatamam karaṇam. もしこの引用を後の挿入と考え削除しようとする、次の文章の ca および tasya の指示する内容に困難が生じるので、そのままにする。

<sup>8</sup> M に欄外註あり。解読できないが、おそらく S はそれを指して、kriyānirvarttanabhāvepi と註記する。

<sup>9</sup> dūradeśatā- M [yul thag ring ba T(D14b5, P17b7)]; adūradeśatā- S.

<sup>10</sup> so sor nges pa'i nram pa T(D14b5, P17b7) for pratiniyatākārātā.

<sup>11</sup> pariprāpyeta M [thob na T(D14b5, P17b7)]; pratiprāpyeta S. M に欄外註あり。解読できないが、おそらく S はそれを指して、nopadīyeta と註記する。

<sup>12</sup> na tadā tadākārārthaparicchedavyavasthā conj. [de'i tshe de'i nram pa can gyi don yongs su gcod pa nram par mi gnas so T(D14b5f., P17b7f.)]; na tadākārārthaparicchedavyavasthā MS. T および註 15 に挙げた Y に含まれる引用に従って tadā を補う。

<sup>13</sup> -bhāvinī M ['gyur ba (P; gyur pa D) T(D14b6, P17b8)]; -bhāsinī S.



を生起せしめること (nirvartana) は、[卓越性] ではない<sup>14</sup>。たとえそれ (作用を生起せしめること) があるとしても、あるものが、作用に対して間隙がない (ānantarya) 場合に、それこそが最も有効な成立要因である。

すなわち、たとえ感官など [の諸要素] があるとしても、もし [対象が] 遠くの場合にあること (dūradeśatā) などによって [知が] それぞれに限定された形象をもつこと (pratiniyatākāratā) が得られないならば、その場合、その形象をもつ [外的な] 対象に対する判別の確立 (tadākārārthaparicchedavyavasthā) がない<sup>15</sup>。その [対象に対する判別の確立という]<sup>16</sup> 作用がそれ (それぞれに限定された形象をもつこと)<sup>17</sup> と間隙をもたずに生じる (tadanantarabhāvin) のだから、それ (それぞれに限定された形象をもつこと) こそが手段である。

ダルマキールティは、PV III 311 において、作用 (kriyā) に対して、その作用を成り立たしめる全ての要素 (kāraṇa) が効用をもつとしても、それだけでは最も有効な成立要因 (sādhakatama), すなわち手段 (karaṇa) としては不十分であることを述べる。そして、「作用に対して最終的なもの (antya)」であり、かつ、「作用を区別するもの (bhedaka)」であるものこそが、作用にとって最も有効な成立要因であるとする<sup>18</sup>。

<sup>14</sup> See Y D250b6/P337a3: **bya ba sgrub par byed pa tsam ni khyad par du 'phags pa ma** (P; *n.e.* D) yin no // de ni rgyu thams cad la yod pa'i phyir ro // (単に作用を生起せしめることは、卓越性ではない。それ (作用を生起せしめること) は、あらゆる要因にあるから)。

<sup>15</sup> See Y D250b7/P337a4f.: **ma thob na zhes bya ba ni mi ldan na de'i tshe de'i rnam pa can gyi** zhes bya ba yul thag ring ba la sogs par gnas pa'i **don rnam par mi gnas so** // (得られないとは、結びつかない [という意味] であって、その場合、その形象をもつ云々、[すなわち、] 遠くの場合などにある対象は確立されない)。

<sup>16</sup> See Y D250b7/P337a5: **de** (P; *n.e.* D) zhes bya ba don yongs su gcod par bya ba yin no // (そのとは、対象の判別である)。

<sup>17</sup> See Y D250b7/P337a5: **de dang bar ma chod pa** zhes bya ba ni rnam pa dang bar ma chod par **'gyur ba'o** // (それと間隙をもたずにとは、形象と間隙をもたずに生じる [という意味である] )。

<sup>18</sup> 最も有効な成立要因 (sādhakatama) をどのように解釈するかについては、他学派にも多くの議論がみられる。例えば、ウッディヨータカラは *Nyāyavārttika* (Calcutta ed.) 18,5–20,2 において、それ (x) があれば必ず知が生じるというような、それ (x) のもつ卓越性を sādhakatamatva と理解し、続けて 6 つの解釈を挙げる。第 5 解釈の「認識が [それと] 間隙をもたずにあること (pratipatter ānantaryam)」については、ダルマキールティによる理解との類似性が見られる。Cf. 岡崎 [2005: 452f.], 戸崎 [1979: 405, fn. 34]。

なお、PV III 311 では、最も有効な成立要因であるための条件として、最終的なもの

それに対してプラジュニャーカラグプタは、まず、「最も有効な (-tama)」ということ卓越性 (prakarṣa) と言い換えて理解し、単に作用を生起せしめるだけでは、卓越性に値しないことを述べる<sup>19</sup>。そしてさらに、具体例を挙げながら解説を加える。例えば、感官などの諸要素が存在するとしても、もしも、対象が遠くの場所にあることなどの障害によって、「知がそれぞれに限定された形象をもつこと (pratiniyatākārātā)」が得られないならば、「その形象をもつ外的な対象に対する判別の確立 (tadākārārthapariśeṣa-vyavasthā)」はもたらされない。したがって、「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」こそが、それと間隙を持たずに生じる「その形象をもつ対象に対する判別の確立」という作用に対して、最終的すなわち直接的な要素であるから、最も有効な成立要因であり認識手段である。

なお、ここで言われる、「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」と「その形象をもつ対象に対する判別の確立」とは、それぞれ認識手段と認識結果であり、ダルマキールティが言うところの、「知が認識対象の形象をもつこと (meyarūpatā)」と「認識対象の認識 (prameyādhigati)」に相当するものである (PV III 306)。まず、「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」とは、青いもの (青) や黄色いもの (黄) といったそれぞれの外的な対象に応じて各々限定された形象を、知が有することである<sup>20</sup>。これは後に、「知における形象の特殊性 (tadākāraviśeṣa)」(本章 5.2.2), 「知における形象の限定 (ākāraniyama)」(5.2.3) 等と言い換えられる。一方、「その形象をもつ対象に対する判別の確立」については、その詳細が定かではないものの、「限定された対象の確立 (niyatārthavyavasthā)」(5.2.2) や、「対象の確立 (arthavyavasthiti)」, 「それぞれに限定された対象の確立 (pratiniyatārthavyavasthā)」(5.2.3) 等と類似する概念である。その意味

---

(antya) であることと、区別するもの (bhedaka) であることの二つが挙げられているが、これに対する PVA では、第一の条件が主に取り上げられている。それはおそらく、PV III 303 や 312 に対する註釈において、区別するもの (bhedena niyāmakah, bhedaka) に関する詳細な議論がなされているからであろう。

<sup>19</sup> Cf. PVin I 32,12: avyavadhānābhāvāt kārakāṭīśayāsiddheḥ (介在されないことがないので、卓越した要素であることが成立しないから)。

<sup>20</sup> このようにプラジュニャーカラグプタにおいては、知のもつ形象そのものに、対象に応じた限定や特殊性といった要素を含ませる傾向が顕著である。知覚は無分別であるという仏教論理学派の大前提からすれば微妙な問題ではあるが、「青の認識」「黄の認識」といった区別が知覚にも認められる以上、このような限定が形象に還元されるのは当然の帰結であろう。この問題については、註釈者間での理解の相違が予想される。

するところは、知における青や黄といった形象の特殊性に応じて、それぞれ別々のものとして青や黄といった外的対象を確立するということであろう<sup>21</sup>。

### 5.2.2. 感官の健全性と知における対象の特殊性との前後関係

以上のようにして、「知がそれぞれに限定された対象の形象をもつこと」こそが、作用（＝認識結果）にとって最終的なものであるから、認識手段であるという自説が述べられた。続いて、「対象が近くにあること（対象の近在性）」や「感官が損なわれていないこと（感官の健全性）」を認識手段と見なす対論者との議論が展開される。

PVA(S345,1-3, M174b1f.<sup>22</sup>):

*nanv adūradeśataiva sādhanam.*

【対論者】[対象が] 近くにあること (adūradeśatā) こそが、成立要因である。

*na. indriyopaghāte 'dūradeśatāyām api na niyatārthavyavasthā.*

【立論者】そうではない。感官が損なわれている (indriyopaghāta) ならば、たとえ [対象が] 近くにあったとしても、限定された対象の確立 (niyatārthavyavasthā) はない。

*anupaghātas tarhi sādhanam.*

【対論者】その場合には、[感官が] 損なわれていないことが成立要因である。

*nedam apy asti. yataḥ,*

【立論者】これもまた、[正しく] ない。なぜならば、

*akṣasyānupaghāto hi tadākāraviśeṣataḥ /*

*saṃvedanasya viśayaḥ tataḥ sa vyavadhīyate //617//*

実に、感官が損なわれていないことは、それ（知）における形象の特殊性に基づいて、認識 (saṃvedana) の対象 (viśaya) となる [すなわち知られる] <sup>23</sup>。

<sup>21</sup> See PVA 346,23f.: *yadi sa tathābhūta ākāro na syāt, na kaścit pratiniyatam arthaṃ vyavasthāpayet* (もし、そのようなその形象がないならば、如何なるものも、それぞれに限定された対象を確立することがないことになる)。

<sup>22</sup> PVA(M) 174b は写真の状態が悪く、右 1/3 が不鮮明である。以下、写本が不鮮明な箇所については、テキストをイタリック体にした。

<sup>23</sup> See Y D250b7-251a1/P337a6: *shes pa de'i rnam pa'i khyad par gang yin pa de las myong ba'i yul yin no zhes shes par bya ba yin no //* (それすなわち知における形象の特殊性、およそそれに基づいて、認識の対象となるすなわち知られる)。

それゆえ、それ（感官が損なわれていないこと）は、[知における形象の特殊性によって] 介在されている（vyavadhīyate）<sup>24</sup>。

ここではまず、第一の対論者説として、「対象が近くにあること（対象の近在性，adūradeśatā）」を成立要因すなわち認識手段と見なす説が取り上げられる。しかし、たとえ対象が近くにあったとしても、感官が損なわれていればその対象を認識することはできない。したがって、対象の近在性が、限定された対象の確立にとって最終的な要素であることは否定される。

そして次に、第二の対論者説によって認識手段とされる「感官が損なわれていないこと（感官の健全性，akṣasyānupaghātaḥ）」と、プラジュニャーカラグプタの自説である「限定された対象の形象をもつこと」すなわち「知における形象の特殊性（ākāra viśeṣa）」のうち、どちらが作用に対してより直接的な要素であるのか、という問題が浮上する。ここでプラジュニャーカラグプタは、前者が後者に基づいて「認識の対象となる」すなわち「知られる」ということを根拠に、感官の健全性と作用との間には知における形象の特殊性が介在することを述べる。言い換えるならば、形象の特殊性があれば必ず作用が成り立つという意味で、形象の特殊性の方がより直接的な要素であると主張する。この根拠については疑問が残るものの、以下のような意味であろうか。すなわち、形象の特殊性がなければ、感官の健全性はそもそも知られえないので、感官の健全性には必ず形象の特殊性が付随することになる。したがって、感官の健全性も一要素としては認められるものの、知における形象の特殊性の方が、作用にとってより有力な直接的要素であるということになる。

### 5.2.3. 形象の限定と対象の確立との同一性

ここではさらに、感官の健全性と知における形象の特殊性との序列に関する対論が続けられ、その結果、「形象の限定と対象の確立は同一のものである」というプラジュニャーカラグプタの重要な自説が提示される。

PVA(S345,4–9, M174b2f.):

nanu sa evākāro vyavadhīyata iti prāptam. tena hy ākāreṇa niścito 'nupaghātaḥ pratiniyatā-

<sup>24</sup> See Y D251a1/P337a6: rgyu de'i phyir na ma nyams pa de ni rnam pas chod pa yin no // (この理由によって、それすなわち[感官の] 損なわれていないことは、形象によって介在されている)。

rthavyavasthāhetuḥ.

【対論者】その形象こそが介在されている，ということになる．なぜならば，その形象によって決定された (niścita) [感官の] 損なわれていないこと (anupaghāta) が，それぞれに限定された対象の確立の原因 (pratiniyatārthavyavasthāhetu) であるのだから．

nedam sādhiyaḥ. yataḥ,

【立論者】こちら (対論者の説) の方が優れているということはない．なぜならば，

ākāraṇiyamaḥ siddho yadi sārthavyavasthitiḥ<sup>25</sup> /

ākāraṇam paraḥ<sup>26</sup> siddhe prāptaḥ<sup>27</sup> kim iti poṣyate<sup>28</sup> //618//

もし形象の限定 (ākāraṇiyama) が成立しているならば，それ (形象の限定) が [すなわち] 対象の確立 (arthavyavasthiti) である．[形象の限定すなわち対象の確立と] 別個のもの [たる感官の損なわれていないこと] は，[対象の確立の] 要因ではない．既に成立に到達したもの (対象の確立) が<sup>29</sup>，[感官の損なわれていないことによって] 一体どうして助長されよう (poṣyate) か<sup>30</sup>．

<sup>25</sup> de yis don gnas te T(D15a1, P18a3) for sārthavyavasthitiḥ.

<sup>26</sup> paraḥ *em.*, (pa)raḥ M [gzhan pa dag T(D15a1, P18a3)]; śaraḥ S.

<sup>27</sup> prāptaḥ *n.e.* T(D15a1, P18a3).

<sup>28</sup> rgyas par byed pa T for poṣyate. T(D15a1, P18a3): grub la rgyu min gzhan pa dag / ci zhig rgyas par byed pa yin //.

<sup>29</sup> siddhe prāptaḥ kim iti poṣyate の解説には疑問が残る．特に siddhe と prāptaḥ の関係性が不明瞭である．T と Y のいずれもが prāptaḥ を訳出しておらず，siddhe と一体化して意識したものと想定される．暫定的に，依格を prāptaḥ の対象として理解したが，「[対象の確立が] 既に成立しているならば，既に獲得されたものが」というように分けて理解する可能性も残る．

<sup>30</sup> See Y D251a1f./P337a6–8.: gal te rnam pa nges par (P; pas D) grub na ni de'i tshe don [gyi rnam pa nges pa (?)] de nyid don rnam par 'jog pa yin te / (D; no // P) rnam pa nges pa grub pa las don gnas pa gzhan med pa'i phyir ro // de las gzhan nyams pa med pa ni don rnam par gnas pa la (*em.*; las DP) rgyu ma yin no // gal te de lta na yang nyams pa med pa tshad mar 'gyur ro snyam na / don gnas pa grub zin pa la nyams pa med pas ci zhig rgyas par byed / (もし，形象の限定が成立しているならば，その場合，正にそれ [すなわち知における] 対象 [の形象の限定 (? そのままでは解説困難なため補って理解する)] が対象の確立である．なぜならば，対象の確立は，既に成立した形象の限定と別個のものではないのだから．それ (形象の限定すなわち対象の確立) と別個のものたる [感官の] 損なわれていないことは，対象の確立の要因ではない．【反論】もしそのようであったとしても，[感官の]



*nāsiddha ākāranīyamo 'kṣānupaghātam* <sup>31</sup> *sādhayati. sa cet prasiddhaḥ, saivārthavyavasthitiḥ. vyārtha evākṣānupaghātaḥ. na khalu siddhe 'rthe prāptam* <sup>32</sup> *sādhayati kaścit, siddhasya sādhanāsaṃbhavāt. tataḥ siddhopasthānakārī* <sup>33</sup> *kim apekṣyate.*

未だ成立していない形象の限定 (ākāranīyama) が、感官の損なわれていないことを成立させることはない。それ (形象の限定) が既に成立しているならば<sup>34</sup>、それ (形象の限定)こそが、対象の確立 (arthavyavasthiti) である。感官の損なわれていないことは、全く無意味である。そもそも、いかなるものも、既に成立した目的に到達したものを<sup>35</sup>成立させることはない。なぜならば、既に成立したものを [さらに] 成立させることはありえないから。したがって、既に成立したものに奉仕するもの (siddhopasthānakārīn) が、どうして必要とされようか。

ここで再度対論者は、感官の健全性こそが、作用にとって最も直接的な要素であることを述べる。すなわち、先程プラジュニャーカラグプタによって述べられた「知における形象の特殊性に基づいて感官の健全性が知られる」という両者の関係を、「形象によって感官の健全性が決定される (niścita)」と言い換えながら容認する。しかしその一方で、感官の健全性が「それぞれに限定された対象の確立」(pratiniyatārthavyavasthā) たる作用に対する原因 (hetu) であるとし、因果関係を強調することによって、感官の健全性の方がより直接的な要素であると考えている。

損なわれていないことが認識手段となろう、というならば、【答】既に成立した対象の確立に対して、[感官の] 損なわれていないことによって一体何を助長せしめようか。最後の回答部分は、PVA 本文のサンスクリットに合わせて *prāptaḥ* を補い、*poṣyate* という受動態で理解するならば、以下のようなだろう。「【答】既に成立に到達した対象の確立が、[感官の] 損なわれていないことによって一体どうして助長されようか。」

<sup>31</sup> '*kṣānupaghātam em. [dbang po ma nyams pa T(D15a2, P18a4)]; 'kṣānuyātam S. M は解読不可。*

<sup>32</sup> *prāptam M; prāptaḥ S, [n.e. T]. T D15a2/P18a4f.: don grub pa la (P; las D) ni 'ga' (P; 'gal D) yang sgrub par byed pa ma yin te.*

<sup>33</sup> *siddhopasthānakārī M [grub pa (D; par P) nye bar 'jog par byed pa T (D15a3, P18a5)]; siddhopasthānahārī S.*

<sup>34</sup> See Y D251a3/P337b1: *de grub na zhes bya ba ni rnam par nges pa grub na'o* (それが既に成立しているならばとは、形象の限定が成立しているならば [という意味] である)。

<sup>35</sup> これは、註 29 に挙げた偈文の箇所に対する説明であるが、同じく、*siddhe arthe prāptam* の理解には疑問が残る。暫定的に、*siddhe arthe* という依格を *prāptam* の対象として理解した。

それに対してプラジュニャーカラグプタは、先と同様、感官の健全性ではなく、形象の限定こそが直接的な要素であると主張するわけであるが、新たにその重要な根拠として、形象の限定と対象の確立とは同一のものである、という説を提示する。したがって、形象の限定が成り立った時点で対象の確立は必然的に成り立つことになり、それ以外の要因を必要とすることはありえない。ゆえに、両者の間に感官の健全性が入り込む余地はない。

#### 5.2.4. ダルモッタラと目される論者との対論

前節でプラジュニャーカラグプタによって主張された、形象の限定と対象の確立との同一性について、ダルモッタラと目される対論者から、異論が唱えられる。

PVA(S345,9f., M174b3):

*tadākāratāyām api<sup>36</sup> niścayo paraḥ pratiniyataavyavasthāyām apekṣyata iti cet.*

【[ダルモッタラと目される] 対論者<sup>37</sup>】[知が] それ（＝対象）の形象をもつことがあるとしても、決定（niścaya）が別に、それぞれに限定された[対象の] 確立（pratiniyataavyavasthā）のためには必要とされる。

ここで対論者は、それぞれに限定された対象の確立（pratiniyata[artha]vyavasthā）のためには、知が対象の形象をもつこととは別に、「決定」（niścaya）が必要である述べる。すなわち、知が対象の形象をもつことと対象の確立との間には、決定が介在すると考えている。実際に、これに類似するダルモッタラの自説が NBT<sup>1</sup> に見えるが、その詳細については第3節で取り上げる。

これに対してプラジュニャーカラグプタは、以下のように反論する。

PVA(S345,10–12, M174b3f.):

*na, pratyakṣaprāmāṇyaprastāvāt. abhyāsasambhave hi pratyakṣam pramāṇam, tadākāramātrād eva ca tadā pravartanam<sup>38</sup> niścayam antareṇāpi. yadā tu niścayāpekṣā, tadānumānam pramāṇam. tasyāpy ākāramātrād eva pravṛtter nāparāpekṣā. tasmād ākārān*

<sup>36</sup> de'i rnam pa yang T(D15a3, P18a7) for tadākāratāyām api.

<sup>37</sup> See Y D251a3/P337b1f.: da ni slob dpon chos mchog gi lugs sun phyung ba'i don du nye bar 'god pa ni / **de'i rnam pa yang** zhes bya ba'o // (ここで、師ダルモッタラの説を論難するために述べるのが、その形象をもつことがあるとしても云々である)。

<sup>38</sup> pravarttanam M ['jug pa yin no T(D15a4, P18a7)]; pravarttana S.

nāparaṃ karaṇam.

【立論者】そうではない。なぜならば、知覚がプラマーナであることが目下の論題（prastāva）であるから<sup>39</sup>。というのも、反復経験（abhyāsa）がある場合には、知覚がプラマーナとなる。そして、その場合（反復経験がある場合）<sup>40</sup>には、決定がなくとも、ただそれ（知覚）のもつ形象のみによって〔知覚は人に〕行動を引き起こす（pravartana）<sup>41</sup>。一方、〔人が行動を起こすために〕決定に依拠する場合には、推論がプラマーナである。〔しかし〕、正に〔その推論のもつ〕形象のみに基づいて〔人は〕行動を起こす（pravṛtti）のだから、それ（推論）も<sup>42</sup>また、〔決定という、推論のもつ形象とは〕別のものを必要とすることはない。したがって、形象と別の手段（karaṇa）はない。

ここではまず、知覚がプラマーナであるということが目下の論題となっている以上、その対象に関しては反復経験があることが含意される、ということが示される<sup>43</sup>。そして、

<sup>39</sup> See J D118b7–119a1/P135a1: gzhan gyi sun dbyung ba bstan pa ni **ma yin te / mngon sum gyi tshad ma'i** zhes bya ba ste / (他者への論難を説くのが、そうではない、知覚がプラマーナ〔であることが〕云々である)。

<sup>40</sup> See Y D251a3/P337b2: **de'i tshe** zhes bya ba goms pa'i dus na'o // (その場合にはというのは、反復経験の場合には〔という意味〕である)。

<sup>41</sup> See Y D251a3f./P337b2: des na yod pa ma yin pa'i nges pa (P; phyir D) tshad mar ji ltar 'gyur zhes bya ba'i don to // (したがって、存在しない決定がどうして認識手段となろうか、という意味である)。

<sup>42</sup> See Y D251a4/P337b2: **de yang** ni rjes su dpag pa yang ngo // (それもとは、推論も〔という意味〕である)。

<sup>43</sup> 知覚と推論の区分と反復経験の有無との関わりについて、類似する説が以下の PVA の記述に見える。PVA 218,6–8 ad PV III 56: yatra bhāvīgatis tatrānumāṇam mānam iṣyate / vartamāne 'timātreṇa vṛttāv adhyakṣamānatā //240// yatrātyantābhyāsād avikalpayato 'pi pravartanam, tatra pratyakṣam pramāṇam. anyathā vikalpasya pramāṇāntaratā prāptā. yadi yatra vikalpas tatraiva pratyakṣam pravartakam pramāṇam ceti (ある〔対象〕に対して未来時の理解〔すなわち、獲得時の対象の理解〕がある場合、その〔対象〕に対しては推理が認識手段であると認められる。一方、現在時のものに対して、極度の〔反復経験〕(atimātra) によって〔未来時の理解を介することなく〕行動が起こる場合には、知覚がプラマーナである (240)。ある〔対象〕に対して、完全な反復経験によって、分別を起こさずとも〔人は〕行動を起こすが、その〔対象〕に対しては、知覚がプラマーナである。さもないければ、分別が〔知覚とは〕別のプラマーナであることになってしまう。もし、ある〔対象（青など）〕に対して、〔「これは青である」という〕分別がある場合に〔はじめて〕、その同じ〔青などの対象〕に対して知覚が人の行動を引き起こすものであり、プラマー

反復経験がある場合には、知覚は、決定（＝分別）に依拠せずに、その知覚知のもつ形象のみによって人の行動を引き起こす<sup>44</sup>。よって、決定は不要である。一方、人が行動を起こすために決定に依拠する場合には推論がプラマーナとなる。しかし、その推論自体は、それとは別の決定には依拠せずに、その推論知がもつ形象のみによって人の行動を引き起こす。つまり、その決定こそが推論であるという立場である。したがって、知覚と推論のいずれのプラマーナにおいても、決定という別のものを必要とすることはなく、それらの知が有する形象こそが認識手段である。

具体例として、宝石鑑定人がダイヤの真贋を確立して（＝プラマーナ）振り分ける（＝行動）というプロセスを考えてみよう。まず、反復経験が完全な鑑定人は、ダイヤを見るのと同時に真贋を確立することができ、直ちに適切に振り分けを行う。この場合には、初めに起こる真（または贋）なるダイヤの知覚がプラマーナである。一方、反復経験が不完全な鑑定人は、そのように直ちに真贋を確立することはできず、諸々のプロセスを経て「これは真（または贋）である」という決定をした後に、振り分けという行動を起こす。この場合には、推論がプラマーナとなる。そして、「これは真（または贋）である」という決定知こそが推論である。

### 5.3. ダルモータラにおける決定知 (niścayapratyaya)

本節では、決定知に関するダルモータラの自説について NBT の記述を中心に概観し、PVA に見える対論者説との比較を試みる。なお、ダルモータラにおける決定および判断 (adhyavasāya) 等の知覚における位置付けについては前章で既に述べたので、要点のみを記す。

ダルモータラは、把握対象 (grāhya) と判断対象 (adhyavaseya) という二種のプラ

---

マであるならば、ということである)。これは、プラマーナの対象に関する議論の一節であるが、議論の全体像については、Kobayashi [2011] を参照。また、反復経験がある場合に知覚がプラマーナであるという考え方は、シャーキヤブディに遡ることができる。Cf. 稲見 [1993: 96], 稲見 et al. [2002: 26f., n. 38], Krasser [2003].

<sup>44</sup> 先に註2でも触れたように、仏教論理学派においては、知覚や推論としてのプラマーナは正しい知を意味している。よって、知覚や推論は、より正確に言うならば、知覚知あるいは推論知であり、有形象認識論に立つ限り何らかの形象を有する。また、これらのプラマーナが行動を引き起こす主要因であるという説は、PV II 3 に遡る。詳しくは、本研究 1.1.5 を参照せよ。

マーナの対象を明確に打ち出した。すなわち、知がその形象をもって生じるところの瞬間的なもの (kṣaṇa) としての把握対象と、人がそれに向かって獲得しようとする行動を起こす対象 (prāpanīya) である相続 (saṃtāna, 時間的な幅のあるもの) としての判断対象とである。この中、判断対象とは、知覚の力によって生じた決定 (niścaya) すなわち決定知 (niścayapratyaya) <sup>45</sup>によって、判断されるものである<sup>46</sup>。そして、知覚がプラマーナとして機能する、すなわち人の行動を引き起こすためには、このような決定知による判断が不可欠である。もし判断がなされないならば、その知覚において、それが青などといった特定の対象の認識であるという認識結果 (pramāṇaphala) は完成せず<sup>47</sup>、青などの対象に対して行動を引き起こすこともない。

このように、ダルモッタラの体系においては、プラマーナが人の行動を引き起こすために、決定によってその獲得対象を判断することが重要な位置を占めていることが理解されよう。これは、先に見たように、プラジュニャーカラグプタが、プラマーナが人の行動を引き起こす際に決定は不要である、と主張するのとは極めて対照的である。

さらに、PVA において、ダルモッタラと目される対論者によって、「知が対象の形象をもつことだけでは、それぞれに限定された対象の確立は成立しない。そのためには、決定という別のものが必要である。」という説が述べられたが、これに類似する見解が、NBT に見える。これは、前章 4.5.1 でも取り上げたものであるから、細かい註釈は付さない。

NBT 83,2–84,1: sadṛśam anubhūya tadvijñānaṃ yato nīlasya grāhakam avasthāpyate niścayapratyayena, tasmāt sārūpyam anubhūtaṃ vyavasthāpanahetuḥ. niścayapratyayena ca tajjñānaṃ nīlasamvedanam avasthāpyamānaṃ vyavasthāpyam. ... vyavasthāpakaś ca vikalpapratyayaḥ pratyakṣabalotpanno draṣṭavyaḥ.

〔青と〕類似するもの (sadṛśa) を感受した後に、〔「私は青を感受する」という、後の時点にある〕決定知 (niścayapratyaya) によって、その（前の時点の）知は青を把握するものと決定される (avasthāpyate)。したがって、感受された同一形象性

<sup>45</sup> ここでの決定が決定知を意味することは、後に引用した NBT 83,2–4 などから理解される。

<sup>46</sup> See NBT 71,1–72,3. Cf. 沖 [1990: 146–148], 護山 [2011: 63, fn. 29], 西沢 [2011: 141–143] 他。同様の説は、*Laghuprāmāṇyaparīkṣā* や *Pramāṇaviniścayaṭīkā* などにも見える。Cf. Krasser [1991: I 36(8), II 41f.].

<sup>47</sup> See NBT 84,1–85,2. Cf. 沖 [1990: 129,9–22], 西沢 [2011: 457f.] 他。



(sārūpya) は、確立させる原因 (vyavasthāpanahetu) である。そして、[後の] 決定知によって、その（前の時点の）知は、青の認識と決定される (avasthāpyamāna) ので、確立させられるもの (vyavasthāpya) である。……そして、知覚の力によって生じた分別知 (vikalpapratyaya, =決定知) が確立させるもの (vyavasthāpaka) であると思なされるべきである<sup>48</sup>。

ここでは、外的対象たる青と類似するもの（＝知にある青の形象）の感受 (anubhava) の後に、「私は青を感受（＝把握）する」という決定知 (niścayapratyaya) が生じる、というように、時間差を有する、感受（＝知覚知）と決定知という二段階の知が想定されている。そして、前の知において感受される、「青と類似するもの」すなわち、「外的対象たる青と同一の形象」を知がもつことによって、後の決定知による決定すなわち確立が起こるので、その同一形象性が確立させる原因 (vyavasthāpanahetu) である。また、その後続する決定知によって、前の知が青の認識 (nīlasaṃvedana) すなわち青を把握するものであることが決定される (avasthāpyamāna) ので、青の認識が確立させられるもの (vyavasthāpya) である。そして、その決定を行う後の決定知（＝分別知）こそが、確立させるもの (vyavasthāpaka) である。

このように、ダルモータラの説によれば、先行する感受（＝知覚知）における同一形象性が確立の原因ではあるものの、その知が青の認識であるということは、後続する決定知から遡って決定されるものである。したがって、知が青と同一の形象をもつことと知が青の認識であることとの間には、決定が介在していることになる。

これは先に 5.2.4 で取り上げた対論に見られる、ダルモータラと目される対論者の説と近似するものといえよう。

## 5.4. まとめ

本章では、まず、PVA ad PV III 311 の解説を通じて、以下のことが明らかとなった。ダルマキールティによって、認識手段は「知が認識対象の形象をもつこと」(meyarūpatā), 認識結果は「認識対象の認識」(prameyādhigati) と言われるのに対して、プラジュニャーカラグプタは、前者を「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」(pratiniyataḥkāratā),

<sup>48</sup> 翻訳については沖 [1993: 128–130], 解説については沖 [1993: 132f.]を参照。



後者を「それぞれに限定された対象の確立」(pratinīyatārthavyavasthā)等と言い換えて理解する。そして、両者は同一のものであるから、その間に、対象の近在性や感官の健全性、決定といった別の要素が入り込む余地は認められない。

さらに、ダルモッタラと目される論者との対論の中で、プラジュニャーカラグプタは決定に関する以下のような説を提示している。すなわち、プラマーナが人の行動を引き起こすという機能を果たす上で、決定は不必要である。反復経験が完全である場合には知覚が、それ以外の場合には推論がプラマーナとなるが、いずれの場合も決定という別のものには拠らず、知覚知や推論知における形象のみに基づいて人の行動が起こる。

第3節では、NBT等に見えるダルモッタラの決定知理解について概観し、PVAで批判される対論者説との比較を試みた。まず、ダルモッタラの理解によれば、知覚がプラマーナとして人の行動を引き起こすためには、獲得対象を示すものとして、後の決定知が不可欠である。さらに、ある知覚知が青を把握する認識であるということは、「私は青を感受する」という後続する決定知(=分別知)から遡って決定されるものである。したがって、知が青という対象と同一の形象をもつこととそれが青という対象の認識であることとの間には、決定が介在することになり、PVAに見える対論者の説とのおおよその一致が確認された。

## 第6章 結論

本研究第1部では、仏教論理学派における対象認識論の成立と展開と題して、仏教論理学派の創始者といわれるディグナーガ、大成者ダルマキールティ、そして、後継者の中からダルモッタラとプラジュニャーカラグプタという2人を選び、知覚における対象認識に関する彼らの理解について思想的アプローチを試みた。

議論の中心的位置を占めるのが、仏教論理学派独自の所説である、認識手段と認識結果の非別体説であった。本研究が扱う範囲において、認識手段は対象形象性 ([pra]meya-rūpatā) を、認識結果は対象認識 (prameyādhigati) をそれぞれ具体的に指し示しており、いずれも同一の瞬間的な知覚知に属している。よって、両者は知のもつ性質 (dharma) としてのみ区別されるのであって、実体 (vastu) としては区別されないということになる。そこで、認識の内部に現れる対象形象と対象認識との関係をどのように捉えるか、さらに、知覚による対象認識から行動へのプロセスをどのように考えるか、といった問題について、諸論師による理解をテキストに沿って考察した。また、特にダルモッタラとプラジュニャーカラグプタについては、両者の間に明らかな対立関係があることに着眼し、その相違点について論じた。

以上の論考により明らかにされた内容について、本論の順に従ってまとめた上で、残された課題について終わりに述べる。

### 6.1. 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa) の意味

第2章では、認識論の重要な術語として当時インドで広く用いられていた「プラマーナ」という語が、仏教論理学派においてどのように使用されるのかを確認した上で、その特徴を、ニヤーヤ学派との比較を通じて明らかにした。

仏教論理学派においてプラマーナの語は、主に、「正しい知」(samyagjñāna) と「正しい知の手段」(pramākarāṇa) という二つの意味で用いられる。知覚や推論を指示する場合の正しい知たるプラマーナは、認識手段と認識結果という対立概念によって分析された場合には、むしろ認識結果に該当せられるべきものであって、その場合のプラマーナという語は、プラマーナの結果／認識結果に対して転義的に用いられている。

プラマーナが正しい知を意味すること自体は、むしろ一般的であり、仏教論理学派独自のものではない。しかし、ウッディヨータカラ等のニヤーヤ学派の論師が *-ana* 接尾辞の文法的分析に基づいた正当な方策によってプラマーナが知であることを根拠付けた上で、常にそれとは別にプラマーナの結果を設定したのに対して、仏教論理学派の論師たちが、認識結果たる知に対して本来は手段を意味するプラマーナという語を転義的に用いたと考えることによって、別個にプラマーナの結果を設定することを回避したという点は、特徴的である。よって、このような転義的用法は、認識手段・認識結果非別体説という仏教論理学派独自の思想的立場によるものと考えることができよう。

## 6.2. ダルマキールティにおける対象認識と認識手段と認識結果の非別体説

第3章では、仏教論理学派の対象認識論の要である認識手段と認識結果との非別体説について、ディグナーガからダルマキールティへと順を追って論じた。

その結果、まず、ダルマキールティによる認識手段と認識結果との非別体説の重要な点として、以下の点が明らかにされた。すなわち、彼は、「認識手段とは対象に応じて知を限定する要因である」として、ディグナーガの段階でははっきりとは述べられていなかった、認識手段のもつ、知およびその認識作用に対する働きを明示している。さらに、この認識手段に関する独自の定義に基づいて、認識手段とは対象の形象をもつことであるということを積極的に論証しようとしている。

次に、その論証の内容について、PV と PVin を合わせて検討しながら詳しく論じた。PVin では、対象の形象をもつこと以外のものは認識手段としては不適當であるということを示すために、認識手段として四つのパターンを想定している。すなわち、①感官 (*indriya*)、②外的対象にある (*arthagata*) 形象 (*ākāra*)、③特殊な感受 (*anubhavaviśeṣa*)、④知 (*jñāna*) の本性 (*ātman*) である対象の形象をもつこと (*meyarūpatā*)、の四つである。この中、第一の外的な要因たる感官は、対象に応じて区別をもたないという理由によって否定され、第二の外的な要因たる外的対象にある形象は、知を通じてしか知られないという理由によって否定される。さらに、第三の特殊な感受は、内的な要因ではあるが、はっきりと規定されていないという理由によって否定される。以上のような段階を経て、第四の知の本性である対象の形象をもつことが、対象に応じて区別をもち、か

つははっきりと規定されるものであるから、認識手段として妥当であるという結論に至る。

### 6.3. ダルモッタラにおける対象認識

第4章では、まず初めに、ダルモッタラによるプラマーナおよびプラマーナの結果の定義を確認した。彼によれば、正しい知 (samyagiñāna) たるプラマーナとは、人を「対象に向かって行動させる (pravartaka) 知」すなわち「対象に到達せしめる (prāpaka) 知」であり、さらに、「行動の対象を示す (pradarśaka) 知」および「対象を判別する (paricchedaka) 知」と言い換えられる。一方、プラマーナの結果は、そのような到達せしめる知のもつ、到達せしめる作用 (vyāpāra) であり、「行動の対象を示すこと」(pravṛttiviśayapradarśana) および「対象を認識すること」(arthapratīti) と言い換えられる。

次に、その行動や判別の対象について、瞬間的な存在である「把握対象」(grāhya) と時間的幅をもった「判断対象」(adhyavaseya) という二種の知覚対象の観点から考察を加えた。この二種の対象に関連して、把握作用を為す知覚と、その後に生じる、判断作用を為す決定知という認識プロセスが確認された。さらに、このことから、これら行動や判別の対象が、いずれも、時間的幅をもった判断対象であり、目的達成 (arthakriyā) との密接な関係を有することが明らかになった。

最後に、この二種の対象に関連する、知覚と決定知という認識プロセスは、行動の前提となる知覚と決定知の場合にも類似することが分かった。ここでは、青などの対象と同一の形象をもった無分別なる感受すなわち知覚が生じ、その後に、その知覚について決定 (avasthā) を行う決定知 (niścayapratyaya) たる分別知 (vikalpapratyaya) が生じる。先行する知覚が、青などの特定の対象の認識であることは、後の分別知による判断を待って、初めて決定される。したがって、青の認識という対象認識そのものは無分別なものとして存在するが、それが青の認識であることは後の分別を通してのみ理解される。

### 6.4. プラジュニャーカラグプタにおける対象認識

第5章では、まず、PVA ad PV III 311 の解説を通じて、以下のことが明らかとなった。ダルマキールティによって、認識手段は「知が認識対象の形象をもつこと」(meyarūpatā), 認識結果は「認識対象の認識」(prameyādhigati) とされるのに対して、プラジュニャ

一カラグプタは、前者を「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」(pratiniyatākāratā), 後者を「それぞれに限定された対象の確立」(pratiniyatārthavyavasthā)等と言い換えて理解する。そして、両者は同一のものであるから、その間に、対象の近在性や感官の健全性、決定といった別の要素が入り込む余地は認められない。

また、ダルモータラと目される論者との対論の中で、プラジュニャーカラグプタは決定(niścaya)に関する以下のような説を提示している。すなわち、プラマーナが人の行動を引き起こすという機能を果たす上で、決定は不必要である。反復経験(abhyāsa)が完全である場合には知覚が、それ以外の場合には推論がプラマーナとなるが、いずれの場合も決定という別のものには拠らず、知覚知や推論知における形象のみに基づいて人の行動が起こる。

さらに、NBT等に見えるダルモータラの決定知理解について概観し(この内容は、第4章で既に詳しく扱った)、PVAで批判される対論者説との比較を試みた。その結果、認識手段と認識結果との間に決定の介在を認めるという点で、そのダルモータラの理解とPVAに見える対論者の説とのおおよその一致が確認された。

## 6.5. ダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識に関する解釈の違い

ここで、本研究の第4章および第5章において考察されたダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識に関する解釈について、両者の相違点を整理された形でまとめておくことにする。

まず、認識手段と認識結果の非別体説に関する理解は、それぞれ以下のごとくである。

### ・ダルモータラ

知が対象の形象をもつことと、その知がその特定の対象の知として確立されることとの間には、後続する決定知の決定する働きが介在している。知覚に関する議論においても、決定知は確立作用を行う主体として重要な位置を占める。

### ・プラジュニャーカラグプタ

知が対象の形象をもつこととその知が対象に従って限定的に確立されることとは、完全に同値である。よって、決定知などの第三の要素がその間に介在する余地はな

い.

また、知覚が人の行動を引き起こす際の決定知すなわち分別知の役割についても、以下のような解釈の違いがある.

- ・ダルモータラ

知覚が人の行動を引き起こすためには、知覚に後続する、知覚の内容を決定する知や、想起などの分別知が必要である.

- ・プラジュニャーカラグプタ

知覚が人の行動を引き起こすために、知覚に後続する分別知は不要である.むしろ、知覚の形象のみに基づいて行動が起こる.ただしその場合には、当該の対象に対して、既に十分な反復経験 (abhyāsa) を備えていることが前提となる.

なお、ここでは詳しくは述べないが、このような両者の解釈の違いは、「人の行動を引き起こすもの」(pravartaka) や「確立」(vyavasthā) といった概念の理解にも影響を与えている<sup>1</sup>.

## 6.6. 今後の課題

以上のように、認識手段と認識結果の非別体説を仔細に検討することにより、認識の内部に現れる対象形象と対象認識との関係、さらに、知覚による対象認識から行動へのプロセスといった論題について、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタとの間には、重大な見解の相違があることが明らかになった.そこでまず問題となるのが、なぜこのような解釈の相違が生じたのか、ということである.

一つの可能性としては、既に本研究 1.2.4 で示唆したように、「形象虚偽論」と「有形象認識論」といった、知における対象形象に対する基本的な態度の違いが、このような解釈の相違に影響しているということが考えられる.しかしながら、結論を急ぐことはできない.ダルモータラやプラジュニャーカラグプタの知覚論の全体像の解明を目指

---

<sup>1</sup> 「人の行動を引き起こすもの」(pravartaka) としてのプラマーナに関する両者の解釈の違いについては、Miyo [2014] を参照せよ. また、「確立」(vyavasthā) については、2014 年 8 月に行われた第 5 回国際ダルマキールティ学会 (ドイツ、ハイデルベルク) にて、口頭発表を行った. いずれ論文としてまとめる予定である.



す中で、より慎重に検討されるべき課題であろう。

さらに、このような解釈の相違は、ダルモータラやプラジュニャーカラグプタ以前にも遡りうる。というのも、既にデーヴェーンドラブッディ (Devendrabuddhi, ca. 630–690) とシャーキヤブッディ (Śākyabuddhi, ca. 660–720<sup>2</sup>) の間に、知覚が行動を引き起こす際の決定知の関わりについて、同様の見解の相違が窺われるからである<sup>3</sup>。また、行為発動における決定や反復経験といった論題に対する問題意識は、仏教内外を問わず多くの思想家によって共有されており、関連する議論は散見する。したがって、より広い範囲、より広い問題意識による思想史的観点からの更なる検討が必要であろう。

また、両者の解釈の違いにおいて重要な働きを担う「決定」(niścaya) や「反復経験」(abhyāsa) といった概念についても、その意味が十分に明らかにされているとは言えない。これらは、様々な文脈において繰り返し登場する、いわば仏教論理学派のキータームであるが、総合的な研究は未だなされていない。個別の文脈や論書における用例の分析を積み重ねた後に、それらを統合する作業が必要である<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> 年代は Frauwallner [1961] による。

<sup>3</sup> デーヴェーンドラブッディが、知覚は決定知を生ぜしめてから行動を引き起こすと考えているのに対して、シャーキヤブッディは、知覚を反復経験を有するものと有しないものとに分けた上で、前者については、知覚自身で正しさを判別する、すなわちそのような形象をもって生じることによって、行動を引き起こすと考えているようである。Cf. 稲見 [1993: 95f.]

<sup>4</sup> 決定に関する近年の研究としては、酒井 [2013] と中須賀 [2014] を挙げることができる。前者では、刹那滅論証の論証因である存在性 (sattva) の成立に関連して、ダルモータラの決定に関する議論が扱われている。また、後者は、PVI n I 43–49 およびそれに対するカルナカゴーミンの註釈の分析を通じて、アポーハ論の文脈における「判断」(adhyavasāya) と「決定」の違いを明らかにした。

なお、中須賀 [2014: 400, fn. 6] は、三代 [2013: 105] (=本研究 p. 110) を引用しながら、「三代 [2012] (筆者註: 本研究では、発行年に基づいて三代 [2013] とする) の解釈でも、niścaya は知覚判断とイコールで推理は niścaya に含まれていない」とするが、これは誤解である。少なくともプラマーナと行動の関係を論じる PVA の当該の文脈では、三代 [2013: 102] (=本研究 p. 107) でも述べたように、むしろ、決定こそが推論 (=推理) となる。ここでは、知覚あるいは推論が、それ自体とは別の決定に依拠して人の行動を引き起こす、ということの否定を意図したのであって、決定が推論とが別のものであるということを積極的に述べたわけではない。

また、反復経験については、知覚の一種であるヨーガ行者の知 (yogijñāna) との関わりが予測される。反復経験によって、本来分別が関わるような言語化された知であっても、無分別なる知覚に転化すると見なされている。

## 第6章 結論

以上のような、註釈者間の見解の相違に関する課題への取り組みを経た後に、あらためて、原点であるダルマキールティの著作に立ち返って考えてみたい。註釈者たちが、これほどまでに異なったオリジナリティーを註釈に織り込んでいることが明らかになった以上、註釈に拠ることが、かえってダルマキールティの真意を汲むための妨げになると言うこともできよう。とはいえ、註釈に拠らずに、自らの理解のみを頼るというのも心許ない。註釈者たちによる解釈の違いとその経緯を踏まえておくことが、一つの方策となろう。

## 第 2 部

*Pramāṇāvinīścaya* I 34–37 原典研究

以下にあげるのは、*Pramāṇaviniścaya* 知覚章 (PVin I) のうち、対象認識と対象形象による認識手段と認識結果の非別体説に関する自説を述べる、PVin I 30,9–32,10 (vv. 34–37 とそれに付随する散文) に関わる原典研究の成果である。

まず始めに、PVin の当該箇所をあげる。本研究の科段は、戸崎 [1991] のものと、ブトン・リンチェントゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290–1364) の註釈およびチャパ・チューキセンゲ (Phya pa Chos kyi seng ge, 1109–1169) の註釈によるものを参考にした上で<sup>1</sup>、独自に設定したものである。これら諸論師によって設定された科段についても、まとめて掲載する。

次に、サンスクリットテキストとチベット語訳の対照表を掲載した。サンスクリットテキストは Steinkellner [2007] (PVin I) を使用した<sup>2</sup>。チベット語訳との相違点についても、それに倣って記載した。チベット語訳テキストは、Vetter [1966] (V) を底本として使用したが、念のため、北京版 (P)、デルゲ版 (D) およびナルタン版 (N) との再校合を行い、情報を補足した。PV を始めとする他のテキストとの引用関係については、PVin I に詳しく述べられているので、そちらを参照されたい。

さらに、その PVin に対する和訳をあげる。本箇所については、Vetter [1966: 79,17–81,26] および戸崎 [1991] によるチベット語訳からの翻訳研究があるが、サンスクリットテキストに基づいた翻訳は未だ出版されていないため、ここに掲載した<sup>3</sup>。そのうちの多くの部分は、既に本研究の第 1 部の中で詳しく扱われている。また、翻訳に際しては、ダルモータラの註釈による解釈を多く使用している。しかし、本研究第 1 部でも明らかになったように、彼の解釈は時に独自の理解を含み、必ずしもダルマキールティの本意に沿ったものとは言い切れない。そのような場合には、適宜註記した。ダルモータラの

---

<sup>1</sup> チャパによる PVin 註の科段については、Pascale Hugon 氏によって整理されたもの (Hugon [2009]) がインターネット上に公開されており、それを参照した。

<sup>2</sup> 本研究で取り上げる範囲には、テキストに訂正が要される箇所はほぼない。1 箇所パunctuationを変更したため、註記した。なお、本校訂本に対しては、Isacson [2009] による詳細な批評があり、写本解読に問題がある点などが指摘されている。

<sup>3</sup> なお、チベット語訳からの翻訳である両研究と、以下に挙げる翻訳とで解釈が異なる点は多くない。というのも、Steinkellner [2007: xxxiii] も触れられるように、ゴクローツァーワ・ローデンシェーラプ (rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059–1109) によるチベット語訳の精度が高く、また、本箇所はほとんどが *Pramāṇavārttika* III vv. 301–319 とのパラレルであり、それに基づき元のサンスクリットを想定することが比較的容易であったためである。ただし、PV には見られない PVin 独自の議論も若干含まれており、僅かながら解釈が訂正される箇所もある。それらについては、適宜註記した。

影響を強く受けたプトンの註釈や、もう一つのサンスクリット註釈書（チベット語訳のみ現存）であるジュニャーナシュリーバドラ（Jñānaśrībhadrā, 11 世紀頃）の註釈についても、できる限り脚註の中で触れるようにした。これらの註釈のテキストは、後にまとめて掲載されている。

最後に、当該の PVin に対する 3 種の註釈のテキストを掲載した。すなわち、ダルモータラの *Pramāṇaviniścayaṭīkā* (PVinṭ(Dh)) のチベット語訳、ジュニャーナシュリーバドラの *Pramāṇaviniścayaṭīkā* (PVinṭ(Jñ)) のチベット語訳、プトンの *Tshad ma rnam par nges pa'i ṭīk*, *Tshig don rab gsal* (PVinṭ(Bu)) である。ダルモータラ註のテキストについては、北京版 (P), デルゲ版 (D), 金写版 (G) を、ジュニャーナシュリーバドラ註のテキストについては、北京版とデルゲ版を校合した。異読については、採用された読みを本文中に提示し、続けて ( ) 内に、その読みの出典と ; の後に採用されなかった読みとその出典を示した。pa と ba の異同については、不明瞭な箇所が多いので、特に問題となりうる場合を除いて註記しない。また、人名、書名等に関しては、気付いた限り下線を付した。

## 1. 科段

### 1.1. 本研究による科段

1.	認識結果と認識手段に関する総説	30,9–11
2.	認識手段とは、対象認識を対象と結び付けるものであり、知が認識対象の形象をもつことである	30,11–32,5
2.1	総説 (v. 34)	30,11–31,2
2.2.	説明する	31,3–32,3
2.2.1.	成立要因とは認識を対象に応じて区別するものである	31,3–4
2.2.2.	知を対象に応じて区別するものは、知の本性である	31,4–10
2.2.3.	知を対象に応じて区別するものは、知が対象と同一の形象をもつことである	31,10–32,3
2.3.	結論 (v. 35)	32,4–5
3.	認識手段とその結果とは非別体である (v. 36ab)	32,6
4.	知が対象に対して作用をもつかのように見えることの説明 (vv. 36cd–37)	32,7–10

### 1.2. 戸崎 [1991] による科段

VIII	量果と量とは別体ではない	31,9–33,10
VIIIa	量果とその能成者についての総説	30,9–11
VIIIb	量＝対象相似性	30,11–32,5
VIIIb1	総説 (v. 34)	30,11–2
VIIIb2	「知の確立の能成者」(＝量)と「知の生起の能成者」とは別である	31,3–4
VIIIb3	知の確立の能成者は知自身にある	31,4–10
VIIIb4	知の確立の能成者は対象相似性である	31,10–32,3
VIIIb5	結論 (v. 35)	32,4–5



## 1. 科段

VIIIc	量果（＝対象認識）と量（＝対象相似性）とは別体でない（v. 32,6 36ab）	
VIIIId	「対象の認識」の意味（vv. 36cd-37）	32,7-10

### 1.3. プトン・リンチェントウプの註釈による科段

1.	tshad 'bras spyir bstan	量・量果を一般的に説く	30,9-11
2.	don yod smra'i tshad 'bras rnam par gzhang	有境論（経量部）の量・量果 の確立	31,1-33,10
2.1.	don dang 'dra bas don rtogs 'jog byed du bstan	対象との類似性によって対象 の認識を確立せしめると説く	30,11-10
2.1.1.	bstan	説く（v. 34）	30,11-2
2.1.2.	bshad	説明する	31,3-32,3
2.1.2.1.	bsgrub bya sgrub byed so sor bstan	成立させられるものと成立さ せるものをそれぞれ説く	31,3-4
2.1.2.2.	rnam 'jog gis sgrub byed bye brag tu bshad pa	確立によって成立要因を個別 的に説明する	31,4-32,3
2.1.2.2.1.	shes pa'i bdag nyid kyī byed brag byed brag sgrub byed du bstan	知の本性の違いが違いを成立 させるものであると説く	31,4-10
2.1.2.2.1.1.	rig tsam gyis mi 'grub par las so so la nges pa'i bdag nyid du 'gyur dgos pa	単なる感受によっては成立し ない，それぞれの対象に限定 された本性をもつはずである	31,4-5
2.1.2.2.1.2.	de las gzhan byed brag tu byed pa po yin pa dgag	それ以外のものが区別を為す ものであるということの否定	31,5-9
2.1.2.2.1.2.1.	shes pa'i rgyu yul la bye brag med pas	知の原因は対象に対して区別 がないから	31,5-7
2.1.2.2.1.2.2.	shes pa'i rang gi ngo bo la khyad par med pas	知の自性には違いがないから	31,7-8

## 1. 科段

2.1.2.2.1.2.3.	'bral pa can ma shes pas bye brag tu byed pa po ma yin pa	結び付きをもつものは知られ ないから、区別せしめるもの ではない	31,8–9
2.1.2.2.1.3.	des na shes pa'i bye brag don dang 'brel par gyur pa sgrub byed du bstan pa	したがって、対象と結び付き た知の違いが成立せしめるも のであると説く	31,9–10
2.1.2.2.2.	de don dang 'dra ba las bzhan min par bstan pa	それが、対象と同一の形象を もつこと以外のものではない ことを説く	31,10–32,3
2.1.2.2.2.1.	phyogs	主張	31,10–11
2.1.2.2.2.2.	chos sgrub pa	特性の成立	31,11–32,3
2.1.2.2.2.2.1.	dbang sogs	感官など [が確立せしめるも のであることの否定]	31,11–13
2.1.2.2.2.2.2.	don gyis byas pa'i bye brag 'jog byed yin pa dgag pa	対象によってもたらされる違 いが確立せしめるものである ことの否定	31,13–32,3
2.1.3.	'dra ba sgrub byed du 'jog pa'i rgyu mtshan	〔対象と〕 同一の形象をもつ ことを成立要因として確立す る根拠 (vv. 35–37)	32,4–9

### 1.4. チャパ・チューキセンゲの註釈による科段

1.	phyi'i don gyi tshul gyi tshad 'bras	外的対象の方法の量・量果	30,9–33,10
1.1.	'bras bu'i rang bzhin	量果の自性	30,9
1.2.	'dod pa'i sgrub byed	認めることの論証	30,9–32,10
1.2.1.	spyir gzhaq pa	一般的に確立する	30,9–31,2
1.2.1.1.	sgrub byed kyi mtshan nyid	成立要因の定義	30,9–11
1.2.1.2.	sgrub byed kyi ngo bo ngos gzung pa	成立要因の自性が弁別される (v. 34)	30,11–31,2

## 1. 科段

- |            |   |  |            |
|------------|---|--|------------|
| 1.2.2.     | bye brag du gzhaḡ pa  | 個別に確立する  | 31,3–32,10 |
| 1.2.2.1.   | rtog pa'i bdag nyid du gyur pa'i<br>nye ba kho na sgrub byed yin<br>pa                                  | 認識の自体となった近接こそ<br>が成立要因である                                | 31,3–10    |
| 1.2.2.1.1. | skyed byed kyī rgyu la nus pa<br><i>med</i> pas rnam 'jog gi rgyu la<br>ltos pa                         | 生起せしめる要因には能力が<br>ないので、確立せしめる要因<br>に依拠する                  | 31,3–4     |
| 1.2.2.1.2. | myong pa (ba?) tsam don gyis<br>khyad par du ma byas pas don<br>gyis khyad par du byas pa la<br>ltos pa | 単なる感受は対象による区別<br>をもたらしさないので、対象に<br>よる区別をもたらしものに依<br>拠する  | 31,4–5     |
| 1.2.2.1.3. | bdag gcig pa ma yin na mtshan<br>gzhi la mi srid pas shes pa'i<br>bdag nyid la ltos pa                  | 本性が一つでないならば規定<br>主題 <sup>1</sup> にはありえないから、知<br>の本性に依拠する | 31,5–9     |
| 1.2.2.1.4. | don bsdu ba   | 意味内容のまとめ   | 31,9–10    |
| 1.2.2.2.   | de 'ang 'dra ba las gzhan pa mi<br>'thad pa   | それも、同一の形象をもつこ<br>と以外のものではありえない                           | 31,10–32,3 |
| 1.2.2.2.1. | dbang pos byas pa'i gsal ba<br>don la nye ba <i>med</i> pa  | 感官によってもたらされた明<br>瞭さは対象への近接がない                            | 31,10–13   |
| 1.2.2.2.2. | don gyis byas pa'i nye ba<br>gzhan ma grub pa   | 対象によってもたらされた別<br>の近接は成り立たない                              | 31,13–32,3 |
| 1.2.2.3.   | des na 'dra ba nyid sgrub byed<br>yin pa  | したがって同一の形象をもつ<br>ことが成立要因である (v. 35)                      | 32,4–5     |
| 1.2.2.4.   | rnam pa bzhaḡ 'jog gi don<br>bstan pa   | 確立するものと確立させられ<br>るものの意味内容を説く (v.<br>36–37)               | 32,6–10    |

<sup>1</sup> インドにはないチベット独自の概念である *mtshan gzhi* は, *mtshon bya* および *mtshan mtshan* とともに三つ組みの概念として用いられる. この独自の用法は, チャパによって確立されたものとされる. 詳細については, 福田 [2003] を参照せよ.

## 2. サンスクリット・チベット語訳テキスト対照表

	Sanskrit	Tibetan
1.	(30,9) kiṃ punar asya pramāṇasya phalam. prameyādhigatiḥ. sā hi jñānam, tac ca phalam iti kim idānīm pramāṇam. yata iyaṃ prameyādhigatir avyavadhānā tattvaṃ pratilabhate.	(V78,12, D162b2, P260b2, N270b4) yang tshad ma 'di'i 'bras bu gang yin / gzhal bya rtogs pa'o // de ni <sup>1</sup> shes pa yin la <sup>2</sup> de yang 'bras bu yin pa'i phyir / da ni tshad ma gang zhig yin // gang las bar chad med par gzhal bya rtogs pa 'di'i de nyid 'grub pa'o //
2.	(30,11) tatra	
2.1.	arthena ghaṭayaty enām na hi muktvārtharūpatām / tasmāt prameyādhigateḥ pramāṇam meyarūpatā // (v.34)	de la <sup>3</sup> 'di'i don <sup>4</sup> 'brel byed pa // don gyi rang bzhin min pa med // de phyir gzhal bya rtogs pa yi <sup>5</sup> // tshad ma gzhal bya'i rang bzhin nyid // (v. 34)
2.2.	(31,3) na hi kriyāsādhanaṃ ity eva <sup>6</sup>	gang gi phyir bsgrub par bya ba sgrub <sup>8</sup> par
2.2.1.	sarvaṃ sarvasyāḥ kriyāyāḥ sādhanam, kiṃ tu yā yataḥ <sup>7</sup> .	byed pa yin pa'i phyir thams cad bya ba thams cad kyi sgrub par byed pa ni ma yin gyi / 'on kyang gang las gang 'grub pa'o //
2.2.2.	(31,4) tatrānubhavamātreṇa sadṛśā-	de la nyams su myong ba tsam du las thams

<sup>1</sup> de ni V, D, P, N. V では, D, N が da ni とされる.

<sup>2</sup> yin la V, P VinT(Dh); yin par N, P, yin pa D. yin par でもよいか.

<sup>3</sup> tatra にあたる de la は, 偈文に含まれている. しかし, D では V に含まれない dang の語があり (V に註記なし), de la を含めると 8 音節となる. よって, 'di'i を 'di yi 等の形で 2 音節とし, de la を偈文の外に出そうとしていた可能性もある.

<sup>4</sup> don V, N, P; don dang D.

<sup>5</sup> yi V, N, P; yis D.

<sup>6</sup> eva n.e. T.

<sup>7</sup> gang las gang 'grub pa'o for yā yataḥ

<sup>8</sup> sgrub V, D; bsgrub N, P. V に註記なし.

2. サンスクリット・チベット語訳テキスト対照表

	tmano jñānasya sarvatra karmaṇi tenātmanā bhavitavyam, yenāsyedam iti pratikarma vibhajyate.	cad la 'dra ba'i bdag nyid kyi shes pa ni gang gis 'di ni 'di'o zhes las so so la <sup>9</sup> rnam par 'byed <sup>10</sup> pa'i de'i <sup>11</sup> bdag nyid du 'gyur bar bya dgos so //
	(31,5) anātmabhūtaś cāsyendriyārtha-saṃnikarṣādiṣu hetuṣu vidyamāno 'pi bhedo bhinne karmaṇy abhinnātmano jñānasya na bhedena niyāmakāḥ, kriyā-nibandhanatvāt <sup>12</sup> karaṇatattvasya, <sup>13</sup> tadaviśeṣe tasyā api viśeṣāsiddheḥ <sup>14</sup> , sato 'pi vā <sup>15</sup> viśeṣasya tadanāṅgatayā-karaṇatvāt <sup>16</sup> .	de'i bdag nyid ma yin pa yang dbang po dang don dang phrad pa (N271a) la sogs pa rgyu rnams la bye brag yod du zin kyang las kyi bye brag la bdag nyid tha dad pa med pa'i shes pa bye brag tu nges par byed pa po ni ma yin te / byed pa'i de nyid ni bsgrub par bya ba'i rgyu mtshan can <sup>17</sup> yin pa'i phyir ro // de khyad par med na yang de'i khyad par yang mi 'grub bo // yod kyang de'i yan lag ma yin pas de'i byed pa ma yin pa'i phyir ro //
	(31,9) tasmād yato 'syātmabhedād asyeyam adhigatir iti ayam asyāḥ karmaṇi niyamaḥ, tat sādhanam.	de'i phyir 'di'i bdag nyid kyi bye brag gang las 'di'i rtogs pa ni 'di yin no zhes 'di'i las la nges pa 'dir 'gyur ba de ni sgrub par byed pa (D163a) yin no //
2.2.3.	(31,10) na ceyam arthaghaṭanārthasārūpyād anyato jñānasya saṃbhavati.	shes pa'i don dang 'brel pa 'di don dang 'dra ba las gzhan las <sup>18</sup> ni srid pa ma yin no //

<sup>9</sup> la V, N, P; las D.

<sup>10</sup> 'byad(?) P.

<sup>11</sup> da' (?) P.

<sup>12</sup> bsgrub par bya ba *for* kriyā.

<sup>13</sup> Steinkellner の校訂はコンマをここに入っていない。これは, *kriyānibandhanatvāt* という複合語の理解とも関わる。詳しくは, 本研究 3.4.1 を見よ。

<sup>14</sup> mi 'grub bo *for* asiddeḥ.

<sup>15</sup> vā *n.e.* P Vin I.

<sup>16</sup> de'i byed pa ma yin pa'i phyir *for* akaraṇatvāt.

<sup>17</sup> rgyu mtshan can D, N, P; rgyu mtshan V, P Vin T(Dh)(?). 註 13 参照。

<sup>18</sup> gzhan las V, P Vin T(Dh); gzhan la D, N, P.

2. サンスクリット・チベット語訳テキスト対照表

	(31,11) na hi paṭumandatādibhiḥ svabhedair bhedakam apīndriyādy arthenaitad ghaṭayati, tatra pratyāsatti- nibandhanābhāvāt.	dbang po la sogs pa gsal ba dang mi gsal ba nyid la sogs pa'i rang gi bye brag gis bye brag tu byed pa po yin yang de ltar don dang 'brel par byed pa ni ma yin pa'i phyir te / de la nye ba'i (P261a) rgyu med pa'i phyir ro //
	(31,13) asty anubhavaviśeṣo 'rthakṛtaḥ, yata iyaṃ pratītiḥ, na sārūpyād iti cet,	don gyis byas pa'i nyams su myong ba'i bye brag gang las rtogs <sup>19</sup> pa 'dir 'gyur ba yin gyi / don dang 'dra ba <sup>20</sup> las ni ma yin no zhe na /
	(32,1) atha <sup>21</sup> katham idānīm sato rūpaṃ na nirdiśyate. nedam idaṃtayā śakyam nirdeṣṭum. anirūpitenā nāmāyam ātmanā bhāvān vyavasthāpayatīdam asyedaṃ neti suvyavasthitā bhāvāḥ.	da ni yod pa'i rang bzhin ji ltar mi ston / de ni <sup>22</sup> 'di'o <sup>23</sup> zhes bstan par nus pa ma yin no zhe na / 'di'i bdag nyid nges par rtogs pa med pas 'di ni 'di'i yin gyi 'di'i ma yin no zhes dngos po rnam par 'jog par byed pa ni legs <sup>24</sup> par rnam par gzhang pa yin no //
2.3.	(32,4) tasmāt prameyādhigateḥ sādhanaṃ meyarūpatā / sādhane 'nyatra tatkarma sambandho na prasidhyati // (v. 35)	de'i phyir gzhal bya rtogs pa yi // sgrub byed gzhal bya'i rang bzhin nyid // sgrub par byed pa gzhan yin na // de yi las dang 'brel mi 'grub // (v. 35)
3.	(32,6) sā ca tasyātmabhūtaiva tena nārthāntaraṃ phalam /	de yang de yi bdag nyid yin // des na 'bras bu don gzhan min //
4.	(32,7) dadhānaṃ tac ca tām ātmany arthādhigamanātmanā // (v. 36) savyāpāraṃ ivābhāti vyāpāreṇa svakarmanī // tadvaśāt tadvyavasthānād	de yi bdag nyid 'dzin de ni // don rtogs pa yi bdag nyid kyi // (v. 36) byed pas rang gi las la ni // byed dang bcas pa lta bur snang // rang nyid byed po min na yang //

<sup>19</sup> rtogs V, D, P; rtog N.

<sup>20</sup> 'dra ba V, D; 'dra bar N, P.

<sup>21</sup> atha *n.e.* T.

<sup>22</sup> de ni V, D, P, N. V では D, N が da ni とされる.

<sup>23</sup> 'di'o V, D, N; 'di'i P. V に註記なし.

<sup>24</sup> le(?) N.



## 2. サンスクリット・チベット語訳テキスト対照表

	akārakam api svayam // (v. 37) ity antaraślokāḥ.	de yi dbang gis der gzhag phyir // (v. 37) zhes bya ba ni bar skabs (N271b) kyi tshigs su bcad pa'o //
--	---	--

### 3. 和訳

#### 1. 認識結果と認識手段に関する総説

【問】それならば，この「直前に述べられた」認識手段にとっての結果（phala）とは何か．

【答】「認識手段の結果とは，」認識対象の認識（prameyādhigati）である．

【問】しかし「そうすると」（hi），これ（認識対象の認識）は知（jñāna）であり，そして，それ（知）は結果である「ということになる」ので，この場合に認識手段とは何か．「認識手段として何が残されようか，いや何もない．」

【答】およそそれに基づいて，この「他のものによって」介在されることのない（avyavadhānā）認識対象の認識（prameyādhigati）がそれたることを獲得する「ところのものが，認識手段である」<sup>1</sup>．

#### 2. 認識手段とは，対象認識を対象と結び付けるものであり，知が認識対象の形象をもつことである

##### 2.1 総説

この場合（認識手段は，他の要因に拠らずに，自らの内部にある相違に依って知を区別する要因であり，対象の特定の認識が認識結果である，という道理が確立される場合），

実に，対象の形象をもつことなしに，「他の如何なるものも，」それ（認識）を対象と結びつけることはない．したがって，認識対象の認識に対する認識手段は，認識対象の形象をもつこと（meyarūpatā）である．（v. 34）<sup>2</sup>

##### 2.2 説明する

###### 2.2.1. 成立要因とは認識を対象に応じて区別するものである

---

<sup>1</sup> 本節について，詳しくは本研究の 2.3 を見よ．

<sup>2</sup> 本節についても，前節と同じく，詳しくは本研究の 2.3 を見よ．

### 3. 和訳

というのも、「[ある要因が] 作用 (kriyā) を成立させるもの (sādhana) である」という [正にこのこと] だけから、あらゆる [要因] があらゆる作用を成立させるものであるということにはならない。そうではなくて、ある [要因] によって、ある [作用が成り立つ場合に、その要因がその作用を成立させるものである]。<sup>3</sup>

#### 2.2.2. 知を対象に応じて区別するものは、知の本性である

その場合<sup>4</sup>、知は、単なる感受 (anubhava) としてはあらゆる対象 (karman) に対して同じ本性をもつので、[その知] には、およそそれによって「この [知] はこの [対象] に対するものである」というように [知が] それぞれの対象に応じて区別されるような、そのような本性 (ātman) が存在するはずである。<sup>5</sup>

---

<sup>3</sup> 本節は、作用 (kriyā) すなわち認識結果 (pramāṇaphala) と、成立させるもの (sādhana) すなわち認識手段 (pramāṇa) とが、何らかの形で一対一対応していることを述べるものである。しかし、それを解釈する際の問題意識は、註釈によって異なる。

ダルモータラはここで、認識手段は知を対象に応じて区別するものであるという後の議論を先取りして、成立させるものが、知を生起させる要因 (\*janaka) ではなく、確立する要因 (\*vyavasthāpaka) であるということを強調し、両者の違いについて丁寧に説明する。これは、本研究 4.5.1 で確認された、NBT での態度とも一致する。また、プトンの註釈もこれに従う。

一方、ジュニャーナシュリーバドらは、vyavasthāpaka という概念を持ち出すことなく、先に述べられた、認識手段は他のものによって介在されることなく認識結果を成立させるという点に注目し、必要十分条件であることを強調する。PVinṬ(Jñ) D196b1/P233a1f.: 'on kyang 'bras bu gang byed pa gang yod pa tsam las yin pa de byed pa nyid yin no // de ltar na dbang po la sogs pa yod pa tsam gyis gzhal bar bya ba rtogs pa mi 'grub kyi / don dang 'dra ba gang yod pa tsam gyis so // (そうではなくて、ある結果が、ある手段が存在するだけで存在する場合に、それが手段に他ならない。その場合に、感官などが存在するだけで認識対象の認識 (\*prameyādhigati) が成り立つことはないが、およそ対象と同一の形象をもつこと (\*arthasārūpya) が存在するだけで、[認識対象の認識が成り立つ] )。

<sup>4</sup> Cf. PVinṬ(Dh) D130b1/P151a4: de la zhes bya ba ni gang gi sgrub par byed pa'i dngos por 'thad pa de ni de'i sgrub par rnam par gzhas (D; bzhas P) par bya ba yin no zhes bya ba'i tshul 'di rnam par gnas pa na'o // (その場合とは、あるもの (x) が成立させるものとして認められるならば、それ (x) はその [成立させられるもの] の成立に確立されている、というこの方法が確定している場合 [ということである] )。

<sup>5</sup> 本段落の内容は、本研究 3.3 で扱った PV III 302 とほぼ同じである。そこでは、PVV の解釈に基づいて帰謬論証的な解釈を提示したが、この PVin に対する PVinṬ(Dh) にもそれにやや似た表現が見える。PVinṬ(Dh) D130b2/P151a6f.: 'dis ni rnam par dbye ba mi nus pa nyid kyi rgyu bstan te / nyams su myong ba rang bzhin khyad par med pa la khyad par du

なぜならば (ca), 感官や [外的] 対象, [両者の] 接触などの諸要因において [何らかの] 区別があったとしても, それ (知) の本性ではない [それらの区別は], 区別される対象に対して, 区別されない本性をもつ知を, 区別されるものとして限定するものではない. 手段のそれたること (知を区別するものとしての手段たること) は, 作用の [区別] を根拠とするから. [感官のように] それ (手段と見なされるもの) に [対象に応じた] 違いがない場合には, それ (作用) にも違いは成り立たないから. あるいは, [外的対象にある形象などは,] たとえ [対象に応じた] 違いがあったとしても, [その対象にある形象の違いは] その [作用の違いの] 原因ではないので, 手段ではないから.

6

以上のゆえに, 何らかのそれ (知) の本性の区別に基づいて, 「この認識はこの [対象] に対するものである」というこのようなこれ (認識) の対象に関する限定がある場合に, それ (知の本性の区別) が成立させるもの (=認識手段) である.

### 2.2.3. 知を対象に応じて区別するものは, 知が対象と同一の形象をもつことである

【立論者】そして, この知の対象との結びつきは (arthaghaṭanā), [知が] 対象と同一の形象をもつこと (arthasārūpya) より別のものによってはありえない. というのも, 感官などは, 鋭さ・鈍さなどの [感官など] 自身の区別によって [明瞭・不明瞭などの何らかの形で知を] 区別するものであったとしても, これ (知) を対象と結びつけるものではない. なぜならば, それ (感官など) には, [知と対象との] 近接 (pratyāsatti) [すなわち結び付き] の原因が存在しないのだから.

【対論者】[外的] 対象によって特殊な感受 (anubhavaviśeṣa) がもたらされ, それ (特殊な感受) に基づいて, その認識 (pratīti, 対象認識) がある. [対象と] 同一の形象をもつことによって [認識があるの] ではない.

【立論者】それならば, この場合, なぜ [特殊な感受という] 存在するもののあり方が示され (nirdīśyate) ないのか.

---

rnam par gzhaḡ (D; bzhaḡ P) pa mi nus pa'i phyir ro // (これ (“anubhavamātreṇa sadṛśātmano jñānasya” の文言) によって, 区別ができないことの原因を説く. なぜならば, 感受という本性に違いがないならば, 違ったものとして確立させられえないのだから).

<sup>6</sup> この段落について詳しくは, 本研究の 3.4.1 を見よ.

【対論者】これ（特殊な感受のあり方）は、これであるという〔知覚されるような〕形では示されえない。

【立論者】この者（このような説を説く人）は、〔感受／知における〕規定されない（anirūpita）本性（ātman）によって、「これはこの〔対象〕の〔感受〕であり、これは〔この対象の感受では〕ない」というように諸々の存在（bhāva, すなわち認識）を確立せしめている。諸々の存在は、〔何と〕見事に確立される〔ことか〕。<sup>7</sup>

### 2.3. 結論

したがって（対象の形象をもつこと以外のものは、知を対象と結び付けないから）、認識対象の認識を成立させるものは、〔知が〕対象の形象をもつことである。それ以外のものが成立させるものであるとするならば、それ（知）と対象との結びつきが成立しない。（v. 35）

### 3. 認識手段とその結果とは非別体である

そして、それ（対象の形象をもつこと）はそれ（知）の本性となっているに他ならない<sup>8</sup>。したがって、〔認識手段の〕結果は〔認識手段とは〕別個のものではない。（v. 36ab）

### 4. 知が対象に対して作用をもつかのように見えることの説明

また、〔知〕自身にそれ（対象の形象をもつこと）を保持するそれ（知, jñāna）は、対象認識（arthādhigamaṇa）を本性とする作用（vyāpāra）によって、〔知〕自身の対象に対して作用（vyāpāra）をもつかのごとくに顕現する。〔知は、実際には〕自ら

<sup>7</sup> 本節について詳しくは、本研究の 3.4.2 を見よ。

<sup>8</sup> ここでの二つの代名詞に何を入れるかは、註釈によって異なる。ダルモータラは、「認識対象の形象をもつこと（\*meyarūpatā）」と「知（\*jñāna）」をそれぞれ入れている。PVinṬ(Dh) D134b2f./P156a4: gzhāl bya'i rang bzhin de yang shes pa de'i bdag nyid du gyur pa yin no (そして、それすなわち認識対象の形象をもつことは、それすなわち知の本性となっている)。さらに、全く同じ PV III 307ab に対する註釈の中で、PVP も同様の解釈を示す。一方 PVV は、前者に「感受を自性とする認識」を入れる。PVV 210,22: sā cādhigatir anubhavasvabhāvā jñānasyātmabhūtaiva (そして、その感受を自性とする認識は、知の本性となっているに他ならない), cf. 戸崎 [1979: 399f., fn. 20].

### 3. 和訳

(能動的に, svayam) 作用を為すもの (kāraka) ではないが, それ (対象の相をもつこと) によってそれ (対象の知) が確立する (vyavasthā) からである. (v. 36cd–37)

という以上 [3 偈] が挿入偈 (antaraśloka) である<sup>9</sup>.

---

<sup>9</sup> antaraśloka (AŚ) については, 御牧 [1980] によって samgrahaśloka (SŚ) とともにその取扱いが論じられており, 著作によっては両者の区別が曖昧であると指摘される. PVin に限って言えば, 御牧氏が Vetter [1966: 7(? 当該ページには見当たらない)] の見解として好意的に取り上げる, 「AŚ は独立した内容を持ち, 偈の著者はそれを注するを要しない. 一方, SŚ は先立つ散文のレジюмеである. つまり, SŚ はその注を先に持ち, 後にはもたない」という区分は概ね当たっている. しかし, ここで AŚ (複数形) とされる vv. 35–37 偈については, 後の 2 偈は確かに独立した内容を持つが, 先の v. 35 はむしろ先行する内容のまとめであって, SŚ に近いようにも見える. また, 御牧氏は, PVin I 20 の AŚ が PVin I 19c と d の間に入り込んでいることなどから, AŚ に対しては他の偈と同じレベルでの番号を付すべきではないという可能性を示唆している. なお, Steinkellner の校訂では特にこの問題には触れていない.



## 4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト

### 1. 認識結果と認識手段に関する総説

#### ■ 認識結果について

(D129a3, P149b2, G352,6) '**di'i** ni bshad ma (DG; *blank* P) thag pa'o // thob par byed pa ni tshad ma yin la / gdon mi za bar bya dgos pa'i don thob par byed pa ni de'i 'bras bu yin no //

de yang rang bzhin gang yin zhe na / **gzhal bya** (DP; *om.* G) (G353) zhes bya ba la sogs pa smos so // don rtogs na 'jug la de (PG; *des* D) las kyang thob pa de'i phyir don rtogs pa'i bya ba ni don (DP; *don* rtog G) thob pa'i bya ba yin pas gdon mi za bar bya dgos pa'i tshad ma'i 'bras bu ni de nyid yin gyi gzhan ni ma yin no //

gzhan gyis smras ba ni byed pa po'i ngo bor gyur pa'i dngos po la (DP; *om.* G) ni tshad mar brjod pa yin la / byed pa yang bya ba'i sgrub par byed pa dam pa yin te / de'i phyir gang la ltos nas de de'i byed par 'gyur ba 'bras bur gyur pa'i bya ba 'ga' zhig gdon mi za bar yod dgos so zhes bya ba yin la / cig shos kyis kyang 'jal ba'i bya ba byed pa tshad ma yin pa de'i phyir / de nyid 'bras bu yin la tshad ma'i 'bras bu de yang las nges par gcod pa yin no zhes bstan pa'i phyir **gzhal bya rtogs pa'o** zhes gsungs pa yin no //

#### ■ 認識手段について

(D129a6, P149b7, G353,4) gang gi phyir gzhal bya rtogs (D; *rtog* PG) pa **de ni shes pa yin la de yang 'bras bu yin** pa des na shes pa nyid 'bras bur 'gyur ro // gang gi phyir de lta (DP; *lta* ba G) yin pa de'i phyir **da ni** ste / da ltar (D; *lta* PG) shes pa 'bras bu'i dngos por khas blangs na / ji ltar mngon par 'dod pa'i **tshad ma** lus pa **gang zhig yin** te / cung zad kyang ma yin no //

gang gi phyir khyed (PG; *byed* D) ni shes pa tshad mar 'dod (P150a) pa yin na / da lta na (D; *om.* PG) ni shes pa yang tshad ma'i 'bras bur brjod pas / 'bras bu (DG; *bus* P) las tha dad pas tshad ma shes pa ma yin pa'i (D129b) bdag nyid du (DP; *de* G) nges par 'gyur dgos pa des na 'bras bu tha dad par smra ba la mi 'dod pa thog tu bab po zhe na /

slob dpon gyis shes pa gcig la rnam par gzhag par bya ba dang / rnam (G354) par 'jog par

byed pa'i dngos pos tshad ma dang 'bras bu'i dngos po mi 'gal bar dgongs nas bshad pa / **gang las**  
te byed pa po gang **gzhal bya rtogs pa 'di'i de nyid** de / gzhal bya rtogs pa nyid rnam par gzhag  
pa **grub pa'o** // rang gi byed brag gis (D; gi PG) bya ba'i (DP; ba'i dngos G) bye brag tu byed pa  
po ni byed pa yin te / byed pa po thams cad bye brag tu byed pa po nyid yin yang / gang zhig  
byed pa po gzhan la ltos pa med par bya ba bye brag tu byed pa po de ni byed pa yin no //

de bzhin du 'dir yang rang gi bye brag gis rnam par gzhag par bya ba don rtogs pa bye brag  
tu sgrub pa'i byed pa ni gang zhig rnam par 'jog pa'i rgyu mtshan ltos par bya ba'i byed pa po  
gzhan gyis ma chod pa nyid yin no // 'di ltar gang la ltos kyang don rtogs pa rnam par mi gnas na  
ni rnam par 'jog pa'i rgyu mtshan de las gzhan la ltos par bya ba yin te / des na snga ma de bar du  
chod pa na rang gi bye brag gis bya ba'i bye brag tu byed pa por mi 'gyur gyi / 'on kyang ltos par  
bya ba gzhan gang yin pa de nyid bar du ma chod par rang gi bye brag gis bye brag tu (D; bye  
brag tu *om.* PG) byed pa por 'gyur ro // de ston pa ni **bar chad med par** zhes bya ba yin no //  
gang las 'di la **bar chad** bar du gcod pa po ltos par bya ba gzhan **med pa** ste / gzhan gyis bar du  
ma chod par gyur pa na **'di'i de nyid 'grub** par byed pa gang yin pa de ni byed pa yin no //

2. 認識手段とは、対象認識を対象と結び付けるものであり、知が認識対象の  
形象をもつことである。

### 2.1. 総説 (PVin I 34)

(D129b5, P150a8, G354,6) **de la** ste (DP; sta G) tshul de ltar gnas pa na'o (DP; ma'o G) //  
ltos par bya ba (bya ba DP; pa pa G) gzhan gyis bar du ma chod par rang gi bye brag gis (D; gi  
PG) bye brag (P150b) tu byed pa po byed pa yin pa dang / don gyi khyad par rtogs pa ni tshad  
ma'i (G355) 'bras bu yin no zhes tshul de lta yin pa na'o //

don dang 'brel par byas pa rtogs pa **'di'i don** dang **'brel par byed pa ni don** lta bu'i **rang**  
**bzhin** gang yin pa de'i dngos po **don gyi rang bzhin** nyid **min pa** gzhan ni 'ga' yang **med** do //

'brel par byed pa yang sgrub byed yin la / 'brel par byas pa rtogs pa yang 'bras bu yin te (yin  
te PG; ste D) / **de'i phyir gzhal bya rtogs pa** gzhal bya dang 'brel par byas pa rnam par gzhag  
(D130a) par bya ba'i **tshad ma** ste / rnam par 'jog par byed pa nyid kyis sgrub byed dam par gyur  
pa ni **gzhal bya'i rang bzhin nyid** de / don dang 'dra ba nyid yin no //

## 2.2. 説明する

### 2.2.1. 成立要因とは認識を対象に応じて区別するものである

#### ■ na hi kriyāsādhanaṃ ity eva ... (≡ PV v. 301) の註釈

(D130a1, P150b3, G355,3) skyed par byed pa'i rgyu de nyid rnam par 'jog par byed pa yin pa'i phyir don dang 'dra ba nyid sgrub par byed par ci'i phyir brjod / gang gi phyir de rtogs pa'i bya ba skyed par nus na rnam par 'jog pa yang ji ltar mi nus / rnam par 'jog pa po yin na yang ji ltar de'i skyed par byed pa por mi 'gyur zhe na /

**gang gi phyir bsgrub par bya ba** yin pa nyid kyi phyir **thams cad thams cad** (D; thams cad *om.* PG) **kyi bsgrub par bya ba ma yin** la / gang gi phyir sgrub par byed pa yin pa de'i phyir thams cad gang cung zad bya ba yin pa de'i sgrub par byed pa yang ma yin no //

'o na ji ltar yin zhe na / bshad pa / **'on kyang** zhes bya ba ni khyad par ston pa'o // sgrub par byed pa **gang las** bya ba **gang 'grub pa** ('grub pa DG; 'grub pa pa P) de ni de'i sgrub par byed pa yin no //

#### ■ ダルモータラによる補足：確立させるもの (\*vyavasthāpaka) と生起させるもの (\*janaka) との別立について

(D130a3, P150b7, G355,6) des na 'ga' zhig ni rnam par shes pa bskyed (D; skyed PG) pa'i bya ba'i sgrub par byed pa yin te / gang zhig gi rjes su (DP; rjesu G) 'gro ba dang ldog pa'i rjes su byed par rtogs pa'o // 'ga' zhig gis (D; gi PG) las so sor nges pa rnam par 'jog pa'i sgrub (G356) par byed pa yin te / gang las shes pa de sngon po la sogs pa'i las la nges par rnam par 'jog nus pa'o //

des na 'di ni don dam pa yin te / 'ga' zhig (P151a) gis 'ga' zhig bskyed (D; skyed PG) pa'i bya ba byed pa na / byed pa po yin pa'i phyir rnam par 'jog pa yang de nyid kyi byed pa'am / rnam par 'jog par byed pa na yang de'i skyed par byed pa yin no zhes de ltar rnam par gzahag par ni nus pa ma yin no // gang gi phyir bskyed bya skyed (DG; bskyed P) byed kyi dngos por rnam par gzahag (D; bzahag PG) pa'am / rnam par gzahag 'jog gi dngos po phongs pas rnam par brtags pa ni

ma yin gyi / 'on kyang rig pas nges par brtags pa na gang zhig ji ltar 'byor pa ste / de ltar rnam par gzhang (D; bzhag PG) par bya ba yin no // 'ga' zhig ni skye ba'i sgrub par byed pa yin la / 'ga' zhig ni rnam par gzhang (D; bzhag PG) pa'i yin te / gang las skyes pa (DP; skye ba G) dang gang las rnam par gzhang (D; bzhag PG) par rig pa'o // gang gi phyir skyed par byed pa dag las ni don rtogs (DP; rtog G) pa (PG; par D) rnam par gzhang (D; bzhag PG) pa mi 'thad pa de'i phyir sgrub par byed pa gzhan tshol ba (D130b) yin no //

## 2.2.2. 知を対象に応じて区別するものは、知の本性である

### ■ tatrānubhavamātreṇa ... (≡PV III 302) の註釈

(D130b1, P151a4, G356,4) **de la** zhes bya ba ni gang gi sgrub par byed pa'i dngos por 'thad pa de ni de'i sgrub par rnam par gzhang (D; bzhag PG) par bya ba yin no zhes bya ba'i tshul 'di rnam par gnas pa na'o //

**nyams su myong ba** ni 'dzin par byed pa nyid de / 'dzin pa'i rnam pa de kho na'am / de **tsam** mo // 'dzin par byed pa'i rang bzhin de '**dra ba'i bdag nyid** dang (DP; 'dra ba'i bdag nyid dang *om.* G) 'dra ba'i rang bzhin **gyi** (D; rang bzhin gyi *om.* PG) rnam par **shes pa ni'o** (D; na'o PG) //

'dis ni rnam par dbye ba (DP; *om.* G) mi nus pa nyid kyi rgyu bstan te / nyams su myong ba rang bzhin khyad par med pa la khyad par du rnam par gzhang (D; bzhag PG) pa mi nus pa'i phyir ro //

gang gi phyir sngon po'i don dmigs pa ni shes pa'i rang gi rang bzhin dmigs (G357) pa'i bdag nyid kho na ste / gcig ni don gyi yin la / gzhan ni bdag nyid kyi yin pa dmigs pa gnyis ni med pa'i phyir ro //

yul dmigs pa bdag nyid dmigs pa'i bdag nyid yin na yang (yin na yang D; yin yang P; yin yang rnam par shes pa'i bdag nyid yin yang G) rnam par shes pa'i bdag nyid la khyad par med pa'i phyir shes pa thams cad kyi bdag nyid (P151b) dmigs pa khyad par med pa dang / de dang tha dad pa med pas don dmigs pa yang khyad par med par 'gyur te / de'i phyir na sngon po dmigs kyi ser po ni ma yin no (D; no // PG) zhes shes pa'i yul so so la 'brel pa nges pa 'dir mi 'gyur la / 'brel pa nges pa med na yang don nges par myong bar rab tu grags pa nyams par 'gyur ro //

des na nyams su myong ba'i rang bzhin du bye brag med pa 'di ni **gang gis las so so la** ste /

las dang las la **rnam par 'byed pa** zhes bya ba gzhan dang gzhan du rnam par gnas pa yul nges pa **de'i bdag nyid du 'gyur bar bya dgos so //**

gang gi phyir las kyi gnas su gyur pa'i yongs su gcad pa'i yul ni las su brjod do //

rnam par gnas pa'i rnam pa ston pa ni **'di ni** sngon po'i yin la / 'di ni gzhan gyi yin no zhes bya ba'o //

#### ■ anātmabhūtaś ca ... (≡PV III 303) の註釈

(D130b6, P151b4, G357,5) gang gi phyir bdag nyid kyi khyad par ram 'brel pa can gyi khyad par las 'gyur te / 'brel pa can gyi khyad par gang gis khyad par med pa'i shes pa de khyad par (DG; pa P) can du rnam par 'jog pa'i phyir de'i bdag nyid du 'gyur bar bya dgos so zhes ci'i phyir brjod par byed / shel (G358) gyi rang bzhin khyad par med kyang nye bar gzhag pa de dang de dag 'brel pas khyad par can du rtogs (D131a) pa de bzhin du shes pa yang 'brel pa can gyi dbang gis rnam par 'byed pa yin no zhe na de'i phyir **de'i bdag nyid ma yin pa** zhes smos so //

**ni'i** sgra ni gang gi phyir gyi don te / gang gi phyir bdag nyid ma yin pa nges par byed pa ma yin pa de'i phyir zhes rgyang ring por brjod pa dang 'brel par bya'o // bdag nyid du ma gyur pa gang yin pa de yod pa ni dbang po la sogs pa 'brel pa can rnams la yod par 'gyur te / de dag ni rgyu'i dngos pos nye ba yin gyi gzhan ni ma yin pa'i phyir ro //

**dbang po dang don dang phrad pa** zhes bya ba dbang po dang don dag gi 'brel pa dang / de dag **la sogs pa** ni yid la sogs pa (P152a) gang yin pa de dag ste / shes pa'i **rgyu de rnams la** yod kyang ste / re zhig bye brag ni med mod kyi 'ga' zhig la **bye brag yod kyang** yul zhes bya ba'i **las kyi bye brag** tha dad par gyur pa **la bdag nyid tha dad pa med pa'i** khyad par med cing mtshungs pa'i rang bzhin gyi bdag nyid kyi **shes pa de'i nges par byed pa po ma yin** pa de'i phyir byed pa ma yin no //

gang gi phyir shes pa yul tha dad pa la nges pa nyid yin na ni phyi rol gyi bye brag kyang shes par gtogs pa'i bye brag gi rgyu nyid kyis (D; kyi PG) shes par gtogs (D; rtogs PG) pa'i bye brag nges pa'i rgyur 'gyur ba yin na dbang po la sogs par gtogs pa'i tha dad pa ni shes pa bye brag tu byed pa ma yin te / shes pa'i bye brag de nyid byed par thal ba'i phyir dang / phyi rol ni brtag par bya ba yin pa'i (G359) phyir te / **bdag nyid tha dad pa med pa** zhes gang brjod pa yin no //

de'i phyir shes pa dang shes bya dag mi 'brel la / shes pa dang don ma 'brel na yang bye brag 'di gzhal bya rtogs pa'i sgrub par byed par mi 'gyur ro //

### ■ 第一の理由句の註釈

(D131a6, P152a5, G359,2) gal te byed par gyur pa'i bye brag ni rang gi ngo bo nyid kyis 'di ltar gyur pa yin (DP; *om.* G) te / gang gis nram par shes pa'i bye brag ma byas kyang nges par byed pa por 'gyur ba de'i phyir don la so sor nges pa ni shes pa'i bye brag sngon du 'gro ba can ma yin no zhe na (/)

de ni de ltar mi rigs te / gang gi phyir gang zhig gi mthus rang bzhin khyad par med kyang rang gi ngo bos bya ba bye brag tu 'gyur ba rang bzhin gyis byed pa zhes bya bar gnas pa ni 'ga' yang med kyis / 'on kyang **byed pa'i de nyid** ni byed pa nyid de bye brag tu byed pa po nyid ces bya ba'i don no (D; to PG) // (D131b) **bsgrub par bya ba'i rgyu mtshan** ni bye brag gi rgyu'o //

rang gi bye brag gis bya ba'i bye brag byed pa na sgrub par byed pa 'ga' zhig byed par 'gyur ba yin gyi / bya ba'i bye brag byed pa med par (DP; pa G) ni 'ga' (DP; 'gal G) yang byed pa zhes bya ba (P152b) ma yin no // gang gi phyir **byed pa'i** byed pa nyid ni bya ba'i bye brag (bya ba'i bye brag PG; bye brag D) gi rgyu nyid yin pa des na / (/ PG; *om.* D) de bya ba'i rgyu yin pa'i phyir dbang po la sogs pa rnam la bye brag rnam par gnas kyang shes pa'i mtshan nyid kyis bya ba bye brag tu mi byed na / (/ D; *om.* PG) nges par byed pa ma yin pa ni byed pa ma yin no //

### ■ 第二の理由句の註釈

(D131b2, P152b2, G359,6) 'di snyam du 'o na ni 'brel pa can nyid kyis shes pa bye brag tu byed par 'gyur gyi / gang las rnam pa dang bcas par thal bar 'gyur ba rang bzhin gyi khyad par 'jog (G360) pas ni ma yin no // 'brel pa ba (DG; pa P) yang bye brag tu byed pa po yin pa des na nges par byed par 'gyur ro snyam na /

bshad pa / byed par 'dod pa'i bye brag **de khyad par med na** / rang nyid la bye brag med na bya ba **de'i khyad par yang mi 'grub po** // des na de nges par byed pa ma yin no // gang gi phyir dbang po la gnas pa'i khyad par 'brel pa can gyis kyang rang bzhin bye brag med pa'i bya ba yang khyad par du byas pa yin la / byed par 'dod pa'i khyad par 'brel pa can de yang don rnam la thun mong du khyad par med pa'i phyir 'brel pa can des bya ba khyad par du byed par ga la 'gyur /

### ■ 第三の理由句の註釈



#### 4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト

(D131b5, P152b5, G360,3) 'di snyam du don la gnas pa'i rnam pa'i khyad par ni 'brel pa can yin la / 'brel pa can des ni shes pa'i don so so la nges pa rnam par 'jog pa'i phyir nges par byed pa yin te / don la gnas pa'i rnam pa ni thun mong ma yin no snyam na /

don la gnas pa'i sngon po la sogs pa'i rnam pa'i khyad par **yod kyang** bya ba'i khyad par **de'i yang lag ma yin pas byed pa ma yin pa'i phyir ro //**

'di skad brjod pa yin te / gal te don la gnas pa'i mtshan nyid kyi rnam pa'i bye brag don so so la tha dad pa yin pa de lta na yang / 'di shes pa'i khyad par rnam par 'jog pa'i yan lag ni ma yin te / gang gi phyir de ni nyams su ma myong ba kho na yin la / rtogs (DP; rtog G) pa nyams su myong ba na (myong ba na D; myong na PG) yang ma shes pa da dang 'brel pa nyid du shes par nus pa ma yin (G361) pas na de dang 'brel pa nyid kyi khyad par du rnam par gzhas (D; bzhas PG) pa lta ci smos / 'di ltar 'di sngon (DG; sngod P) po dang (D132a) 'bral lam 'on te gzhan dang 'brel pa zhes rang bzhin khyad par med pa'i phyir rnam par shes pa la the tshom za bas ji ltar na the tshom za ba'i rang bzhin gyi sngon po dang 'brel pa can des the tshom za ba'i rang bzhin de nyid nges par byed / gzhan la (D; las PG) gnas pa'i khyad par yang ma nges pa kho na yin no //

de nges pa ni shes pa kho nas byas pa yin na khyad par ma shes pa (D; na PG) de yang ji ltar khyad par can 'dzin par byed pa 'gyur zhing, khyad par gang gis de khyad par can du rnam par gzhas / de'i phyir ji srid du rnam par shes pa las tha dad pa'i khyad par 'brel pa can shes pa'i bye brag rnam par gnas pa'i rgyu brtags pa de ni rnam pa gnyis kyi 'brel pa ma yin te / thun mong ba'i phyir dang / thun mong ma yin pa nyid kyang (D; kyi PG) ma shes pa'i phyir ro //

de shes na ni de dang 'brel pa'i khyad par can (DP; nyan G) yang shes par 'gyur na / shes pa las tha dad pa de ni rang gi ngo bos shes par bya ba ma yin no // da ltar ni 'dzin par byed pa'i shes pa yang 'ga' zhis 'thad pa ma yin te / de nyid dpyod (DP; dped G) pa yin pa'i phyir ro //

de'i phyir tha dad pa'i khyad par nyams su ma myong ba'i phyir med pa dang 'dra ba ni khyad par rnam par gnas pa'i yan lag ma yin zhing / **yan lag ma yin pa'i** phyir yang nges par byed pa ma yin la / des na byed pa ma yin no //

#### ■ tasmād yato 'syātmabhedād ... (≡PV III 304) の註釈

(D132a5, P153a7, G361,6) de ltar na gang gi phyir bdag nyid tha dad pa med pa'i shes pa'i rgyur gyur pa'i bye brag nges (G362) par byed pa ma yin pa dang / rang gi ngo bo khyad par med pa dang / kha cig ma shes pa'i phyir 'brel pa can nyid kyi sgo nas bye brag tu byed pa po nyid ma

yin pa'i phyir na gzhan bye brag tu byed pa po ma yin pa **de'i phyir** / shes pa **'di'i bdag nyid kyi bye brag** ni rang bzhin gyi khyad par ro // **gang las** te bdag nyid kyi khyad par gang gi phyir (P153b) yul zhes bya ba'i **las la** (*em.*; ma DPG) **nges pa'o** //

nges pa ci 'dra ba zhig ce na / bshad pa / sngon po **'di'i rtog** (D; rtogs PG) **pa ni 'di yin no** zhes 'di 'dra ba'i don gzhan rnam par bcad nas rtogs pa 'di'i don gcig la nges pa ste / nges pa 'di nyid ni don dang 'brel par brjod pa yin no //

**de ni** zhes bya ba ni bdag nyid kyi bye brag gang las 'gyur ba'i bdag nyid kyi bye brag **de ni sgrub par byed pa yin** (D132b) **no** // **de ni** zhes bya ba ni sgrub par byed pa'i sgra dang gzhi mthun pa'i phyir ma ning ngo //

## 2. 2.3. 知を対象に応じて区別するものは、知が対象と同一の形象をもつことである

### ■ na ceyam arthagatānā ... の註釈

(D132b1, P153b3, G362,4) 'di snyam du bdag nyid kyi bye brag kho na las don dang 'brel pa yin du chug kyang / don dang 'dra bas byas pa yin no zhes bya ba 'di ga las she na /

**shes pa'i** zhes gsungs te / gal te 'dra ba las gzhan las kyang srid na ni 'dra bas byas par gzung bar mi bya ba zhig na **shes pa'i don dang 'brel pa 'di lta bu ni don dang 'dra ba las gzhan las ni srid pa ma yin no** //

### ■ na hi paṭumandatādibhiḥ ... の註釈

(D132b2, P153b4, G362,5) shes pa las tha dad pa'i dbang po la sogs pa la gnas pa'i bye brag ni mi shes pa'i phyir 'brel par byed par mi 'gyur gyi / dbang po la sogs pas byas pa shes pa la gnas pa'i bye brag ni rnam par shes pa'i phyir (PG; spyir D) 'brel bar byed pa por 'gyur bar de'i phyir **gzhan las ni srid pa ni ma yin no** zhes ci'i (G363) phyir brjod ce na /

**dbang po la sogs pa** zhes smos so // dbang po de gsal ba dang mi gsal ba de'i dngos po ni **gsal ba dang mi gsal ba nyid do** // **de la sogs pa** gang dag yin pa ste / **sogs pa** smos pas ni goms pa bogs pa dang / ma bogs pa dang yul nye ba dang mi nye ba la sogs pa gzung ngo // 'di dag gi **rang gi bye brag gis** dbang po'i rnam par shes pa la sogs pa bye brag tu 'gyur te / zas zos pa

dang ma zos pa la sogs pas gnod par byas pas mi gsal ba dang / phan btags pas gsal bar gyur pa'i dbang pos ni nam par shes (P154a) pa gsal ba dang mi gsal ba 'dzin par byed pa dang / sngon goms pas 'dus byas pa'i yid la byed pa yang 'dod pa dang mi 'dod pa'i shes pa'i rgyur 'gyur te / 'di yang skabs ji lta ba bzhin du sgrub par 'gyur ro // yul nye na gsal la nye ba ma yin na mi gsal ba zhes bya ba la sogs pa'i rjes su 'brangs nas rtogs par bya ba'o //

de ltar dbang po dang yid la byed pa dang yul gyi bye brag rnam rang gi bye brag gis bye brag tu gyur pa na de ltar shes pa dga' ba la sogs pa'i bye brag rnam dang sbyor bar byed pa yin yang don dang sbyor bar byed pa ni ma yin no //

#### ■ 理由句 tatra pratyāsattinibandhanābhāvāt の註釈

(D132b7, P154a3, G363,5) ci'i (DP; de ci'i G) phyir zhe na / **de la** (*em.*; las DPG) zhes smos te / dbang po la sogs pa bye brag tu byed par gyur pa la **nye ba** ste / 'brel pa'i **rgyu** gang yin pa de **med pa'i phyir ro** // dbang po la sogs pa'i bye brag tu byed pa'i dngos pos 'brel pa'i (D133a) rgyu med pa mtshon par byas pa'o //

(G364) dbang po la sogs pa'i bye brag la ni shes pa dang nye ba'i rgyu yod pa ma yin te / 'di ltar nyams su myong ba zhes bya ba dbang pos byas pa'i shes pa'i bye brag yod kyang don thams cad la thun mong ba (D; ma PG) yin pa nyid kyis nges pa ma yin pa'i dang nye ba'i rgyu ma yin no // ji ltar dbang pos byas pa'i gsal ba ni sngon po la (las PG) ji lta bar ser po la yang de bzhin no zhes bya ba la sogs par (PG; pa D) thun mong bar sbyar bar bya'o //

don gyis byas pa'i bye brag don dang 'dra ba zhes grags pa nyid ni nye ba'i rgyu yin te / don so so la tha dad pa'i phyir ro //

des na **dbang po la sogs pa** zhes smos pas yul ma bzung ba yin no // gang gi phyir yul tha dad par byed pa yin na ni shes pa la yul gyis bskyed pa'i 'dra ba nyid nye ba'i rgyur 'gyur ro //

#### ■ asty anubhavaviśeṣo 'rthakṛtaḥ ... の註釈

(D133a3, P154a8, G364,3) gal te dbang po la sogs pas byas pa'i bye brag bye brag tu byed pa po ma yin pa de lta na / 'o na ni **don gyis byas** (P154b) **pa'i nyams su myong ba'i bye brag** ste / nyams su myong ba'i khyad par **gang las** don nges par rtogs pa'i **rtogs par 'gyur ba yin gyi don dang 'dra ba las ni ma yin no zhe na** /

■ atha katham idānīm... の註釈

(D133a4, P154b1, G364,5) de ltar 'dod na **da ni** ste de ltar khas blangs pa na **yod pa** don byed pa'i rang bzhin gyi (DP; gyis G) khyad par don dang 'dra ba mi bzod pas khas blangs pa de'i **rang bzhin** te de kho na **ji ltar mi** brjod / yod par tha snyad du bya ba'i yul ni tshad mas rtogs pa'i rang bzhin yin la / tshad mas rtogs pa yang nges pa la gnas pa'i don bstan par nus pa kho na yin te / rnam par rtog pa la gnas pa ni sgra'i don yin pa'i phyir ro //

■ nedam idaṃtayā ... の註釈

(D133a5, P154b3, G364,6) cig shos kyis kyang nyams su (G365) myong ba thams cad '**di'o** zhes bya bar **bstan par nus pa ma yin** te / dper na nor bu dang lcags la sogs pa'i gzugs rnams mi mkhas pas mthong du zin kyang khyad par brjod par mi nus pa bzhin no // tshad mas yul du byas pa thams cad kyang 'di'o zhes bstan par nus pa ma yin te / dper na rjes su dpag pa'i mig bzhin no // de'i phyir brgal ba 'di ci zhig yin zhes smras pa ni / **de ni** zhes bya ba don gyis byas pa'i khyad par gyi rang bzhin no // 'di'i dngos po ni '**di nyid** de (D; kyi PG) mngon sum nyid do //

■ anirūpitena nāmāyam ātmanā ... の註釈

(D133a7, P154b6, G365,3) de byed par gyur pas mngon sum nyid du rwa nas bzung nas bstan par mi nus kyi / don nges par (D133b) rtogs pa'i rtogs pa mthong ba'i phyir de'i rgyu mtshan du gyur pa don gyis byas pa'i nyams su myong ba'i khyad par yod do zhes ni smra bar nus pa yin no zhe na /

cig shos kyis smras pa / rigs pa smra ba '**di rtogs pa med pa** mtshon pa med pa 'di'o zhes **nges pa med pas dngos po** ste shes pa'i rang bzhin **rnam par 'jog par byed pa** ste / nges pa'i rang bzhin du rtogs par byed pa'o zhes bya ba'i don ni gzhan (ni gzhan D; gyi gzhan G, ni gzhan om. P) gyi 'di ni mi srid do zhes bya ba'o //

ji ltar rnam par 'jog ce na / bshad pa (P155a) myong ba'i rang bzhin '**di ni** sngon po '**di yin gyi** gzhan ser po'i ni **ma yin no zhes** bya bar te / de'i phyir **legs par rnam par** (DP; rnam par om. G) **gzhaḡ pa yin no** // 'di ni bsting (DP; bstan G) tshig ste gzhan gyis bzhaḡ pa 'gog pa'o //

■ダルモータラによる補足：anirūpita について

(D133b3, P155a2, G365,6) 'di'o zhes bya bar nges par rtogs pa med kyi mig la sogs (G366) pa'i rang bzhin gyi bye brag rnam par 'jog pa ma yin nam zhe na /

bden te / de las ni nges par rtogs pa'i rang bzhin mig gi rnam par shes pa zhes bya ba 'bras bu rnam par 'jog pa yod pas de'i (PG; 'di D) dbang gis mig la sogs pa nges par rtogs pa med pa'i rang bzhin yang rnam par gzahag pa yin na / rnam par shes pa ni nges par rtogs pa'i rang bzhin gzhan gyis (D; gyi PG) rnam par gzahag pa ma yin gyi / 'on kyang bdag nyid kho nas yin no // de'i phyir de nges par ma rtogs na ni rtogs pa nges par (D; pa PG) rnam par gzahag pa yod pa ma yin no //

nor bu dang dngul la sogs pa bye brag tu rnam par gzahag pa'i rgyu nges par ma zin pa gang yin pa de dag kyang bye brag med pa'i tha snyad du bya'o // 'di skad du 'bras bu bye brag tu rtogs (D; rtog PG) pa mthong ba'i phyir bye brag tu rnam par 'jog go zhes ni brjod par mi nus te / sngon po la sogs pa'i don gyis byas pa'i myong ba'i bye brag nges pa yin na ni sngon po rtogs pa'i (D; par PG) nges par yongs su bcad par 'gyur ba yin te (DG; no P) / don nges par rtogs par yongs su gcod pa ni don gyis byas pa'i khyad par yongs su gcod pa nyid yin gyi gzhan du (PG; om. D) ni ma yin pa'i phyir ro //

gang gi rang bzhin nges pa nyid shes pa'i las la nges par 'gyur ba (PG; 'gyur ba na D) de ma nges na de'i bdag nyid las la nges pa'i rtogs pa ji ltar 'gyur / de'i phyir bye brag gi (D; gis PG) rtogs pa mthong ba'i phyir bye brag rnam par 'jog go zhes gang smras pa de la don 'dir 'gyur te / bye brag rtogs pa'i (D134a) phyir bye brag (G367) rtogs so zhes bya ba yin na de ltar ni rigs pa ma yin no //

de nyid kyi phyir **bdag** (P155b) **nyid nges par rtogs pa med pa** zhes gsungs te / gang gi bdag nyid du dngos po nges par rtogs par (D; pa zhes PG) bya ba de nyid nges par rtogs pa med pa zhes bya bar ji ltar 'gyur / de nges par ma rtogs na yang dngos po (DG; om. P) de'i rang bzhin ci 'dra ba zhig tu rnam par 'jog / rang bzhin gang zhig ma rtogs na ni dngos po de'i rang bzhin du rtogs par mi 'gyur te / dper na skad cig ma nyid nges par ma rtogs par sngon po la sogs pa de'i rang bzhin du nges par mi rtogs pa bzhin no //

shes pa'i don gyis byas pa'i bye brag kyang nges par rtogs pa ma yin te / des na shes pa de'i rang bzhin du nges par rtogs par mi 'gyur ba'i phyir / don nges par rtogs pa'i rtog par mi 'gyur ro //

#### 4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト

dngos po de'i rang bzhin du rtogs pa ni rang bzhin rtogs pa'i sngon du 'gro ba can yin te / 'di lta 'ga' zhig la ltos (D; ldog PG) pas rang bzhin 'ga' zhig brtags pa yin la / dngos po yang ldog pa gzhan las brtags pa yin no //

de la ldog pa gzhan dang ldan pa'i ldog pa gzhan gyi rtogs pa khyad par du gyur pa'i rang bzhin rtogs pa'i phyogs gcig tu gyur pa gang yin pa 'di la ni de'i rtogs pa'i phyogs gcig tu gyur pa gang yin pa 'di la ni de'i rtogs pas khyab pa yin te / dper na dbyig pa rtog (D; rtogs PG) pa'i phyogs gcig tu gyur pa dbyig pa can rtogs pa ni dbyig pa rtogs (DP; pa ni ... rtogs *om.* G) pas khyab pa yin pa bzhin yin pas na khyab par byed pa mi dmigs pa'o //

'dra ba yang rtogs pa med pa ma yin nam / gzung ba'i rnam pa nyams su myong ba'i phyir ma (G368) rtogs pas (DP; *om.* G) so zhes ci'i phyir brjod ce na /

bden te / nyams su myong yang 'dra ba'i bdag nyid du ni ma yin te / gang gi phyir nyams su myong ba ni rtogs (D; stobs PG) kyis 'di ni 'dra ba'o zhes zhen pa (D; pa'i P, pa ni G) med kyi 'on kyang don yin no zhes so //

de lta na 'o na ni rjes su dpag pas 'dra ba'i bdag nyid du nges par byed de / rang bzhin ni gsal ba nyid du mngon sum du gyur pas ma rtogs pa ma yin pa de'i (P156a) phyir de ni sgrub par byed par 'thad pa yin no //

#### 2.3. 結論 (v. 35)

(D134a7, P156a1, G368,2) gang gi phyir 'dra ba las gzhan don dang 'brel par byed pa ma yin pa **de'i phyir gzhal bya rtogs pa** ste / gzhal bya rtogs par rnam par gzhas (PG; gzhal D) pa'i **sgrub byed** de byed pa ni **gzhal bya'i rang bzhin** lta bu gang yin pa de'i dngos po ni **gzhal** (D134b) **bya'i rang bzhin nyid** de / rnam par shes pa'i gzhal bya dang 'dra ba nyid do //

**sgrub byed** 'dra ba las **gzhan** shes pa las phyi rol du (D; tu PG) gyur pa 'am / rang bzhin du gyur kyang dbang po la sogs pas bya ba (D; byas pa PG) yin na ni shes pa **de'i las dang 'brel pa** nges pa 'di ni sngon po myong ba yin gyi ser po ni ma yin no zhes bya ba de lta bur gyur pa **mi 'grub** ste / rtogs pa ma yin no //

#### 3. 認識手段とその結果とは非別体である (v. 36ab)



(D134b2, P156a4, G368,5) gal te sgrub par byed pa don dang 'dra ba de nyid kyang 'bras bu las gzhan du 'gyur ro zhe na /

bshad pa gzhal bya'i rang bzhin **de yang** shes pa **de'i bdag nyid** du gyur pa **yin** no // gang gi phyir bdag nyid yin pa **des na 'bras bu** tshad ma las **gzhan** tha dad pa **ma yin** no //

#### 4. 知が対象に対して作用をもつかのように見えることの説明 (vv. 36cd–37)

■ 知が対象と同一の形象をもつことが手段であることは、推論される (akārakam api svayam の註釈?)

(D134b3, P156a5, G368,6) byed pa thams cad ni byed pa po'i gzhan gyi (D; gyis PG) dbang dang rang gi bya ba dang ldan pa dang / (G369) gtsor gyur pa'i bsgrub par bya ba la nye bar sbyor bar mthong ste / dper na shing skyes bus byin gyis brlabs shing 'bar ba'i bya ba dang ldan pa tshos pa'i bsgrub par bya ba la nye bar sbyor ba mthong ba bzhin no // 'dra ba ni byed pa po'i gzhan gyi dbang dang bya ba dang ldan pa dang / gtsor gyur pa'i bsgrub par bya ba la nye bar sbyor bar ma mthong zhing / byed pa po 'ga' zhig kyang mthong ba med pas de ji ltar na don dang 'dra bar (D; bas PG) byed par 'gyur zhe na /

smras pa / cung zad kyang phongs pas byed par (PG; pas D) rtog pa ni ma yin gyi 'on kyang 'di ni (PG; om. D) dngos po la gnas pa yin te / byed pa 'ga' zhig la ma brten (D; rten PG) par ni bsgrub (DP; sgrub G) par bya ba sgrub par mi byed pa'i phyir ro //

'di tsam zhig ni khyad par yin te / byed pa 'ga' zhig ni rang las nges pa yin te / dper na (P156b) gcod pa la ste'u bzhin no // gzhan la ni bsgrub par bya ba dang ldan pa'i byed pa po mthong ba las byed pa (PG; byed pa po D) nam par 'jog pa yin te / (PG; yin no // D) byed pa med par ni bsgrub par bya ba 'la grub pa mi 'thad pa'i phyir ro //

'dir don dam par ni **byed pa po** 'ga' yang yod pa **ma** yin gyi 'on kyang tha snyad pa kho na'o // byed pa yang tha snyad kyi rgyu mtshan yin gyi 'dir skyed pa por 'dod pa (PG; pa la D) ni ma yin no //

de la shes pa'i 'dzin pa'i nam pa gzung ba'i nam pa las tha dad par bdag tu 'dzin pa'i gzhir gyur pa dga' ba la sogs pa'i rang bzhin gyi (PG: gyis D) 'dzin pa la ni ngas mthong ngo zhes (D135a) byed pa por zhen pa yin zhing / de yang don rtogs pa'i rang bzhin du zhen pa na bsgrub

par bya ba'i rang bzhin du zhen par 'gyur ba (D; gyur pa PG) yin no //

des na bsgrub par (G370) bya ba dang ldan pa'i byed pa po de'i bsgrub par bya ba'i bye brag 'di'i rgyu byed pa 'ga' zhig tu 'gyur dgos la de yang tha snyad par brtag pa'i (DP; pa G) ni mi 'thad do //

gang gi (DP; gis G) phyir khyad par dang ldan pa ma yin pa'i (PG; pa'i om. D) rang bzhin gyi shes pa (PG; shes pa om. D) nyams su myong ba na khyad par can gyi don rtogs par rnam par (DG; rnam par om. P) gzhas pa ni rigs pa dang ldan pa ma yin pa de'i phyir rnam par 'jog pa'i rgyu shes pa'i rang bzhin gyi bye brag nyams su myong bar gyur pa ni byed par 'gyur dgos so //

'dir byed pa de'i (PG; de D) shes pa las tha dad pa med pa nyid ni byed pa po'i dbang du gyur pa nyid yin la / nyams su myong bar gyur pa (DP; 'gyur ba G) nyid kyang bya ba dang ldan pa zhes bya ba yin gyi gzhan ni ma yin no //

gang zhig byed par 'gyur ba 'dzin pa'i rnam pa'i khyad par can gyi rang bzhin ni nyams su myong ba med pa des na / gal te gzung ba'i rnam pa ngar 'dzin pa (PG; pas D) las phyi rol dang bde ba'i rnam pa dang bral ba mi shes pa'i bdag nyid du zhen pa de lta na yang gzhan du mi 'thad pas na rjes su dpag pa las shes pa'i ngo bo de (D; don PG) dang 'dra ba'i rang bzhin du bzhag pa (P157a) yin gyi mngon sum las ni ma yin no //

gzung ba'i rnam pa 'dra ba'i bdag nyid can shes pa'i rang bzhin du mngon sum gyis ni nges pa ma yin gyi / 'on kyang don gyi khyad par rtogs pa gzhan du mi 'thad pas rjes su dpag pa yin no //

rig bzhin pa'i 'dra ba de yang shes pa las tha mi dad pa yin na shes pa don nges par (PG; pa D) 'dzin par 'jog par byed pa yin no //

de'i phyir 'dir rang gi ngo bo nyid kyis byed pa nyid du shes pa'i byed pa ni med (G371) kyi 'on kyang byed pa po'i bya ba'i khyad par can mthong ba las rjes su dpag (D; dpags PG) pa yin zhing de las kyang gtsor gyur pa'i bsgrub par bya ba la 'di'i bya ba rjes su dpag (D; dpags PG) pa yin no //

byed pa po'i bdag nyid kyang shes pa'i bdag (DG; 'dag P) nyid (kyang ... bdag nyid *dittography* G) kyi phyir dang / shes pa'i bdag nyid du nyams su myong ba'i bya ba dang ldan pa zhes bya ba yang rjes su dpag par bya ba yin te / mngon sum gyis ni gzung ba'i rnam pa (pa *conj.*; par DPG) shes pa'i ngo bor nges pa ma yin pa'i phyir ro //

■ dadhānaṃ tac ca tām ātmani arthādhigamanātmanā // savyāpāram ivābhāti vyāpāreṇa

svakarmani の註釈

(D135a7, P157a5, G371,3) bye brag tu rnam par 'jog pa'i rgyu ni de'i bdag nyid du nyams su myong (D135b1) ba yin gyi gzhan gyi rang bzhin du ni ma yin pas na de ci'i phyir gang gi phyir sgrub par byed pa nyid du ma mthong ba 'di ji (D; om. PG) ltar sgrub par byed pa yin zhes brjod / byed pa po'i bya ba mthong ba'i phyir na 'di nyid gtsor gyur pa'i bsgrub par bya ba'i yan lag tu rjes su dpag (D; dpags PG) pa yin la / byed pa po'i rang bzhin nyid kyang byed pa po'i gzhan gyi dbang dang / de'i bdag nyid du nyams su myong ba yang bya ba dang ldan pa yin par bstan pa'i phyir / **de yi bdag nyid 'dzin de ni** // zhes smos te / don dang 'dra ba nyid '**dzin** pa'i shes pa byed pa por gyur pa **de'o** // 'dis ni bya ba dang ldan pa dang byed pa po'i dbang du gyur pa brjod pa yin no //

nges pa'i **don rtogs pa** de nyid kyi **bdag nyid kyi bya ba** gang yin pa'i bya ba des **bya ba dang** (P157b) **bcas par** gtsor gyur pa'i bsgrub par bya ba dang ldan par **snang** ngo //

de'i don ni 'di yin te / gang gi phyir 'dra ba'i dbang gis byed pa po shes pa'i don nges par 'dzin pa bzhin du snang ba de'i phyir / de byed pa por shes pa yin (G372) gyi mngon sum gyis ni ma yin no //

**rang gi las** te yul nas (PG; zhes D) bya ba'i **las la'o** // **de lta** (de lta D; lha PG) **bu'i** sgra sbyar ba ni chos thams cad byed pa med pa'i phyir ro //

■ tadvaśāt tadvyavasthānād の註釈

(D135b4, P157b2, G372,1) bsgrub par bya ba dang byed pa dag tha dad pa med na 'dra ba byed pa nyid ji ltar yin zhe na / **de'i** zhes smos te 'dra ba'i **dbang gis** te nyams su myong bas so // gang gi phyir shes pa la gnas pa'i 'dra ba myong ba de'i phyir shes pa **de** sngon po'i don rtogs par nges pa yin na / de'i phyir 'dra ba (PG; ba'i D) ni rnam par 'jog par byed pa ni (byed pa ni *haplography* G) byed pa yin no // nges pa'i shes pas rnam par gzhag (D; bzhag PG) pa na yang shes pa de nyid 'bras bu yin pa de'i phyir rtogs pa'i cha ni 'bras bu yin la / 'dra ba'i cha ni sgrub par byed pa yin no //

■ ity antaraślokāḥ の註釈

(D135b6, P157b5, G372,3) snga na med pa'i don brjod pa'i phyir **bar skabs** par ma dor

#### 4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト

'phros pa'i **tshigs su bcad pa'o** //

## 5. ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト

### ■ 導入

(D196a4, P232b3) de ltar mngon sum (P232b4) gyi rab tu dbye ba bshad nas tshad ma'i 'bras bu'i (D; bu P) rab tu byed pa bshad par rtsom ste / yul brtag pa ni sngar mngon sum dang lkog tu gyur pa dag gi dbye bas kyang bstan la / le'u gnyis pa nas (P232b5) kyang ston par 'gyur ro //

### ■ kim punar asya pramāṇasya ... の註釈

**yang** zhes bya ba ni tshad ma spyi'i rab tu byed pa dang mngon sum gyi rab tu byed pa dag bsdu ba'o //

tshad ma'i mtshan nyid **gang las** tshad ma 'di'i **gzhal bar bya ba rtogs pa** dang (P232b6) **bar chad med pa** ste / tshad ma gang yod pa tsam gyis gzhal bar bya ba rtogs pa **de nyid 'thob pa'o** //

### ■ v. 34 の註釈

(D196a6, P232b6) de nyid gang zhe na / **de la** zhes bya ba smos te / tshad ma zhes (P; zhes bya D) bstan pa **de la'o** // (P232b7) 'di ni sngon po rtogs pa'o zhes don dang shes pa dag so sor nges pa'i **'brel ba byed pa'o** //

### ■ na hi kriyāsādhanaṁ ity eva ... (≡ PV v. 301) の註釈

(D196a7, P232b7) gal te dbang po dang rtags dag kyang rtogs par byed pa nyid ma yin nam zhe na / **bya ba sgrub par byed pa'i phyir** (P232b8) **te** zhes bya ba la sogs pa smos te / tshad ma nyid ni byed pa'i don nyid yin na gang la bya ba dang / gang las 'ongs pa dang **gang gi phyir** zhes (D196b1) bya ba kun kyang **bya ba sgrub par byed pa** nyid yin mod kyi / (P233a1) byed pa nyid ni ma yin gyi / 'on kyang 'bras bu **gang** byed pa **gang** yod pa tsam **las** yin pa de byed pa nyid yin no // de ltar na dbang po la sogs pa yod pa tsam gyis gzhal bar (P233a2) bya ba rtogs pa mi 'grub kyi / don dang 'dra ba gang yod pa tsam gyis so //

### ■ tatrānubhavamātreṇa ... (≡ PV III 302) の註釈

gal te 'dra ba med kyang don rig pa nyid tshad ma yin no zhe na / **nyams su myong ba tsam ni** (anubhavamaatra) zhes smos te / don ni don gang (P233a3) dang (P; dang yang D) yul dang yul can nyid du 'brel ba'i rgyu mtshan med pa nyid du **'dra ba'i bdag nyid** yin pa'i phyir / las dang byed pa'i rang bzhin gzhas par mi rung bas (D196b3) don dang 'dra ba gang yang yul **'di'i shes pa** (P233a4) **'di'o zhes** 'dra ba des yul dang yul can so sor nges pa'i las dang byed pa **rnam par 'byed pa** ste / de yang don rtogs pa'i **bdag nyid du gyur pa** yin no //

■ anātmabhūtaś ca ... (≡PV III 303) の註釈

(D196b3) **sogs pa'i** (aadi) sgras ni don la lta (P233a5) ba dang / bye brag tu byed pa'i shes pa la sogs pa gzung ngo // de dag **yod kyang** shes pa las gzhan du gyur pa'i las de yul de dag gis shes pa'i bdag nyid las gzhan ma (P; la D) yin pa don rtogs pa'i (P233a6) rang bzhin gyi bya ba'i bye brag 'di sngon po rtogs pa nyid do zhes nges par nus pa ma yin no //

tshad ma ni byed pa po'i don nyid kyis yin zhing / byed pa po'i yang **bya ba'i rgyu mtshan gyis byed pa po'i de kho na nyid yin** (P233a7) la / dbang po la sogs pa shes pa'i bdag nyid ma yin pa de las **kyang** shes pa 'dis sngon po rtogs so zhes bya ba **de'i bye brag mi 'grub pa'i phyir** ro //

(D196b5, P233a6) gal te de'i bye brag med kyang dbang po la sogs pa (P233a8) las shes pa gsal ba la sogs pa'i bye brag yod do zhe na / gsal ba la sogs pa'i **bye brag yod kyang** las dang byed pa'i **yan lag ma yin pas** na shes pa des **byed pa po'i** (D; po P) 'grub pa **ma yin pa'i phyir** de dag (P233b1) tshad ma nyid ma yin no //

■ tasmād yato 'syātmabhedād ... (≡PV III 304) の註釈

yul **'di** shes pa **'di'i las su nges par sgrub** (P; 'grub D) **par byed pa** de tshad ma nyid yin no //

■ na ceyam arthaghaṭanā ... の註釈

de yang gang zhe na / **shes pa la** (j.jaanasya) zhes bya ba smos te / **don dang 'dra ba 'di las gzhan mi** (P233b2) **srid** de / don dang mi 'dra na de rtogs par mi rung ba'i phyir ro //

■ na hi paṭumandatādibhiḥ ... の註釈



gal te dbang po la sogs pa'i dbang gis shes pa gsal ba la sogs pa yod do zhe na /

**dbang po la sogs pa'i gsal** (*em.*; g-yeng DP) **ba dang** zhes (P233b3) bya ba la sogs pa (D197a1) smos so // dbang po la sogs pa de don 'di'i rtogs pa ni 'di'o zhes las dang byed pa'i 'brel ba 'grub pa'i rgyu ma yin pa'i phyir nye ba'i rgyu med pa'o //

#### ■ asty anubhavaviśeṣo 'rthakṛtaḥ ... の註釈

gal te nam pa med par (P233b4) smra ba dag (D; *om.* P) don gyi nam pa med kyang **don** gyi bye brag gis **byas pa** ste / bskyed pa'i shes pa'i rang bzhin gyi bye brag las las dang byed pa'i 'brel ba 'di rtogs kyi 'dra ba las ni ma yin no zhe na / ci ste shes (P233b5) pa'i bye brag de'i mtshan nyid **mi ston** te bstan par byos shig /

gal te myong ba'i bye brag **de 'di'o zhes bstan par mi nus so** zhe na / **rang nyid kyis kyang** zhes bya ba la sogs pa smos so //

#### ■ v. 35 の註釈

(D197a3) don gyi (P233b6) nam pa las gzhan pa'i **sgrub byed gzhan yin** te / dbang po la sogs pa don gyi nam pa ma yin pa dag las so //

**las ni yul lo** // 'brel ba'i yul ni 'di'i rtogs pa ni shes pa 'di'i (P233b7) shes so //

#### ■ vv. 36–37 の註釈

(D197a3) 'brel ba don gyi nam pa **de yang** don de shes pa'i **bdag nyid du gyur pa nyid** do // de'i phyir don gyi nam pa de las **don gzhan** tshad ma'i '**bras bu min** / 'bras bu'i bdag nyid dang tshad (P233b8) ma'i bdag nyid gcig pa de'i phyir 'bras bu'i bdag nyid du gyur pa'i (D; pa P) '**dzin pa** ste / tshad ma **de yang** rang gi yul la byed pas na (P; byed pas na *om.* D) **byed pa dang bcas pa** i phyir byed pa po nyid do //

ci zhig ce na / **don** (P234a1) **rtogs pa'i bdag nyid kyis** de'i yul de rtogs par byed pa'i phyir ro //

**lta bu** zhes bya ba'i sgras ni ji ltar 'jig rten na grags pa rtsva'i rgyun dang / de gcod pa'i zor (P234a2) ba dang / de dum bu gnyis su byed pa dang 'bras bu dag tha dad pa'i bdag nyid med kyang byed pa dang (D; *om.* D) 'bras bur snang bas na / byed pa zhes gzhas go zhes ston to //

5. ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト

(D197a6) de nyid bshad pa ni **rang gis** te / (P234a3) dngos po'i ngo bo nyid kyis (D; kyi P)  
'bras bu dang byed pa tha dad pa **byed pa can ma yin yang** don gyi rnam pa **de'i dbang gis** 'bras  
bu **de rnam par gzhag pa'i** (D; *om.* P) **phyir** ro //

## 6. プトン註のチベット語テキスト

0. tshad 'bras bshad pa

(130,3) gsum pa ni / ku ma' ri las /

gang zhig yul gcig 'dod pa na // tshad ma 'bras bu nyid smra ba //  
de la bsgrub bya sgrub byed dag / tha dad 'jig rten pa yis gnod //  
ji ltar spyod byed seng ldeng la // babs pas pa la sha mi 'chad //  
de bzhin 'jig rten na gcod dang // sta re gcad bya gcig ma yin // (ŚV pratyakṣa vv. 74f.)<sup>1</sup>

zhes phyi rol pa dag tshad 'bras rdzas gzhan du 'dod pa dgag pa dang / mdo las /

bya dang bcas pa rtogs pa'i phyir // 'bras bu nyid yin 'jal byad la //  
tshad ma nyid du 'dogs pa ste // bya ba med pa 'ang ma yin no // (PS I v. 8)

zhes gzhung bshad pa'i phyir tshad ma'i 'bras bu ston pa la dris lan gyis (1) tshad 'bras spyir bstan / (2) don yod smra'i tshad 'bras rnam par gzhag / (3) de ldog nas sems tsam pa'i tshad 'bras kyi tshul gzhag pa las dang po ni /

1. tshad 'bras spyir bstan

(130,6) tshad ma spyi dang mngon sum bsdubs na **yang** bshad ma thag pa'i **tshad ma 'di'i** gdon mi za bar bya dgos pa'i 'bras bu **gang yin** / don rtogs na 'jug pa de las kyang thob pa'i phyir / don rjogs ba'i phyi ba ni don thob pa'i bya ba yin pas gdon mi za bar dgos pa'i 'bras bu don thob byed yin no // 'jal ba'i bya ba byed pa tshad ma yin la 'jal ba'i bya ba 'bras bu yin (131,1) pas tshad 'bras ni las nges par gcod pa'o // zhes bstan pa'i phyir gzhal bya rtogs pa'o zhes gsumgs so //

**gzhal bya rtogs pa de ni shes pa yin la / de yang** tshad ma'i 'bras bu yin pa'i phyir de ni de las tha dad pa'i **tshad ma gang zhig yin** zhe na / slob dpon gyis 'dir smras tshad 'bras bskyed bya

---

<sup>1</sup> Taber [2005: 154]: viṣayaikatvam icchāṃs tu yaḥ pramāṇaṃ phalaṃ vadet / sādhyasāadhanayor bhedo laukikas tena bādhitaḥ // chedane khadiraprāpte palāśe na cchidā yathā / tathaiva paraśor loke cchidayā saha naikatā //, cf. Taber [2005: 79], 戸崎 [1992a: 307f.].

## 6. プトン註のチベット語テキスト

skyed byed kyi rgyu 'bras min gyi shes pa gcig la rnam par gzhag bya dang nam par 'jog byed kyi tshad 'bras mi 'gal lo zhes ston pa / byed pa po rang gi byed brag gis rnam par gzhag bya don rtogs pa byed brag tu sgrub par byed pa **gang las** / don rtogs pa bye brag tu rnam par 'jog pa'i rgyu mtshan ltogs par bya ba gzhan gyis **bar cad med par gzhal bya rtog pa 'di'i** gzhal bya rtogs pa **de nyid** de (*em.*; da) rnam par gzhag pa 'grub par byed pa ni tshad ma'o //

### 2. don yod smra'i tshad 'bras rnam par gzhag

(131,4) gnyis pa la gnyis te / (2.1) don dang 'dra bas don rtogs 'jog byed du bstan / (2.2) de las gzhan 'jogs byed yin pa dgag pa las /

#### 2.1. don dang 'dra bas don rtogs 'jog byed du bstan

(131,4) dang pa la / (2.1.1) bstan (2.1.2) bshad (2.1.3) 'dra ba sgrub byed du 'jog pa'i rgyu mtshan dang gsum gyi dang po ni /

##### 2.1.1. bstan

(131,5) rgyu mtshan gzhan gyis bar ma chod pa'i rang gi byed brag gis byed brag tu byed pa po ni byed pa dang don gyi khyad par rtogs pa 'bras bu'i tshul gyis gnas pa **de la** shes pa **'di'i** phyi rol gyi **don dang 'brel pa** ste don rtogs pa'i sgrub par byed pa ni chos can / phyi **don gyi rang bzhin** te don dang 'dra ba **min pa** gzhan don rtogs 'jog byed **med** de / don dang 'dra ba las gzhan gyi shes pa don dang 'brel pa nges par mi 'grub pa'i phyir /

des na **gzhal bya** phyi rol gyi don gyi **rang bzhin** te rnam pa 'dra ba nyid chos can / **gzhal bya** phyi rol gyi don **rtogs pa'i tshad ma** ste sgrub byed yin te / de phyi rol gyi don rtogs su 'jog byed yin la don rtogs pa'i 'bras bu yin pa **de'i phyir** ro //

##### 2.1.2. bshad

(131,7) gnyis pa la / (2.1.2.1) bsgrub bya sgrub byed so sor bstan / (2.1.2.2) rnam 'jog gis sgrub [132,1] byed bye brag tu bshad pa'i dang po ni /

##### 2.1.2.1. bsgrub bya sgrub byed so sor bstan

## 6. プトン註のチベット語テキスト

(132,1) don rtogs skyd pa'i rgyu de nyid kyis don rtogs pa'i bya ba bskyed nus na 'jog kyang nus pas 'dra ba kho na sgrub byed du ma nges so zhe na /

**gang gi phyir bsgrub par bya ba yin pa'i phyir thams cad** thams cad kyis bsgrub byar 'gyur ba ma yin la / sgrub par byed pa'i rang bzhin yin pa'i phyir sgrub byed thams cad gang dang gang bya ba yin pa de **thams cad kyis (conj.; kyis) sgrub par byed pa ni ma yin gyi** khyad par ston pa **'on kyang** sgrub byed **gang las** bya ba **gang 'grub pa** de ni sgrub byed yin no //

des na 'ga' zhig rnam shes skyed pa'i bya ba sgrub byed yin gyi rnam 'jog min / 'ga' zhig las so sor nges par rnam par 'jog pa'i sgrub byed yin gyi skyed byed min pas grub byed so sor nges la de bzhin du bya ba yang so sor nges pas skyed byed las gzhan pa'i rnam par 'jog byed tshol ba yin no //

2.1.2.2. rnam 'jog gis sgrub byed bye brag tu bshad pa

(132,4) gnyis pa la / (2.1.2.2.1) shes pa'i bdag nyid kyis byed brag byed brag sgrub beyd du bstan / (2.1.2.2.2) de don dang 'dra ba las bzhan min par bstan pa'i dang po la /

2.1.2.2.1. shes pa'i bdag nyid kyis byed brag byed brag sgrub beyd du bstan

(132,4) (2.1.2.2.1.1) rig tsam gyis mi 'grub par las so so la nges pa'i bdag nyid du 'gyur dgos pa dang / (2.1.2.2.1.2) de las gzhan byed brag tu byed pa po yin pa dgag / (2.1.2.2.1.3) des na shes pa'i bye brag don dang 'brel par gyur pa sgrub byed du bstan pa'i dang po la /

2.1.2.2.1.1. rig tsam gyis mi 'grub par las so so la nges pa'i bdag nyid du 'gyur dgos pa

(132,5) gang gis sgrub byed yin pa de de 'dra'i sgrub par gzhag pa **de la** don dang 'dra ba med kyang don rig pa nyid tshad ma yin no zhes bye brag tu smra ba'am / grangs can sems na /

**nyams su myong ba** 'dzin pa'i rnam pa rig **tsam** ni chos can / don rtogs byed du 'jog byad min par thal / **las** te yul gzugs sgra la sogs **thams cad la 'dra ba** ste khyad med cing yul can **shes pa** thams cad la khyad par med pa'i **bdag nyid** can pa'i phyir / 'don na / don gyi bye brag sngon po rtogs par grags pa nyams par 'gyur ro //

des na myong ba'i rang bzhin du khyad par med pa'i (133,1) shes pa 'di ni gang gis yul **'di ni** sngon po 'di na'o 'di ni ser po'o zhes **las** te yul sngo ser la sogs **so so la** tha dad du **rnam par**

'byed cing yul nge pa de'i bdag nyid du 'gyur bar bya dgos so //

2.1.2.2.1.2. de las gzhan byed brag tu byed pa po yin pa dgag

(133,1) gnyis pa la gsum ste / (2.1.2.2.1.2.1) shes pa'i rgyu yul la bye brag med pas dang /  
(2.1.2.2.1.2.2) shes pa'i rang gi ngo bo la khyad par med pas dang / (2.1.2.2.1.2.3) 'bral pa can  
ma shes pas bye brag tu byed pa po ma yin pa'i dang po ni /

2.1.2.2.1.2.1. shes pa'i rgyu yul la bye brag med pas

(133,2) shes pa khyad par med kyang rkyen tha dad dang 'brel bas khyad par can du rtogs pa  
bzhin du shes pa yang rgyu tha dad kyis rnam par 'byed do zhe na /

ni ste gang gi phyir bdag nyid ma yin pa byed brag tu nges byed min pa de'i phyir / **dbang  
po dang** phyi'i **don dang** dbang don **phrad pa** ste 'brel pa dang / **la sogs pa**'i sgras yid la sogs pa  
shes pa'i **rgyu rnams la** re zhig bye brag med cing gsal mi gsal la sogs pa'i **bye brag yod du zin  
kyang** de rnams chos can / **las** te yul sngo sor la sogs **kyi bye brag** tha dad **la bdag nyid tha  
dad med** cing mtshungs pa'i **shes pa** de don 'di rtogs kyi 'di ma rtogs so zhes **bye brag tu nges  
par byed pa ma yin te** / de dag shes pa de'i rgyu mtshan yin gyi shes pa de'i bdag nyid ma yin  
pa'i phyir / des na shes pa don dang 'brel bar byed par mi 'gyur ro //

2.1.2.2.1.2.2. shes pa'i rang gi ngo bo la khyad par med pas

(133,5) gnyis pa ni / shes pa'i bye brag med kyang rang gi ngo bos bye brag tu nges par byed  
do zhe na /

shes pa'i rang gi ngo bo chos can / don rtogs bye brag tu sgrub byed min par thal / rang gi  
bye brag gis bya ba'i bye brag byed pa ma yin par thams cad la khyad par med pa'i phyir / khyab  
pa yod de / sgrub par **byed pa'i de nyid ni bsgrub par bya ba**'i bye brag sgrub byed kyi **rgyu  
mtshan can yin pa'i phyir** ro //

2.1.2.2.1.2.3. 'bral pa can ma shes pas bye brag tu byed pa po ma yin pa



## 6. プトン註のチベット語テキスト

(133,7) gsum pa la / dbang po la gnas pa'i khyad par 'brel pa can gyis shes pa bye brag tu byed do zhe na /

dbang po la gnas pa'i khyad par 'brel pa can de chos can / bya ba sngo ser **de'i khyad par yang mi 'grub** par thal / sngo ser la sogs pa la **khyad par med** pa thun mong pa yin pa'i phyir ro //

'on te don la gnas pa'i rnam pa'i khyad par gyi 'brel pa can des shes pa bye brag tu byed cing thun mong ma yin pa yin no zhe na /

don la gnas pa'i sngon po la sogs pa'i rnam pa'i **khyad par yod kyang** / de chos can / shes pa **de'i** bye brag tu **byed pa ma yin par** thal / shes pa **de'i** khyad par rnam 'jog gi **yan lag ma yin pa'i phyir** ro //

rtags grub ste / de bem po yin pas shes pa'i khyad par ma grub par mi shes pa'i phyir ro //

2.1.2.2.1.3. des na shes pa'i bye brag don dang 'brel par gyur pa sgrub byed du bstan pa

(134,3) gsum pa la / shes pa las gzhan shes pa bye brag tu byed pa min pa de'i phyir / shes pa **'di'i bdag nyid** de rang bzhin **gyi bye brag gang las** sngon po **'di'i rtog pa ni 'di** (*conj.*; 'dis) **yin zhes** don gzhan rnam par bcad nas shes pa **'di'i las** yul gcig **la nges pa** ste 'brel pa **'dir 'gyur ba** bdag nyid kyi bye brag **de ni** don rtogs bye brag tu **sgrub par byed pa yin no** //

2.1.2.2.2. de don dang 'dra ba las bzhan min par bstan pa

(134,4) gnyis pa la / rtags dgod / (2.1.2.2.2.1) phyogs (2.1.2.2.2.2) chos sgrub pa'i dang po ni /

2.1.2.2.2.1. phyogs

(134,4) de don 'dras byas pa ci zhe na /

**shes pa'i don dang 'brel pa** ste rtogs pa'i tha snyad **'di** chos can / shes pa don dang 'dra bas bzhag pa yin te / 'di la 'jog byed cig yod la / **shes pa don dang 'dra ba las gzhan las ni** 'di 'jog **srid pa ma yin** pa'i phyir ro //

2.1.2.2.2.2. chos sgrub pa

## 6. プトン註のチベット語テキスト

(134,5) gnyis pa la / (2.1.2.2.2.1) chos sgrub pa dang / (2.1.2.2.2.2) don gyis byas pa'i  
bye brag 'jog byed yin pa dgag pa'i dang po ni /

### 2.1.2.2.2.1. chos sgrub pa

(134,6) dbang po gsal mi gsal dang yul nye ring la sogs pa'i bye brag gis byas pa'i shes pa la  
gnas pa'i bye brag ni don rtogs bye brag tu nges byed yin no zhe na /

**dbang po gsal ba dang mi gsal ba nyid** dang / **la sogs pa'i** sgras goms pa che chung dang  
yul nye ring la sogs pa'i **rang gi bye brag gis** shes pa dga' mi dga' la sogs pa'i **bye brag tu byed**  
**pa po yin yang** / de dag chos can / **de lta** don 'di'i (135,1) rtogs pa 'di'o zhes shes pa **don dang**  
**'brel par byed pa ni ma yin te** / **de la** shes pa don dang **bnye ba** ste 'brel pa'i **rgyu mtsahn med**  
**pa'i phyir ro //**

### 2.1.2.2.2.2. don gyis byas pa'i bye brag 'jog byed yin pa dgag pa

(135,1) gnyis pa ni / de bye brag tu byed po min yang phyi rol **don gyis byas pa'i nyams su**  
**myong ba'i bye brag gang las** don nges par rtogs pa'i **rtogs pa 'dir 'gyur ba yin gyi don dang**  
**'dra ba las ni ma yin no zhe na /**

de ltar khas blang spa'i gnas skabs **da ni** don 'dra ba las gzhan don gyis byas pa'i shes pa'i  
bye brag **yod par** tha dad du bya ba'i yul gyi **rang bzhin ji ltar mi ston** ste ston cig / don gyis  
byas pa'i nymas myong gi khyad par **de ni 'di'o zhes** mngon dum du rwa nas bzung ste **bstan**  
**par nus pa ma yin te** / nor bu'i gzugs mi mkhas pas mthong yang khyad par bstan mi nus pa  
bzhin /

'on kyang don nges par rtogs pa'i rgyu mtshan yin no zhe na /

don gyis byas pa'i nyams myong gi bye brag **'di'i bdag nyid** chos can / myong ba'i rang  
bzhin **'di ni** sngon po **'di'i yin gyi** / gzhan ser po **'di'i ni ma yin no zhe dngos po** ste shes pa'i  
rang bzhin **rnam par 'jog pa** ste nges pa'i don rtogs par byed pa min par thal / de'i 'di'o zhes  
**nges par rtogs pa med** pa'i phyir / **legs par rnam par gzhaq pa yin //** zhes bsting tshig go /

'di'i zhes ma rtogs kyan mig la sogs pa'i rang bzhin rnam par 'jog pa yod pa min nam zhe na /

de ni 'bras bu nges par rtogs nas de rnam par 'jog pa yin la / shes pa ni gzhan gyis rnam par  
'jog pa min gyi rang kho nas so //

'o na 'dra ba yang ma rtogs so zhes na /

gzung ba'i rnam pa nyams su myong bas 'di ni 'dra ba'o // zhes zhen pa med par don no zhes  
zhen la 'dra bar rjes dpag gis nges par byed do //

### 2.1.3. 'dra ba sgrub byed du 'jog pa'i rgyu mtshan

(135,7) gsum pa ni / shes pa phyi rol gyi **gzhal bya'i rang bzhin** lta bu ste 'dra ba **nyid** chos  
can / phyi rol (136,1) gyi **gzhal bya rtogs pa'i** rnam 'jog gi **sgrub byed** yin te / phyi rol gyi  
gzhal bya rtogs pa'i rnam 'jog gi sgrub byed gcig yod la 'di las gzhan gyis phyi rol gyi gzhal bya  
rtogs par 'jog mi nus pa **de'i phyir** /

rtags grub ste / don rtogs su **sgrub par byed pa** 'dra ba las **gzhan** shes pa las **gzhan** nam  
shes pa yin yang dbang po la sogs pas byas pa'i khyad par yin **na** shes pa **de'i las dang 'drel pa**  
ste nges pa 'di ni sngon po myong ba yin gyi gzhan min no zhes pa lta bur **mi 'grub** ste rtogs pa  
ma yin no //

tshed ma shes pa don dang 'dra ba **de yang** chos can / **'bras bu** don rtogs pa dang **don gzhan**  
**min** te / don rtogs pa **de'i bdag nyid yin** pa **des na** ste de'i phyir /

'o na don dang 'dra ba chos can / don rtogs kyi sgrub byed min par thal / byed pa po gzhan  
gyi dbang dang rang gi bya ba dang ldan pa dang gtso bor gyur pa'i bsgrub bya la nye bar sbyor  
ba ma mthong zhing byed pa po ma mthong ba'i phyir / khyab pa yod de / shing gi tshos par  
sgrub pa bzhin zhe na /

dir rgyu mtshan med par byed pa rtogs pa min la / byed pa la ma brten par bsgrub bya sgrub  
pa'ang min no // byed pa 'ga' zhig ni rang las nyes pa 'ga' zhig gzhan las yin te / byed pa med par  
bsgrub bya mi 'grub pa'i phyir ro // 'dir don dam par byed po 'ga' yang med kyi tha snyad pa yin  
no //

de la mngo sde pa'i lugs la shes pa gzung ba'i rnam pa dang / 'dzin pa'i rnam pa gnyis las  
'dzin pa'i rnam pa bdag 'dzin gyi gzhir gyur pa ni byed pa po yin te / ngas mthong po zhes byed  
por zhen pa'i phyir ro // gzung ba'i rnam pa ni phyi rol don du zhen par byas pa yin yang 'dzin  
rnam las gzhan du mi 'thad pas shes pa'i ngo bo don dang 'dra ba'i rang bzhin du rjes dpag gis  
grub bo // 'dra ba de yang zhes pa'i rang bzhin du don gyi khyad par rtogs pa gzhan du mi 'thad  
pas dpog go // 'dra ba (137,1) de rang gi ngo bos byed par shes pa min gyi byed pa po'i bya ba  
mthong ba'i rtags las grub cing / de las kyang gtso bor gyur pa'i bsgrub bya la bye bar sbyar bar  
dpags so //

## 6. プトン註のチベット語テキスト

des na byed pa don dang 'dra ba **de** byed pa po '**dzin pa**'i nram pa **de'i bdag nyid** yin pas  
byed pa po'i dbang dang / rang gi bya ba nyams su myong ba dang ldan pas don nges par 'dzin pa  
de ni nges pa'i **don rtogs pa'i bdag nyid kyi byed pas rang gi las** yul yin rtogs par **byed pa**  
**dang bcas pa lta bur snang** gi / don dam par bya ba dang byed pa med de / skad cig ma la bya  
byed med pa'i phyir / bya ba dang byed pa ngo bo gcig pas 'dra bar dang nyid don dam par **byed**  
**pa min yang** shes pa yul gyi nram pa can du skyes pa'i 'dra ba **de** nyams su myong ba'i **dbang**  
**gis** yul sngon sogs rtogs pa **de** nram par **bzhag pa'i phyir** shes pa gcig la rtogs pa'i cha 'dras su  
'dra ba'i cha sgrub byed yin te / dpar na / bu pha'i gzugs 'dra ba skyes pa la pa'i gzugs 'dzin zhes  
tha snyed byed pa bzhin no //

rnam 'dral las /

dper na 'bras bu rgyu nams kyi // bdag nyid 'dra bar byung ba'i phyir //

bya ba bdag nyid ma yin yang // 'jig rtan rgyu gzugs 'dzin zhes brjod // (PV III 309)

ces so //

'dra ba tshad ma ste de'ang tshad ma'i mtshan nyid mtshon bya dang gnyis ka min pa la sogs  
min gyi tshad ma'i mtshan gzhi la tshad mar brjod la / don rtogs pa 'bras bu ste de'i dbang gis  
grub pa'i chos so //

de gnyis bsgrub bya sgrub byed du 'jog pa ni bskyed bya skyed byed dnag yul yul can dang  
go byed go bya ma yin gyi nram par gzhaq 'jog yin la / de yang 'dogs pa'i rgyu mtshan dang  
btags pa'i chos yin no zhes ma ha' lo tsa' ba gsung ngo //

## 参考文献

### 一次文献（略号とテキスト）

- AK I      Abhidharmakośa (Vasubandhu): *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, Chapter I: Dhātunirdeśa*, ed. Yasunori Ejima, The Sankibo Press, Tokyo, 1989.
- AKBh I    Abhidharmakośabhāṣya (Vasubandhu): see AK I.
- AP        *Apoḥaprakaraṇa* (Dharmottara): see Frauwallner [1937].
- D         Derge edition: 『デルゲ版チベット大蔵経論疏部 東京大学文学部所蔵』, 東京大学文学部印度哲学印度文学研究室編, 全 43 巻, 世界聖典刊行協会, 1977–1989.
- DhPr      *Dharmottarapradīpa* (Durvekamiśra): *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a sub-commentary of Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary of Dharmakīrti's Nyāyabindu*, ed. Paṇḍita Dalsukhbhai Malvania, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1955.
- G         Golden manuscripts: *Dge'-ldan Golden Manuscripts bsTan 'gyur*, 225 vols., 1990.
- Gītā      *Bhagavadgītā: The Mahābhārata*, eds. V. S. Sukthankar & S. K. Belvalkar, 7 vols., Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1947, 114–188.
- HB        *Hetubindu* (Dharmakīrti): see Steinkellner [1967].
- J         *Pramāṇavārttikālaṅkāraṭīkā* (Jayanta): D 4222 (ne), P 5720 (ne).
- M         See PVA<sub>M</sub>.
- N         Narthang edition: bsTan 'gyur (sNar thang).
- NB        *Nyāyabindu* (Dharmakīrti): see DhPr
- NBT      *Nyāyabinduṭīkā* (Dharmottara): see DhPr.
- NBh      *Nyāyabhāṣya* (Vātsyāyana): see NS.
- NBh<sub>T</sub>    *Nyāyabhāṣya* (Vātsyāyana): *Gautamīyanyāyadarśana with Bhāṣya of Vātsyāyana*, ed. Anantalal Thakur, Indian Council of Philosophical Research, New Delhi, 1997.
- NK        *Nyāyakośa: Nyāyakośa or Dictionary of Technical Terms of Indian Philosophy*, ed. Mahāmahopādhyāya Bhīmācārya Jhalakīkar, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1978.

- NM *Nyāyamañjarī* (Jayantabhaṭṭa): *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippanī, Vol. I*, ed. S. N. Varadacharya, Oriental Research Institute, Mysore, 1969.
- NM<sub>G</sub> *Nyāyamañjarī* (Jayantabhaṭṭa): *M. M. Sivakumaraśāstri-Granthamālā 5, 3 parts, with Cakradha's Nyāyamañjarī-granthibhaṅga*, ed. Gaurinath Sastri, Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, Varanasi, 1982–84.
- NP *Nyāyapraveśa* (Śaṅkarasvāmin/Dignāga): see Tachikawa [1971].
- NS *Nyāyasūtra: Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyaṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*, eds. Taranatha Nyāya-Tarkatirtha, Amarendramohan Tarkatirtha and Hematakumar Tarkatirtha, 2 vols., Munshiram Manoharlal Publishers, Calcutta, 1936–44.
- NV *Nyāyavārttika* (Uddyotakara): see NS.
- NV<sub>T</sub> *Nyāyavārttika* (Uddyotakara): *Nyāyabhāṣyavārttika of Bhāradvāja Uddyotakara*, ed. Anantalal Thakur, Indian Council of Philosophical Research, New Delhi, 1997.
- P Peking edition: 『影印北京版西藏大藏經』, 西藏大藏經研究会編, 全 168 卷, 鈴木學術財団, 1955–1961.
- Pāṇini *Aṣṭādhyāyī* (Pāṇini): *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, ed. & tr. Sumitra M. Katre, Motilal Banarsidass, Delhi, 1989.
- PP *Prasannapadā* (Candrakīrti): *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna, avec la Prasannāpadā Commentaire de Candrakīrti*, ed. Louis de la Vallée Poussin, Académie Impériale des Sciences, St. Pétersbourg, 1903–1913.
- PPar II *Laghuṣrāmāṇyaparīkṣā* (Dharmottara): see Krasser [1991].
- PS I *Pramāṇasamuccaya*, chapter 1 (Dignāga): *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter I*, ed. Ernst Steinkellner, [www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga\\_PS\\_1.pdf](http://www.oeaw.ac.at/ias/Mat/dignaga_PS_1.pdf), 2005.
- PS II, III *Pramāṇasamuccaya*, chapter 2 and 3 (Dignāga): see 北川 [1965].
- PST *Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā* (Jinendrabuddhi): see Steinkellner et al. [2005].
- PSV *Pramāṇasamuccayavṛtti* (Dignāga): see PS.
- PV *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti): see PVV, 戸崎 [1979] for PV III.
- PVA *Pramāṇavārttikālaṅkāra* (Prajñākaragupta): *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta: Being a commentary on Dharmakīrti's*



- Pramāṇavārtikam*, ed. Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Patna, 1953..
- PVA<sub>M</sub> Sanskrit Manuscript (Manuscript B) of PVA: see Watanabe [1998].
- PVA<sub>O</sub> *Pramāṇavārttikālaṅkāra* (Prajñākara Gupta): see Ono [2000].
- PVP *Pramāṇavārttikapañjikā* (Devendrabuddhi): D 4217 (che), P 5717(b) (che).
- PVṬ(R) *Pramāṇavārttikaṭikā* (Ravigupta) ad PV III: D 4225 (phe), P 5722 (phe).
- PVṬ(Ś) *Pramāṇavārttikaṭikā* (Śākyabuddhi): D 4220 (nye), P 5718 (nye).
- PVV See PVV<sub>S</sub>.
- PVV<sub>S</sub> *Pramāṇavārttikavṛtti* (Manorathanandin): *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika with a Commentary by Manorathanandin*, ed. Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Appendix to *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 24-3, Patna, 1938.
- PVV<sub>M</sub> Sanskrit Manuscript of PVV: *The Sanskrit Commentaries on the Pramāṇavārttikam from the Rāhula Sāṅkṛtyāyana's Collection of Negatives*, 3 vols., Vol. 3 A Sanskrit Manuscript of Manorathanandin's *Pramāṇavārttikavṛtti*, Patna-Narita, 1998.
- PVin I *Pramāṇaviniścaya*, chapter 1 (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Chapters 1 and 2*, ed. Ernst Steinkellner, China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, Beijing - Vienna, 2007.
- PVin I<sub>t</sub> Tibetan Translation of PVin I: see Vetter [1966] (D 4211, N P 5710).
- PVin II *Pramāṇaviniścaya*, chapter 2 (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, chapters 1 and 2*, ed. Ernst Steinkellner, China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, Beijing - Vienna, 2007.
- PVin III *Pramāṇaviniścaya*, chapter 3 (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, chapter 3*, eds. Pascale Hugon and Toru Tomabechi, China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, Beijing - Vienna, 2011.
- PVinṬ(Bu) *Tshad ma rnam par nges pa'i ṭik, Tshig don rab gsal* (Bu ston Rin chen grub): *The Collected Works of Bu-ston*, ed. Lokesh Chandra, 28 vols, New Delhi, 1965–1971, vol. 24.
- PVinṬ(Dh) Tibetan translation of *Pramāṇaviniścayaṭikā*, *Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad* (Dharmottara): D 4229 (dze), P 5727 (dze), G 198 (dze).
- PVinṬ(Dh)<sub>S</sub> *Pramāṇaviniścayaṭikā* (Dharmottara): see Steinkellner and Krasser [1989].
- PVinṬ(Jñ) *Pramāṇaviniścayaṭikā* (Jñānaśrībhadrā): D 4228 (tshe), P 5728 (we).

- rNgog *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad* 『量決択論釈難』 (rNgog blo ldan shes rab): Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang 中国蔵学出版社, 1994.
- S Sāṅkrtyāyana's edition of PVA: See PVA.
- T Tibetan Translation of PVA: D 4221 (the), P 5719 (the).
- 大正 『大正新脩大蔵経』: 『大正新脩大蔵経』, 高楠順次郎他編, 大正新脩大蔵経刊行会, 東京, 1960–1978.
- TrBh *Triṃśikā(vijñapti)bhāṣya* (Sthiramati): *Vijñaptimātratāsiddhi: Deux traités de Vasubandhu: Viṃśatikā et Triṃśikā*, ed. Sylvain Lévi, Librairie Ancienne Honoré Champion, Paris, 1925.
- TrBh<sub>B</sub> *Triṃśikā(vijñapti)bhāṣya* (Sthiramati): *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and Its Tibetan Translation*, ed. Hartmut Buescher, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2007.
- TS *Tarkasaṃgraha* (Annambhaṭṭa): see 宇野 [1996].
- Y *Pramāṇavārttikālaṅkāraṭīkā Suparīśuddhi* (Yamāri): D 4226 (me), P. 5723 (me).

## 二次文献

赤松明彦 (Akamatsu, Akihiko)

- [1984a] 「IV ダルマキールティの論理学」, 『認識論と論理学』(講座・大乘仏教 9), 春秋社, 東京, 183–216.

- [1984b] 「Dharmottara の Apoha 論再考——Jñānaśrīmitra の批判から」, 『印度學佛教學研究』 28–1, 43–45.

赤松明彦・山上證道 (Akamatsu, Akihiko and Yamakmi, Shodo)

- [1988] 「ニヤーヤ学派の知識論」, 岩波講座 東洋思想 第五卷『インド思想 1』, 岩波書店, 東京, 285–322.

Bandyopadhyay, Nandita

- [1979] “The Buddhist Theory of Relation between *Pramā* and *Pramāṇa*,” *Journal of Indian Philosophy* 7, 43–78.

van Bijlert, Vittorio A.

- [1989] *Epistemology and Scriptural Authority*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien.
- Chu, Junjie
- [2006] "On Dignāga's Theory of the Object of Cognition as Presented in PS(V) I," *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 29–2, 211–253.
- Dreyfus, George B. J.
- [1997] *Recognizing Reality: Dharmakīrti's Philosophy and Its Tibetan Interpretations*, State University of New York Press, Albany.
- Dunne, John D.
- [2004] *Foundation of Dharmakīrti's Philosophy*, Wisdom Publications, Somerville.
- Eckel, Malcolm David
- [2008] *Bhāviveka and His Buddhist Opponents*, Harvard University Press, Cambridge.
- Eltschinger, Vincent
- [2010] "Dharmakīrti," *Revue Internationale de Philosophie*, 64, 397–440.
- Franco, Eli
- [1993] "Did Dignāga Accept Four Types of Perception?," *Journal of Indian Philosophy*, 21, 295–299.
- [1997] *Dharmakīrti on Compassion and Rebirth*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien.
- [2004] "Towards a Critical Edition and Translation of the Pramāṇavārttikālamkārabhāṣya: A Propos Two Recent Publications," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 48, 151–169.
- [2005] "On Pramāṇasamuccayavṛtti 6AB Again," *Journal of Indian Philosophy*, 33, 631–633.
- Frauwallner, Erich
- [1937] "Beiträge zur Apohalehre. II. Dharmottara," *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Südasiens*, 44, 233–287.
- [1957] Review of Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārtikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta (Being a Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārtikam) by Tripiṭakāchārya Rāhula Sāṅkṛityāyana, *Journal of the American Oriental Society*, 77–1, 58–60.

参考文献

- [1961] "Landmarks in the History of Indian Logic," *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens*, 5, 125–148.
- [1986] "Once Again on Dharmakīrti's Deviation from Dignāga on *pratyakṣābhāsa*," *Journal of Indian Philosophy*, 14–1, 79–97.
- 福田洋一 (Fukuda, Yoichi)
- [1988] 「ケドゥプジェの『プラマーナ・ヴァールティカ』注釈における自己認識と他者認識の設定方法について」, 『日本西藏学会々報』 34, 8–15.
- [1999] 「ダルマキールティにおける *adhyavasāya* について」, 『印度學佛教學研究』 47–2, (91)–(96).
- [2003] 「初期チベット論理学における *mtshan mtshon gzhi gsum* をめぐる議論について」, 『日本西藏学会々報』 49, 13–25.
- 船山徹 (Funayama, Toru)
- [2000a] 「カマラシーラの直接知覚論における「意による認識」(*mānasa*)」, 『哲學研究』 569, 105–132.
- [2000b] "Two Notes on Dharmapāla and Dharmakīrti," *Zinbun*, 35, 1–11.
- [2011a] 『中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性』, 平成 19 年度～平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書（課題番号 19320010）.
- [2011b] 「インド中国における仏教文献の伝播と仏教徒の地理的移動に関する基礎知識」, 船山 [2011a] 所収, 3–62.
- [2012] 「第三章 認識論——知覚の理論とその展開」, 『認識論と論理学』（シリーズ大乘仏教 9）, 春秋社, 東京, 91–120.
- 袴谷憲昭 (Hakamaya, Noriaki)
- [1976] 「唯識の学系に関するチベット撰述文献」, 『駒沢大学仏教学部論集』 7,
- 原田和宗 (Harada, Waso)
- [1999] 「〈経量部の「単層の」識の流れ〉という概念への疑問（IV）」, 『インド学チベット学研究』 4, 22–66.
- 服部正明 (Hattori, Masaaki)
- [1959] 「ディグナーガの知識論（完）」, 『哲學研究』 40–5, 372–399.
- [1968] *Dignāga, On Perception*, Harvard University Press, Cambridge.

- [1969] 「論証学入門—ニヤーヤ・バーシュヤ第一篇」, 世界の名著 I 『バラモン経典 原始仏典』, 中央公論社, 東京, 331-397.
- Hugon, Pascale
- [2009] "Table of Phya pa Chos kyi seng ge's Tshad ma rnam nges bsdu don," version 1, [http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/hugon\\_table\\_version1\\_2009.pdf](http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/hugon_table_version1_2009.pdf).
- 稲見正浩 (Inami, Masahiro)
- [1992] 「『プラマーナ・ヴァールティカ』 プラマーナシッディ章の研究 (2)」, 『広島大学文学部紀要』 52, 21-42.
- [1993] 「仏教論理学派の真理論——デーヴェーンドラブッディとシャーキヤブッディ」, 『渡辺文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』下, 永田文昌堂, 京都, (85)-(118).
- 稲見正浩・野武美弥子・林慶仁・護山真也
- [2002] 「プラジュニャーカラグプタにおける二種の認識対象と認識手段——Pramāṇavārttikālaṅkāra ad PV III 1-2 和訳研究」, 『南都佛教』 81, (1)-(53).
- 稲見正浩・石田尚敬・野武美弥子・林慶仁
- [2005] 「プラジュニャーカラグプタにおける vyavaccheda 論——Pramāṇavārttikālaṅkāra ad PV IV 189-194 和訳研究」, 『南都佛教』 85, (1)-(89).
- Isaacson, Harunaga
- [2009] "Of Critical Editions and Manuscript Reproductions: Remarks apropos of a Critical Edition of *Pramāṇavinīścaya* Chapters 1 and 2", *Manuscripts Cultures*, 2, 13-20.
- 石田尚敬 (Ishida, Hisataka)
- [2011] *Dharmottaras Pramāṇavinīścayaṭīkā zum auf der Realität basierenden logischen Nexus*, Dissertation, Universität Wien.
- [2014] 「ダルモータラにおける分別知の考察」, 『印度學佛教學研究』 62-2, (77)-(81).
- 伊藤康裕 (Ito, Yasuhiro)
- [2010] 「安慧の唯識説についての一考察——upacāra の定義を中心に」, 『久遠—研究論文集』 1, 27-38.
- 岩田孝 (Iwata, Takashi)
- [1983] 「Prajñākaraḡupta (PVBh) に於ける有形相知識説に関する一考察」, *Sambhāṣā*,

5, 39–67.

- [1986] 「Prajñākaragupta によるヨーガ行者の知の無錯乱性証明の一視点」, 『印度學佛教學研究』 35–1, (142)–(145).
- [1991] *Sahopalambhaniyama*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- [1993] *Prasaṅga und Prasāṅgaviparyaya bei Dharmakīrti und seinen Kommentatoren*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, Wien.
- [2010] 「他者の為の推論 (parārthānumāna) における世間承認 (prasiddhi) ——法称の見解とダルモータラの解釈」, 『東洋の思想と宗教』 26, (1)–(33).

梶山雄一 (Kajiayama, Yuichi)

- [1983] 『仏教における存在と知識』, 紀伊国屋書店, 東京.

上村勝彦 (Kamimura, Katsuhiko)

- [1992] 『バガヴァッド・ギーター』 (岩波文庫 赤 68–1), 岩波書店, 東京.

加納和雄 (Kanō, Kazuo)

- [2012] 「アティシャに由来するレティン寺旧蔵の梵文写本——1934 年のチベットにおける梵本調査を起点として」, 『インド論理学研究』 4, 123–161.

片岡啓 (Kataoka, Kei)

- [2009] 「『集量論』I 9 解釈の問題点——ディグナーガとジネーンドラブッディ」, 『印度學佛教學研究』 58–1, (106)–(112).
- [2011a] 「*Pramāṇasamuccayaṭīkā* ad I 8cd–10 和訳」, 『南アジア古典学』 6, 1–50.
- [2011b] 「ダルマキールティによる『集量論』I 9 の解釈『量評釈』III 320–352 の分析」, 『哲学年報』 70, 43–75.
- [2013] 「Dharmottara は Apoha 論で何を否定したのか?」, 『南アジア古典学』 8, 51–73.

桂紹隆 (Katsura, Shoryu)

- [1969] 「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」, 『南都佛教』 23, 1–44.
- [1982] 「因明正理門論研究 [五]」, 『広島大学文学部紀要』 42, 82–99.
- [1984] "Dharmakīrti's Theory of Truth," *Journal of Indian Philosophy*, 12, 215–235.
- [1988] 「5 論理学派」, 『インド仏教 1』 (岩波講座 東洋思想 第 8 巻), 岩波書店, 東京, 314–342.
- [1989] 「知覚判断・擬似知覚・世俗知」, 『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学』



と仏教』, 平楽寺書店, 京都, 533–553.

[1993] "On Perceptual Judgement," eds. N.K. Wagle and F. Watanbe, *Studies on Buddhism in Honour of Prof. A.K. Warder*, Toronto, University of Toronto, 66–75.

[2012] 「第 1 章 仏教論理学の構造とその意義」, 『認識論と論理学』(シリーズ大乘仏教 9), 春秋社, 東京, 3–48.

Kellner, Birgit

[2010] "Self-Awareness (*svasamvedana*) in Dignāga's *Pramāṇasamuccaya* and *-vṛtti*: A Close Reading," *Journal of Indian Philosophy*, 38, 203–231.

[2011] "Dharmakīrti's Criticism of External Realism and the Sliding Scale of Analysis," *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23–27, 2005*, eds. Helmut Krasser et al., 291–298.

木村誠司 (Kimura, Seiji)

[1994] 「ダルマキールティの論理学書における *pramāṇa* と *samyagjñāna* について」, 『駒澤大學佛教學部研究紀要』 52, (10)–(16).

木村俊彦 (Kimura, Toshihiko)

[1987] 『ダルマキールティ宗教哲学の研究』, 木耳社, 東京.

[1999] "A New Chronology of Dharmakīrti," 209–214 in Katsura [1999].

北川秀則 (Kitagawa, Hidenori)

[1965] 『インド古典論理学の研究——陳那 (Dignāga) の体系』, 鈴木学術財団, 東京.

北原裕全 (Kitahara, Yuzen)

[1996] 「*adhyavasāya*——有形象理論における唯識と外界」, 『論集』 23, (55)–(68).

小林久泰 (Kobayashi, Hisayasu)

[2005] 『プラジュニャーカラグプタ自己認識理論の研究』, 広島大学提出博士学位論文.

[2006] 「認識手段・認識結果の非別体性——プラジュニャーカラグプタの PV III 319 解釈」, 『比較論理学研究』 4, 43–50.

[2009] 「認識結果としての自己認識」, 『日本西蔵学会々報』 55, 121–130.

[2010] "Self-Awareness and Mental Perception," *Journal of Indian Philosophy*, 38, 233–

245.

- [2011] "Prajñākaragupta's Interpretation of *svalakṣaṇa*," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 59–3, (182)–(187).

高麗行真 (Koma, Gyoshin)

- [1977] 「プラマーナ・ヴィニシュチャヤ」現量章和訳, 『智山学報』26, 39–59.

Krasser, Helmut

- [1991] *Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit der Erkenntnis Laghu-prāmāṇya-parīkṣā*, 2 vols., Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.
- [1992] "On the Relationship between Dharmottara, Śāntarakṣita and Kamalaśīla," *Tibetan Studies: Proceedings of the 5<sup>th</sup> Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, 2 vols., Narita, Vol. 1, 151–158.
- [1995] "Dharmottara's Theory of Knowledge in His *Laghuprmāmāṇyaparīkṣā*," *Journal of Indian Philosophy*, 23, 247–271.
- [2003] "On the Ascertainment of Validity in the Buddhist Epistemological Tradition," *Journal of Indian Philosophy*, 31, 161–184.
- [2011] "Bhāviveka, Dharmakīrti and Kumāṛila," in 船山 [2011a], 195–242.

Kyuma, Taiken

- [2010] "Śālikanātha's Criticism of Dharmakīrti's *svasaṃvedana* Theory," *Journal of Indian Philosophy*, 38, 247–259.
- [2011] "On the (Im)perceptibility of External Objects in Dharmakīrti's Epistemology," *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis: Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23–27, 2005*, eds. Helmut Krasser et al., 309–318.

Lindtner, Christian

- [1980] "Apropos Dharmakīrti: Two New Works and a New Date," *Acta Orientalia*, 41, 27–37.

McClintock, Sara L.

- [2003] "The Role of the 'Given' in the Classification of Śāntarakṣita and Kamalaśīla as Svātantrika-Mādhyamikas," *The Svātantrika-Prāsaṅgika Distinction: What Difference Does a Difference Make?*, eds. G. Dreyfus, S. MacClintock, Wisdom

Publicatons, Somerville, 227–248.

Matilal, Bimal Krishna

- [1986] Perception: An Essay on Classical Indian Theories of Knowledge, Oxford University Press, Oxford.

Meuthrath, Annette

- [1996] *Untersuchungen zur Kompositionsgeschichte der Nyāyasūtras*, Echter Verlag, Würzburg.

御牧克己 (Mimaki, Katsumi)

- [1980] 「antaraśloka について」, 『印度學佛教學研究』 28-2, (29)–(36).

宮林昭彦・加藤栄司 (Miyabayashi, Shogen and Kato, Eji)

- [2004] 『現代語訳南海寄帰内法伝——七世紀インド仏教僧伽の日常生活』, 法蔵館, 京都.

宮坂宥勝 (Miyasaka, Yusho)

- [1960] 「Pramāṇa-phala-vyavasthā とダルマキールティの立場」, 『印度學佛教學研究』 8-1, 43–48.

三代舞 (Miyo, Mai)

- [2008] 「ダルマキールティの量・量果非別体説——なぜ外的要因は量でないのか」, 『印度學佛教學研究』 57-1, (314)–(410).
- [2009] 「ダルマキールティの対象認識に関する一考察——なぜ対象の形相をもつことが認識手段なのか」, 『東洋の思想と宗教』 26, 67–87.
- [2010] 「仏教論理学派による外界实在論者の認識根拠批判——感官と対象との接触を中心に」, 『久遠—研究論文集』 1, 39–56.
- [2011] "grāhakākāra as pramāṇa: The Difference between Dignāga and Dharmakīrti," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 59-3, (177)–(181).
- [2012] 「プラマーナ (pramāṇa) という語のもつ二つの意味とその関係——仏教論理学派とニヤーヤ学派」, 『久遠—研究論文集』 3, 52–68.
- [2013a] 「決定知に関するプラジュニャーカラグプタのダルモッタラ批判——*Pramāṇavārttikālankāra* ad PV III 311 訳注研究」, 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 58-1, 93–107.
- [2013b] 「ダルモッタラにおける対象認識——分別と無分別のあいだ」, 『久遠—研

究論文集』4, 26–40.

- [2014] "Controversy between Dharmottara and Prajñākaragupta Regarding *Pravartaka*," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 62–3, (223)–(228).

護山真也 (Moriyama, Shinya)

- [2010] "On Self-Awareness in the Sautrāntika Epistemology," *Journal of Indian Philosophy*, 38, 261–277.

- [2011] 「ラトナキールティ著『多様不二照明論』和訳研究（上）」, 『南アジア古典学』6, 51–92.

- [2014a] *Omniscience and Religious Authority: A Study on Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikālaṅkārabhāṣya ad Pramāṇavārttika II 8–10 and 29–33*, Leipziger Studien zu Kultur und Geschichte Süd- und Zentralasiens, Bd. 4, LIT Verlag, Berlin - Münster - Wien - Zürich - London.

- [2014b] 「プラジュニャーカラグプタの〈知覚＝存在〉説に関する一資料」, 『信州大学人文科学論集』1, 51–73.

村上徳樹 (Murakami, Atsuki)

- [2006a] 「所取の形象と能取の形象についてのケドゥブジェの解釈」, 『日本西藏學會々報』52, 3–12.

- [2006b] 「ギェルツァブジェによる唯識派の対象認識の解釈について」, 『仏教文化研究論集』10, 51–67.

- [2008] 「rang rig pa に関するケドゥブジェの解釈」, 『日本西藏學會々報』54, 17–31.

村上真完 (Murakami, Shinkan)

- [1991] 『インド哲学概論』, 平楽寺書店, 京都.

中井本秀 (Nakai, Honshu)

- [1981] 「Sāṃkhya 派における pramāṇa 理論の受容形態」, 『論集』8, 53–79.

中須賀美幸 (Nakasuka, Miyuki)

- [2014] 「ダルマキールティの「付託の排除」論——adhyavasāya, niścaya, 知覚判断の関係をめぐって」, 『南アジア古典学』9, 397–418.

西沢史仁 (Nishizawa, Fumihito)

- [2011] 『仏教論理学の形成と展開——認識手段論の歴史的変遷を中心として』第2

巻, 全 4 巻, 東京大学提出博士学位論文.

乗山悟 (Noriyama, Satoru)

[2000] 「Hetubinduṭīkā の知覚判断説」, 『印度學佛教學研究』 49-1, (122)-(127).

小川英世 (Ogawa, Hideyo)

[1997] 「Mahābhāṣya ad P1.3.1 研究 (8)」, 『広島大学文学部紀要』 47, 52-74.

岡田憲尚 (Okada, Kensho)

[2005] 「Tattvasaṃgraha, Śabdārthaparīkṣā 章に於ける avasāya, adhyavasāya の用法について」, 『印度學佛教學研究』 53-2, (174)-(176).

岡崎康浩 (Okazaki, Yasuhiro)

[2005] 『ウッドヨータカラの論理学——仏教論理学との相克とその到達点』, 平楽寺書店, 京都.

沖和史 (Oki, Kazufumi)

[1975] 「《citrādvaita》理論の展開——Prajñākaragupta の論述」, 『東海仏教』 20, 80-94.

[1982] 「VI 有相唯識と無相唯識」, 『唯識思想』 (講座・大乘仏教 8), 春秋社, 東京, 177-209.

[1987] 「Dharmottarapradīpa における現量の定義」, 『印度學佛教學研究』 35-2, (143)-(148).

[1990] 「ダルモータラ著『正理一滴論』 (Nyāyabinduṭīkā) 第一章における知覚判断」, 『仲尾俊博先生古希記念 佛教と社会』, 永田文昌堂, 京都, 137-160.

[1993] 「ダルモータラの「量量果非別体論」——Nyāyabinduṭīkā における」, 『渡辺文麿博士追悼記念論集 原始仏教と大乘仏教』 下, 永田文昌堂, 京都, (119)-(136).

[1999] "Pravṛtti as an Action of a Person," *Dharmakīrti's Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy*, ed. Shoryu Katsura, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 287-294.

太田心海 (Ota, Shinkai)

[1973] 「Adhyavasāya」, 『印度學佛教學研究』 22-1, 138-139.

小野基 (Ono, Motoi)

[1993] *Prajñākaraguptas Erklärung der Definiōn gültiger Erkenntnis (Pramāṇavārttikā-lamkāra zu Pramāṇavārttika II 1-7)*, Dissertation, Universität Wien.

## 参考文献

- [1994] 「プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の解釈——プラジュニャーカラグプタの真理論」、『印度學佛教學研究』42-2, 878-885.
- [1995] 「仏教論理学派の一系譜——プラジュニャーカラグプタとその後継者たち」、『哲学・思想論集』21, 142-162.
- [2000] *Prajñākaraguptas Erklärung der Definiiton gültiger Erkenntnis (Pramāṇavārttikālaṃkāra zu Pramāṇavārttika II 1-7)*, Teil I, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.
- [2003] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(1)」、『哲学・思想論集』28, 67-99.
- [2004] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(2)」、『哲学・思想論集』29, 6-82.
- [2005] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(3)」、『哲学・思想論集』30, 17-40.
- [2006] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(4)」、『哲学・思想論集』31, 35-51.
- [2007] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(5)」、『哲学・思想論集』32, 37-56.
- [2008] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(6)」、『哲学・思想論集』33, 49-78.
- [2011] 「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna 章の研究——校訂テキストと和訳・訳註(7)」、『哲学・思想論集』36, 41-69.
- [2012] 「第五章 真理論——プラマーナとは何か」、『認識論と論理学』(シリーズ大乘仏教 9), 春秋社, 東京, 155-188.

Sakai, Masamichi (酒井真道)

- [2003] 『刹那滅論証の展開』, 筑波大学提出修士学位論文.
- [2010] *Dharmottaras Erklärung von Dharmakīrtis kṣaṇikatvānumāna (Pramāṇaviniścayaṭīkā zu Pramāṇaviniścaya 2 vv. 53-55 mit Prosa)*, Dissertation, Universität Wien.
- [2013] 「ダルモットタラの刹那滅論研究——sattvānumāna における論証因——存在



性 (sattva) —— 成立の問題」, 『インド哲学仏教学研究』 20, 77–93.

Sakuma, Hidnori S.

- [2013] "Remarks on the Lineage of Indian Masters of the Yogācāra School: Maitreya, Asaṅga, and Vasubandhu," *The Foundation for Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. Ulrich Timme Kragh, Department of South Asian Studies, Harvard University, Cambridge, 330–366.

櫻部建 (Sakurabe, Hajime)

- [1969] 『俱舍論の研究——界・根品』, 法蔵館, 京都.

志田泰盛 (Shida, Taisei)

- [2002] 「真知根拠 (pramāṇa) としての主宰神——*Nyāyakusumāñjali* 第 4 篇と *Tārkikarākṣā* における主宰神論」, 『印度學佛教學研究』 50–2, (81)–(83).

白館戒雲 (Shiratate, Kaiun)

- [2004] 「ロンドルラマ著『量評釈など因明所出の名目』」, 『大谷大学研究年報』 56, 1–54.

Stcherbatsky, Theodore

- [1930] *Buddhist Logic*, Vol. 2, Bibliotheca Buddhica 26.  
[1932] *Buddhist Logic*, Vol. 1, Bibliotheca Buddhica 26.

Steinkellner, Ernst

- [1981] "Philological Remarks on Śākyamati's Pramāṇavārttikaṭīkā," *Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1981, 283.  
[2004] *A Tale of Leaves: On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future*, Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences, Amsterdam, 2004.

Steinkellner, Ernst and Krasser, Helmut

- [1989] *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis im Pramāṇaviniścaya*, eds. Ernst Steinkellner und Helmut Krasser, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

Steinkellner, Ernst, Krasser, Helmut and Lasic, Horst

- [2005] *Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā*, China Tibetology

Publicing House and Austrian Academy of Sciences Press, Beijing - Vienna.

Steinkellnr, Ernst and Much, Michael Torsten

- [1995] *Die Texte der erkenntnistheoretischen Schule des Buddhismus: Systematische Übersicht über die buddhistische Sanskrit-Literatur II*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.

Taber, John

- [2005] *A Hindu Critique of Buddhist Epistemology: Kumāṛila on Perception: The "Determination of Perception" Chapter of Kumāṛila Bhaṭṭa's Ślokavārttika*, RoutledgeCurzon, London and New York.

谷貞志 (Tani, Tadashi)

- [1983] 「プラサンガ・サーダナ（帰謬論証）導入による論理系の構造変換——ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの解釈の差異」, 『佛教學』 15
- [1984] "A Conflict between Logical Indicators in the Negative Inference : *Svabhāvānupalabdihivādin* versus *Vyāpakānupalabdihivādin*," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 32-2, (18)–(24).
- [1991] "Logic and Time-ness in Dharmakīrti's Philosophy: Hypothetical Negative Reasoning (*prasaṅga*) and Momentary Existence (*kṣaṇikatva*)," *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition: Proceedings of the 2<sup>nd</sup> International Dharmakīrti Conference*, 325–401.

Tachikawa, Musashi

- [1971] "A Six-century Manual of Indian Logic (A Translation of the *Nyāyapraveśa*)," *Journal of Indian Philosophy*, 1, 111–145.

戸崎宏正 (Tosaki, Hiromasa)

- [1963] 「仏教論理学説と経量部説——量・量果の非別体説について」, 『印度學佛教學研究』 11-1, 187–190.
- [1979] 『仏教認識論の研究——法称著『プラマーナ・ヴァールツェティカ』の現量論』 上巻, 大東出版社, 東京.
- [1984] 「III ダルマキールティの認識論」, 『認識論と論理学』(講座・大乘仏教 9), 春秋社, 東京, 153–182.
- [1985] 『仏教認識論の研究——法称著『プラマーナ・ヴァールツェティカ』の現量論』

## 参考文献

下巻，大東出版社，東京．

- [1986] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（1）」，『哲學年報』 45, 1-8.
- [1987] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（2）」，『哲學年報』 46, 1-12.
- [1988] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第 1 章 現量（知覚）論の和訳（4）」，『哲學年報』 48, 1-18.
- [1991] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（7）」，『哲學年報』 50, 1-10.
- [1992a] 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第 4 章（知覚ストトラ）和訳（2）——認識手段とその結果」，『成田山仏教文化研究所紀要』 15（仏教文化史論集 II），303-317.
- [1992b] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（8）」，『哲學年報』 51, 1-7.
- [1993a] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（10）」，『西日本宗教学雑誌』 15, 1-13.
- [1993b] 「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第一章現量（知覚）論の和訳（9）」，『哲學年報』 52, 1-14.

塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文

- [1990] 『梵語仏典の研究 IV 論書篇』，平楽寺書店，京都．

宇野惇（Uno, Atsushi）

- [1996] 『インド論理学』，法蔵館，京都．

Vetter, Tillemann

- [1964] *Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.
- [1966] *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścayaḥ, 1 Kapitel: Pratyakṣam: Einleitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.

王森（Wang, Sen）

- [1985] 『民族図書館蔵梵文貝葉経目録』，Appendix of Haiyan Hu-von Hinüber,

"Remarks on the Manuscript of the Mūlasarvāstivāda-Prātimokṣasūtra,"  
*Jaina-Itihāsa-Ratna: Festschrift für Gustav Roth zum 90. Geburtstag*, hg. von Ute  
Hüsken et al., 283–337.

渡辺照宏 (Watanabe, Shoko)

[1970] 「調伏天造・正理一滴論釈和訳」, 『インド古典研究』 1, 241–303.

Watanabe, Shigeaki

[1998] *The Sanskrit Commentaries on the Pramāṇavārttikam from the Rāhula Sāṅkṛtyāyana's Collection of Negatives*, 3 vols., Vol. 1 Sanskrit Manuscripts of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam: Facsimile Edition, Bihar Research Society and Naritasan Institute for Buddhist Studies, Patna - Narita.

[2000] "Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam ad Pramāṇavārttikam 2.1.abc and 2.4.d–2.5.ab Sanskrit Text and Tibetan Text with Tibetan-Sanskrit Index edited by Shigeaki Watanabe," 『成田山仏教研究所紀要』 23, (1)–(88).

矢板秀臣 (Yaita, Hideomi)

[2005] 『仏教知識論の原典研究——瑜伽論因明, ダルモッタラティッパナカ, タルカラハスヤ』 (モノグラフ・シリーズ IV), 成田山新勝寺, 千葉.

山上證道 (Yamakami, Shodo)

[1999] 『ニヤーヤ学派の仏教批判——ニヤーヤブーシャナ知覚章解説研究』, 平楽寺書店, 京都.

Yao, Zhihua

[2004] "Dignāga and Four Types of Perception," *Journal of Indian Philosophy*, 32–1, 57–79.

[2005] *The Buddhist Theory of Self-Cognition*, Routledge, New York.

吉田哲 (Yoshida, Akira)

[2011] 「仏教認識論における pramāṇa の両義性」, 『佛教學研究』 67, 31–48.